

---

# 俺的妄想ファンタジーでもっと自由に戯れる

網野雅也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺的妄想ファンタジーでもっと自由に戯れる

### 【Nコード】

N1031L

### 【作者名】

網野雅也

### 【あらすじ】

ネタ枯渴のため、発想の創造や拡大を目的としたもの。

好きにやる。(前書き)

スルー推奨。

好きにやる。

さあ、不感症な上にネタに枯渇した俺は、携帯を使って、好きな世界作って、中で色々試して面白いアイディアを拾う旅に出ます。

似たような実験小説はあったが、これはそれとは違う物だ。

携帯使いまくるし、途中で世界を変更なんてこともある。この世界では完結なんてない。

いやになったら、はいさようならって違う世界の設定し直しもある。

本当の意味で好き勝手振舞うので人に見せるようなものじゃないけど、覗かれても気にはしない。

その代わり詰まらなくても外から騒がないでくれたら良い。

さあ、御託はこのへんにして、よし、名前は拓です。苗字はいらないか。

さっそく世界を自由に作ってみよう。

ええい、面倒だ。場所は、取りあえず、荒野でいいや。

他は携帯で中から逐一設定だ。

ちなみに俺の携帯は好きな事を書いて決定を押すと、それが俺の世界に反映される神アイテムだ。

今回は自由な発想を生み出し拾う事が目的なので、大胆なものから奇矯な事や、突拍子もない行動に走るかもしれないが、気にしないでおくれ。

俺が座る椅子の下に異世界への穴が開いた。

格好はパジャマだ。上下とも青だ。

まあ、なんとかなるはずだ、行くぜ！

好きにやる。(後書き)

これには構わないでください。

## 砂山づくりから衣服調達。

さあ、砂山作ろう。

地面にしゃがみ込み、荒野に積もる足元の砂を両手で集めて山を拵える。

周りには刺々しいサボテンが見える。

空は白い雲が大半を覆ってはいるが、青空が見えないわけでもない。

陽射しは雲の合間からいくつか漏れて、広大な台地の所々を照らしているに違いない。

そんな事はどうでもいいけど、この世界で最初にやったことが砂山づくりなんて、また趣があっといういなとか柄にもなく思ってしまった。

パジャマのズボンのポケットには、しっかりと携帯が差し込まれている。

ふふふ、このチートアイテムがある限り俺はこの世界をどうとでもできるんだ。

前のように出し惜しみなんぞしないつもりだ。

砂山の頂きを尖らせて見ては、上から踏み潰し、また山の形にしてを続けていたら飽きてきた。

特に目的なんてないから、仕方ないんだけどさ。

よし携帯使おう。

まずは服だ。

パジャマじゃ格好悪いし、寒いんで厚手の服に変えようか。

ここ荒野の癖に、風が冷たいんだよね。

「セーター、綿パン、靴下、靴、キャップ 頂戴」

携帯にこれだけ書いて、決定を押し。

と、同時に、宙にそれらがふつと湧いて出て俺の足元に落ちた。

俺はパジャマ上下を無造作に脱ぎ捨て、まず茶色のセーターを着込み、綿パンに足を通した。次に尻を地面につけて座り、足を折りたたんで片方ずつ白いソックスを履いていく。それが済むと白い運動靴にすぽつと足を嵌めこんだ。サイズはどれもこれもピッタリだ。最後にカーキ色のキャップを頭に被った。

## 仲間。

仲間が欲しい。

いくらなんでもこんな寂しい荒野で俺一人とか侘しすぎる。

さっそく携帯だ。

『俺は16歳の高校生なんで、相手は年下にするか、14歳にしよう。名前はテリー。』

性別は、最初は男にしよう。俺の僕、従順で優しくて聞き上手、明るい、先導役もこなせる。

外見は眉目秀麗、自然な亜麻色の髪、目は優しさを湛えてフレンドリー。背は俺175より低めの170cm。特技は陰陽道、柔道3段、剣道3段、空手3段、そろばん3段、IQ高め。推理オタ。これらを満たす』

よし、決定を押しした。

さあ出てこい、テリー。

おお、袴着た侍のような姿のテリーが目の前に現れた。

腰には日本刀を刷いて、足には草履。

眉毛は濃くはつきりと末端まで映え揃っている。

年下なので遠慮なく容易く声をかけることにした。

「やあ、テリー」

「拓様、はじめまして」

その場にさっそく肩膝ついて頭を低くするテリー。

姿勢好が微妙にアンバランスだし、言動にも適当なところが見られるが、

要は携帯に書いた条件を攪拌して出来た即席人間がテリーなわけ



だ。

「今日から俺の足となり手となって働いてもらおうぞ」

俺はもちろん主人なので、従者であるテリーには上から物を言っ

「もちろんです！」

そこでそんな発言するとは思わなかった。

明るいが微妙にブレンドされているせいだろう。

「さあ、どうするか」

「砂山つくりしましょう！」

「飽きた……」

悪いけどすぐに否定させてもらった。

発想まで俺と一緒に貧相にならなくても良い。

おっと、今日は眠いな。

瞼がやけに重い。

さつきまでいた俺の世界では深夜2時半だった。

そろそろ寝なくては。

『ペンション 山伏、俺専用の宿だ。気のいい老夫婦が身の回りの世話をしてくれる。ペンションの土台にはタイヤがついていて、移動が出来る』

これでOK押すか。

すぐに白い煙が荒野の一部分に立ち昇り、ペンション山伏が姿を表した。

白一色で染められた、長方形の建物だ。車みたいな形だと思っ

て欲しい。

窓が何個か両側面にある。

前面と思われる部分には車のライトのようなものと覗き窓が一

つ。  
あの窓から老夫婦、たぶん爺さんが外を見て運転するに違いな

い。  
側面の左側に木の扉がついている。

「テリー俺を負んぶしろ」

「はいー！」

テリーの背中によいしょとか言いながら負ぶさる。

見かけによらず、がっしりしてて俺の重みを意に介せず、

左手で尻を支えつつ、扉のノブを右手で回して中に入っていく。

「ちわ、拓様はすぐに眠りたいそうです！」

「おうおう、これはこれは拓様！ 爺が案内しますよ！こちらへ」

「任せた……」

エプロン姿の目尻が下がった優しそうな爺さんが木の香りがする階段を上って、

俺達を部屋に案内する。

「ここです！」

「おお、ベッド！」

窓から差す柔らかい白光が部屋を優しく包んでいる。

中は木材がふんだんに使われていて、何となく気分が落ち着く。

まあ、そんな事はどうでもいいんだ。

ベッドに、ダイブ！

ああ、気持ち良い……乾いたばかりの日光の匂いが染み付いた敷物に、

青っぽい柔らかい掛け布団、俺の頭にあつた程よい高さの枕。

俺はすぐに掛け布団を駆けて、枕に頭を良い塩梅に乗せて右側を下にして目を閉じる。

二人の息遣いが聞こえるが、俺の命令を待っているせいかな黙ったままだ。

取りあえず、よく寝たいので……

「俺が部屋を出てくるまで、起こす事は罷りならぬ！」

「「御意！」」

ピエールと同じく言葉は臨機応変に変わるようだ。

おやすみ。



暇だ。

なんだか頭が痛い。

昨日冷たい荒野の風に当たりすぎたせいだろうか。

起き上がるのが面倒だ。

バ、バ○アリンが欲しい。

ベッドの横の小さなテーブルには金色のベルが載せてあった。

何かあればこれで呼び出せて事かな。

ならさっそく打ち鳴らそう。

甲高い澄んだ音が響いた。

少しして誰かが部屋の扉をノックした。

「起きられましたか？ 拓様」

「うんー、ちよつときて」

テリーがそれに応じて部屋の中に入ってくる。

相変わらずの格好をしている。

大分前から起きていたんだろか。

それより、頭痛薬だ。

「バ○アリンある？」

「ここに」

懐から畳紙を取り出しそれを広げると、見慣れた錠剤が2錠挟まれている。

俺が水と言う前にテリーは、さっと部屋を出てしばらくして戻っ

てきた。

手には水の入ったコップが握られている。

「有難う」

俺はそれを受け取り、薬を口に放り込んで水を流して嚥下した。

ふー、これでそのうち頭痛は和らぐだろう。

テリーは肩膝をついたまま、目を床に落としている。

「飯は食ったのか？」

「いいえ、主君より先に食べるわけには参りません」

「そうか、なら爺に、トーストでも焼いてくれって頼んでくれ、目玉焼きもだ。もちろん二人分な、ここで一緒に飯にしよう」

「はい！ でわ」

一階に行くのが億劫な俺は、この部屋のテーブルに飯を運ばせることにした。

テリーは幾分、笑顔を灯して部屋を後にする。

彼も腹は減っていたんだろう。

「うまかった、ごちそうさま」

テーブルの向かいではテリーが静かに品よくパンをちぎって食べている。

俺はちぎらず囃り付くと、そのまま押し込んであっという間に食べ終えた。

白い陶器のカップに注がれた紅茶を啜って一息つくと受け皿に戻した。

窓に目をやり、テリーの顔に視線を流す。

「良い天気だ、どこか行こうか」

頭痛がなくなってきたので、外出意欲が戻ってくる。

「はい」

ナフキンで顔を急いで拭くと、テリーはテーブルの上に並べられた食器類を銀色のトレイに載せて部屋を出て行き、すぐに戻ってきた。行動が迅速なのはテリーの良いところかもしれない。

「そついや、爺と婆にはあっていないな」

「朝食を作った後、夕飯の材料の調達をするといってご夫婦で出かけていきました」

朝食を持ってきたのは、テリーだ。

壁に防音素材でも使っているのかしらないが、そのおかげで、部屋の外や階下の音は一切聞こえない。

夫婦が生活の営みの音を立てても、どこかへ出かけようともまる

で気づかなかった。

逆に、中からの音は外に筒抜けのようだ。ベルの音をすぐにテリーが聞きつけてやってきたからね。

どんな素材使ってるんだろうか。

まあ、どうでもいいんだけどさ。多少はコミュニケーションでも取っておきたかったかな。

満ち足りすぎて欠伸が出る。

太陽が高く昇ると、外に出て岩場に腰掛けてぼーっとしていた。

俺はテリーに適当に寛いでいいよと言ってあるので、足を崩して俺の足元にぼーっと座っている。

暇だなあ。

「テリー暇だよ」

「そうですね、ここは荒野だし何にもないですから」

「うん、暇で死にそうだ」

なんとなくテリーに打開策を求めるような視線を注いで見る。

じーっとみつめられたテリーは俯いて黙ったままだ。

何か思案しているのかもしれない。

しかし、何にもない荒野の世界。俺が設定でもしないと、遊び場  
すらないだろう。

そっぴや、老夫婦はどこへ出かけたんだろうな。

物足りない。

「少しいったところに沼がありました、そこで蛙捕まえてきましたよ」

「お爺さん、年甲斐もなく沼地入って網で頑張ってたんですよ」

「はあ……そう」

グロテスクな緑に黒の斑点がある大きな蛙を一匹顔に突き出してくる。

俺は後退りして、顔を引きたらせていた。

「じゃあ、さつそく、食事の準備してくるんで」

夫婦は丁寧なお辞儀をして、車の中へ入っていく。

あの蛙が今晚の食事らしい。

「テリー……逃げるか」

「は、はい？」

「他へいこう、夫婦置き去りにしてどっかへ行こう」

「え？」

夕暮れを背に受けたテリーの表情は見えづらかった。

それでも、かなり動揺しているようだ。

「何故ですか？」

岩に座る俺の正面にやってきて、夕日の眩しさに目を細めながら尋ねる。

「男はいつまでも微温湯に使ってはいけない！ 分かるな……」

「はあ……」

俺は蛙を食べたくないとは言えず、態の良い言葉で繕う。

テリーは最初は瞬きを繰り返して思案げに黙っていたが、すぐに顔を上げて、

「移動しますか！」

「うむ……」

俺は携帯を握ると、

『ママチャリ二台くれ』

と打ち決定を押しした。

青いママチャリが二台目の前に現れる。

「お前乗れるか？」

「はい、自転車は得意です」

どこかで乗ったことがあるらしい。

まあ、俺の作った人間だから、俺のやれる事は彼も大抵できるんだろう。

深くは考えない。

土や砂利の地面はごつごつはしていたが、ぬかるんではないのでママチャリでも何とか進めた。

出来るだけ平坦な道を折んで突き進む。

なぜか俺が先頭を走っていた。

「大丈夫か？」

「は、はい」

テリーは普通に走れるようだが、こつこつ悪路を走る事には慣れていないようだ。

覚束ない様子でハンドルを左右に忙しく振りながら、何とかついてきていた。

辺りはすっかり日が落ちて、空は群青色の度合いが深まっていた。

西の空には僅かに残照が滲む程度だ。

どこかで狼の遠吠えが聞こえた気がした。

俺は自転車を止めて片足を地につける。

「おい、このへん狼出るのかよ？」

「さあ、でも遠吠え聞こえましたね」

やばいなあ、狼にでも襲われたらどうしよう。

もう辺りも暗いし、今日はこの辺りで宿を設けた方が良さそうだな。



スタンドを立てて、俺は自転車を降りた。  
携帯を取り出し、

『円柱形の頑丈な二階建ての宿泊施設おくれ』  
と携帯に打った。

少しして、地鳴りがして足元が揺れる。

「な、なんだ」

俺は思わずしゃがんだ。

「あ、あれ！」

テリーが指差す方に視線を走らせると、少し離れた場所に銀色の円柱形の塔が聳え立っていた。

金属製の四角い扉は簡単に開いた。

中にテリーと共に入る。

扉を閉めて鍵をかけた。

中は案外広く、裝飾などないものの、一階にはベッドが一つ、窓が一つ、流し、コンロ、冷蔵庫、テーブル、スツールと生活に必要な物は全部揃っている。内に盛り上がった壁に扉があり、中はユニットバスになっていた。緩やかな階段を上った二階も同じような造りだ。

「な、生温い……」

「……………」

テリーの蔑むような視線に、俺は忸怩たる思いに耳を赤くしていた。

分かってるさ……過保護な造りの宿だと言いたいんだろ……

その夜、夕食を適当に終えた後、テリーに一階を宛がった俺は階段を上って二階のベッドに大の字で横たわる。ふかふかの布団の上は気持ち良い。宿は空調が聞いていて心地よい風が循環していた。

至れり尽くせりの環境の中で、俺は何か物足りなさを感じていた。

**猛襲！ 殺人ロボット！**

安穩とした生活はこれまでだ。

そろそろ何か変わったことがしたい。

しかし、あんまりややこしい事態になるのも避けたい。

前編のような話に巻き込まれるのはご免だ。

もつと段階を踏んで……

「う、ううん、朝か……」

寝ながら考え事してたのか……

起きてたのか、判然としないな。

大あくびをして伸びをする。

そして、宙に視線を置いたまま、ぼんやりした頭でさっきの余韻にまた浸る。

とにかく……俺は決してこの世界に、ぼけーっと過ごすために来た訳じゃないんだ。

もう一度、欠伸をしながら体を振る。

逸れた視線の先に携帯があった。

俺はおもむろに携帯を右手で掴むと、もう一度掛け布団に包まれた。

どうしようか……布団の中の薄闇で携帯を開いたまま、何を打とうか考えていた。

こんな体たらくな毎日送ってちゃ、俺の不感症は治らないんだ。刺激が欲しい。

何か良い案がないか思索に耽る。

そんな時ふと、ある疑問が舞い込んできた。

そう言えば……テリーって強いのかな？

確か陰陽師とかも彼の作成条件に含んだはずだ。

臙だが、柔道3段とか、空手3段でのも加えたはず。

俺はふと軽い気持ちで携帯に文字を打ち始めていた。

書いている内容はとても恐ろしいものであったが、起きぬけの俺はいつにもまして軽薄だった。

「バットを持った人間型ロボットで、熊のように大きく、素早く、テリーを撲殺するためのロボット、俺の命令には忠実。こんなロボットおくれ！」  
と、打って、決定を押ししていた。

ベッドから跳ね起きると、煙が立ち込める部屋の一角を凝視していた。

出てきたのは……禿頭の上半身裸に黒いパンツを履いた目つきの怪しい男だった。

窪んだ眼窩に埋まる奥まった瞳は黒目がちで、何かホラーを思わせる不気味なオーラを発している。

なんていうのか、人間じゃない……無機質な瞳だ。殺人機械人形の目だ。

確かに熊のようにでかいし、腕は太い、肩幅も広い。バットも持っている。

「よし、お座り！」

ロボは俺の命令一下、巨体を落とし胡坐をかいて床に座り込んだ。目が怖い。ぐりぐり動いている。

この怪物を目の前にして、俺の頭の芯が冴え冴えとしてくる。

何でこんな化け物出したのか考え、後悔の念が漂い始めたところで頭を振ってそれを払う。

違う！ これは必要不可欠な試練だ！

済まない、テリー！

どうも昨日からの君の様子を見てみると、

君が頼りなく見えて仕方がないんだ。

俺は僕には従順さも求めるが、いざという時の強さも持っていて欲しいんだ。

だから こいつで。

「お前の名前は……」

そっぴや決めていなかった。

なんにしよ。

ロボットの前で腕組みをしてしばし考える。

時々片目を開いて、一応警戒は崩さない。

不気味な奴だからね。

昔こんな格好で強い奴いたよな。何の漫画だったかな。

そっぴだ、

「お前の名前はナツパだ！」

「御意、マスター」

ナツパは電子的な声を発した。

しばらく俺は目を閉じて黙っていた。

これから酷薄とも言える命令をナツパに与えることに、躊躇していたからだ。

だが、決心した。

「ナツパよ！ 下に眠るテリーを襲って来い！」

言った瞬間、すくつと立ち上がるナツパ。

悠然と大股で床を歩き、扉を開けて廊下に出た後、静かに扉を閉めた。

見かけに寄らず、行動には慎重さが見れる。開け閉めも丁寧で無音に近い。

この宿の部屋の壁も同じように防音材が使われている。

それは一度、寝る間にテリーの大声を出させて確かめている。

全く彼の声はこの部屋にいる俺には届かなかった。

今、下でナツパが大暴れしていても、何も聞こえない。

3分ほどして、俺は恐る恐る部屋の扉そーっと開けて隙間から外

の廊下を見た。

何もいない事を確認すると、青いガウンの胸の辺りの裾を内へ絞るように両手で掴んで

青いスリッパを脱ぎ捨て、裸足のまま忍び足で階段を降りていった。

一階の部屋は二階と違って、扉や壁で仕切られていないためすぐに部屋全体を見渡す事が出来る。

しかし、二人の姿はなかった。だが、部屋の様子は惨憺たるものだった。

床のタイルが、あちこちでひび割れ窪んでいるのが分かる。

白い扉は破壊されていて、中のユニットバスが丸見えだ。

ベッドが真つ二つに折れて、Vの字型になっている。

足元を見ると、ガラスの破片が光っていて危なく踏みそうになった。

この惨状を見ているうちに、俺は酷い罪悪感に苛まれた。

ほんの軽い気持ちでやったんだけど、えらいことしてしまったんじゃない……

そんな時 外界を隔てるこの宿唯一の扉が無造作に開けられた。

「シツツ！ この糞口ボが！ なめんじゃねえよ！」

げげ、テリーがなんか鬼のような形相で部屋に入ってきたかと思うと、

扉に右手をかけて外に向かって罵倒する言葉を吐き捨てている。

相手はたぶん、ナツパだろうとは思うが……

テリー、すっげえキレテル！

怖いよ……

「あ、拓様！ おはようございます！」

だが、すぐにテリーは俺の気配を察したのか、

瞬時に笑顔を作って俺に朝の挨拶をした。

「お、おはよう……」

冷たい悪寒が背中を這い回る。

「賊を始末しておきました、確認お願いします」

俺は言われるがまま、扉の前まで歩く。

ふわふわとした足取り。地に足がついていない感覚。

扉の外を眺める。

朝日が眩しい。今日は良い天気だ。

いや、そんな事言ってる場合じゃ……

手を翳してナツパの姿を探した。

見つけるのに大して時間は掛からなかった。

「あ、あれ、お前がやったの……？」

「はい、少々手こずりましたが」

あっけらかんとそう報告するテリーの顔にはいくつも青い痣や、

生々しい擦り傷が出来ていた。

「どうやって入って来たんでしょうね」

「さ、さあな」

「ちょっと、シャワー浴びてきます」

と言って、テリーは壊れた扉を払いのけてユニットバスの中へ入っていった。

「ナツパ……」

あの強そうなナツパが……

ナツパは右手がなく、仰向けに倒れていた。

体から白い煙がしゅくと幾筋も立ち昇っていた。

手の切断部分に見える金属片が朝日を浴びて白く煌いている。

女。

ナツパは携帯使って消しといた。

テリーは朝起きて外覗いたら、アイツがない！　って慌ててたけどね。

でも、それも一時で、まあいいかってすぐに欠伸びながら食器洗ってたな。

それでもやつぱり俺は罪悪感一杯だ。

テリーは普段通り今日の朝も明るく接してくれるんだが、俺の方がぎこちなくなってしまう。

試したかったとか、俺の言い分だし、実際はテリー暗殺を企てた黒幕以外の何者でもない。

それで部屋に閉じこもって、俺は罪悪感を払うにはどうすれば良いか考えていた。

まず、真実を打ち明けて、謝るは選択肢に入れない。ありえない。

下手をしたら、俺の命がヤバイ気がする。

そうすると、他の手を考えないといけなわけだが、要するに、俺は彼と二人つきりだから、悔悟の念が消えないわけだ。

誰か間に緩衝材のような役割となる人物がいれば、テリーがその相手と話したり、気がそっちへ向いてたりすれば、俺はかなり楽になるんだ。

まあ、俺が撒いた種なんだけどね。

そこで考えた。彼はまだ若い。俺より年下の男の子だ。

14歳っていやあ、思春期真っ盛り。

頭の中は女の子の事ばかり考えていても可笑しくない年頃だ。



てことで、女の子を携帯で作成しようと思う。

『年は14、髪は肩まで。髪の色は無難に亜麻色、ソバージュがかかっている。名前は雪乃にでもするか。瞳は茶褐色。格好は、巫女さんルック、美人可愛い系。気が強い、はきはき物を言う、でもKYではない。トラブルメーカーではあるがみたいな、女の子おくれ！』

敢て騒がしそうな娘を作るのは、俺一身へ傾けるテリーの気を他に向けさせるため。

これからも俺はどんな問題を起こすか分からない。

だが、木を隠すなら森の中。彼女には少ない木の一つになってもらおう。

よし、決定押す。

出でよ、雪乃。

白い煙と共に現れた女の子、雪乃。

「よお！」

俺は笑顔で声をかけてみる。

……

ガン無視。

彼女は憤然とした目つきで辺りをきよきよ見ている。

「ここは俺の部屋だよ、そして、君は……」

「誰？　なんで私の部屋にいるのよ！　出て行け！」

うわ……俺の語りなんて聞いちゃいない。

あつという間に部屋を追い出されてしまった。

怒涛の張り手。

戸を閉められ、内から鍵を掛けられる。

ふー想像を絶する女だ。俺の手に負えそうもない。

俺はしぶしぶ、廊下に出て階段を降りていく。

「テリー、いるか？」

階段の上から見える範囲にはいない。

奥の流しの方から水の流れる音が聞こえる。

皿でも洗ってるんだろう。

部屋はナツパの暴れた跡がまだ生々しく残されている。

ユニットバスの扉は全部外して片付けたようだが、床のタイルはぼろぼろだな。

後で、ひっそり携帯で直しとくか。

いや、その前に部屋を増やす必要もあるな。雪乃の部屋がいる。

よし、敢てテリーの部屋の隣に雪乃の部屋を拵えるところか。

これであのツン女の世話をテリーに押し付けられる。

「おい、テリー」

「あ、はい、どうされました？ 拓様」

「あのな、女がここに住むことになった、身の回りの世話はお前がしろ」

「ええ、部屋はどうするんですか？」

「お前の部屋の西側に扉あるだろ、あの向こうに部屋を用意した」

テリーに会う前に仕事はしておいた。

「ああ、本等にある……いつの間に来たんだろっか」

テリーにはたぶん、携帯の存在は知られていないと思う。

たぶん、俺は魔法使いか何かだと思われるに違いない。

実際に携帯を打つ姿は彼には見せないからだ。

「取りあえず、俺にとっても大事な客だ、失礼のないように」

「分かりました！ お任せください！」

どうなることやら。

逃げた。

さてと、俺はテリーと雪乃をおいて、今全然違う場所にいる。ずーっと荒野だから、風景は代わり映えしないんだけどね。

小型飛行機と操縦士を出して、ここまで飛んできた。

しっかり、滑走路も作ってから無事着陸。

こうした経緯に至ったのは大した意味はない。

柵って奴に耐え切れなくなっただけだ。

後、今回の旅が前と違う事を示す意味もある。

おざなりな展開や生活なんて、もうご免なのさ。

さて、家でも近くに作って風呂にでも入るかな。

湯船の中でじっくり、この後の展開を考えようか。

## 試しに世界創造。

扇形の建物が地面に張り付いている。

白い建物。扇形の扉。

雪国のかまくらみたいなものだ。

単純明快な造り。だけど中は俺の家と遜色ない生活必需品の全てが揃っている。

ベッドは二つ。一つはここまで俺を運んでくれた小型飛行機の操縦士岩倉源二のものだ。

彼は今昼寝してるので放っておいて、一人で外に出て何をしようか考え中。

俺はこの自由な空間で常に斬新なアイデアを欲している。

だから、色々試す必要がある。

その過程で、ありきたりでつまらない実験をすることもある。寧ろ、その数の方が多いだろう。

だが、マンネリからの脱却を計るには仕方ないことだ。

俺は朝起きて、外に椅子を置いて座りずっと考えていた。

貧相な俺の頭には、まぐた性懲りもなく魔法や剣の世界を作ろうとか、勇者魔王の治める世界とか、ありきたりな話ばかり浮んでは消える。

もうね、そういうのは飽きたんだ。

だけど、このままじゃ何も始らない。実験ができない。

そこで 簡易世界をまず一時的に作ってみようと決心した。

まあ、つまらなければ、すぐ消してしまっ。

どんな世界を作ろうか。できるだけ簡単な世界が良い。

よし、俺が現実の世界で住む都市をコピーしたものをこの世界に

貼り付けしようか。

なんでそうなるんだって俺自身思うわけだが……正直ネタがない。ただ、自分の住む街の事には詳しい。

この世界に俺の街を創造しよう。

携帯だ。

『俺の街をこの仮想空間にそのままおくれ』

決定を押しただぞ。

周りの景色が揺らぎ始めた。

まるで陽炎でも立っているのかと思うような大気の変質。

チヨコレートが溶けるかのように、目に映る景色もどろっと崩れていく。

だが、やがて新たな色が滲んできて、新しい世界の輪郭が徐々に浮かび上がる。

ここは……俺の部屋！？

いや、俺の部屋ではあるが、俺の部屋ではない。

仮想空間に俺の都市そっくりではあるが所詮、模造品。

虚構の世界だ。

その中にある自宅に俺がいるだけだ。

ここでは現実の世界と全く同じ道理で物事が進んでいる。

そのまんまと書いたからにはそうなっているはずだ。

ただ、現実世界と違うものが一つある。

俺の携帯はこの世界では神ツールであり、俺は神なんだ。

## 携帯発動。

「母ちゃん、飯は？」

「冷蔵庫に冷凍ピザでもあったから食べなさい」

「分かった」

一階の台所にある冷蔵庫からピザを取り出し、オーブンに入れた。10分ほどでできるだろう。

俺は木目のある円卓の傍にある椅子に腰掛ける。

まあ、異世界にいながら、自宅で寛げるのは不思議な感覚だ。

あまり居心地がいいと、現実の世界に帰りたくなるかもしれない。

ピザができたので大きめの皿に移した。

隣には紅茶を入れたティーカップがある。

まあ、腹減ってたので食べ飽きたピザではあるけど、いつもより美味しく感じる。

紅茶の最後の一滴を飲み干すと、俺は二階に上がって自分の部屋に戻った。

デジタル時計が机の上にある。

2010年5月2日。GWの真っ只中だ。

時刻は23時17分。

もう寝る時間だな。

俺はベッドに仰向けに寝転がり、携帯を開いて画面を凝視していた。

この見知った世界に、何を持ち込もうか考えていた。

宇宙人でも降臨させようか……それとも、凶悪な殺人鬼でも街に放とうか。

考える事は凶悪な方向に流れていく。

ただ、凶悪ではあるが、まんねりだな。  
使い古されたパターンだ。  
もっと何か面白いことないかな。

うーん、浮ばないな……

散々考えたが、マンネリ打破ができない。

仕方ない、外に出て夜の景色を眺めながら歩いてみよう。

何か浮ぶかもしれない。

深夜の散歩か。

うちの母ちゃんに見つかったらまずいな。

深夜に外出しようとしてるのがばれたら、怒られるに決まってる。

俺の家は高校生の深夜の外出を許すような親じゃないんだ。

うーん、いきなり携帯が役に立ちそうだ。

『俺に瞬間移動の能力付与』

決定を押す。確定した。

何ら変わったエフェクトはなかったが、

既に俺の体にはその能力が宿っているはずだ。

懐かしくなった。

瞬間移動を使って、家のすぐ前の道路に出た。  
深夜の車道は静まり返っている。

とはいえ、道沿いに電灯が等間隔にあるため、  
真っ暗ではない。

車道沿いの歩道を東に向かって真直ぐ歩く。  
人いないなあ。

と、思ったら曲がり角から急に人影が。

カップルらしき二人と擦れ違う。

夫婦かもしれない。

どうでもいいけど。

カップルが曲がってきた方向とは逆、つまり交差点を左に曲がって北へ上がっていく。

この道は家の手前の道路より、広く少し傾斜がある。

先には広い車道があり、そこを渡れば神社があった。

大きすぎず、狭すぎず、幼い頃よく近所の友達と遊んだ場所だ。

神社に行くために俺は信号待ちをしていた。

俺は少し怯えていた。

神社の手前には派出所があるからだ。

深夜に高校生である俺が出歩いているのを見つけて、

補導でもされないかと心配だった。

だが、それは杞憂に終わった。

交番には明かりは点いているが、人がいないようだ。

もしくは奥にいるのかもしれない。

そのうち信号が青に変わる。

石段を上って神社の境内に足を踏み入れた。



~~~~~

それにしても単調だ。

これではただの散歩に過ぎない。

境内は電灯が奥にしかなく、今いる場所は薄暗い。

しかし、道路の明かりが届くので、やはり真っ暗ってほどではない。  
い。

大きな御神木？　ってほどではないが、太い幹の木がある。

その木の暗がりて足を止めて一息ついた。

夜風にさやぐ木の葉の音が聞こえる。

境内は寂として薄闇に沈んでいた。

妖怪でも出そうな雰囲気　には程遠いが。

山奥にある神社ではないからだ。

時々、入って来た方から、バイクの甲高いエンジン音が聞こえてくるし。

所詮は住宅街の一角を占める神社に過ぎない。

あーあ、詰まんないな。現実世界って。

携帯でも使わないと、何にも目新しい事なんて起きようがない。

まあ、元々ここは俺が作った仮想世界。

俺が色づけしないと、何も始らないわけだが。

神社は詰まらないな。

俺は目を閉じて、次の行き先を頭でイメージする。

そして、その場所に移動する意志を脳に伝える。

瞬間　俺をとりまく風景が変わっていた。

ここは高校に上がる前に通っていた中学校だ。

その手前の坂道に俺は立っていた。

坂道を上がりきり、閉じられた門の向こうに映る学校を眺める。  
変わっていないな。

二年くらいじゃなあ。

学校の奥の方へ視線を投じる。

確かあのへんが……

俺はここで3年の時に過ごした教室を今でも覚えていた。

まだあるに違いない。

そうだ、あの教室に瞬間移動してみよう。

うまく行った。

イメージが少しだけ薄らぎかけていたんで心配だったが、部屋の中へ無事やってきた。

教室だ。

真つ暗かと思っただが、月明かりが差し込んでいるのか、青白い光が薄く教室を照らしていた。

ここで一年、勉強に勤しんだんだよな。

一昨年の話か。

黒板がある。

前には教卓があり、向かいに机が整然と並んでいる。

教卓から見て窓際から2番目の列の一番後ろから2つ目の机が俺の席だった。

懐かしい。

俺はその机まで歩いて、表面を手で撫でる。

そして、すぐ右側の席を見る。

ここに俺の好きな女の子が座っていたんだ。

ってなに郷愁に浸っているんだ、俺。

## 朝。

自室で迎える朝はやはり快適だ。

窓を覆う水色のカーテンから淡く漏れる陽射し。

俺の匂いが染み付いた柔らかい掛け布団。

木目のある壁に押しピンで留められたカレンダー。

部屋にある全ての物から安堵を感じる事ができる。

昨日は学校行つたまでは良かったが、

特に目新しい発想が浮かばなかった。

ただ全く何も浮かばなかったわけじゃない。

色々考えて、一つは浮んだ。

実際、それを携帯で実行しようか考えた。

だが、その結末の虚しさがすぐに頭をよぎって不成立。

この世界に貼り付けた現実の俺のいる場所そっくりの地域で、ありふれた願望をなしたとしても、残るのは言い様のない虚無感だけだ。それはあたかも、オンラインゲームで途方もない時間を使つて、お金を溜めたり、ほしい物を手に入れたりする行為と似ているかもしれない。決して現実世界には反映されないものだ。そんな事のために、俺はこの世界を作つたわけではない。飽くまで現実世界では体験できない奇抜な展開に身を委ねるのが目的だ。

靴下はぐつと。

押入れを開ける。

ここには衣装ケースが段々に重なって置いてある。

靴下や下着類はこの中に収められていた。

洗ったばかりの白いソックスとパンツを取り出した。

フローリングの床に座り込んで、パンツを履き替え靴下を両足に被せていく。

きつちり引張って足に馴染ませると、気だるい体に鞭うって立ち上がる。

そして、押入れを閉めようとした。その時だった。

何か押し入れの奥の方で音がする。

ん？ この空気が漏れる様な音は一体何だろう。

ふしゆるるゝふしゆるるゝって。

俺は押入れの奥の影にそろりと視線を這わせた。

この見慣れた形は……人間の足！？

驚いて、慌てて後退りした。

だ、誰か、押入れにいる……

ど、泥棒か？

俺は慌てて部屋の隅に立てかけられた金属バットを手にした。

そして、わななく足をゆるりと前に押し出し、押入れの前でバットを振り上げる。

大上段の構えのまま、反対側の押入れの扉に親指を引っ掛けゆつくり開いていく。

あ！？ お前は……

俺は押入れに眠る男の顔を認めて、急激に体中の強張りを解いていった。

「拓様、ここは？」

「俺の部屋だよ」

白髪交じりの中年の男、岩倉源二、小型飛行機の操縦士だ。

茶色の腹巻に白いランニングシャツ、青と白のストライプのパンツ。

それに裸足！

典型的なオヤジルック。しかも少々時代がっている。

腹巻してる人間って今時珍しいよな。

「どうやら、世界が上塗りされても、元いた人間は消去されず残っていたようだ。」

「おやっさん、取りあえずこの部屋で大人しくしておいてくれよ」「は、はい」

言い置いて、部屋を出て扉を閉める。

そして、俺の父ちゃんの部屋へ走った。

部屋に入ると、誰もいなかった。

壁掛け時計に目をやる。

時計の短針は9時を回っていた。

父は会社に出かけ、母はパートに行ったようだ。

GW明けの木曜日だからな。

俺も本当なら高校へ着いていないといけない時間だ。

でもまあ、仮想世界だしなんとでもなるだろう。

あっと、言い忘れていたが、俺がこの世界にいる間、現実の世界もすっかり時間は動いている。

俺がこの世界で動き出すという事は、オンラインゲームのログインと同じようなものだと思って欲しい。この世界にいない間は通常の生活を送っている。ただし、内の世界の時間は適当で、ログインした時、その始まりの日付時間は俺の一存で決める事ができる。夜の時間帯だろうが、朝だろうが、一週間先だろうが俺の気持ち一つだ。

話が脱線したが再開。

俺は父の普段着のズボンと半そでを取りに来たんだ。

衣装箆笥を開いて、おやっさんに合いそうな服を見繕う。

サイズが合わないと困るので、ベルトも持っていこう。

ぶかぶかなら無理やり絞ってやる。

あ、窮屈ならどうしょ。うーん、ままよ！ 面倒くさい。

俺はいくつか父の衣服を小脇に抱えると自室に戻った。

「おお、合ってるじゃん」

「はい、ピッタリですな」

おやっさんは、顔を綻ばせてはいるが些か照れ臭そうにしていた。あまり身につけたことのない衣服に、違和感のようなものを感じているんだろう。

「家にいるとさ、色々まずいんで、他へ行こうか？」

「え、はい」

「腹も空いてるだろうし、朝マックでも行こう」  
「そういうことになった。」

## 浅慮。

俺は何にも分かっていなかった。

住んでる地域だけを削つてこの世界に貼り付けるといふ事が、  
どつという事を招くか、まるで分かっていなかった……

家を一步出て路上をしばらく歩いているうちに、

街の様子の異変に気づいた。

歩道を歩いていると、三々五々と集つた人々が何やら話している。  
彼等の表情は至つて深刻で、動揺の色がありありと浮んでいた。

歩道に沿うように走る車道は、この時間帯にしては車でこつた返  
している。

「うわ……」

俺とおやつさんがマツクの店舗近くにくると、大勢の人達が店を  
取り巻いている。

一重二重の群集の囲いは堅牢だ。

入っていく隙間もないくらい。

一体何が起きてるんだろつ？

「おやつさん、ちよつと何が起きてるか聞いてきてくれないか？」

「いいですよ」

おやつさんはラフな白いポロシャツとジーパン姿をしている。

おばさんらしき人を捕まえて話を聞いていたが、すぐに戻つてき  
た。

「拓様！」

「どつしたの？」

「えーつと、この〇×市以外が突如、全て荒野になつていって噂  
が飛び交つてるそうです。それにテレビもネットも見れないし、携  
帯も電話も繋がらないとか。でも実際、この市の果てを見に行つた  
人は、周りが何にもない荒野であるの確認したらしくつて、その事

実が口伝えで広がってるらしいです。

それを信じた住民の方々が、慌てて食料確保のために食品関係の店へ殺到しているらしいです」

「なんだって」

「もし周りが荒野だとしたら、この地域外からの流通が全く途絶えてしまうことになるので、何れ食料がなくなるとか、慌てた人々がパニック起こしているようです」

「しまった……」

俺はとんでもないミスを犯してしまった。

まずいな。

深く考えていなかった。

興味本位で実験的にやった事だけど、現実世界の一部をそっくり異世界の荒野に、

運べば、当然、ライフラインや情報網が崩され、そこで暮していた人の生活が脅かされることになる。

こんな事に気づかなかったのは、所詮仮想空間に作った擬似地域だと俺が軽んじていたためか。

このままだと略奪とか始まるのも時間の問題だな。

自宅が心配になり急いで戻った。

おやつさんを外に待たせて家の門を潜る。

「拓！ 大丈夫だった！？」

「うん」

玄関の扉を開けると青褪めた顔で母が俺を出迎えた。

母は肩までの茶髪を後ろで束ね、 그레이のスカートに白いブラウスを着ている。

顔には汗が滲んでいて、息が少し荒い。走って帰ってきたんだろ  
うか。

ただ、俺の顔を見て、安堵したかのように深い息を漏らす。

「母さん、びっくりしたわよ、パート行こうとしたら、路上に人だ



かりすぐつくてね、話聞いたら、こんなことになってるでしょ、パ  
ート先に電話しても繋がらないし。本当びっくりしたわよ」  
「だよな」

「拓、お、落ち着いてるわね」

俺は母の狼狽ぶりに反して冷静に受け答えをしていた。

「隣の奥さんとばったりあってね、話してたら、今のうちに食料や  
水集めたほうがいいわよって。だから、急いでパンとかレトルトパ  
ックとか、飲み物、買い込んできたわ」

肩を押されて、台所に連れられると、確かにダンボール箱に1ダ  
ースのミネラルウォーター、パンや、

おにぎりやらの入ったビニール袋が、テーブルの上に散乱してい  
た。

すっげえ荷物、これ全部母が運んだのか。

「重かったでしょ？」

「火事場の糞力って言うの？ 母さんもパニックだったけど、何  
とか食べ物確保しとこうって」  
頼りになる母だ。

「拓、この後、どうしようか」

「焦っても仕方ないし」

「そ、それもそうね」

大きな目を瞬かせ、深呼吸をして胸を上下させる母。

そして、テレビをつけるが、

「やっぱりテレビ映らないわね」

画面には砂嵐がざわめいているだけだ。

「そりゃ……」

この世界には衛星もないし、映るわけない。

「あ、そう言えば父さんは？」

「もうすぐ帰ってくると思うんだけど……携帯も通じないの」

母が不安げにテーブルに視線を落とした。

なんか面倒な事になってきたな……



漲ってきた。

時間が経つに連れて、ある程度、認識違いがある事に気づいた。まず、テレビの電源がつかないという事は電力は途絶えていない。

電話や携帯はパニックになった住民が、知り合いや親類にひっきりなしに、

連絡するから、繋がりにくくなってはいる。

しかし、インターネットは部分的に生きているようで、いち早くメールで市民達の間で情報交換が為されていた。そのおかげで、早い段階で人々に情報の伝達がスムーズに行われていた。市のホームページにも現況が画像つきで紹介されている。まあ、当然と言えば当然。別に市に大地震が起きたので、建物が崩壊したわけでもないのだ。市内のライフラインや情報網は生きている。貯水池はこの市にもあるし発電所もあるが、電力はともかく、この市の貯水池だけで市民の生活に必要な水を全て補えるかは甚だ疑問だ。それに、他の都市からの流通が途絶えた以上、市内にある食糧だけでは不足する事は確実だ。やはり目下のところ、逼迫する問題は食糧だろう。そして、何より　こんな状況になっても、日本政府や他都市からの救援は絶対ないと言える。

本当ならこの絶望的状况を導いた俺は、市民のために何らかの善処を行う義務がある。しかし、俺はいづれ何とかするにせよ、今それを行う気は更々なかった。俺は故意にこの状況を作り出したわけではないが、期せずして、稀有な状況を作り上げる事ができたのだ。俺は好奇心が芽ばえていた。人間は突発的且、極限の境遇において、どういう行動を取るのか、それを確かめたくなっていた。そこで、しばらく成行きを見守ってみる事に決めた。

「母さん、えらいことになったな」

「ですよね〜」

黒縁の眼鏡をかけた父、宏。

白髪交じりの黒髪、額は広く、鼻筋は通っている。

顔だけ取れば十人並みではあるが、性格は鷹揚にして頑健、家族の大黒柱であり頼りになる父親だ。

父の会社は市外にあり、当然、会社との連絡もつかないでいた。

母が働く市内のスーパーも、こんな状況では店を閉じるしかなく、ここ3日間は家に入り浸りだ。

しかし、そろそろ一家の食糧も底を尽き始めている。

「市長の話だと、どうやら、職員と警察を伴って果ての世界の探索調査に乗り出すらしい」

「そうなんだ、大変ねえ」

「荒野が広がってるらしいからね、は〜しかし、何でこうなったんだろうな〜」

親父は太い眉を寄せて深い溜息をついた。

母は茶を啜りながら、居間のガラス窓から暢気な顔で外の庭を眺めている。

庭にはシマトネリコ、ソヨゴといった常緑樹が垣根の傍に植えられていて、手前にあるレンガに囲まれた花壇には素朴な美を湛えるマーガレットや、鮮やかな青紫が目に映えるムスカリなどが咲きほこっていた。

俺は一旦家族を居間に残して自室に戻った。

岩倉源二こと、おやつさんは押入れに住んでいた。

だが、そのまんまの姿では家族に見つかってしまふ。

仕方なく、俺はある特殊な能力を自らに付与した。

能力名、ミニマム。人差し指を対象に向けて小さくなあれ！と唱えれば、

対象を小指大の大きさに縮める事ができる特殊能力だ。

俺はこっそり、昼食の残りをサランラップに包んで自室に持ち込んでいた。

無論、おやつさんのエサ……もとい、昼食だ。

以前どっかで買った招き猫の置物の下に敷かれた座布団を引っぺがし、

それを俺の部屋のテーブルに置いて、おやつさんに上に座ってもらった。

面倒なので、大きめの木のサイコロをテーブル代わりとした。

サイコロの上に広げられたラップにはごちゃ混ぜの食べ物かひしめく。

「美味しい？」

「ええ！」

箸などあるわけないので、手づかみで食べてもらっている。

おっと、飲み物忘れた。

俺は急いで部屋を出て一階へ下りる。

台所に行き、番茶を小さなカップに入れた。

もちろんスプーンも忘れない。

おやつさんの前にお茶を溜めたスプーンを差し出して啜って貰うつもりだ。

一段飛びで音を立てて階段を上り、部屋の扉を開け放つ。

「ただいま」

「ぎゃああ、助けて！」

「うお！ どうした」

部屋に入るや、おやつさんがしわがれた声で悲鳴をあげていた。

見ると、家で飼っている猫ちゃんが、おやつさんの昼食を食べ終えてラップを、

赤い舌で舐めているところだった。

テーブルの隅にまで逃げて、猫と最大限の距離を保つおやつさん。背後は崖だ。落ちたら只じゃすまない。

俺は慌てて猫ちゃんを後ろから抱きかかえる。

「ふーちゃん、いつの間に入ったんだ」

飼い猫ふーちゃんは、大きめの白い猫だ。

彼は俺に抱きかかえられながら、好奇に満ちた瞳でおやつさんを見下ろしている。

「さいなら」

ふーちゃんを廊下に出して扉を閉めた。

「ごめんなくおやつさん！」

「はあはあ、いゝえ、き、気にしないでください」

猫がいなくなつて安心したのか、テーブルの表面にずりりと、くず折れる。額の玉の汗を白いハンカチで拭っていた。怖かつただろ  
うなあ。ラップの食べ物が尽きてたら……もう少し来るのが遅かつたら、ふーちゃんの凶悪な爪を受けて深い傷を負つてたかもしれない。  
い。

「解除！」

元の姿に一瞬で戻るおやつさん。

テーブルがおやつさんの重みで軋む。

脚立が貧弱なんだ。

俺はおやつさんの背後に周り、両脇を抱えてテーブルから下りるのを手伝う。

「あ、有難うございます、拓様」

「いや、本当悪かつたよ」

おやつさんは、あれだけの思いをしても好々爺のような笑顔をやささない。

後ろめたい気持ち、良心に刺々しく迫ってきて俺を咎める。

だが、同時におやつさんの屈託ない笑顔が別の思いを俺の中に植  
えつけていた。

「なあ、おやつさん！」

俺は親密な響きを声に乗せて言った。

「はい」

「未開の地を旅してみないか？」

後ろ暗い感情を払拭したいという利己的な心からそう言ったわけではない。

おやつさんと一緒に旅をしたいという自然な思いが口を衝いたのだ。

## 謎

この前の俺はテンションが幾分ずれていた。

おやっさんの人の良さに心を打たれたものの、

二人で旅をするのは無理があった。

まあ、旅といっても、俺の街を逍遙しただけなんだけどね。

30分足らずで息を切るご老体のおやっさんとの旅は相当気を使った。

本人いわく、スタミナがないらしい。

年など考えたことがなかったが、よくみれが深い皺が顔の随所に刻まれたその顔は、

優に齡70を超えていそうだ。

俺は彼の亀の歩みに歩幅を合わせた。

度々、彼のために休憩も挟んだ。

俺はそんな移動を繰り返しているうちに、老人介護を生業とする人間になったような錯覚を覚えた。

とても街の探索どころじゃない。

街にはまばらに人はいるが、皆どこことなく表情が暗い。

時折、殺伐とした視線が肌に突き刺さる。

どこことなく身の危険を感じ始めた頃には自宅に戻っていた。

家族には目もくれず、自室に走り中に入ると、内から鍵を閉めた。

おやっさんをミニマムで小さくして、押入れに寝かせ、その間、じっくりこの先どうするか考えた。

この状況を放って置くのは得策じゃない。

こんな何も無い世界のご真ん中で、俺の街が孤立してぼつんとあ



っては、

街の住民は死を待つばかりだ。

そんな結論に達した後の俺の仕事は速かった。

あつという間に携帯を使って街を消去していた。

街が跡形もなく消え、荒野にぽつんと残された俺とおやっさん。

俺はおやっさんの事は好きだけど、旅の相棒としては適任者には程遠い。

だが、消去する気にはなれなかった。

家族は街ごと消えたが、彼等は現実世界では幸福な生活を送っている。

だから、この世界から消去するのに迷いはなかった。

しかし、おやっさんは、この世界にしか存在していない。

いわば、オリジナルな一人の人間だ。

無碍に携帯で消すなど、できようはずがない。

しかし、一緒に旅はできない。

そこで

おやっさんには家を与えた。介護要員の老練でタフな女性を二人つけた。

もちろん、家の中には、食料や水が無限増殖する冷蔵庫や水道つきだ。

ついでに医療設備も家の中に拵え、常駐の医者もつけた。

ここまですれば、おやっさんは死ぬまで、あの家で幸せに暮らせるだろう。

俺のしてあげれる事は全部した。

心置きなく彼を置いて、旅に出れる。

事情を話しおやっさんに別れを告げた。

快くそれを受け入れた彼の目は寂しげだった。

家の入り口に立ち、手を振って俺を送り出すおやっさん。

その姿を振り返った時初めて、俺は彼に親近感を抱いた理由が分かった。

彼に死んだ祖父の姿を重ねていたんだ。

荒野をしばし一人彷徨った。

当て所のない旅に途方に暮れる　つもりはなかった。

行き先は既に決まっていたんだ。

俺の街をこの世界に召還した時、おやっさんは消えてなかった。

小型飛行機の方は消えていたけどね。

だから、まだテリーもツン娘もあの家もこの世界に存在してるはずだ。

飛行機で大分移動してたはずだし、街がああの地域に被る事はないと思うし。

俺はテリーとの再会を果たすつもりだった。

かなり離れた位置ではあるが、テレポートの力があるので、簡単に移動できるはずだ。

まあ、そういうことで、彼が今どういう生活を送っているか、興味が湧いてきたので、あの家に戻ってみようと考えた。

あれから一週間が過ぎている。

あの二人はうまくやっているだろうか。

とりあえず、家のまん前だと外に誰かいれば見つかってしまうので、

家の裏手にあつた岩影をイメージして飛んでみることにした。

頭の中に場所を思い浮かべ、脳にその意志を伝える。

ふっと体が軽くなった感覚がしたかと思うと、

辺りの景色がテレビのチャンネルを変えたかのように刹那に入れ替わる。

岩陰からそつと顔を出してテリー達の家を覗く。  
あつた。

銀色の円柱形の塔。

真昼の陽光を浴びて煌びやかに表面が光っている。

さあ、どうするか。

まだあの中に二人は住んでいるのだろうか。

忠実さだけは並々ならぬものがあるテリー。

きつと、主人の帰りを待っているとは思っただが。

ただ、一週間の間、留守にした理由を弁解するのも面倒だ。

それにあのツン娘もいるだろうし。

仕方がない。

俺は携帯を取り出した。

『俺の携帯の画面に、捉えたすべてのものをリアルタイムで移し  
だす、超小型の浮遊する、携帯で自由に操作できるカメラおくれ』  
これを確定する。

……

ん？ 見えないな。

小さすぎて目で捉える事ができないようだ。

携帯を見る。

ディスプレイの下にレバーのようなものがついている。

操作するために新しく携帯に備わったものようだ。

ディスプレイに俺の顔が映っている。

操作に慣れよう。

右にレバーを倒すと右に景色がずれる。

左に倒すと、また俺の姿が映し出される。

上に倒すと俺の胸の辺りから首、頭、頭越しに見える荒野の風景

へと変わっていく。

下はその逆。

前進は……ああ、レバーを押すようだ。

斜めは……

一通りレバーをいじって大体の操作は分かった。  
よし、動かすぞ。

塔の入り口付近にアイを移動させた。

このカメラはアイと名づけた。

それはいいとして、外の外壁と同じ色の扉。

四角く金色の枠で縁取られているのですぐに判別はつく。

家の前に人気なし。

もう少し後方に退いて、全体像をカメラに収めよう。

確か窓があつたはずだが……

うーん、ない。

外からは窓の存在は確認できない。

しかし、俺の部屋には確かに窓があり外の景色を見ることができた。

外の日差しが部屋の中を照らしていたはずだ。

どうやら……あの窓はマジックミラーと似た性質を持っているらしい。

窓枠と壁の隙間からカメラを進入させようかと思っただけどな入り口の扉は床や壁と寄木細工のようにぴったりと密着していて、隙間がなく入れなさそうだったんで。

ああ、どうすっかな。

そうだこっししよう。

よし、携帯だ。

『カメラに投石機能付与』

確定。

おっけーだ。

携帯に黒と白のボタンのようなものが新しく追加された。  
黒を押してみる。

……  
何も起きない。

たぶん、発射ボタンだ。  
白を押す。

お、カメラの前に地面の小石が浮かび上がる。  
カメラを振ってみると、小岩もカメラが映す四角い枠の視界の真ん中に位置しようと思えば泳ぐ。

よし、分かった。

扉の前にまたカメラを移動させた。

カメラの角度と高度を調整しながら、小岩を当てる場所に照準を合わせる。

俺は深く息を吸い込み息を止めた。

黒いボタンに親指をかける。

発射！

小岩が残像を残してカメラの視界から消えたかと思うと、

甲高い金属音がカメラを通して俺の耳に鳴り響いた。

扉の辺りに小さな砂煙のようなものが舞っている。

小岩が衝突して砕け散った残滓だ。

どうだ……あれだけの物音だ。誰か人がいれば出てくるはず。

お、扉から今何か音がした。

少し外側に開いている。

それを見咎めた俺は、カメラをすーっと扉に近づけ隙間から建物の中に入れた。

カメラの視界は赤で覆われている。

扉を開けた主の衣服が映っているんだろう。

カメラをすかさず上空に移す。

え……？

俺は上からカメラが映した人影に目を見張った。

おかつぱ頭に、赤い着物、紫の帯を巻いた少女らしき姿がある。

扉を大きく開けて、外を覗き見て頭を左右に用心深く振っている。

傍らの壁にかけた、ぬけるような白さが際立つ小さな手。

日本人形のような繊細な黒髪と襟ぐりの隙間から覗く白皙のうなじ。

その姿はあのツン娘の容貌とは全く異なっている。

一体この娘は誰だ……？

## 主従。

「テリー最近元気ないじゃない？」

「そうかなー」

巫女さん姿のツン娘がテリーと向かい合ってテーブルを挟んで座っている。

白いテーブルの上には食べ物をもよおした浅い小さめの皿が並んでいた。

たぶん、昼飯を二人で食べているんだろう。

その脇にはお盆を左手に持ち、侍立するかのように立っているあの少女がいた。

「ほら、おかず残してるし」

「あげるよ」

テリーが宙に浮かした朱色の箸を白い皿に置いた。

頭をうな垂れたまま、

「ごちそうさま」

と力なく呟くと、スツールを引いて立ち上がった。

「どこ行くの？」

「ちょっと外の空気吸ってくるよ」

猫背でテリーは入口まで歩むと扉を開け外を出た。

ツン娘は凜々しい亜麻色の眉を吊り上げてはいるが、

入口を見据える瞳には不安と困惑が入り混じった色が浮かんでい

る。

何だろう……

どういことだろう……

俺はどういうわけか自失してしまっていた。

ぼんやりした頭の中に正体の知れない違和感が蠢いている。

何かが変わだ。

何が変なんだろう。

虚を衝かれたとでもいうべきか。

思考が纏まらない。

それでも順繰りに今みた情景を頭に思い浮かべていく。

まず、思い当たったのは二人の横に立っていた少女。

何者なんだろう。

身じろぎせず、背をまっすぐ伸ばして二人を遠巻きに見ていた。

まるでウエイトレスのような立ち居振る舞い。

テリーかツン娘が連れてきたのか？

この世界に俺とおやっさん、この二人以外に人間は作った覚えな  
いんだがな。

それにも増して奇怪な事が。

ツン娘の雰囲気ごとく最初と違っていた。

なんていうか、角がとれたというか、

元気なさそうなテリーを見つめる様子が、汐らしく見えた。

恰も

ん？ ツン娘がカメラの視界から消えた。

俺はカメラの高度を落とし、ツン娘を探した。

いた。

扉のすぐ前で突っ立っている。

扉が開かれた。

まずい、閉められては……

カメラを大急ぎで外に移した。

「あんな奴の事忘れなさいよ！」

「いや……それはできない」

「なんでよ！」



「あのお方は私の主君だからだ」

語気を荒げて詰め寄るツン娘に臆する様子なく、テリーは淡々と言いはなつた。

きりりと濃い太い眉の下にある精悍な眼差しが、押さえ込むかのようにツン娘の顔に置かれている。

その威風は、カメラ越しでも俺に十分伝わってきた。

俺は固唾を呑んで、その様子を見守る。

「そんなに心配なら、探しに行けばいいじゃない！」

「できない、いつ帰ってこられるか分からないし、拓様の行き先も見当がつかないんだ」

「ふん、どうせ、遠くにいけやしないわよ、ここは荒野よ！ ろくに食べ物もなく彷徨ってるんなら、行き倒れて死ぬだけよ、いえ、きつと死んでるんだわ！」

おいおい、生きてるぞ……

「む……」

テリーは目を伏せて、低く唸る。

む……

テリーの俺に対する主従の誓いが、これほど固いとは思わなかった。

しかし、出るに出来ないな。

テリーはともかく、ツン娘が怖い。

俺は二人のやり取りを見て、大体の事を理解していた。

テリーにツン娘は惚れているに違いない。

そして、主君の俺をいつまでも慕い、消息不明の俺の事に気を病むテリーにツン娘は苛立ちを募らせている。いや、俺に苛立っているはずだ。

こんな状況で出て行ったら、ツン娘の弾丸のような罵倒を浴び続けなければいけないだろう。

ああ、どうしたものか。

俺は切り立った岩肌にびったり背をつけ地に腰を下ろしていた。

とりあえず、懐から携帯を取り出した。

「みつけた……」

その刹那、背後からしわがれた低い声がした。

面食らって振り返ると、そこには白装束の皺くちゃの老婆が宙に漂っていた。

気が重い。

「さつきは有難う」

「いえいえ、どういたしまして」

さつき、お婆さんにみつきかり、テリーがどれだけ心配してたかをやんわり伝えられ、出てきて欲しいと頼まれた。そうはいつてもツン娘〓雪乃が怖い。その事を婆さんに訴えると、先に行つて帰つてきた旨と、俺の懸念を伝えて段取りしときますので、私が合図したら来て欲しいと　まあ、手取り足取りの取り成しのおかげで、こうしてテリー達と再会を果たしたのだ。

「えーっと、ところでお二人はどちらから？　テリーの知り合い？

」

「あ、拓様、その老婆とあの少女は私の式神です」

「式神？」

「はい、私は陰陽道がある程度極めていきます。拓様がいなくなつてから、ちよつとした雑用や、外の見張りなど任せていました」

「なるほど」

そついや、テリー作成時、陰陽道使えるとか書いたっけなあ。

この白装束のお婆さんと少女はテリーが陰陽道の力を使って生み出した式神らしい。

雪乃は俺がテリーと話している間、終始膨れっ面で、そつぽを向いている。

左手で頬を支え、苛立ちのリズムを刻むかのようにテーブルを人差し指でとんと叩いていた。

「とにかく、無事帰られて良かったです！」

テリーは俺が出て行く前と変わらぬ澁刺とした笑顔で言った。

彼はよくできた従者だな。悪いことをしたよ。

「次出るときは教えるよ、一緒に行こう」

「はい！」

テリーが微笑むと、周りの式神達も口元を綻ばせる。少女の式神は陶磁器のような、真っ白な端正な顔の桃色の唇を薄く開いている。

その微笑にはぞくりとするような洗練された美しさが漂っている。婆さんの式神に後ろから声かけられ、振り返ってその姿を目にしたときも、違う意味でぞくりとしたが、彼らは何か、人間とは一線を画する靈験のようなものを体から発散させている気がする。

「じゃ、俺、少し自分の部屋で休むよ」

「分かりました、ゆっくりお体休めてください」

「有難う」

立ち上がり、緩いカーブを描くきざしを上げていく。

階下のテリーに手を振りながら、雪乃を一瞥した。

背中を向けてさつきと同じ姿勢を保っている。

テリーと式神達とは話せたものの、雪乃には口を聞いてもらえなかった。

まあ、さつきのカメラで大体の事は分かっているので、これは予想していた。

罵倒されなかっただけかもしれませんと思っべきだな。

「さてと」

取りあえず、ねぐらも確保できたし、テリーとの溝も埋める事ができた。

まあ、一方的に俺が距離を空けただけの話だが。

それにしても、雪乃とは早めに仲直りっていうか、普通に話せるようにならないと、同居者としてはきついな。彼女を作成した時も、取り付く島もなく追い出されたし、よく考えるとコミュニケーション自体、皆無に等しかった。ほぼ面識がない状態でここまで嫌悪されて、良好な関係の構築は難しいとは思っけど、自分の撒いた種だ

し何とかしたいな。

俺はその日、一旦昼寝した。

目が覚めたときは、部屋の内部は薄暗く、窓から見える青白い空が夜の気配を漂わせていた。

どうしよう……そろそろ夕食時だ。

階下のテリーの部屋で皆で集まって、食事をとる時間が迫っている。

俺だけ夕食をテリーに運んでもらう……否、それだと余計に雪乃との軋轢は広がるばかりだ。

体を横に向けて、良い打開策がないか頭を捻る。

大体なあ……テリーの奴がどうやったか知らないが、たった一週間の間に雪乃の心を驚つかみして虜にしてしまったのが、更なる問題を招いている。

まあ、発端は俺の身勝手な行動が呼び込んだ結果だろうけど。

うーん、気が重たい。何か考えなくては……

## 皇女。

このままでは肩身が狭い。

雪乃の機嫌云々の話だけの事じゃない。

同じ屋根の下での共同生活で男女男の比率。

その唯一の女が片方の男と恋仲になっている。(直感)

端的に言っと、居づらいんだ。

俺はここではテリーはともかく、雪乃からすれば邪魔者に過ぎない。

一時期の怒りが和らごうとも、どっちみち雪乃にとって余計な人間だ。

つまり、男女男の比率が無理がある。

俺にも女がいれば、戦況が変わってくる気がする。

そこで

『美人で禁色の長い髪の落ち着いた女性、年は俺と同年、この大陸のジグルト帝国の王子である俺の婚約者、俺の気ままな旅の連れとして俺が無理やり連れまわしている』

とまあ、とってつけたような設定を加えてみる。

従者従者といっても、何でテリーが仕えているのかをはっきりさせないと、理屈が通らないと思ってるね。ただ、これを確定すると、この荒野のどこかにジグルト帝国が発生する。何か面倒なしがらみを作ってしまう。けど、まあ、俺の気持ち次第で撤回消去できるし、一度試しに成立させてみる。

俺は確定を押しした。

「拓様、一緒に食事に参りましょう」

「しかし、雪乃が」

金色の背中まで伸びた髪を後ろで束ねた、雪白の肌をもつ眉目秀麗な美女。

名前は……？

「大丈夫ですよ、拓様、この氷雨にお任せください」

「おお、そうか氷雨よろしくな」

氷雨か、ジグルト帝国つて横文字の王子の婚約者にしては和風な名前だな。

「た、拓様」

「ん？」

「先ほどは、し、失礼いたしました。拓様がジグルト帝国の王子様だなんて知らなかったから、私、テリーと氷雨さんに教えてもらって……ご、ご無礼お許してください」

「よきに計らえ」

ハハハ、雪乃が態度180度変えたぞ。

設定が世界に浸透して、ようやくテリーが俺たちの素性を打ち明ける事ができたんだ。

氷雨が俺の婚約者であることは、従者であるテリーが知っているのは当然。

彼女が現れた事で、何らかの理由で素性を隠していたテリーが雪乃に真相を話したに違いない。

テリーには内緒で、今までミニマムの魔法で氷雨を俺が小箱に入れて持ち歩いてたということで、話は通っている。都合の良過ぎる話だと思っが。

身を小さくして食事を取る雪乃を見ると、なんだか滑稽だ。

だけど、白い純白の豪華なドレスを着たまま、こんな丸テーブルで、身を寄せ合って済まし顔で味噌汁を啜る氷雨の姿もそぐわないな。俺の嫁ってことは、どこかの皇女だろうから、仕方ないのかも。しれないが、今の服装は場違いだ。

よし、携帯で、

「ちよっとトイレしてくる」

「はい」

『氷雨の服を、淡い青のワンピースに変える』  
確定。

トイレの水を流し、席に戻る。

うん、こういう家庭的な場所ではこのラフさがいい。

俺だつて家に居たときと同じ半そでに綿パンなんだし。

俺も氷雨も王族なので、身分を考えると、不釣り合いな格好ではある。

まー、お忍びの旅ということにしているから、これはこれで問題ないのかもな。

「拓様」

「ああ、氷雨よ、俺の呼び名は拓でよい」

「え、じゃその、拓……」

氷雨は頬を赤くして、恥ずかしそうに俺の名を呼び捨てた。

その様子を雪乃が顔を伏せたまま、物珍しいものを見るように上目遣いでちらちら視線を投げてくる。対照的に、テリーは落ち着きはらって、屈託ない微笑みを満面に湛えていた。

「どうした？ 氷雨」

「父が今日こちらへ尋ねてくるそうです」

「ん、どうやって連絡取ったんだ？」

「私の一族は念話で交信ができます。先ほど頭の中で父と話しておりました」

「ほお」

そんな特殊な力を持っているのか。

俺が付与したわけでもないのに、うーん、嫌な予感がするな。



これまでの経験上、携帯である世界観を形作ると、その世界に似つかわしい環境が勝手に反映されてしまうんだ。またややこしい事にならないければいいが。

## 時空転換。

何でも人の力に頼ろうとするから、余計な柵が増える。

ジグルト帝国、氷雨はこの世界からなかったことにした。

氷雨を作る前に俺は携帯の力を使って戻り、全てをやり直す事にした。

しつかり、自力で雪乃と対面。

『ああ、みんな迷惑かけて悪かった、反省している、ここに置いてください』と平謝りして、テリーのフォローもあり、一応の雪乃との対面も果たし、怒りも収めてもらって今に至る。

案外、初対面に近い事もあって、雪乃からぼろ糞に叱責されることはなかった。

ありきたりな方向へ流れそうになったので、話を遡って方向軸を変えた。

もうね、皇女とかいいからって、そう思ったわけだ。

## パラレル。

『俺の住む世界すべてをこの世界に持ってくる、テリーは俺の弟、雪乃は隣の家の娘、おやつさんは雪乃の祖父、俺、テリー、雪乃は同じ高校に通う。全て反映』

また俺は現実の世界の自室にいる。

いや、もう俺だけの部屋ではない。

テリーとの相部屋だ。

正直むさ苦しい。だが、我が家は兄弟二人が住めるほど大きないのだ。

「兄貴、雪乃と今度デートいくんだけど、どっか面白いところないか？」

「ボーリングでもいけよ、ち、良いよな、お前、幼馴染とデートかよ、羨ましい、」

「ボーリングか……」

テリーの姿は変わっている。

以前の武士のような身なりではない。

この世界での一般的な高校1年生と同じラフな家着、夏なので半袖に半ズボンだ。

ただし、彼は陰陽師で推理好きという設定は生きている。

まあ、それが独立して彼だけに宿るのは不可能だ。

彼が陰陽師であるということは

「拓様、お父上から伝言承りました。あまり式神を便利に使いすぎるなど仰られています」

今、目の前に現れた少女の式神、見かけはテリーが扱っていた式神と似ている。

ちよっとばくってみた。

「ああ、お前に朝飯持ってこさせたの気に入らなかつたんだな」  
「そうみたいです」

俺の足元にはお盆があり、その上には何も載っていない皿があった。

トーストと目玉焼きは既に俺の腹の中だ。

「親父もよー、好きに利用してるくせに俺にだけ言うか」

「兄貴は、式神に頼りすぎてるから体動かせて言ってるだけだと思っが。怠慢こきすぎなんだよ」

「うるせー！」

テリーを足蹴にする。

「ごめんよ、言い過ぎた」

テリーは手を突き出して苦笑いを浮かべる。

兄弟とはいえ、従順なところは同じらしい。

「雪乃ちゃん、おはよう」

「あ、拓兄はやいじゃん」

俺は高校に行こうと門をでたところで、制服姿の雪乃とばったり会った。

「輝、もう少しで来ると思っ」

俺はテリーと呼んでいるが、実際の彼のここでの名前は輝だ。

「あ、ども」

「じゃ俺は行くよ」

雪乃は俺にいつてら〜と微笑み手を振って見送る。

## 余談。

一応制服を着こんで、高校へ向かう振りをして家を出たが、現実の世界でうんざりしながらも毎日通う高校へ、仮想世界でも真面目に通うつもりはない。

それでもこの世界で遊ぶなら、取りあえず通っていないと、面倒なことになる。

なぜなら、レプリカ世界といえど、現実世界のコピーであるため、向こうの道理で世界が回っているからだ。

まあ、これは前に一部をこちらへ反映したから分かっている。

そんな面倒な世界を、テリー、雪乃、おやつさんを取り込み、再び創り上げた理由。

特にこれだと言うものはないのだが、しいて語るならこの間一部を持ってきて、短い時間ではあったがその中で暮らしてみても、そう悪い気がしなかったからだ。

今回は一部だけ反映したために死活問題に発展し、悠長に世界の中で色々試す時間も心の余裕も全くなかった。だから、今回は全て地球ごとこの仮想空間に反映した。これなら至急に何か切迫した事態に悩まされる事はないだろう。

ただ、前にも言ったが、ありきたりな生活を送るつもりは更々ない。

そんなものは現実世界だけで十分だ。

この世界を再び呼び込んだのは、俺が様々な過程を経て集めた仲間、テリー、雪乃、おやつさんとも絡んで、奇矯な体験をするためだ。

まだ、何をするかは決めていない。

ここへ来て取りあえずした事と言えば、俺の分身を携帯で作り出しただけだ。この世界で体裁を繕うために俺の代わりとなり、高校へ通うことが彼の任務だ。分身君が代わりに演じている間、しばらく俺は、一人レポートでうるうるしながら、何を始めるか考えてみようと思う。

だるい。

とある、マンションの屋上、空に迫り出した貯水槽に寄りかかり、ぼーっと、なにをやるか頭の中で吟味していた。

潮の香りに乗せた風が間断なく、前髪を揺らしている。

半袖の白いカッターシャツではあるが、影の中に身を潜めていないと、

灼熱の日差しが身を焦がし、数分もその場に留まれないだろう。

現実の世界の高校では俺は目立った存在ではない。

如才なく人並みの学力と体力を有するが、これといって特技を持つてはいない。

人間関係においても、友人は2、3人はいるが、実際、よく遊ぶのはそのうちの一人とだけだ。

5、6人かそれ以上の集団で行動する事など無縁に等しい。

そんな地味な俺だが、現実と変わらないこの世界では神である。

全ての人間の頂点にあり、あらゆる権限をその手に擁し持て余す雲上人。

その気になれば、この世界にあらゆる災厄をもたらす事が可能だ。ここに住まう全ての人間の生殺与奪も、俺の手中に収められている。

前もそうだったが、ネガティブな考えばかりが去来する。

実際、人間がこの世をどうにでも変えられるような力を持てば、その力で世の中に善行を目論もうとするだろうか？

人によるだろうが、殆どの人間は我欲に任せて、私利私欲を満たそうとするんじゃないかな。

銀行吹っ飛ばして金盗んだり、女を作成し自分の彼女を作ったり

とか。

ふ、小市民の俺は夢想すらもスケールが小さい……  
俺はやおら立ち上がると、高校へ行くことを決意した。



## 淡い午後。

「おい、今休み時間だろ、俺と交代しよう」

「え、今ですか、はい、分かりました」

ドツペルゲンガーと思念で話す。

頭の中で会話できるように設定してある。

人気のない体育館裏へ呼び出して、ドツペルと合流。

「解除！」

と俺がドツペルに向かって言うと、彼は七色の飴玉に姿を変える。それを地に落ちる前に手のひらで受け取ると、口の中へ運んだ。

ごくりと喉を鳴らして嚙下した直後、彼のこれまでの記憶が俺の中に流れ込んでくる。

ドツペルがどことなく、冴えない顔をしていたがその意味が分かった。

隣の席の前川まえがわらあゆみ愛美と良い具合に話が弾んでいたようだ。

先日、授業を休んだ彼女にノートを貸してあげたらしい。

小さな親切から彼女と少し親密になった。

普段女つけのない俺の分身在、夢心地で胸を高鳴らせ青春を謳歌してる時に俺が割り込んできた。

立場が逆なら、俺でも不満を露にしただろう。

彼の意志は無駄にはしない……俺は体育館の外周を回って教室のある別館に移動した。

以前、俺は仮想空間での体験は所詮ネットゲームのようなもので、現実の世界になんら反映されない無駄なものであると嘯いた。しかし、ネットゲームが日ごろのストレスや、満たされない思いを緩和したり、癒す場を担っている事を頭に入れていなかった。現実の世界と瓜二つの仮想世界、そこでどんな成功を収めようともし空しいだけと言ったが、癒しという観点で捉えれば、あながち無駄なもの

でもないと思いはじめている。それに瓜二つの世界であるなら、こころで成功した事例を現実の世界で試せば、良い結果を得られるんじゃないだろうか。

キンコンカンコーン

俺を急かすように、歪んだ響きが構内に響き渡る。

教室へ急いで走る。

引き戸式の扉を開け、ざわめきの間を縫うようにして歩み席に着いた。

5時限は英語らしい。

俺の机の上は消しゴムのカスで塗れていた。

あいつ、どんなノートの書き方してるんだ……おっと、アイツは俺のコピーだった。

普段から誤字が多い俺の粗野な部分まで受け継いでいるらしい。

教科書とノート、筆記用具をカバンから取り出し机の上に並べる。

その作業の合間に、隣の前川愛美に一瞥を投げると、彼女は既に落ち着き払って、英語の教師が来るのを待っている様子だった。だが、不意に彼女が顔を上げると視線が合った。俺はつい、意味もなく視線を逸らし、前頭部の黒髪をなで上げる。今まで俺自信は彼女と話したことがないので、どうしてもドツペルの記憶がよぎり、気恥ずかしい思いが先に立ってしまった。

隆という男。

「拓、何か良い事あったのか？」

三宅隆が俺に唐突に尋ねてきた。

彼は俺が唯一腹を割って話せる人間？

俗に親友と呼べる人間かもしれない。

学校が終わり一緒に帰宅する道々での会話だ。

「何で？」

「……………」

俺は質問に質問で返す。

なんで隆がそう思ったのか疑問に思ったからだ。

隆はその端正な顔立ちに薄い笑みを浮かべて黙っている。

2枚目で物静かな彼は、クラスの女の熱い眼差しを当たり前のよう  
うに受ける存在だ。

まあ、モテモテ君だ。

だが、可笑しなことに、隆には彼女がいない。

今日も何故か男二人で帰宅の途についている。

「……………」

隆は何か含んだような顔のまま、宙を見据え黙然と歩いている。

「そんな気がしたからさ」

この発言が彼の薄い口から漏れるのに1分32秒かかった。

これなんだよな……………こいつに女が見つからないのは。

隆は沈黙が長すぎる男なんだ。

断っておくが、彼は馬鹿ではない。

気が向いた時にしか語ろうとしない、もしくは、よく言葉を吟味  
してから慎重に話すタイプ。

これは彼と長く友として付き合っ  
て導き出した俺の推論だ。

「どんな気だよ……………」

彼が悠然と黙っている間に、女の子はその沈黙に耐えかねてその

場から去ることを余儀なくされる。

結局、面と向かって彼と会話の歩調を合わせる自信がないために、女達は刹那的な挨拶や見返りを期待しない言葉を彼に投げかけるか、遠巻きに彼の美形の顔を眺めるしかできないんだ。ジャーニーズ系の秀麗な顔の持ち主であるにもかかわらず、近寄りがたい雰囲気撒き散らし女を遠ざける。言うなれば、警護の厳重な美術館の展示エリアで不本意にも、柵と警備員にびっしり囲まれ、ケースを被せられる黄金のフラオ像のような男とでもいうべきか  
柵は自前だけどね。

「……………」

黄昏の光が正面から差込んでくる。

眩しそうに手を翳しながら沈黙を共有する俺達。

彼とふとしたきっかけで、友達になつてから一年。

俺はまだ彼を分析しきれていない。

白い霧が体表面を覆っているような正体の掴めない隆。

奇矯な存在である彼と本当に打ち解けて話せているかまだ自信が持てない。

だから、俺は彼を親友と断言できないわけだが

「お前は良い奴だ……親友が幸福そうにしていると俺も嬉しいよ」

隆は何の銜いもなく、俺に微笑み親友と言いつてしまつ。

俺の方が恥ずかしくなるような発言だ。

だが、決して彼は冗談でそれを言つてはいない。

彼の形のいい眉や鼻梁、口元は、本来ある位置に穏やかに留まり、今漏らした言葉が嘘でない事を暗黙のうちに示唆していた。

## この世あらゆる者。

家に帰ると、自室に入りネットゲーを始めた。

小休止とばかりに、中世ヨーロッパを舞台とするオンラインゲームに手をつける。

仮想世界にやってきてまで、ネットゲーやってる俺は変わり者に違いない。

過疎化の進んだゲーム内は、深夜のこの時間でも人が少ない。

金曜日ならもう少し遊んでそうなものだが。

やめた。

現実の世界でもこのゲームは飽き飽きしてんのに、長くは続かわけなかった。

はーやれやれ、そろそろ、本格的にこの世界に新しいものを加えていくか。

その方が楽しいに決まっている。

あ、そうそう、俺は陰陽師の家系になっているが、そんなしよっぱい特技使う必要ないので封印することにした。携帯でなくんでもできるのに、俺が陰陽師ごときの力使っても意味がない。

そろそろ限界だ。

鬱屈したものが心の澱となって堆く積まれ始めている。

もう抑えきれない衝動が手足に、制しきれない倦怠感を充満させている。

ヤルシカナイ。

めっちゃめっちゃにしてやる。

消極的な自制もここまでだ。

この世界をぶっ壊してやる。

今日は満月、俺の体内に脈打つ熱い血は、何かを求めている。平凡なものじゃない、もっと違う何かを呼び込もうとしている。

俺は深夜のこの時間帯に大暴れをしようと思論んだ。形態変化。

俺は空気となる能力を自らに付与することにした。確定を押しした。

さあ、旅たつぞ。

俺の体が空気に変容すると、着ている衣服が宙に舞った。窓の隙間から、外へ。

この季節とはいえ、今日は気温が低くめで肌寒いはずだった。

しかし、大気の体には外の夜気の冷たさは伝わってこない。

壁に触れるが手には何も感じない。触覚も失われているようだ。だが、嗅覚、視覚だけは残っていた。

潮風の匂いが意識の中に浸透していく。

闇に浮かぶ満月は際立って白く見え、俺に無限のパワーを注いでいるような気さえした。

夜の街の上空を空気となった体で滑走する。

移動は思いのままだ。意志の力でどこにでも飛んでいける。

その上、大気の体は誰の目にも映らない。

一種の透明人間のようなものだ。

こういう状態でやる事の定番といえば、覗きでしょうか。

しかし、深夜に風呂入ってる若い女の子を見つけるなど、

労力に見合わないし、やってる俺が馬鹿馬鹿しくなるので却下。

低空飛行で住宅街の路地を進むと、男の罵声とも呻きともとれる

声が闇を渡ってくる。

たぶん、酔っ払いだろう。

目を凝らして見ると、リーマン二人が肩を抱きあって、ふらふらと覚束ない足取りで夜の道を闊歩している。恰幅の良い若い男と太り気味の年配の男、上司と部下といった関係だろうか。

よし、少し脅かしてやろう。

俺の能力は融通がきくものだった。

体の一部を瞬間的に元に戻す事ができる。

「おじさんたち、どこ行くの？」

俺は口と喉を具現化し、後ろから二人に声をかけた。

小心者だから、こんな地味な脅かししかできない。

「あ、お前なんか言った？」

「ああん、なーんも、気のせいだよ」

おっさんたちは振り返りもせず、よく知らない歌を大声で垂れ流しながら夜の闇に消えていった。

駄目だ、酔っ払いは駄目だ。

と、反省しきりで、次の手を考えていると、

『そんなんじゃ、幽霊失格だよ……』

突然、背後から呆れたような女性の声が朗々と響く。

気体の姿のまま後ろを振り返る。

そこには、青いブレザーの制服を着た女の子が立っていた。

こんな時間に高校生が？

傍の電灯の光を受けてか、その少女の姿は夜の闇にくっきり浮かび上がっていた。

しかし、何か可笑的い。

闇から縫い取るように、少女の輪郭は青白い燐光を帯び、その癖、体の色は酷く色褪せている。

それ以前に、何で大気の体である俺に声を掛けられるんだ？

「あんた、俺が見えるのか？」

「うん、見えるっていうか、そこにいるって分かるの」

「ふーん、よく分からないな……」

言いながら、俺は相手の正体に薄々感づき始めていた。

少女は鼻を青白い手で包んで、何かを考えるように視線を辺りに散らしていた。

「えーっとね、簡単に言うと……あなたが私を感じれるように、私もあなたを近くに感じる事ができる……そう言う事だと思う」

「なるほど……てことは、姿は見えていないんだ」

「うん、ただ、近くにあなたが存在する事は知覚できてる」

うまい表現だと感心しながら、彼女はともかく、俺が彼女を目にできている理由に当たりをつけた。

俺は陰陽師の力は使わないことにしたが、それは飽くまで意識で制する事ができるものだけだ。この世の者でない人間、つまり幽霊などを見る力は意志に関係せず機能しているんだ。

「怖い？ 同業でしょ、姿を見せてよ」

俺がしばらく声を発せずにいると、少女は悪戯っぽい笑みを浮かべ言った。

「良いけど……」

俺は姿を現そうか迷ったが、寸前で素っ裸であることを思い出した。

どつしどつ……



## 幽霊談義。

「見えるかな？」

俺は首から上だけ具現化して彼女に語りかけた。

「ん？ 首から下は？」

「あいにく、事故でね……」

俺は咄嗟の判断で、適当な事を口走った。

そしたら、彼女から見る間に笑顔が失われた。

俯く彼女の顔は翳りを一層濃くし悲哀さえ漂う。

「ど、どうした？」

「……………」

さっきまでの笑顔と明るい雰囲気が一転して暗く淀んだものへと変わり、本来の幽霊らしさを取り戻したとでもいうか。

俯いた青白い顔には、一種異様な迫力が纏わりついている。

「私もさ……事故でね、死んだの……」

「あ、そ、そうなんだ……」

「私には彼氏もいたし……大学に進む予定だった……やさしい家族もいた……」

低い悲痛な声は、時々掠れて一人囁くようでもあった。

魂とは感情がそのまま凝り固まったような存在だと聞いた事がある。

だから、生きている時と違い、ちょっとした影響で感情が激しく揺さぶられる のかもしれない。

飽くまで推測に過ぎないが。

彼女の根の深そうな独白はまだ続くようだった。

「あの時……気をつけていれば……」

「……………」

「憎い、切ない、悲しい、やっぱり……憎いのかも？」  
微妙に言い回しに特徴のある子だ。

恨み節続けながらも、自己分析する冷静さは持っている。  
生来の彼女の性格なんだろう。

しばらくして 俯いた彼女の口元が緩んだ。

ついと顔をもたげるので、俺は思わず小さな悲鳴を上げた。

「ふふふ、ごめんね、ちょっと取り乱しちゃった」

「あ、そうなんだ……」  
し、心臓に悪いよ。

荒ぶった鼓動の音が、鼓膜の内側から響いてくる。

大気の体にも心臓はないようであるんだなと感心していると、  
憑き物が落ちたようにけたけたと笑う彼女。

この場合、俺が彼女に憑かれているのかも。

「じゃ、俺自宅に帰るよ」

「え、あなたの自宅って生きてる時、すんでた家？」

「ん？ それ以外何かあるかな」

彼女の妙な質問に首を傾げる。

「そうか、あなた自宅で死ねたのね、事故とかいっからさ、首から  
下がなくなるようなのって、電車で飛び込んだとかそういうの連想  
してた。だから、あなたの自宅は線路かなって……」

「な、な、何を！？」

「だって、そんな悲惨な死に方、それくらいしか浮かばなくて。

幽霊って事故で死ぬと、その場に縛られるっていうからね」

彼女は悪びれた様子もなく一人納得しているように頷きを繰り返  
している。

俺は呆気にとられて彼女を眺めていたが、ふと、舞い込んできた  
疑問に思考がたゆとう。

もし彼女が言った事が本当なら、この子は今いる場所で死んだの  
かな？

察するに、この道で車に引かれたとか。

彼女の足元を見つめていると、そこに血を流してうつ伏せに倒れる彼女の幻影が見えるような気がした。

なんだかやり場のない感傷に浸っていたが、急に彼女は目を見開いて、口を空けたまま俺を覗きこんできた。

「ちよ、ちよと待って！ あなた自宅でその死に方って殺されたの？ 事故って嘘でしょ、は！ 分かった、あれよ！ 草刈機で間違っって自分の首刈ってしまったとかでしょ！ いや他にも……」

まだ彼女の推理は続いていたのか……想像らしいというか。

彼女はそんな調子でしばらく、俺を置いてけぼりにして、しんと静まり返る夜の道で長い時間ひとりごちていた。

## 逃亡。

幽霊つてのは普通、人には姿は見えない。

ある特定の人間に見えたのなら、それは何かを訴えるべく幽霊が相手に姿を見せようとしたか、その人間の霊力が強いいため、偶然視界に入ったかのどちらかだ。

今回の場合、俺は後者の類に入ると考える。

もしかしたら、前者も含まれるかもしれないが、その説は考えたくない。

「あーえっと、君名前は？」

「うーん、拓だよ」

「私は三沢真琴よ」

「そうか良い名前だ、じゃ俺遅いしそろそろ帰るね」

俺は苗字を名乗るのをそれとなく拒んだ。

このまま後腐れなく、恙無く彼女と別れるつもりでいたからだ。

苗字知られると、家を探し当てられるかもしれないからね。

「バイー！」

「さようならー」

俺は具現化した手を振り、振り返りもせずさっと夜の闇に紛れ込んだ。

幾分速度を上げて移動していた。

しばらくして、辻が見えてくると動きを止めて背後を顧みる。

満月の光が道を薄く照らしているが、怪しい人影も幽霊の姿も見当たらない。

どうやら、彼女はついて来ていないようだ。

俺は安堵し一息つくこうとして思い直す。

まだだ、念には念を入れて

俺は完全に大気の姿に戻ると、猛然と辻の左側に滑り込む。そして、その勢いのまま、空へ舞い上がり夜空を突っ切った。

家に帰ってくると、まだ俺の部屋には明かりが灯っていた。

テリーの奴は夜遊び大好きで、普段、深夜1時2時まで普通に外で仲間と遊んでたりする。

たぶん、今日も、さっき帰ったばかりなんだろう。

ふふふ、次の生贄はお前だ。

この不良少年が！（死語）

俺は音もなく一階の庭から、窓の隙間をぬって中に入る。

静寂が包む暗い台所を横切り廊下にでると、二階の自室めざし、大気の体のまま階段を上り扉前に到着。

幽霊ごときじゃ、遭遇しても全く微動だにしないテリー。

今朝も、窓を開けたら蠅のごとく入ってきた浮遊霊のおばさんに、動じる事なく、丁寧に諭して外へ導き、笑顔で見送っていた。

だが 幽霊でない空気人間の俺に対してはどうか？

驚く顔が目に見えるようだ。

俺は半分開いた扉から中に入る。

テリーは床に胡坐をかいて、携帯の画面を見たままにやにや笑っていた。

どうせ、女にでもメール送ってるんだろう。

相手は雪乃か、もしくは男友達だな。

こいつに限って浮気は考えられない。

生真面目を地でいくような実直な弟だし。

雪乃を裏切る事はまずしないだろう。

俺はテリーの背後に回り、両腕を具現化させた。

両脇をくすぐってやる。

笑いを堪えながら、テリーの脇に手を持っていった矢先、

「どなたですか？」

テリーが携帯を指で打ちながら飄々と呟いたのだ。

俺は咄嗟に具現化を解除した。

馬鹿な……なんてばれたんだ。

まさか、こいつも俺の気配を感じる事ができたのか？

一言放ったきり、口を閉ざして何事もなかったように携帯を打ち続けるテリー。

俺は固唾を呑んで、その動向を見守っていた。

しばらくして、入ってきた扉がギョーっと軋みをあげる。

俺は思わず声を立てそうになった。

なんだかよく分からない緊張感に吞まれていた。

だが、その張り詰めた糸も長くは持ちそうになかった。

俺は気が短いんだ。

どうせばれてるならと、テリーの正面に回り、観念して姿を現そうとした。

その時だった。

「勝手に入ってごめんなさい！」

「ギイヤアアアア！」

背後からの突然の声に、俺は無条件に悲鳴を上げていた。

## 闖入者。

「事故で死ぬと、その現場から離れられないんじゃないんじやなかったの？」

「ああ、それ何の確証もないんです。ただ、聞いた話によると、凄惨な事故に巻き込まれて死んだり、巻き込んだ人間にうらみを抱いたりとかいう場合、その場に縛られる事があるとかないとか。実際私はあなたを追ってこれたし、元々あんなところで死んでないし、私の場合にはちよつとそれに当てはまらないようです」

三沢真琴はそれとなく俺たちの輪に加わって軽快なリズムで言葉を紡ぐ。

それは分かったけど、君はなぜ俺を追ってきたんだ……

こうなる事を恐れて、慎重に背後を探り全力で帰ってきたのに水の泡だ。

彼女は俺の怪訝な視線など意に介せず、テリーと自己紹介やら世間話を交えて歓談している。

俺はその間、時々、片目を細めてテリーに目配せを送る。

適当に話を切って、真琴を外に追いやりたい意志を弟に伝えようとしていた。

だって、もう眠いんだ……

幽霊は朝までトークやつても疲れないけど、俺は明日学校あるわけだしそろそろ寝たい。

そんな俺の心が通じたのか、テリーは徐々に聞き役にだけに回り、彼女の話のネタが途切れるのを待っているようだった。俺はその間、自分のベッドの側面に背中を凭せかけうつらうつらとしていた。

「兄貴、朝だよ」

「あ？ お」

朝目覚めると、きつちり布団を被って仰向けに寝ていた。

弟テリーが風邪ひかないように運んでくれたようだ。

俺の顔を覗き込むテリーの目の下は黒ずんでいた。

昨日、真琴といつまで話してたんだろうか。

俺は壁掛け時計に目をやる。

朝6時半だ。

俺は半身を起こし立ち上がると、カーテンを引いて窓の外を眺めた。

空は薄い灰色の雲に覆われ、今にも雨が降ってきそうだった。

「兄貴……」

「あ？」

「ちよつと話いいかな」

一階に下りようとすると、テリーに呼び止められる。

テリーは冴えない顔で俯き、床においてある座布団に座るよう手で促してきた。

何だろう？

「朝まで彼女と話してたんだ」

「ほおほお」

「彼女さあ、昨日、兄貴の後をつけてここまで来たらしいね」

「そうなんだよ、ストーカーだよ、時々いるんだよな、ああいう子」

俺はわざと迷惑そうに声色を変えてテリーに訴えた。

「……………」

「迷惑なんだよな、俺あんまり幽霊にかかわりたくないしさ」

テリーは向かいに正座したまま、黙って俺の愚痴を聞いていた。

「兄貴……彼女訳ありなんだよ」

「ん？」

「真琴ちゃんは、事故で死んだって兄貴に話したらしいね」

テリーは視線を下げたまま、神妙な顔で何か含んだような、もったいぶった間の空け方をした。

「それがどうしたよ」



「彼女……ひよっとしたら誰かに」

「え？」

途中で言葉を濁したテリーの瞳は微かに震えていた。

その弟の様子を目にしているうちに、ざわめく不快な予感が胸の内に広がっていくの感じていた。

## 面倒。

「彼女は水川高校に通ってたんだって」

「水川って言えば、俺らの高校と目と鼻の先じゃないか」

俺は不承不承ながら、テリーの真琴から聞いた話に耳を傾ける。

本来、幽霊との接触自体あまり好ましいことではない。

テリーもそれは分かっている。

「かなり近いよ」

世には有象無象の様々な事情を抱えた霊達が無数に漂っている。

そんな幽霊達は俺達のような強い霊媒体質の人間を見つけると、

あたかも暗闇に浮かぶ誘蛾灯に引寄せられた虫のごとく寄ってくる。

「たしか共学だったよな」

「うん」

「それで？」

彼らは俺たちを見つけると、身近な友達のように声を掛けてくる。その内容は他愛もない世間話だったり、自らの死への不満や、自らを間接的、直接的に死に追いやった人間への復讐話など多種多様だ。ただ、どんな耳苦しい話をされても、それどまりなら、大して俺たちに負担はかからない。だが、中には、面倒な要求をしてくる霊達もいる。例えば……まだ生きている親類縁者に自らの言葉を伝えて欲しいと泣きついてくる者や、俺たちに彼らに代わってあれこれしろと凄む者もいる。幽霊とはいえ、元々彼らは俺と同じくこの世に生を受け暮らしていた人間。色々な幽霊がいて当然だ。だからといって、一々彼らの繰言に耳を貸しては、俺達は体がもたないんだ。正直言つと、最近、面倒な幽霊2、3に絡まれて多少食傷気味だ。

「彼女その高校で事故にあって死んだってことになっているんだって」

「ほお、事故ってなんだ？」

「4階の校舎の窓から誤って落ちたらしいよ」

「なんだ、まんま事故じゃないか」

だから、極力俺も、こういう話は聞きたくないので、  
適当にあしらうつもりだったんだが。

「それがね……どうもそうじゃないらしいんだ」

淡々と話していたテリーの声のトーンが一段階低いものへと変わる。

「彼女、誰かに押されて落ちたっていうんだ」

ああきたよ。

「いわゆる事故に見せかけた殺人ってやつだな……」

「そうなんだよ、なんかさ、朝まで話聞いていたんだけど、彼女啜り泣きながら……中略、悔しいって僕に訴えるんだ……それ聞いててさ……後略」

真琴は俺と話している時も、本当、口が達者で、要領を得た運びでうまく感情を織り交ぜて話す女の子だった。テリーは彼女の哀切の籠った話に絆されたに違いない。

「ふー、分かったよ、で、どうしたいんだ、お前は」

ここまで感化されて暑苦しく語るテリーを、冷淡にあしらうなんてできやしない。

「あ、兄貴！」

諦めて協力の意志を伝えると、曇ったような陰りのあるテリーの顔に光が差し込んだように笑顔が戻る。

「ああ、言っておくが、分かっていると思うが、俺たちにできることなんて、たかが知れている。できない事はできない。警察官でもなんでもないんだからな、それでも良いなら、もう少し話を聞こう」  
「うん！」

厄介ごとは御免だが、弟テリーの彼女の事を親身に思う優しい気持ちも無碍にはできない。

だからといって、あまり深入りはしたくないので、一応釘を刺しておいた。

まあ、彼女の事故現場に花でも添えてやるくらいはしてやるか。

現場へ。

「輝よ、学校まで来てみたはいいが、どうするよ」

「うーん、俺達他校生だし、入りにくいよね」

放課後、俺達は水川高校へやってきた。

テリーはまず、現場をみたいというのだが、中に入れなければ意味がない。

俺達兄弟は校門前で、顔を突き合わせて打開策を図るべく話し込んでいた。

「困りましたね……」

と、呟く真琴の顔は全く困っていないように見えた。

喜色を満面に広げて楽しそうに俺達の方を眺めている。

昨晚、3時に彼女の学校の校門でテリーと落ち合う約束をしたらしいが、実際俺達が来たときの彼女の喜びようは尋常じゃなかった。嬌声を上げながら縋り付いてきたと思ったら、俺達の目の前で、飛んだり跳ねたり、口を押さえて笑ったりしてたが、最後は肩を震わせてその場に泣き崩れた。彼女は俺達が本当に約束を守り、来るとは思ってもいなかったんだろう。

『何かいい案でました？』

「いや」

「中々なあ……」

夕日が真正面から顔に差し込んでくる。

目に染みるような眩しさだ。

俺は目を細めながら、内心そわそわしていた。

さつきから、校門から出てくる学生に訝しげな視線を受けていたからだ。

違う制服の学生が校門前にだらだらいたら、目立つのも当たり前だ。

「あんまり長居したくないな」  
俺はぼつりと不満を漏らした。

「うん、だねー」  
弟も同じ気持ちらしい。

そんな時、ふと、いい案が頭をよぎった。

輝におもむろに近づき、耳元で声を潜めて囁く。

「輝、お前さ、デジカメ持って来てただろ」

「うん」

「あれ、ここの制服着せた式神に持たせて、現場とその周辺を取っ  
てこさせたらどうだ？ 案内は真琴に任せてさ」

「おお、それいいね」

何でこんな簡単な事が浮かばなかったんだ。

「じゃ、さっそく」

輝は足元を見回し何かを探し始めた。

「お、この子いいね」

といいながら、座り込んで何かを手で慎重に捕まえる。

輝が得意げに微笑み、突き出した手の平には蟻が歩いていた。

「じゃ、ちよつと行って来る」

「え？ どこへ……」

真琴が不安げに言つと、心配ない、すぐ帰るといつて微笑み、輝  
は門の少し上の茂みに消えていった。

「お、帰ってきた」

「おかえりなさい」

「お待たせ」

輝が帰ってきた。

「遅いぞ」

「いやあ、結構人目があるので、苦労したよ」

そう呟くテリーの後ろには、女の子が一人寄り添うように立っ  
ていた。

「この制服を身に纏っている。」

肩までの艶のある黒髪をポニーテール風に後ろで束ねた、目の覚めるような雪白の肌をもつ美少女だ。

「おい、これさっきの蟻か？」

「そうだよ、アヤメって言うんだ、よろしく」

「え、その子誰？」

真琴が驚いたようにアヤメを眺める。

「ああ、俺の式神だよ」

「式神って、まさか、陰陽師の？」

真琴は驚嘆に目を見張って、輝とアヤメに忙しく視線を往復させている。

そして、輝を見つめたまま薄く口を開けていた。

「まー真琴ちゃん、詳しい話は後で！ 取りあえず、このアヤメを現場に案内してあげてよ、アヤメはこのデジカメ持って現場の4階の彼女の飛び降りた場所と、その窓から真下の景色、後、その周辺取れるだけとってきてね」

真琴は好奇の眼差しを輝に向けて、詳しい説明を求めているようだったが、今は一刻も早くこの場所をお暇したいので、俺は口早に二人にこちらの要求を伝えた。

「あ、うん、分かった」

「……………」

我に返ったように、真琴は俺の言葉に反応した。アヤメは俺の顔を一瞥すると、輝の顔に視線を移した。黙ったまま、輝が頷くと、真琴を見やった。

「じゃ、じゃあ、アヤメちゃん憑いてきて！」

真琴は気後れしながらも、アヤメに声を掛けた。

アヤメは口元にぞくりとするような微笑みを湛えて真琴の後に憑いて歩く。

「頑張れよー」

「いつてら〜」

俺達二人は彼女達に手を振り見送った。



## 輝の優しさ。

世に未練を残したために、常世の国にもいけず、彷徨う魂が幽霊だとしてよう。

彼らに行くあてもなければ、寄る辺もない、孤立無援な存在。声を掛けようにも、自らの声に気づいてもらえることは稀だ。

私はここにいます。

何で、気づいてくれないの？

気の遠くなるような年月を、そんな報われない思いを抱いて無為に過ごすしかない。

魂、それは生前の記憶と呼ばれるものと似てはいる。

だが、魂に蓄積された生前の記憶は、時の流れとともに風化していく。砂漠に降った雨が淀むことなく底へと消えていくように、一度失われた魂の記憶は戻ってはこないのだ。

今、自室でテリーや俺と笑顔で話している彼女も、いつかは記憶の全てを喪失し、自我さえ保つことができずに、恍惚とこの世を空気のよう彷徨うことになるだろう。

霊と交信できるものはその理を良く分かっている。

特にうちの家系は古来から脈々と受け継がれた陰陽道の一族だ。

輝は路傍に佇む、自我が失われ、ただの浮遊物と化した哀れな魂を見ては、

顔を悲痛に歪めて、見てみぬ振りをして通り過ぎる。

彼は過ぎた後、俺によくこう話す。

「あの人も、以前は記憶が残っていて、僕達と話す事ができたはず。できればもう少し早く、」

彼と話したりして彼の事を知ってあげたかったな』

俺ははつきり言って、弟のような繊細な気持ちを持ち合わせていないから、

そんな言葉を聴くたびに、いちいち一人ひとり聞いてたら体もたねえよ！ と無愛想に返す。

だが、輝は俺とは違うのだ。

今回の件も、彼女が輝に真相が知りたいと哀願したわけではない。輝が彼女と別れる間際、こう切り出したらしい。

『君の亡くなつた場所を見てみたい』と。

これは言葉通りの意味だと俺は思う。

真琴の本当の死因を調べるために、言ったものではない。息絶えた場所を実際目にして、彼女の記憶の断片に触れ、その存在が確かにいたことを、

脳裏に焼き付けてあげたい、そんな輝の優しい気持ちから衝いて出た言葉　だと信じたい！

この後、こんなちなけな現場の画像をもとに、真犯人を探そうなんて、どこかの探偵小説のような流れは断じてないと思いたい！

「よし、大体の様子は分かったね、じゃ、少し見解をみんなに聞こう、兄貴写真見て気づいた事、

よろしく」

つつたく、もおおお。

## 検証。

「ごく普通の廊下に沿うようにある窓、大体臍より少し高い位置に窓の棧がくる。廊下を挟んだ窓の向かいは丁度壁になっている、構造的にみるとこんなかんじだ」

「うん、私は校舎の4階にある窓から少し身を乗り出すようにして、真下を覗き込んだの」

本格的な現場検証を被害者を交えて始めている。

俺一体何やってんだろ……って最初は思っていたが、推理ごっこが始まると案外、真面目に議論してしまうから不思議なもんだ。

「何でその時、真下を覗き込んだの？」

輝が舌鋒鋭く突っ込みを入れるっていうか当たり前の質問。

「ちよつと、待ってね、えーっと」

真琴は顎下に人差し指を当てて、虚空をみつめたまま思考する。

「確か、窓の外を眺めてたら、真下にあるグラウンドから雫に大声掛けられたの、大粒の雨が降り出した時だった」

「ほお、その雫ちゃんとやらのフルネームは？」

「真下雫、私の親友よ」

真琴は最初はきょとんとした顔でその時の様子を語っていたが、

「そしたら、後ろから誰かが……で、わ、私は……」

見る間に、彼女の様子が変わっていく。

彼女の顔が強張り体の輪郭が薄くばやけたかと思うと、陽炎のように揺らめき始めた。

「おい、ど、どうした？　だ、大丈夫……」

その変化に気づき、俺が声をかけようとしたとたん、

炎が風に煽られたかのように、彼女の姿は大きく上に引き伸ばされた。

「うわ……」

唐突な変化に俺は思わず体を後方に仰け反らした。

まるで、ムンクの叫びのようなおぞましい真琴の姿に俺は息を呑んで立ち竦んだ。

「真琴ちゃん！」

すると、輝が慌てて俺の前に割って入り、彼女を抱き竦めるようにした。

「はぁ……はぁ……おおおお」

彼女の面影をどこにも残さない青白い塊は、尚も激したように左右に激しく揺れる。

輪郭が一定しない度を失った彼女の風体は、正視に耐えられるような代物じゃなかった。

後退り震えたまま動けない俺の前で、輝は荒ぶる彼女を必死に両手で押さえ込み、怯える子供を宥めるように大丈夫、大丈夫と呼びかけていた。

「ごめんねー驚かしちゃって……私自分を制御できなくなって……」

「ううん、気にしないで」

「……………」

大変やった……怖かった。

輝がなんとか落ち着かせたけど、一時はどうなるかと思ったよ。

今、真琴は猫かぶりして、屈託ない笑顔を見せてはいるが、

さっきのホラーバージョン見た後じゃ、すぐにはこの場に和めそうにない。

俺は飲み物持ってくるのか言って部屋を一旦出た。

台所にくると電気をつけて、広めの空間で両手を広げて深呼吸をする。

そして、冷蔵庫から取り出した冷たいフルーツジュースを一気飲み。

「ふう……………」

俺は大分落ち着きを取り戻していた。

台所の新鮮な？ 空気と冷たい飲み物のおかげで呼吸は整ったよ  
うだ。

俺は台所の椅子を引いて腰掛ける。

だらりと、背もたれに体を預け、さつき真琴が語った話と現場の  
様子を思い浮かべる。

詳細聞くまで半信半疑だったが、彼女の証言に嘘がなければ、雨  
の日の午後、校舎の4階の廊下で窓を眺めている時に、何者かによ  
って彼女は背中を押されて転落して死んだ。明らかな他殺だ。

あの廊下は彼女の話だと、人があまり通らない廊下だと言う。

真琴は雨の日に、あの場所から外を眺めるのが好きだったらしい。  
人間、家にも外にいても、必ず自分だけの落ち着ける場所を  
一つは持っているものだ。

その安住の地に土足で入り込み、彼女を死に追いやった何者かに、  
俺は柄にもなく強い憤りを感じていた。

「輝、犯人見つけるぞ」

勇み足で部屋に戻ると開口一番、輝に言い放った。

「お帰り」

「おかえりー」

何だか団欒してたような生温い空気が部屋を包んでいる。

「輝！ 真琴を殺った犯人が許せない！」

「俺もだよ」

「兄貴かっこいいー！」

真琴の黄色い声が聞こえて、膨らんだ土気が一瞬萎えたが、  
そう悪い気もしなかったのは俺だけの秘め事にしておく。

「まあ、兄貴、それはいいんだけどさ、一度事故として処理されて  
るし、僕達警察じゃないよね」

「ああ、そつだな……」

この言葉で盛り返しつつあった波が現実の壁にぶつかり砕け散る。犯人を見つけるには、どうしてもあの学校に忍び込むか何かして、彼女の知り合いや友人に話を聞く必要がある。警察でいうところの聞き込み調査だ。しかし、俺達は他校の生徒であり、一介の学生に過ぎない。完全に次の手立てが潰えて、俺達は沈黙を余儀なくされた。

動く。

「真琴ちゃん、頼んだ件うまくやってくれたか？」

「えーっと、だ、大丈夫だと思う……」

「なんか頼りないなあ……」

この間の画像検証から5日が経っている。

俺達はどうかやれば、真相に近づいていけるかあの時議論した。

散々意見を出し合って悩んだ末に、取りあえず、真琴の親友、真下雫と会って事件当日の話を聞く事が必要だという結論に達した。

それが直接事件説明に繋がるとは思わないが、俺達には情報を拾える相手も手段も少なすぎる。まず、身近なところから活路を見出すしかないのだ。

「そろそろ来るわね」

「本当に今日なんだろうな」

「カレンダー見たら母がめもってたからきつと来るよ」

真下雫は今日、親友を弔うために真琴の家に来る事になっている。

俺は真琴に案内されて、真下雫より先に真琴のアパート前に辿り着いた。

彼女がアパートに入る前に接触しようという算段だ。

輝は来ていない。バイクで骨折した友達の見舞いに病院へ行くとか。

仕方ない事情なので2人で来るほかなかったが、輝がいないと心細い。

「ぼろっちいでしょ、アパート」

「そ、そうでもないよ」

俺は言葉を濁してごまかす。

「うち父さん2年前に亡くなって、母のパート代と父の残したお金で細々とやってたんだ」

「そ、そうか」

照れくさそうに眺める真琴の視線を追って、道路に面するアパートを見上げた。

確かに目の前の建物は古びていて、お世辞にも普請が行き届いていないと言えなかった。

外を覆う壁はもとは真っ白だったと思われるが、長年雨風にさらされ灰色がかっている。

所々輝を補修した痕はあるが、まだいくらか裂けた部分が残存していた。

金属製の赤茶けて錆びた外階段も、うらびれた外観を際立たせていた。

「母さん、ずっと元気ないんだ、ハハ……これじゃなんかほっとけないよね」

「……………」

彼女は死後もずっと母の近くを離れずアパートに住み着いているらしい。

母が寝静まった頃、夜を散歩するのが彼女の日課だった。

その時、たまたま俺とばったり出くわしたわけだが。

「残された母があんな顔してるのが心配でね、でも私が心配しても仕方ないよね、幽霊だし何にもしてあげられないしさ」

「そうだな……………」

健気に微笑みを崩さず語る真琴を見ていると、急に鼻の奥がつんと痛み、目の裏に火照りを感じた。

夫と若くして死に別れた彼女の母親……

日々の生計を立てるため、そして、娘のために、身を粉にしてパートで働いていたに違いない。

真琴は母親にとって唯一の心の支えだったはずだ。

その掛け替えのない娘を不慮の事故で亡くした。



残された母親の悲痛は幾ばかりだろうか。  
自分の母親にその像を重ねると、真琴の今の気持ちは痛いほど理解できた。

アパートの前の道は東西に長く伸びている。

俺達はアパートから少し離れたところに移動していた。

「あ、母さんだ」

「あれか」

黄昏時、オレンジ色に染まった道の向こうに、人影が見えアパートの辺りで消えた。

太陽を背負って黒い輪郭しか分からなかったが、真琴にはその影が母だと判別できたようだ。

「ていうことは、そろそろか？」

「うん、母とは逆方向から来るはずよ、駅がそっち側にあるから」  
「き、来たよ」

唐突な真琴の声に驚いて振り返る。

気がつくと、真後ろ3mあるかないかの場所に制服姿の女の子が立っていた。

「あ、あの〜」

「……………」

突然、真下雫が目の前にいるので、動転して言葉が出てこない。

赤っぽい縁の眼鏡をかけた彼女は一見大人しそうに見える。

薄い水色の制服を着ているが、夕日を受けているので彩色の判断は難しい。

彼女は一言発して黙って俯いていた。

眼鏡の奥の黒い瞳は何か怯えるように震えていた。

「ほ、ほら、早く話して」

真琴が背後から急かしてくる。

て、てめえ……こんな至近距離で知らせやがってその態度は何だ……  
腹の底に憤懣としたものを感じつつ、第一声に乗せる言葉を捜す。  
「えっと……」  
「はい!?」  
俺の声に反応して彼女は、肩をびくと一度波打たせ顔をもたげる。

視線が合ってしまった。

これ以上は伸ばせない。

頭を急速に整頓して一か八か切り出してみる。

「あ、あなたを待っていました」

俺は何を口走ってるんだろう。

彼女は呆然と俺を見据えたまま押し黙っていた。

だが、明らかにその表情は驚愕に震えていた。

「ほ、本当だった……」

気まずい沈黙を破り、彼女は何か仕えが取れたように小さな唇から言葉を漏らした。

眼鏡の奥の黒い瞳は大きく見開かれていた。

解明!?

「はい、真琴が夢に三日三晩出てきて、彼女は泣きながら事件の真相を聞かせてくれました。そして、どうか協力者である拓さんに今日会って欲しいって言われて」

「ここへやってきたんですね」

「はい」

真琴が彼女の枕元に現れて、真下雫に協力を要請した。

最初はそんなうまくいくわけないと内心思っていたが、まさか本当に真下雫を連れてくるとは。

『これでなんとかかなりそうね』

「うん」

『じゃあ、公園にでも行って三人で話しましょう』

真琴は嬉しそうに先を数歩行って振り返り、おいでおいでと手をひらひらさせている。

「じゃ、真下さん、真琴が近くの公園に行こうって言うてるんで、行きましょう」

「はい」

彼女は唯々と頷き、俺と一緒に歩き始めた。

その時だった。

突然、目の前を黒い何かがよぎる。

「な、なんだ？」

「ど、どうしたんですか？」

真下雫が驚いたようにこちらを振り返る。

俺は黒い物体の軌道を読んで、空を仰いだ。

見ると、電信柱の頂に黒いカラスが止まっていた。

不吉な……

「そうですか、声を掛けたとき、真琴ちゃんは少しして飛び降りて

きた。その時、あなたは真下において、押し込めた犯人の姿は見えなかつたんですね」

「はい、雨が降ってきたので見えなかつたと思います」  
「なるほど、分かりました」

俺は一通り話しを終えて、真琴を見る。

何か上の空で、公園の入口の方をボーッと眺めている。

『あ、話終わった？』

「うん、終わった」

俺の視線に気づいて真琴が声を掛けてくる。

『じゃ、世間話でもしてたら？』

「それはいいけどさ」

まだ会ったばかりの真下雫と何を話せばいいんだろう。

「あの、牧野さん、真琴が見えてるんですね」

俺が戸惑っていると、真下雫が沈黙を破った。

「はい」

「すごいですね」

「いや、すごいつていうか、うちの家系が……」

「陰陽師ですもんね」

「ん……」

なぜそれを知ってる？

「夢の中で真琴に聞きました」

「なるほど」

真琴の奴余計なことまでべらべらと。

俺は少し非難をこめた視線を真琴に送る。

『ん？ どうしたの？』

「いや」

悪びれた様子なく、彼女はきよとした顔で正面から俺を見据える。

その屈託ない真琴の視線を厭い、真下雫に視線を戻す。

「いつから、霊が見えるように？」

すると、待ちかねたように真下雫が尋ねてくる。

「さ、さあ、あんまり覚えていないけど、物心ついたときには色々なものが見えてましたね」

俺は思わずしどろもどろになって、適当に古い記憶を過去から引き出す。

真下雫の瞳には好奇の色が微かに見て取れた。

「じゃ、また今度、何か分かったらよろしく、さてと、そろそろ帰るかな」

「あ、あの」

日が暮れてきて、腰を浮かそうとすると、真下雫が俺の腕をとって呼び止める。

「兄貴！ 帰ろうか」

その時、公園の暗がりの向こうから聞きなれた声が、弟輝だった。

「輝、なぜここが？」

一応場所は教えていたが、公園の事までは話していなかったはず。

「ははは、ごめん、兄貴にこっそり式神を連れ添わせたんだ」

「え？」

輝が微笑みながら指差す方向を見ると、ベンチの後ろの叢から黒いカラスがゆっくり歩み出てきた。

「僕、弟の輝です、よろしく」

「はじめまして」

突然の来訪者に真下雫も俺も困惑気味だ。

「輝今頃のこのこと、来れるなら最初っからきてくれよ、それに式神なんて何で俺に？」

「ふふふ」

何か含んだように笑って、太い眉を上下に揺らす輝。

真下雫、俺と視線をゆっくり流すと、真琴をみやってまた俺に戻

す。

「それはね、はじめっから、兄貴達のやり取りを見学するつもりだったから」

「はあ？」

俺は意味が読み取れず、呆然と弟の顔を覗き込んだ。

「じゃ最初から話そうかな」

輝がにこにこしながら、おっとりとした物腰で語り始める。

輝は5日前の議論の中である種の違和感を覚えていたと切り出した。

「どういうことだよ、何のことだよ」

俺はそう言われても、まるでぴんと来ない。

「なんか変だと感じたんだ、なんていうか、説明しづらいけどね、でも式神を利用して、みんなの話を一部始終聞いて、全て謎は解けたよ」

「何が分かったんだ……」

「簡単だよ、真琴ちゃんは嘘をついてた、つまり、彼女は他殺ではなく、本当に事故で死んだってこと」

「え？」

俺はすかさず真琴に視線を飛ばした。

『な、何言ってるの？ ど、ど、ど』

真琴が慌てた様子でこちらに向き直る。

彼女が何か言いかけると、手を突き出して輝は制した。

「じゃ、疑問に思った事を軽く、まず、真琴ちゃんを最初見たときから感じていたんだけど、殺された人間が本来持つべき、なんていうかな、陰々とした雰囲気じゃなかった」

輝は周りの不可解な視線の直中において、淡々とマイペースに語っていた。

「確かに、殺された時の状況を語ろうとした時は錯乱したように見えただけ、僕にはどうもそれが芝居がかってわざとらしく見えたん

だ。平静のあつけらんとした状態からあまりに唐突に豹変しすぎる。幽霊にはそういう人も確かにいるけど、かなり惨たらしい殺され方したケースに限られると思うんだ。飽くまで、僕の経験した内での話しだけどね。だから、飛び降りには苦痛はあれど、一瞬だから腑に落ちなくってね……それで」

『そんなの、言いがかりだわ！』

真琴が続く輝の言葉を遮るように大きな声で駁した。

「そつだよ、もし違つてたらどうすんだよ」

その勢いに気圧され、弟に弱気な視線を送る。

「違つてたら謝るだけの話さ」

それでも弟は笑みを崩さず、臆面もなくさらつと言い放つた。

「真下雫さん」

真琴は背中を向けて腕を組んでいる。

輝はこの重い空気を意に介さず、真下雫の名を呼んだ。

「はい」

真下雫は怯えたような視線を足元に落として答える。

「真下雫さん、僕は悪いんですが、あなたと兄貴の会話を全て盗み聞きしていました。この黒いカラス、式神をベンチの裏に忍ばせて式神を通して話は全て筒抜けでした。盗み聞きなんて本来僕はしな人間ですが、今回は真相を知るために必要でした。申し訳ないとは思っています、ですが、そのおかげで会話の全ては知っています。これから質問する事にできれば嘘をつくことなく答えて欲しいんですが、いいですか？」

「は、はい」

一見、丁寧に見えるがかなり失礼な言い回しだ。

だが、このある意味威圧的な物言いは儀式のようなものだ。

俺はそれをすぐに察した。

これは陰陽道に伝わる一種の呪言だ。

頷いたが最後、彼女は真実しか話せない。

「さつき、あなたは犯人は真下から見えなかったと、兄貴が言ったら、あなたはそれを肯定しましたね？」

「は、はい」

「そして、その理由が、雨が降ってきたからだと言いましたよね？」

「

はい」

輝は懐からデジカメを取り出し、上から降り注ぐ白い電灯の光に画像部分を向けた。

式神に取らせた真琴の飛び降りた現場の画像だ。

輝は画像をしばらく順繰りに調べていたが、6番目の画像を見て、

「あ、これだ」

と一言言い放ち、食い入るように画像を眺めながら、

「おかしいなあ、画像見る限り、窓の下には外に迫り出した庇があつて、真下のグラウンドからじゃ、絶対窓のうち側にいる犯人の姿は見えないのは明白です」

「は、はい……」

「分かりきった事実なら、ただ見えなかったと言えればいいだけじゃないですか？　なのにああなたは雨が降つてて見えなかったと言いつをした」

「そ、それは」

「あなたは本当に現場にいましたか？」

真下雫は、俯いたまま上目遣いで真琴を何度かちらちら眺める。

完全に目で捉えている……彼女は真琴の姿が見えているんだ。

「いいえ、居ませんでした」

「真琴ちゃんとの打ち合わせ不足でしたね」

輝が朗らかに微笑みを撒き散らすと、真下雫は苦笑いを浮かべた。真琴は観念したようにうなだれた瞬間、全ては終わりを告げた。

「兄貴も鈍感だな、せっかく親友の線香あげに雫さんは来てるのに、真琴ちゃんの母との約束ほっぽって、公園に行く自体変だと思わな



「きや」

「それはそうだけど、とにかく！ な、なんでこんな面倒な事をしたんだ？」

俺は憤然と真琴を問いただす。

しばらく真琴は黙ったまま、星が瞬く夜空を見上げていた。

「それはあなた達が霊を見る事ができるからよ、ね、雫」

真琴にいきなり話を振られた真下雫。

戸惑い気味に真琴を見るが、真琴が頷いたのを見るや、堰を切ったように話し始めた。

「わ、私も最初は半信半疑だったのですが、あなたが真琴と話しているのを最初に後ろから見ててびっくりしました。同じ種類の人間がいるんだって、しかも真琴と話せるほどの強い力の持ち主だったから……」

「だ、だからって、それと俺達を騙して、こんなところに連れてきたのと同じ関係が」

俺は渋面で、二人を更に追及しようとした時、

「あ、来たわ」

「良かったー」

真琴が急に公園の入口の方を振り返って言った。

雫も、何か安堵したように微笑を浮かべる。

俺が少し遅れてそちらに視線を送ると、薄っすらと白い光がわだかまる公園の入口が目に入ったが、誰の姿も認められなかった。

「こんばんはー！」

しかし、程なく俺のすぐ近くから男の声が聞こえた。

怒。

「少しは話聞いてあげても良かったのに」  
「うるせー！」

あの後、突然、俺の眼前に降って湧いたように現れた男性は前田仁と名乗った。

目が開いているのか否か、分からない系のような細い眼、背中に達するほどの黒い長髪は後ろになで上げられ、生え際が弓なりになっていた。漆黒のスーツ、赤いネクタイ、黒い靴。はつきりいつて真琴達がいなけりや、不審者認定して、逃げ去っていたところだ。

俺が首を竦めて黒い靴に視線を落とし黙っていると、彼は名刺を差し出してこう言った。

『前田心霊探偵研究所の所長をやっています』

続けて軽い事業の説明の後、前田は俺を雇いたいと言った。  
今までの不可解な真琴の行動の謎が氷解した瞬間だった

つまるどころ、真琴は、前田って人の事務所の人間、いや、幽霊だったのだ。

もちろん俺も関係者だった。

真琴は心霊探偵研究所の所長である前田に頼まれ、人材を探していた。

つまり、俺達のような霊視や霊とコンタクトが取れる人間を求めていた。

あの夜も、真琴は俺と会った付近で自分の姿が見える人間がいな  
いか彷徨っていた。

そして、俺は運悪く発見され、初会にめでたく、真琴の婉曲でい  
やらしい奸計の系に絡め取られてしまったのだ。

俺はその事実を悟った時、腹の底から噴き出た荒れ狂う怒りに我を忘れ、一言彼らに「呪ってやる〜！」とぶちまけて、全くとりつく島を与えず、ぼーっと立っていた弟の手を引きその場を走り去った。

「子供じゃないんだしき、もうちょっと何か……」

「ばか、俺は母ちゃんの子供だ！」

屁理屈を煮え切らない輝に叩きつける。

「お前分かつてるのか？ 俺達馬鹿にされたんだぞ！」

「どうして？」

頭の回転が遅いわけではないのだが、弟はお人よしの部類に入る。

ここは兄としてきつく釘を刺して置かないといけない。

俺は目一杯、息を吸い込むと、吐き出すと同時に早口で捲くし立てた。

「いいか、よく思い出せ、俺達さ、本当に真琴のためを思って、親身になってさ、彼女の学校くんたりまで行って式神つかってまで画像撮ったり、夜明けまで議論して、彼女の死の真相を探ろうと必死だったよな？」

「うん」

「その俺達の混じりけのない真っ白な気持ちを彼女はうまく利用して、あの事務所に引き込もうと企んだんだ。これは清純な青少年の心を操り蹂躪した背徳行為だ。分かるか？ あいつは酷い奴だ。非人間だ。人間の、いや、幽霊の風上にも、風下にも、大気圏内にさえおけない悪霊だ、鬼だ、馬鹿だ、腐女子なんだよ！」

憤りは頂点に達し、もはや何を言っているのか分からないが、とにかく、真琴の顔はもう見たくない。この点だけは俺の脳裏にきっちり穿たれ、動かしようのない要石もとい、漬物石として未来永劫存在し続けるに違いない。

「さあ、式神で復讐を……」  
「ちめときなつて！」

## 何の変哲もない朝。

目が眩むような朝の光が曇り硝子を透して入ってくる。

部屋の中は朝8時にもかかわらず、うだるような熱気に満たされていた。

たまらず扇風機に手を伸ばして強風を部屋に流す。しかし、生温い風がかき回されただけだった。

俺はいつから、今の役分に落ち着いていたんだろう。

兄貴、気がつけばそう呼ばれることに抵抗を感じなくなっていた。

弟が口を開けて、部屋の左隅のベッドで寝ている。

8畳ほどの部屋に男二人。

本来ならむさ苦しい環境なのに、

俺はなぜか　　ここを気に入っている。

俺はベッドから這い出て、寝着のまま窓に近づぐ。

鍵を開けて窓を開け放った。

照りつける朝日に目を細める。

ベランダにあるサンダルを履くと、光を避けるようにして、影のあるスペースに身を移した。

その場所で両足を肩幅まで開き地を踏まえる。そして、両手を大きく天に伸ばし、ついでに、新鮮な朝の空気をしたたか吸い込んだ。これ以上吸えないところまでくると口を窄ませ息をしばらく留める。一拍おいて、両腕を下ろすと同時に肺に溜まった空気を全て吐き出した。

「拓兄、おはよー」

「ん？ おはよ」

隣のベランダには桃色のパジャマで身を包んだ少女が立っていた。こげ茶色の木製の手すりに両手を乗せて、その上に眠気がまだ残る顔を置いている。

寝癖がついた肩まである黒髪、眠いのか瞼が大半を覆う黒い瞳。

まだ顔も洗っていないだろう酷い顔ではあるが、やはり元の造りがいいためか、はたまた色白のせいか、見栄えはそれほど悪くはない。むしろ、子猫のようなあどけない愛嬌さえ漂っている。

「今日は輝とどっか行くのか？」

今日は土曜日、休日だ。

「んんん……特になんにも話してない」

目を擦りながら雪乃は抑揚のない調子で言った。

まだ思考がついてきていない声質だ。

「そうか」

「うん、そういう拓兄はどっかいかないの？」

そう来るとは思わなかった。

「わかんねーな、気が向いたら、友達でも誘ってどっか行くかな」

「友達って隆君？」

「そうだな」

俺が頷くと、ぼーとした顔で雪乃は何か分析するかのようになり込む。

そのうち手を口に当てたかと思うと、

「男二人か、空しいねえ、拓兄も早く彼女づくりなよ」

背中をくるりと向け、毒のある言葉を残して、欠伸をしながら部屋の中へ消えていった。

空は青かった。

「今日さあ、雪乃とデート行ってきたんだ」

「どこへ？」

のろけ話でも聞かされるのだろうか。

「水族館で魚見てきたよ」

「そうか、奇遇だな、俺も魚たんまりみてきたさ」

俺は今日は隆と近所の海へ釣りをしに行ったのだ。

野郎二人での釣りは、一見、地味ではあるが気楽なもんだ。

ぬけるような青空の下、寡黙な隆と一緒に日がな一日、海の魚たちと竿を通して気まぐれな綱引きに興じていた。今日は比較的魚の活性が高いのか、しばしば竿は弓なりに曲がり、俺達に歓喜を引き起こした。釣り上げた銀色に煌く鱈や鯛は、水桶の中を鱗塗れにしながらも元気に泳いでいた。

祭りのような騒ぎも、魚の回遊が遠のくにつれ、竿がピクリとも動かなくなり沈静化していく。だけど、それが俺達の心を昏くすることはない。魚を釣り上げる事だけがここでの過ごし方ではないのだ。魚がいない時間は、折りたたみ椅子に腰を落とした。キャップの鍔を落とし鼻まで覆って日差しを遮ると、のんびりとした静謐に身を浸す。波のしぶく音や海から吹き来る風の音に耳を澄まし、潮の匂いがわだかまる波止場で、恍惚と夢現の境を彷徨う。疲れた体を癒すのにこれほど素晴らしい休日の過ごし方他にあるだろうか？

だ、だから、水族館へ女とデートなんか 面倒だし気も使っし  
よあ。

これっぽっちも

「その後さあ、カラオケ行ってね、二人で好きな歌歌ったよ、雪乃の奴、なんか今日慣れなれしくってね、肩寄せてきてべたべたしてくるから、困ったよ」

太い眉を八の字にして、苦笑いしながら話す弟。

そんなこと　う、羨ましくなんて、な、ないんだからな……

「それでさ、彼女がね……」

「ほおほお」

だから、人を羨むなんて……

「だから言っただよ、雪乃が……」

全くそんなことは……

「それでさ」

……

尚も甘美な話は続くようだった。

この地点で、俺は輝を羨む気持ちは薄れていた。

もはや俺の心は鉄の鎧を纏い、何者をも受け付けない。

「でさ、喫茶店寄った時にさあ、雪乃が言っただよ、向こうにいる席の女の子が僕を見てるってさ！」

「……………」

「焼餅って言うのかな？　それ言われて振り返ると、確かに小奇麗な女の子が一人で紅茶啜ってて、僕を見てただけど、気のせいだと思っただよな、そう雪乃に言ったら……」

冗長なのろけ話に、モテ武勇伝まで織り交ぜ始めた輝。

もはや、心を閉ざして馬耳東風の立場を貫く他なかった。

「さてと、もうこんな時間か」

壁掛け時計の短針が10時を指していた。

明日も学校はあるし、寝る前に風呂に入っておかないと。

そう思い、腰を浮かせかけるが、

「それにしてもねえ、喫茶店の女の子、確かに僕を見ててね」



その俺の関心を惹くかのように輝はひとりごちる。

「またその話か……」

俺が呆れた顔で輝を見やると、どうも浮かれてる風でもない。

何か心の襞に引っかかるものがあったんだろっか。

腕を組み、思案顔で低く唸る輝。

しばし、立ったまま輝を見下ろしていたが、俺の気は再び風呂に引き戻され、

「じゃ入ってくるわ……」

といい置いて、輝を残し部屋を後にした。

## 陰陽師の父。

明治以降、陰陽道は「太政官布告」により迷信として扱われ解体された。

それにより、職を追われた陰陽師は占い師に転向したり、神道に帰依し神職の傍ら祈祷師をしたりして難を逃れた者もいるが、どちらもできない場合は廃業するしかなかった。

現在、完全にその筋の人間は消えたかに思われているが、実はそうでもない。

その技術は一族のものに脈々と受け継がれ、表舞台には上がらずとも、

闇の世界で歴然と今も息衝いていたりする。

俺の家系も、その一派ではある。

祖父の時代までは口コミや独自のルートで、こそこそと祈祷を生業としていた時期もあったらしい。

しかし、現在、その祖父も死に、陰陽師の技だけは受け継がれているものの、祈祷や祓いを頼まれたりすることは皆無に等しい。父もかなりの使い手ではあるが、今はしがない中小企業に雇われるサラリーマンであり、陰陽道の技はほぼ私的利用が常であった。

「ただいまあ」

「……………」

夜遅く、父が帰ってきたようだ。

時刻は23時。残業だろうか。

誰も出迎える気配はない。

もちろん、俺は漫画を読みながら聞こえないふりだ。

弟は既に床に入って寝息を立てていた。

「母ちゃんいまけーったぞ」

一階で空しく響く父の声。

裏返った声から察するに酩酊してるに違いない。

同僚と一杯引っ掛けてきたんだろ。

しばらくして、俺は漫画を読み終わると本を投げ捨てた。

そして、階下の音に耳を敏てる。

玄関から動いた気配はないのだが、一階は静まり返っている。

その場でくず折れて寝ちまったんだろ。

俺は喉が渴いたので、一階の台所で飲み物を調達しようと考え部屋を出る。

廊下を忍び足で渡り、息を殺して階段を音を立てずに降りていく。その途中で玄関が視界に入ったが 案の定、廊下に取りかかるところで父は力尽きていた。

壁に背を凭せ掛けて、赤みが残る顔を上にし、鼾をかいて寝ていた。

「父ちゃん、風邪引くよ……」

俺は本来は優しい男だ。

遅くまで働いてきた父の姿を見てしまっただけなら無碍にもできない。

「おー拓、ありがとよー」

白髪が混じった短めの黒い髪を右手で掻きながら、大口あけて酒臭い息を吐き出す。

動きは緩慢で、充血した瞳は焦点が怪しい。

こりやまともには動けないな……

俺は深いため息を吐くと、親父を背負った。

「おも……しかも酒くさ……」

「拓わりいな」

俺は思わず顔を歪めると、父は甲高い声で謝意を述べながら俺の尻を叩く。

この野郎と憤りながらも、ここは一つ怒りを収める。父に恩を売るいい機会だ、これをネタに何かねだつてやる。些事な野望を胸に秘め、覚束ない足取りで前へ歩を進めた。

だらりと肩口から垂れた親父の腕が視界を遮るように左右に揺れていた。

鬢から漏れ来る酒臭さと合わさり、俺の不快感は極点に達していた。

だが、夫婦の寝室はこの廊下の一番奥だ。

「よし、もうちよつとだ」

廊下の中間地点まで辿りついて、一息つこうと足を止めた。その時だった。

後ろで何やら父がもごもご言い出したのは。

「こ、この呪言は……」

気づいた頃には親父は目の前で手印を結び、何かが放たれてしまう。

「これは……」

目の前には鎧を着た男の式神が立っていた。

俺はその式神の姿を見てすぐに、胸を撫で下ろした。

最強の式神、十二天将ではなかったからだ。

見た目、落ち武者といったところか。

しかし、何か挙動がおかしい。

武者はきよろきよろしながら、何かを探しているみたいだ。

「まさか……」

俺は嫌な予感がして、親父をその場に下ろした。

すぐに印を結び構えたまま、武者の動向を見守る。

この式神を親父は何かに放つたに違いない。

何かを調伏するために現れた式神なんだ。

その証拠に式神は剣を斜に構えている。

ターゲットを探しているんだ。  
しばらくして、武者は廊下の右側にある扉にすっと消えていった。

暑い。

暑すぎる。

頭痛が酷いし。

今日みたいな日に学校へ行くなど正気の沙汰ではない。

ましてや、仮想空間の学校なんぞ行きたくない。

てことで、ドッペル君を見送ると、俺は二度寝をすることにした。

家族は出払って俺を咎めるものは誰もいない。

昨日の式神はどこいつちまったんだらう。

居間に消えて、すぐ後を追ったが、

姿はそこにはなかった。

どうやら、外に飛んでいってしまったらしい。

ターゲットが移動したんだらうか。

それっきり音沙汰ないので、俺は親父を寢室に放り込むと、

そのまま自室に戻って寝てしまった。

まあ、いいか。

どーでもいいや。

とりあえず、もう一眠りしよう。

## 呪いの歌。

かゝごめ かゝごめ 籠の中の鳥は

(酷く懐かしい匂いがする……)

いゝつゝいゝつゝ出やる

(数人に取り囲まれ、その中心で俺は目を手で覆って蹲っている。  
ここはどこだろう?)

夜明けの晩に

(顔を覆った手の隙間から覗くと、細く幼い足が弾んでいる。周  
りから聞こえる声は子供のものだ。)

俺は子供たちに囲まれているに違いない)

鶴と亀と滑った後ろの正面であれ?

(歌が止んだ、と同時に足音も途絶える。突然、音を失ったよう  
な静寂に、俺の鼓動だけが耳を打っている。だが、よくよく耳を澄  
ますと、頭上から微かな息遣いが聞こえて来る。俺は上から数人の  
子供たちに見下ろされている。そして、何かを期待されている)

『真琴ちゃん!』

え? 真琴? てか、俺何勝手に口走ってるんだ?

『あーあ、当たり前! 次は私が鬼か』

視界が映り代わった先には、紅いモンペ姿の少女が残念そうに口  
を尖らせている。

かごめかごめ……そうか、思い出した。昔の子供が遊ぶ時に歌う  
歌だ。

なら、この少女は……

袖から伸びる白い腕は俺に向けて差し出されている。

見上げるが、少女の顔は黒く塗りつぶされていて判然としない。立ち上がれというのか。

俺は素直に白い手を掴んで腰を浮かした。

少女の黒い顔に白い歯が覗くが、次の瞬間、突然、物凄い力で腕を引っ張りあげられる。な、なんだこの強い力は。

俺は自らの腕の先に視線を投じて驚愕した。

光に映し出された少女の顔は大きく膨張していた、その上、目鼻がないのだ。

「だあああつあああ！」

その手を振り払うように大声をあげる。

周りの景色が滲んだようになり、しばらく手足をばたばたさせてパニックに陥る。

「うわ、うわ……あああああ？」

程なく焦点が合わさり、ふと我に返る。

気がつくと、俺はベッドの上にいた。

胸にはタオルジャケットが被さっていて、その一端を汗に滲んだ手でしっかりと掴んでいた。

素早く辺りに視線を散らす。

ここは俺の自室……

そ、そうか、今のは夢か。

状況を把握すると、俺は深い安堵の息を漏らした。体中汗に塗れている。

Tシャツは胸から背中までびっしょり。

部屋の中は灼熱地獄の様相を呈していた。携帯を開けて時間を確認する。

午後2時、そっぴや二度寝したんだっけ。



俺は一階の台所で、スパゲティを作って遅い昼食をとっていた。細い麺をフォークで絡めとって口へ運ぶ。

麺が口内へ吸い込まれていく。

口は忙しなく麺をかみくだかんと動いている。

と、同時に監視カメラのように俺の視界は何かを捉えようと必死だった。

真琴め、絶対奴はこの家にちよくちよく来ている……

さっきの夢でそれを確信した。

真琴の奴、人の夢に土足で踏み込んできやがって。

何が、かごめかごめだ。

あんな場所に行った記憶がないからおかしいと思っただ。

どこかの小高い場所にあるお稲荷さんの境内。

モンペ姿の子供たち。

あいつの記憶の中にある情景を俺の夢に刷り込みやがったに違いない。

しかも、最後に死ぬほど驚かせやがって！

絶対、俺はお前をユルサナイ。

それにしても、酷く時代がかった光景だった。

あいつ、いつの時代の生まれだ？

「もしかして、真琴ってとんでもない婆さんだったりして！」

俺は故意に口にだして毒づいてみた。

沈黙がおりる台所で瞑目し、気配を探るが何も感じない。

稚気にも等しい罫に、しっぱをだすほど愚かではないか。

一寸の真琴にも五分の魂。

「おい、輝、真琴の奴、俺達の家によくちよくきてるみたいだぞ」  
「知ってる」

「え？」

何食わぬ顔で輝が言うので、俺は一瞬呆けてしまったが、

「何で知ってるのに、俺に教えないんだ！」

すぐに語気を強めて輝に問いたです。

輝は俺の剣幕に動じた様子もなく、ため息を一つついた。

「だって、教えたら兄貴のことだから、真琴ちゃんに危害でも加え  
そうだし」

「馬鹿！ そんなことはせん！ ただ、小一時間俺の前に正座させて、世の中の道筋って奴を話して聞かせるだけだ」

「そんなんしたら、真琴ちゃん可哀想だよ、彼女の気持ちも分かってあげなきゃ」

「だってよお」

「人間は感情の動物だよ、それは幽霊も変わらないんだから。一方  
通行じゃ話なんて聞いてもらえないよ」

輝に柔らかい口調で逆に窘められ、氣勢を殺がれてしまう。

俺が動的な性格だとしたら、輝は静的な流れを好む平和主義者。

一辺倒に怒りをぶちまける俺とは違って、輝は仲たがいでいる  
相手と折り合いをつけて、掘り下げられた溝をいかに埋めるかを思  
案するタイプだ。

「どのへんが可哀想だと思うんだ？」

幾分トーンを下げて輝の意見を聞いてみる。

なんだかねで、俺は輝に弟ながらも一目を置いていた。

「だって、真琴ちゃんはその心霊研究所の雇われ人じゃない。雇い

主の命令に従っただけだよ、それに、もしかしたら、真琴ちゃんはあの前田って人に頭があがらないのかも知れない。幽霊っていうのは色々事情があるからね」

「ふむ、一理あるな」

「なんだけ折れてしまう。」

「でしよう、もしかしたら、彼女、僕たちが使役する式神と同じような身の上かもよ」

「なるほど」

前田仁と初めて会った時、何か同業の匂いを彼から嗅ぎ取った気がした。

霊を使役する力をもしかすると、彼も身に備えているのかもしれない。

夕方の輝の話で俺は少し心を改め、一度真琴と話合ってみようと決意した。

輝はできるだけやんわり口調で話すんだよって念を押してきたので、

ノープロブレムと親指を立てて微笑んでおいた。

ただ、俺はいいとしても、真琴は俺と面と話す自信はないように思える。

俺に夢を通して何か主張をしたようだが、全くその意図が汲み取れなかった。

起きたら既にその姿はなかったし。

それでも、輝にはその姿をこの家で晒している。

要は俺が怒っている事を十分知っていて、面と話す勇気がないから、あんな回りくどい夢を見せたり、俺には姿を見せず、弟から懐柔していこうと考えているに違いない。

そこまでして俺達に付き纏うからには、俺達をあ的心灵研究所へ

連れて行く事も諦めてはいないだろう。まー、これは手前勝手な推測に過ぎない。ひよっとしたら、真琴は弟だけでも連れて行くこと必死なのかもしれない。俺には興味がないのかも。

だが、俺は輝の兄貴であり、保護者も同然の立場である。

俺は良く母から弟の素行について、相談を受け、二人の間に入り緩衝材の役割をすることだってある。弟は深夜ほつき歩くような放逸な人間だから、母の気苦労も絶えないのだ。

だから 弟だけあんな怪しい事務所へ連れて行かれては困る。

弟が勝手にあの事務所に通うようになり、何かもめごとや事故に巻き込まれては母にあわす顔がなくなる。話はまず俺に通してもらって、真琴は家族の同意を得なければいけない。

その夜、俺は部屋の隅で正座すると、手印を胸元で結び呪文を唱える。

陰陽師の術の一つ「見固め式」を行使した。

これは霊や物の怪から姿を隠す事ができる術だ。

深夜、あいつはここに毎日やってきてる事は弟から聞いた。

俺が起きていれば、真琴は部屋に入ってこないだろうから身を隠すことにした。

ただ、俺がこの部屋にいないと怪しまれる。

だから、ベッドにも細工を施した。

藁人形を拵えてその上に布団をかけて、頭だけ枕の上に出している。

これは俺の身代わり君だ。

俺の爪と髪の毛を藁に差し入れ、俺の名前を書いた紙を藁人形に貼り付けてある。

他の人間や霊には、ベッドに俺の寝姿が映るだろう。

さあ、来い真琴！ とことん、俺と納得いくまで話し合おうぜ！

ありきたり。

深夜遅く、真琴は窓から堂々と現れた。

俺は真琴のやけに泰然とした挙動に多少驚いた。

てつきり、こそこそ、床から頭を少し出して、潜望鏡のように室内の様子を慎重に窺うものとはばかり思っていたからだ。

部屋の隅に姿を隠したまま、真琴の一挙手一投足に目を配る。

今宵は満月、青白い光が室内を満たしていて、電灯が消えていても真琴の動きは手に取る様に分かる。

真琴は最初、宙に浮かんだまま部屋を見渡していたが、そのうち足から床に降りる。

そして、俺のベッドの脇まで来ると、その上にふわりと舞い上がった。

ベッドの上にそのまま座り込んで正座したかと思うと、

「あなたの気持ち踏みにじってごめんなさい」

深々と体を折り曲げて額づいて言った。

「仕事ではあったけど、二人の親身な気持ちを踏みにじるようなまねして本当悪かったと反省しています、どうか、お許しください」  
続けて言う時には、眦を涙に濡らしていた。

物言わぬ俺に何度も謝罪の言葉を投げかけている。

どういつ心の変化だ？ などと考えていると、寝ていたはずの輝がそのそのそつと起き出して、

「兄貴、ここまで言ってるんだから許してあげなよ」

「……………」

俺はそれを後ろで眺めていた。

身代わり君に涙を流しながら謝る真琴。

目覚めて真琴のフォローをするかのように俺を宥める弟。

なんか見えて滑稽だったが、あまりに真剣そのものなんで出るに

出れないというか。

しかし、結局、俺は後ろから二人の前に躍り出た。

最初は真琴なんかは目をひん剥いて驚いたけど、輝はすぐに術を見破ったらしく平然と兄貴と名を呼ぶに留まる。

「まあ、許してやらなくもない、俺も鬼じゃない」

「やった！」

「良かったね」

その後は軽く彼女の謝罪を聞いて仲直りみたいなの。

なんていうか、茶番という言葉はこの場にこそ相応しいと思う。

さっきの輝と真琴の謝罪コントは事前はどこかで示し合わせてた節があった。

夜の間までにどこかで段取りを話し込んでたに違いない。

まあ、俺もいつまでも怒ってるのも倦んできたので、それを知りながら、態度を軟化させる方向にもっていったわけだ。

「じゃこれで終わりな、おやすみ」

なんだか馬鹿馬鹿しくなって、俺は素っ気無く言つとベッドに横になった。

「うんうん、良かった、じゃ真琴ちゃんまたね」

輝も一段落したので満足げな声で一人頷いてベッドに入る。

「どうも、お騒がせしました」

真琴は満更でもない声質で窓から出て行くこととする。

「ちょっと待て」

その彼女を俺は呼び止めて、

「はい？」

「明日、心霊研究所に伺おうと思っっているんだけど、そちらの都合はどうかな？」

「え？」

真琴は目を見張って一時言葉を失う。

輝のほうを見やると、同じように表情が固まったまま俺を見ている。

「都合悪いかな？」

「え、いや、あの、いいんですか？」

「うん、実は俺も反省しててさ、怒っていたとはいえ、ガキみたいな対応して気まずかったんだよ。だから、一度前田さんに、謝罪しておこうと思ってね」

俺は眠かったせいもあるが、妙に物分りのいい調子で真琴に言った。

弟だけ勝手に先に行かれても困るし、俺が實際話を聞いてみて見極めをしようって意図もある。

「ぜひ、お越しください、いえ、迎えに行きます！ 時間は……」

「俺も行く〜！」

輝まで乗ってきた。予想通り。

話は決まった。

到着。

それは俺の家からそう遠くない商店街の一角にあった。

狭い歩道に面したコンクリート打ちつばなしの2階立ての建物。

夕暮れに染まる建物は陰影を濃く刻み、どこか哀愁さえ漂う。

一階部分は元は何かの店をやっていたんだらうか。

大きな金属のシャッターが下りている。

2階部分には大きな窓が見える。窓の内側に白いブラインドをしつらえてあり、外から中の様子は分からない。建物の2階、右角には白い電気看板があり、前田探偵事務所と書かれていた。

「あれ、心霊研究所じゃないんですか？」

「1階がそうよ、でも……詳しい話は所長に聞いてくださいね」と言つて、今から俺が向かう場所は探偵事務所の方だと真琴は言つた。

「探偵事務所か……」

真琴の後を歩く輝が、ぼんやりとした顔で呟く。

俺は輝に耳打ちをすべく顔を寄せて、

「怪しいよな……キナ臭くなってきた」

俺は訝しげに看板を眺めながら真琴の背中に導かれるままステンレス製の外階段を上っていた



## 本題。

『所長連れてきました』

「おかえり、やあ、良く来てくれたね」

「この間はどうも」

何となく気恥ずかしさがあった、まともに顔を見れない。

この間初対面にもかかわらず、「呪ってやるうっ」などと吐き捨て帰ってしまった。

その時の気まずさが未だ拭えず、罰が悪いので床に視線を落とすにしていた。

上目遣いで瞥見しながら、相手の顔色を窺おうと試みる。

相変わらぬの糸のような細い目にオールバックの長い黒髪。

黒づくめのスーツも前と同じだ。

微笑みを湛える細面の端正な顔立ちは一見優しそうに見える。

部屋の内部は比較的ゆったりしている。

エントランスの曇り硝子の扉を入れてすぐの場所に、応接セットが配置されていた。

木製の丸テーブルを囲むように、黒の皮のソファーがしつらえてある。

手で促され、前田仁の差し向かいのソファーに俺達は腰を下ろした。

「あ、あのー」

俺は強張った顔で前田仁に話しかける。

「どうしました？」

「この間は失礼しました。ちょっとなんていうか」

俺が下を向いて、臍の当たりで手を組んでもじもじしていると、

「ああ、気にしないで、僕も悪かったんですよ、真琴に連れてきて欲しいと頼んだは良かったが、その手段を真琴にまかせたために…」

… 本当申し訳ない」

「いえいえ、こちらこそ」

すかさず、前田仁は察してくれたらしく、差しさわりのない応対で俺に安堵を与えてくれた。

俺は前田の柔らかく丁寧な物腰にいつになく口数が多くなっていた。

「霊が見えるって大変ですよね」

「確かにいい事ばかりじゃないかもね」

俺が流暢に話す間、隣で輝は黙って俺と仁のやり取りを眺めている。

真琴は気がつくといなくなっていた。

「仁」

和やかな雰囲気包む室内に、奥にある扉が突然開け放たれ、若い女性が入ってくる。

白いシャツの上に赤いキャミソールにサンダル。

事務所で働いている人だろうか、それにしてもラフな格好だ。

赤茶色の毛は肩まで流れている。

「あ、今お客さんきてるんだよ、明美ちゃん」

「え？ あら」

俺達を眺めて、明美は愛想笑いを浮かべて佇む。

「じゃあ、ちよつと外でかけてくるね」

「うん、気をつけてな」

明美と呼ばれた女性は、どこか色気のある笑みを室内に振り、扉を開いて奥の部屋へ消えていった。閉じる寸前、一階に通じるであろう階が視界に入る。

「あちらは？」

「ああ、えつと、あれは、僕の彼女です」

「なるほど」

苦笑いしながら、前田は照れ臭そうに言った。

「で、そろそろ本題に入ろうかと思うんですがよろしい？」

「はい」

俺が肯定すると、輝は黙って頷いた。

話は特に埒外のものではなかった。

前田仁は人探しや、浮気調査などをメインとする探偵事務所を開業している。

一階は今は前田の居住空間（たぶん明美って人と同棲）であるが、そのうち心霊研究所の看板を立てるつもりではあるらしい。だが、まだその準備が整っていない。この事業を開くには人手が足りないし、まだ先行きにも不安があるので、検討中の域を脱し切れていないそうだ。

「一応、名刺まで作ったんだけど、金になるか分からなくてね」  
前田仁は最初よりは砕けた話し方に変わってきていた。

「でも、君たちがいれば、仕事は少しずつ出来ると思うんだ」

「はあ……」

「どんな事をするつもりなんですか？」

俺が生返事をしている間に、輝が話しに混ぜてくる。

「話すと、少し長いんだけどね、今探偵の仕事があまり軌道に乗っていないくて困っていてね……」

顔を両手で覆うと、青ざめた端正な顔に暗い陰影を刻んだ。

俺は思わず、ぷつと噴出しそうになるを何とか飲み込む。

何か妙に芝居がかっていて、演技過剰なところが真琴と重なって見えて一瞬笑いがこみ上げたのだ。

「僕は霊が見えることは話したと思うけど」

「ええ」

輝は真剣に話に聞き入っている。

「これを何とか商売にできないかなってずっと考えていてね」

「はい」

「霊が見えるって事は色々可能性があると思うんだよ」  
話が佳境に入ってきて俺は息を呑んで耳を傾ける。

前田は次に話す内容に重みがあることを示唆するかのように長い間を空ける。

程なく立ち上がり窓に近づくと、ブラインドを一度手で撫でた後、硬い表情でこちらに向き直る。

前田が重い口を開こうとしたその時、唐突に奥の扉からノック音が響いた。

「どうぞ」

「お茶いれてきました」

「悪いね」

白いブラウスに黒いスカートの女性。

すらつと長い白皙の足、締まった腰は理想的な曲線を描いていた。  
顔を拝見しようと思えば俺は驚いた。

そこに立っていた女性はあの真琴だった。

やり手。

「私死んでないから！」

前田の隣に座る真琴が、さも当たり前のように言い切った。取り澄ました顔で真っ直ぐ俺を見返してくる。

「いや、おかしいって、あんた、確かに幽霊やったやん！」

取り乱した俺は言葉を御せずに、大阪芸人のような突っ込みを入れてしまう。

「うんうん」

弟も驚きのあまり、太い眉が可笑しな具合に歪んでいる。

「でも、今は幽霊じゃないでしょ、お茶をもってきたし」

と言って、立ち上がったかと思うと、テーブル越しに身を乗り出して、

「ほら、あなたの手もこうして握れる……」

テーブルに置いていた手をそっと真琴に握られる。

瞬間、俺は身を固くして肩を竦めた。

たぶん、耳と両頬も真っ赤だと思う。

「どう、温もり感じるでしょ？」

何やら怪しい目つきで真琴は俺を見下ろしている。

迂闊だった……

俺は幽霊には毅然としていられるが、生身の女に対してまるで免疫というものがないのだ。

この辺は彼女いない暦〓年齢〓童貞の悲しい事実が露呈した形だ。だが、このまま真琴の妖艶な煙に巻かれて、無口を押し通しては負けたも同然（何に？

それだけは嫌だ。俺はこの女に平伏すわけにはいかないんだ。

引かぬ！ 媚びぬ！ 顧みぬ！（昨日みた動画サイトのアニメのキャラの台詞）

自分を鼓舞してなんとか言葉を搾り出す。

「ひゃ、百歩譲ってあ、あんたが、生きてるとしよう、しかし、俺と会った時は確かに魂の状態だった。これは陰陽師である俺が見分したんだから間違いない。どういふことが説明してもらおうか？」

「うんうん」

「真琴、説明してあげなさい」

ずっと微笑を湛えたまま、黙って俺達の様子を眺めていた前田が真琴を見た。

「いいですよ」

輝は好奇心に目を輝かせ前かがみになって耳を澄ます。

「簡単よ、私はいつでも幽体離脱できる体質なの」

「ほほお、面妖な……」

俺は眉を潜めて呟いた。

特に驚くような内容ではなかった。

さもありませんと寧ろ、想定していた答えに冷静さを取り戻す。

真琴の色気に気圧されたが、今俺を取り巻く空気は安閑としたものだ。

「すごいねー、僕達にはそんなことはできないな、先天性のものなの？」

輝は素直に関心を持ったようだ。

「いえ、交通事故で一度大きな怪我を背負って、死の淵を彷徨ってからこうなつたみたい」

「そうなんだよ、まさしく怪我の功名だったな、あれは」

前田が軽薄に合いの手を挟むと、真琴が憤然と眦を吊り上げ、

「あれは労災ですよ！ 仕事受けた現場に、話の分からない幽霊がいて、所長が〜」

「ああ、ごめんなさい、思い出した。ほんとあれはすまなかった。

そういう意味で言っただけじゃ」

「そもそも！ ……」

眼前で広がりを見せる痴話げんかのような諍い。

話を聞いているだけで、ここの仕事の過酷さがありありと伝わってくる。

俺は薄ら寒い思いで、腕時計を眺めて、帰ろっかなあと考えて始めていた。

しかし 状況が一変した。

「楽しそうだなあ、僕もここで働きたいなあ」

輝が何を血迷ったか、目をらんらんと輝かせ言ったのだ。

「お、そうですかー！ いやあ嬉しいな！ じゃ、じゃあ、これからの展望も含めてお話ししましょうか！」

「はい！ お願いします！」

輝の発言にわが意を得たりとばかりに、甲斐甲斐しく迫り弟の両手を握った前田。

糸のような目が大きく見開かれ、黒目がちの瞳が瑞々しく揺れていた。

「お兄さんも！」

真琴は肩に手を回してきて、遠ざかっていた俺を引き寄せる。

こ、こいつ、本当、慣れてるな……押し際を心得ている……

仕事で身についた手際良さだろうか。

諦めて彼らの話を聞く他なかった。

だる。

「なんか、金金金っていけすかねえなあ」  
「かもね」

俺達は前田の事務所から帰ってきた。  
話を聞いてみたはいいが、  
前田は幽霊を金儲けの道具としか思っていないようだ。  
仕事内容に関して言うと、まだ発想の段階でしかない。  
探偵事務所の仕事に失踪者探しはあるが、どうやら、その延長の  
ような仕事になるようだ。

やはり前田は特別な能力を持っていた。  
それは失踪者の写真を見れば、現在死んでいるか生きているかを  
判別できるらしい。

写真を指でなぞらえれば、生死にかかわらず相手の場所の検討は  
大体つくそうだ。

俺達は失踪者が死者である場合に現地へ赴き、以下のことをする。  
行方不明者の幽霊と交渉。

場所を見つけたことを依頼者に知らせ警察に通報。  
依頼者の申し出があれば、死因の特定。  
殺しである場合、犯人がいるなら、見つけ出す。  
見つけた後は、霊的攻撃で相手の精神を弱らせ、警察に自ら行く  
よう仕向ける。

もしくは、揺すって金を奪う。

依頼以外でも近場を回って金の結びつきそうな霊の探索。  
その方法はまだ未定。



まあ、お粗末なものだ。

生業としているのだから、仕方ないが全ては金と結びつかないといけない。その上、あまりに危険だし、グレーゾーンに足を突っ込んでるわけで、なんか適当にあしらって帰ってきたのであった。

お、俺。

「昨日は事務所にきてもらい、話まで聞いてくれて有難う」

「いや、そんな」

次の日、土曜の昼下がり、真琴は俺の家に訪ねてきた。

ブレザー姿の彼女は、幽体ではないので、正面玄関から一定の手続きを踏んで今、自室で話こんでいる。もちろん、今日は両親ともに家にいたので、真琴をみて二人は大層驚いた。

訪ねてきた理由が、俺と話すためだと真琴が打ち明けたので、俺の彼女説が密かに二人の間で囁かれ、妙な盛り上がりを見せたのもご愛嬌だ。

「それにしてもなんだな……ハハ」

俺は柄にもなく緊張していた。

昨日も言ったが、生身の女には免疫がないのだ。

横座りで座布団の上に腰を落とす真琴は、男の匂いが染み付いたこの部屋には妙に不釣合いだし、その輝くような若さを証明する滲刺した肌や妙齡の女性にしか生成できない柔らかい匂いはいささか刺激的だ。

「今日は輝君いないんですか……」

「ああ、あいつは彼女いるからね、土曜日の昼下がりに家にやぼったくいるような俺とは違うのさ」

どこか自分を皮肉るような発言で、俺がフリーであることをそれとなく示唆する。

なぜそのような発言に至ったかは、俺自信にも皆目検討がつかない。

真琴は部屋の内部を見回した。

昼間の明るい部屋で見る俺の自室は彼女の目にどう映ったのだろうかなどと、虚ろな思考を蠢かしていると、突然、その色気がそろそろ芽吹こうとする黒い瞳が俺を真っ直ぐ捉えたのだ。

「前田所長の事悪く思わないでください」

「え？」

「昨日の話の中で誤解したと思いますが、彼は金の亡者では決してないんです」

「はあ」

生返事を返した後、俺は口をつぐんだ。

彼女は俺の視線を真っ向から受け止めて、更にこう続けた。

「私があなたと初めて会った時、あんな嘘をついたのには訳があります」

「嘘って君が殺されたって奴かな？」

この話はもう気が済んでいたので蒸し返すつもりはなかったんだが、彼女から口火を切ったので、仕方なく、忘れかけていた事をアピールする意味で疑問形で漏らす。

「そうです、あれには昨日所長が話した仕事の内容を先に皆さんに体現してもらって、所長の考える仕事の難しさを知ってもらう意味もありました」

「え？」

これまでと違い、ためらいがちに婉曲に話す彼女。

どこことなくその面差しには苦渋のようなものが滲んで見えた。

膝の制服のスカートに乗せた両手の指を軽く内側にしまいこみ、窓に生気のない視線を移して話を続ける。

「あの時、みなさんが親身に私の死の事実を突き止めようとしたよな」

「うん」

「その過程で何かやりにくさみたいなもの感じませんでしたか？」  
言われて、顎に手をやり虚空を見つめたまま、数日前に彼女の学校へ出向いた頃に思いを馳せる。

「確かに、色々難しかったなあ……なんていうか、俺は警察じゃないからさ……しかもあの学校の部外者、どうやって死因を探れば良いか本当悩んだね」

今思い出しても背中がむずがゆくなり、苛立たしさのようなものが蘇る。

あれほどやるせなく、無力感に苛まれたのは短い生涯においてそれほどなかったかもしれない。

「それなんですよ、所長のやるうとしてしている仕事はまさにそういう不便さが付き纏うものなんです」

「とうとう？」

「うちの所長は探偵なんですけど、実際の探偵というものはテレビやアニメと違って本当にたいしたなどできないです。それは牧野さんが言われたのと同じように……」

□ごもる彼女の言わんとすることが、脳裏に冴え冴えと浮かんでくる。

「分かったよ、言いたい事が。制限があるのは前田氏も同じで、彼が提案する仕事には無理があつて、どうしても一般常識の枠を超えて、たまには犯罪めいたものにも手を染めないと解決できない。警察じゃないもんね、探偵つてやつは」

「そうですね、しかも、これは遊びじゃなくって仕事なんです、生きていくために必要なお金を稼ぐ必要がどうしてもあるんです。だから、お金に執着しているのは事実なんです……」

彼女の闇に消えた言葉を再現しようと、続きを俺の言葉で継いでやる。

「その仕事がどれだけ危険で、金ズルとされる霊達をいかに、利己的に利用しているかという観点を見失っているって言いたいんだね」

真琴は目を見開いて驚いたように俺を眺めた。

「あ、あの、こんな言い方失礼なんですけど、良く分かってますよね」「はは、だてに16年も生きていやしないさ」

成り行きで、還暦を迎えた老獪な初老の男のような発言を返した。気恥ずかしさあつて、ごまかすように頭をかきむしる。

おもむろに彼女に視線を戻したところで面食らった。

一瞬で体中の血液が沸騰したかのように、俺の脈は高らかな音を

立てて熱い血を頭に送り込んでいく。

俺を見る彼女の頬は明らかに熱を帯び赤く火照って映り、見開かれた瞳には……

「ただいま」

頭が真っ白になり機能を失った耳に、輝の声が微かに聞こえたきがした。

## 契約。

「土日、入れそうかい？」

「そうですね、学校が早く終わったら、平日4時からでも入れると思いますよ、でも、10時までですかね」

「うん、高校生は法律によって厳格な規則があるから、その辺は配慮して決めるよ、じゃないと私の手が後ろに回ることになるからね」

前田は苦笑しながら、各種契約書を俺達に渡していく。日曜日の昼下がり、事務所で俺達は早速、前田探偵事務所と労働契約の手続きに入っていた。

「そっぴや、学校とご両親の方は大丈夫？」

「はい大丈夫です！ 事前確認できています」

うちの学校はアルバイト禁止じゃないため、親の承諾があればバイトすることができる。俺の親には簡単な仕分け作業だと言ってあるので、元々放任主義な父は社会勉強も必要だろうと、特に反論はしなかった。母は顔を歪ませて難色を示したが、俺がきつちり弟の面倒みると、勉強はおざなりにしないという二つの条件を飲む事でした。しぶしぶながら最後には首を縦に振ってくれた。

「じゃあ、3日後、水曜日の4時、この事務所へ来て欲しい、仕事はまずは簡単なものからやっつけていこう」

「はい、分かりました、よろしく願います」

深々と俺達は頭を下げて、探偵事務所を辞去した。

「しかし、兄貴、よくあそこでバイトする気になったね」

「ああ、まあ、金もなかったし、多少興味も湧いたんでな」

興味も湧いたというのは半分本当だ。

俺は陰陽師の力を普段から持て余していて、それが人々の役に立つのなら一度存分にその力を振るってみたいと思ってはいた。幽霊と関わる仕事っていうのはその意味じゃ、陰陽師と相性がいいし、

興味がそえられるのは否定しがたい。

「でも、思ったよりダーティな仕事でもなさそうだしね、無理強い  
はしないって言ってたし」

「うむ、それが一番心配だったが、俺達の意志は尊重してくれるら  
しいので良かった」

最初の説明が曖昧だったので、俺達は大きく誤解していたが、真  
琴の話によると、霊との交渉はあるが、相手にしっかりと承諾をして  
もらう事が前提となっている。そして、犯罪に手が染まるような事  
はしないらしい。何にでも抜け道というものがあるらしく……  
まあ、手錠をはめられるような事態はないだろうってことだ。まあ、  
その辺は言い回しが微妙だったが、仕事が怪しいと思うなら断る事  
はできるらしい。ある程度、融通がきくということ、それなら軽  
くバイトしてみようと思ったわけだが、アルバイトをする気になっ  
た本当の理由は他にある。

昨日の夜、俺達は顔を見合わせたまま可笑しな雰囲気にもまれて  
いた。

まるでそれは、恋人同士がキスをする前に目を合わせて甘美なひ  
と時に浸るかのような。

輝が後少し部屋に入ってくるのが遅ければ

ふ、たらればは言うまい。

それに、これは俺の希望的観測に過ぎない。

「だけど　俺はあの時、真琴との距離が一気に縮まった気がして  
いた。」

それは深海の底からテレポーテーションして、海の表面にふつと  
現れたザトウクジラが照りつける太陽を拝んだ時のようというか。

完全に俺の思い込みかもしれない。

俺にそんな予感を探知する能力があるかと言えはないと言い切れ  
る。

「いっちゃんだが、俺はこれまで女に全く縁がない人生を歩んで

きた。

そんな俺に女との距離を測る定規や巻尺のような能力が備わっているなんておこがましい。

だが、世の中杓子定規ではかれない不可解な事象はいくらでも転がっている。

全く未知の体験をしたからといって、それを全否定していいものだろうか？

俺の独断と偏見で言うなら、俺の容貌は二枚目には程遠いが、それほど悪くないと自負はしている。

性格においてもこれといった大きな欠陥はないはずだ。

それでも彼女ができなかった理由を敢えて深く掘り下げるなら、常に受身でいたせいもあるかもしれない。自発的に陣地へ乗り込む努力をしなかった。恋愛へなだれ込む端緒を掴もうと、自ら接近することを潔しとしなかった。

それは俺の脆いハートを覆うように張り巡らされた防衛本能が働いていたせいもある。

言い訳がましいが、俺と言う男は繊細すぎたのだ。石橋を慎重に叩きすぎて手を傷めて、そこで踵を返して、自宅にバンドエイドを求めて帰るような人生をこれまでは送ってきたのだ。

しかし 昨日はこれまでとは違う手ごたえのようなものを実感していた。

俺の灰色の学園生活に転機の兆しが見え隠れした瞬間を網膜に焼き付けたのだ。

あの後、輝がやってきてから、真琴は輝にも俺と話したような事を告げ、輝も承諾した。

その後、仕事で必要になるからと、俺達にメアドを教えてくれた。俺はその時は少しかり落胆した。

初めて母ちゃん以外から教えてもらった異性のメアド。



本当いつなら独り占めしたかった。

「真琴ちゃん来てなかったね」

「今日は用事があつて遅くなるらしい」

「何で知ってるの？」

「そんな気がしただけだ」

真琴もあそこでアルバイトをしているが、同じ高校生の身分。フルタイムで出ているわけじゃなかった。

彼女の通っているのは水川高校。あの嘘話で俺達が足を運んだ学校だ。

「輝、お前、携帯に真琴からメールあつた？」

「今日は1件仕事の話のメールが入ってたね」

「そうか」

俺はそれを聞いてほくそ笑む。

おもむろに自分の携帯を開いて、メールを確認する。

今日一日で10件もメールが入っていた。

二件は父と母、もう二件は友達、残りの6件は

「今ね、休み時間！ 牧野君は何してる？」

『今日ちよつと友達とカラオケ行くんで遅くなる！ 急いで帰るけど間に合わないかな^^;』

輝には1件しか、しかも仕事メールしかないのに俺にはこんなに

一応真琴には輝には雪乃という彼女がいる事は知らせてある。

その事に真琴が気を遣ったとも邪推はできるが、それでも、気のせいか、俺に偏って送られたメールの数々。

しかも、やけにプライベートな内容だ。

俺は携帯を乾いた音を立てて折りたたむと、ズックにしまい込む。  
夕闇に沈む街を弟と歩きながら、俺は何か予感めいたものに心が  
弾まずにはいられなかった。

## 波乱の幕開け。

世の中そんなに旨い話は転がっていない。

そんな金言をかみ締めながら、俺は事務所の倉庫で輝と一緒に掃除に勤しんでいた。

アルバイト初日、やってきてすぐに真琴に指示を受けて、倉庫の壁や床の埃ばらいや、段々に詰まれた椅子や机の整頓といった雑用をさせられていた。思ったのとまるで違う仕事内容ではあったので、不満げに直訴したら、真琴に鋭い視線で、下積みは大切などと一蹴された。

「なんなんだよ、俺こんなしにここへ来たんじゃねえぞ」

「仕方ないよ、仕事なんだから」

昨日の妄想200%の浮かれ気分は異次元の彼方に吹き飛んでしまっている。今は突然先輩ぶって俺達をこきつかう真琴に憤懣としたものさえ覚えていた。

黙々と部屋にモップをかける輝は案外楽しそうに見える。

こんな単純作業何が楽しいんだか。

俺はもつと霊的な力をふんだんに活用できるような仕事をしにやってきたのだ。

今日は事務所に前田の姿はなかった。

何やら仕事で出ているらしい。

俺達の出勤日は既に今週分は決まっていた。

本日、火曜日、木曜日、土曜日。

壁に張られた出勤表に俺達の名前が日付の欄に並んでいた。

「真琴さん、一通り掃除終わりました」

「はい、ご苦労様！ 休憩10分ほど挟んでいいわよ」

俺はそれを聞いて一息つくくと、応接室の壁際にあるスツールに腰を下ろした。

輝はすっかり日が沈み星が瞬く夜空を窓に寄り添って眺めている。  
腹減ったなあ。

一仕事終えて、腹減りに気づいてお腹を摩る。  
今日は家に帰らず、そのまま事務所に直行した。  
家に帰って御菓子でも摘んでくれば良かったが、面倒なのでそのまま来てしまった。

コンビニで何か買うこともできたが、バイトしにいくのにお金使うのもなんだか馬鹿馬鹿しいのでやめた。

「みなさん、お腹すいたでしょう」

奥の扉が開け放たれる。

入ってきたのは所長の彼女、佐山明美さんだ。

どこか色気が匂い立つ顔立ちは大人の熟練した女性の証明とも言える。

彼女は銀色のトレイに、スパゲティを3人分皿によそって持ってきてくれた。

天の助けとはこの事だ。

食欲を誘う香ばしい匂いが殺風景な室内を満たし俺の鼻腔をくすぐる。

「美味しい！」

「本当だ、佐山さんお料理上手ですね」

「いやあね、レトルトパックを湯で沸かしただけよ」

「あはは、でも美味しいです」

円テーブルでほんわかと談笑の花が咲き、フォークを操る手の動きも軽やかだ。

俺達はアトホームな雰囲気ですっかり馴染んでいた。

まあ、一人は無言でスパゲティの麺を口に運びながら黙々と食してらっしゃるけど。

「真琴さん、この後の仕事は？」

なんだか浮いて見えるので、真琴に仕事に関する話題を振ってみる。

真琴は麺を一筋口に吸い込むと、フォークを音を立てずに皿に置いた。

そして、壁掛け時計に目をやった。

「7時に所長から連絡があると思う……」

どこか慎重な調子で言葉を紡ぐ。

何だろっ、この真琴の緊張に強張る表情は。

俺はごくりと息を呑んで、彼女の横顔をしばし見つめていたが、不意に真琴がテーブルに置いた携帯の着信音が鳴り響く。

「はい、真琴です。はい、はい、えええ、はい、わ、分かりました。今すぐ連れて行きます」

真琴は携帯を折りたたむと、鋭い視線を俺達に回していった。

その顔は影が幾筋も刻まれ青ざめてるようにも見える。

穏やかならぬ空気を感じ取って、円座の人々は一様に真琴を見たまま黙っていた。

「ど、どうしたんですか？」

沈黙に耐えかね、俺が最初に口を切る。

「あ、えっと、今所長から連絡あったんだけど」

「はい」

所長と聞き、明美さんは色を失い口を開いた。

「何かあったの？」

「えっと、その〜」

逡巡したように真琴は口ごもったが、やがて観念したように明美を見て言った。

「う、動けないらしいです」

「え？」

「だから、私たちですぐ行ってきます！ ほら二人行くわよ！ 急いでー！」

真琴は何か言いたげに口元を振るわせる明美を尻目に、俺達に檄

を飛ばして事務所の扉を出て行く。

俺達は訳も分からず呆然としていたが、我に返って弟とともにその後を追った。

## 終わり（前書き）

実験終了。

ちょっと他の作品に力いれますので、こちら終わります。





## 2章、俺的ファンタジーで誰かが（前書き）

息抜きでだらだら書くためと、別の作品で行き詰った時に執筆間隔を空けないための場所です。

## 2章、俺的ファンタジーで誰かが

俺は今回は疲れたので、俺的ファンタジーの設定に関しては俺が作るが、中で動いて活動する人間は俺が作った人間だ。俺はその人間の心の声が聞こえる神のような存在。途中で俺がだるくなったら、天の声で物語を中断する事も可能だ。

-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----

異世界に僕と彼と彼女。(前書き)

息抜きなので、前と同じような書き方します。  
ご了承ください。

## 異世界に僕と彼と彼女。

中世ヨーロッパっぽい世界観の異世界へ召還された、日本人の高校生、間山武と水島理子、神田雄介。

彼等はバンクス城に、召還拉致され、これから非道な試練を受けさせられようとしていた。

よくあるパターンをたまにはやってみよう。

携帯で反映する。

「よいな、魔王を倒すのだ。倒せたら元の世界へ返してやる。ちなみに任務を放棄しようなど考えない事だ。君たちの腕に巻かれたプレスレットにはめ込まれた魔法石は君たちの『魔王を倒す』意欲を敏感に察知する。放棄するレベルすなわち水準1を下回って長時間放置すれば、腕輪は強大な魔法を発露し、主人を業火で焼き尽くし灰にするだろう」

元気なおじさんだった。

金冠に、赤い外套、豪華な宝石をたわわに実らせた上衣。

身なりのいいおじさんだったけど、言ってることはちょっとしたヤクザな人と同じ。

僕は怯えてしまって言葉を発せなかった。

「こら、はなしーや！ なにすんねん！」

「うるさい！ さっさと歩け！」

関西弁の良く日焼けした男の子が、騎士の格好をした人たちに周りを固められていた。

僕も同じ境遇で前を歩いている。

彼は不満を露にして、騎士達、たぶん王様の家来をどやしつけて

いた。

身なり見る限り、彼も日本からここへやってきたに違いない。  
そして、前を同じように黙って歩く学生服姿の彼女もまた。

## 牢屋にて

不遇な僕たちは良く分からない世界の城の地下牢に入れられた。

3人一緒に……

些か緊張していた。

「おい、間山だっけ」

「あ、はい」

声が裏返ってしまっう。

「どうするんだ？」

「どうすると言われても」

僕は臆病で人見知りが激しい。

当然、こういうタイプの男子は苦手だった。

細い歩道で向かってきたなら、間違いなくこちらが道を空けるに  
違いない。

僕が黙り込むと、彼は奥の苔むした壁に座る彼女を見やった。

「水島だっけか」

「……………」

神田君は水島って女の子に声をかけようとして口ごもる。

彼女は口数は少ないのだけれど、何か近寄りがたいオーラ纏って  
いる色白の美人だ。

さつきも神田君は横柄な口調で声を掛けてガン無視されたばかり  
だった。

「こら出せやー！ 衛兵！」

わめく神田君。

足を抱きこんで大人しく余生を楽しむ僕。

冷たい床に教科書を置いて、その上にノートを開けて何かをつづ  
る水島さん。

何を書いているんだろう？

僕は気になって彼女の傍に、膝でにじり寄った。

興味深げに眺める僕を彼女は一瞥すると、

「日記をつけてるの」

と一言だけ漏らした。

「なるほど」

## 街での買い物

「はあ、城出たはいいけど、こんな爆弾みたいなもの手につかられてよ〜」

「でも綺麗だよな」

金色の腕輪、表面の浮き彫りが施されている。

牢屋から出してもらった僕たちは城の外へ解き放たれた。

こちらへきた時はあれほど高圧的に色々言われたのに、見送りは兵士が二人だけ。

城の入口であろう門前で、『まあ、頑張れや』と送り出された。

スタスタと先を歩く水島さん。

肩までの黒髪は綺麗だけどどこか勇ましく見える。

「どこ行くの〜？」

僕は彼女に追いついて尋ねる。

「お金渡されたでしょ、服を買いに行くのよ」

王様からは武器やら衣服代やら旅の路銀として、金貨100枚を手渡されていた。

どれくらい価値があるかは分からない。

「おい、ちよつと待ってよ！」

置いてかれそうになって弱気な声をあげる雄介君。

最初は威勢の良かった彼も、不案内な土地では勝手が違うみたい。

「理子さん、似合ってるよ」

「有難う」

彼女は雄介君に優しく微笑む。

黒く縁がギザギザに擦り切れたようなローブを着た彼女は、元々のミステリアスな雰囲気を一層濃くしていた。



「えーっと、雄介君、どうこれ？」

人好きする顔立ちの店主に進められたこの街の普段着。

軽くて丈夫だという触れ込みだ。

「いいんじゃないね？ 下の緑色のズボンとクリーム色の上着が武に合ってるよ」

そう言っただきな顔を綻ばせる雄介君は、なぜか忍者みtainな格好をしていた。

「元の世界に戻るには、魔王つてのを倒さないといけない。それには私たち強くないと」

「そうだね……」

「うむ、俺は人間相手の喧嘩は自信があるんだけどよ、魔王つていうのは人間じゃないよな」

不安げに視線を落とした雄介君。

金髪に染めた髪、色黒な肌、筋骨隆々な体つき。

こんな彼でさえ、自信なさそうに俯いている。

異国の地で、人間じゃない相手を倒さないと、元の世界には帰れない。

その現実には想像以上に重いプレッシャーだった。

「武君……怖いのはみんな同じだよ」

そんな彼を見て、理子さんは宥めるように言った。

「ただ、彼女の足も心なしか震えている。」

「とりあえず、剣と楯も手に入れたし、宿も確保した。ちょっと街の外へ行って見ようよ」

「外には魔王の手下がいるらしいね。でもこの辺のは弱いらしいって」

「試しにどれくらいのものか、やってみるか」

## 事情

「まず、基本を知るべきだ、君たちはここへ来たばかりだろ」

「はい」

勇み足で街の外へ出て行こうとした時、おじさんに呼び止められた。

彼はこの町で武器屋を営んでいる。

僕たちが剣などを買いにいった時、一度会ってる人間だ。

「君たちの不遇は哀れだと思っている。城のお歴々が、一年に一度行う召還の儀。これは君たちの世界から人を無作為に連れてきて、魔王と強制的に戦わせる。この大陸を席捲する魔王と魔物たちを異世界の勇者に殲滅させ、自由を勝ち取る。一見理に叶った儀式ではあるが、これまで何人も勇者達は志半ば、この城をすぐ出たあたりで息絶えていった。王様たちは大抵そうになると最初から分かっている。彼等は魔王を倒すなどはなからする気はないんじゃない。いわば、君たちは魔族達への供物にして、王族たちの一年に一回の道楽の道具に過ぎない」

「酷い……」

鼻白む理子さんの声は静かに憤りの炎を内包している。

「まあ、そうだろうとは思ってたよ、何で俺達みたいな高校生がそんな化け物と戦わないといけないんだよってな。城にはもっと強そうな兵士とかいたもんな」

「そういうことじゃ」

鍛冶屋の奥の部屋で僕達はジルクスの話を聞いていた。

彼はこの非道な儀式をずっと悲痛な目で眺めていた。

ある日、王様にやめるよう直談判したものの、門前払いされてしまった。

途方にくれていた彼は、ある時思い立った。

せめて哀れな異界の勇者に、戦い方だけでも教えよう。

それが不本意にも呼び出された勇者達に自分がしてやれる唯一のことだと。

ジンクスは目を充血させながら僕たちをみていた。

「う、おやっさん泣かせるじゃねーか」

雄介君はすすりあげると、涙をを腕で拭った。

ジンクスが熱く語る中、理子さんはテーブルに白い紙を置いて何かを綴っている。

「理子さん、何かいてるの？」

「遺書よ……」

理子さんはジンクスの涙話より、先行きの見通しが暗いことに落胆した様子だった。

## 深夜の凶行。

ジnkスの話を聞き終える頃には日が暮れてしまったので、宿屋に僕たちはとりあえず帰ることにした。煉瓦造りの宿は2階建てで部屋数は7、8だろうか。ここの料金は一人金貨3枚。高いのか安いのかは分からない。しかし、昼間武器防具代で10枚は消費している。これから何があるかわからない状況での浪費は極力避けようというのが僕たちの一致した意見だった。よって、部屋を分かつことはできない。

「いいんだよ、俺は、どこでも寝れるからよ」

「あ、有難う。見かけ……」

ベッドはこの部屋に二つしかない。雄介君は床に寝るといって僕にベッドを譲ってくれた。

「見かけもいい奴だろ？ 八八」

僕は苦笑しながらも、雄介君の中に大きな人間性を見て胸が熱くなっていた、

夕食は胡桃パンを食料品店で2つ購入して室内で食べた。

食べ物も出来るだけ質素なものにして節約。だけど、その反動が夜中に僕を襲う。

「うーん……」

全ての人間が寝静まったような静かな夜。僕のお腹は奇怪な音を一定のリズムで奏でる。

やはり、育ち盛りの男子にパン二つでは長い夜はもたなかった。

床をちらりと見ると、雄介君の口元は涎が垂れているのか月の光を浴びて白く光っていた。

煩悶としながらも、僕はいつしか浅い眠りについていた。

もそり。

だけど、何かの気配を感じて、ふと目が覚める。

すぐ傍の窓を見ると、青黒い空の中天にかかる満月が僕を見下ろしていた。

部屋をそろりと見回す。雄介君は口を開けて寝ている。

対角線上にある理子さんのベッドを見る。

理子さんの姿がない。

それに気づいた数瞬後、視界の端に白い影が見えたきがした。

さっと振り返ると、まさに外の廊下を隔てる扉が閉じたところだった。

女の子の後を深夜おそくつけるのは本意ではない。

しかし、彼女の用事はたぶん、トイレに違いない。

僕は宿のトイレの位置を把握していなかった。

ちょうど小便をしたかったし、僕は渡りに船とばかりに、理子さんの白い影の後をつけることにした。

理子さんはは白い寝着の裾を宙に舞わせて、暗い廊下の闇に分け入っていく。

音もなく闇に漂う仄白い影。

その姿はどこか儚げで、この宿を夜な夜な徘徊する亡霊のようにも映る。

階段を下りていく。僕は気づかれないように一定の距離を保って後をつける。

まさに僕はストーカーだった……

だけど、深夜後ろから声を掛けるのも気が引ける。

それに他の宿泊客にも迷惑……などと自分に言い訳していると、理子さんは扉を開けた。

青白い光が一瞬間を照らしたかと思うと、理子さんは忽然と姿を消した。

こんな夜遅くに、外に何の用事が。  
しかも薄い寝着のまま。

僕は訝しげに思いつつ、再び尾行開始。

ここからは使命感のようなものが僕を突き動かしていた。

未知の世界で深夜遅く、女の子に一人外を歩かせるわけにはい  
かない。

僕は宿の外に落ちていた金属性の棒を手に握った。

変な輩が理子さんをつて時には、この僕が。

どこまで行くんだろう。

理子さんはひたすら歩く。

軒を連ねる民家を足早に過ぎていく。

そのうち、周りに建物の影さえまばらになり場末感さえ漂い始め  
る。

こんな人気のないところへ何の用事が。

背の高い木々が密集する森。

月の光がまばらに森の中に落ちてきていた。

こんなところでトイレ？ などと考えていると、

不意に彼女が足を止めた。

僕ははっとして、近くの木陰に身を隠す。

僕は木陰から少しだけ顔を出して彼女の不審な行動を観察してい  
た。

薄っすら闇に浮かぶ彼女は、太い木の幹の前できよきよとして  
いる。

しばらくして、周りに人気がないことを悟ったのか、彼女は立ち  
上がった。

あ、あれは。

彼女の右手が一瞬鈍い光を放った。  
次の瞬間

ガキン！

森の静寂に甲高い音が響き渡った。

ガキン！ ガキン！ ガキン！

彼女はしきりに手に持ったハンマーらしきもので何かを……

「おおお、ちょっとまって、理子さん！」

嫌な予感が背筋を走り抜けた時には、大きな声をあげていた。  
驚いた彼女は振り返って動きを止めた。

「た、武君、なぜ？」

「な、なぜじゃないよ、何してるの？」

「こ、この忌まわしいブレスレットを！」

ガキン！ ガキン！ ガキン！

「ま、待って！」

理子さんは俺の制止を振り切って、ブレスレットにハンマーを叩き込む。

ガキン！ ガキン！ ガキン！

止めないので仕方なく、彼女を背後から羽交い絞めにする。

「これを碎けば私は自由に……！」

「そんな事したら魔法が発動して黒こげになるよ……！」

「いいのよ、どっちみち死ぬんだから！」

修羅場だった。

彼女は正気を失っていた。

僕はなんとか、彼女からハンマーを取り上げ、地面に投げ捨てる。

「何するのよ！」

乾いた音と同時に小さな手が僕の頬を打つ。

「理子さん落ち着いて！」

「ほっといて！」

と言つて、土の地面にあるハンマーを手にするので、それを遠くに蹴り上げる。

「大丈夫だから！ 僕たちが何とかしてみせる！」

「あーあー聞こえない聞こえない！」

力む彼女の両手首を掴んで動きを封じ、言い聞かせる。

「よく聞いて！ 今君が死んでも、太陽は普通に明日も東から昇る

！ だから、君の死は宇宙的に見ればほんの些細なことだ。だけど、

君を知っている人達には君の死の比重は大きすぎる、考えてみて、

君のお母さんは帰りを待っているはずだよ？ 君を待つ恋人は？」

僕はそれでも怯まず彼女に言葉を連ねる。焦っていたので自分が何を口走っているのか自分でも分からない。それでも、僕は根気よく、その凶行の無意味さと、これからの明るい展望について、あらゆる例や可能性を織り交ぜて彼女にはなして聞かせた。

一時間くらい喉が枯れるまで説得していた気がする。

「そうよね……一人じゃないもんね」

「うん、雄介君は強そうだし、多少頼りないけど、僕だって頑張るしね」

僕は宥めすかすのにかなりのスタミナを消費していた。

理子さんもさすがに疲れたのと眠気もあつて、テンションは落ちてきていた。

「さあ、帰ろう」

「うん……」



何とか理子さんも分かってくれたようだ。  
先行きはこの森の闇のように暗いかもしれない。  
だけど、僕たちは一人じゃないんだ。

## 鍛錬初日。

「早いなあ、雄介君は」

「……………」

僕たちが召還された城を中心として円状に広がる街並。

ここは、いわゆる城下町だ。

中世ヨーロッパのような煉瓦を積み立てた建物や、漆喰の壁の民家が軒を連ねる。

今いる大通りから、鈍色の壁が雄雄しく聳える城の威容は鮮烈な印象を目に伝えてくる。

昨日、ジnkクスは僕たちに戦い方を教えてくれると約束した。

だが、戦い方を教えるにしても、基本的な体力がないとついていけないとも言った。

それで僕たちは朝のジョギングをすることを薦められ、今日から始めていた。

確かに理には叶っている。化け物と戦うのなら体力は必要だ。

「こんなんで、魔物とやらに勝てるんかな」

「だけど、地味な訓練に雄介君は些か懐疑的だ。」

「剣の修行とかした方がいいよなあ」

「まあ、雄介君はともかく僕にはいいと思う」

高校では帰宅部に所属する僕。

無論、スタミナなんて持ち合わせていない。

僕にとっては効果的な鍛錬法だと思う。

額にじっとりと滲む汗。

「だけど、不思議と不快ではない。」

むしろ、気持ちのいい汗だ。

この世界は、今、梅雨を迎えた日本とは違って湿度はそれほど高くない。

街中を吹き抜ける空つ風は心地よく、日本の秋を彷彿とさせる。

「気持ちいいね」

「……………」

白磁のような肌、市松人形のような整った古風な顔立ちの理子さん。

普段は感情をあまり表情に出さない。

昨夜の錯乱ぶりが嘘のように、黙々と石畳の道をみつめ走っている。

「なんか……………」

僕が彼女に並走すると、ふいに彼女は口を開いた。

「違う……………」

首を左右に振って気の強そうなシャープな眉を潜める。

朝のジョギングが終わると、昼飯を食料品店で買った。

昼からジnkクスと街のはずれへ行く予定なので、コンビニでおにぎりを買うが如く、急いで食料品店でパンを購入。

「ありあとやしたー」

「ち、いそがねーと」

雄介君は店の中の壁にすえられた時計を見て舌打ちをした。

この世界にも時計があった。しかも、日本と変わらない原理で動くものだ。

店の中にもや町の広場の中心の尖塔にも時刻を示すものがあって、いつでも時刻は確認できる。

「さあ、今から弓を練習しよう」

ジnkクスに連れてこられた街のはずれにある廃墟跡。

屋根やら壁が取っ払われていて、まるで遺跡のような場所だ。

建物の名残を僅かに残す石の壁には木板の的が設置されていた。

「弓は便利だぞ、遠距離からの攻撃に適している。うまくやれば、一方的にこちらが攻撃できる」

僕はたわんだ弓に矢をつがえて、弦をひこうとする。

しかし、固すぎて、引き絞れない。

「ははは、初めてかい、武君」

「ええ」

僕が恐縮して言うと、ジンクスが僕の後方にきて僕の手を取り、弦を引く確かな位置に誘導した。

「このまま、引くんだ」

彼の力が弦を引く僕の手に合わせて、軋む音とともに弦が引かれると、

「矢尻を的に定めて、今だ！」

手から矢が離れ、しゅつと風を切る音がした。

数瞬後、的を射抜いた甲高い音が耳に届く。

「武やるやん！」

「はは、僕の方じゃ」

言いながらも、矢が的の真ん中付近を穿った快感に密かに打ち震えていた。

「すぐうまくなるさ！」

顎鬚を撫でながら、傍らで豪快に笑うジンクス。

石の出っ張りに座ってた理子さんが流し目で僕たちを眺めている。

彼女は腕が太くなるからという理由で、弓の訓練には参加をしていなかった。

「よっしゃー」

しばらく弓を練習していたら、僕は的の端っこにはなんとか当てられるようになっていた。

雄介君などは2、3度的を外したが、4度目には自力で真ん中付近を射抜くほどだった。

「うん、いいかんじだ」

と言って、ジンクスは運んできたやたら長い布袋が置いてある場所まで歩いた。

長い棒のようなものを紐をといた袋の口から引つ張りだす。

先に銀色の鋭い先端が見えて、それが槍だと初めて認識した。

続けて、長短不ぞろいの鈍い光を放つ剣と思しきものを無造作に土の地面に並べていった。

「さあ、次は剣の振り方を教えよう」

「まっつてましたあ！」

雄介君が弓を地面に投げ出して、喜悦を満面に広げてジnkクスに駆け寄った。

「上段に振り上げてまっすぐ切り下ろす」

薪のような切り出された木片を平たい岩に乗せている。

その上から剣を振り下ろして、真つ二つにするのが目的のようだ。

この鍛錬の目的は、剣術というよりはまず、しっかりの捉えて両断する角度を知る事が目的らしい。

スパーン！

「こうですか、師匠」

「うむ、うまいじゃないか」

見事に真つ二つに太い木片が、こ気味いい音を奏でて切り離される。

さすがに雄介君は体つきからして、何をやらせても万能だ。

剣を扱う自体、性にあつてるらしく、薪割のように、割れた木々が量産されていた。

数刻して雄介君は太く長い剣を自在に操り、その鋭い切っ先は宙を縦横無尽に行き交つていた。

さすがとしかいいようがない。

でも僕も負けてはいられない。

剣を振るう事は体力的に難しいが、適材適所という諺がある。

力がない僕には剣より槍の方をジnkクスに薦められた。

予め用意して持ってきた藁人形をジnkクスは杭に固定してくれて

いたので、それ目掛けて、只管突く作業をこなしていた。これなら僕でもそれほど苦もなく扱えそうだ。

「ジンクス先生、魔法とか教えてください」

「え？」

男たちが汗を滲ませて修行に励む中、理子さんは手持ちぶたさに耐えかねて言った。

腕を太くしたくないので、武器を使いたくない彼女。

武器の代わりになるものが欲しいというのだ。

確かに僕たちの腕を縛る魔法のプレスレットがあるのなら、魔法がこの世界に存在すると考えるのは普通かも。

しかし、そんな理子さんの訴えも

「あ、俺魔法使えないから！」

この一言でにべもなく反故にされた。

修行が終わって、すっかり夜が更けたので僕たちは宿に帰ろうとした。

「夜から、魔王や魔物について話すので、わしの家に来てくれ」

「ええ、疲れて……」

言いかけて雄介君は口をつぐむ。

「済まないな、だが、時間が混んでいるので」

悪いなと言う風に苦笑を浮かべて、手の平を立てるジンクス。

なんでこれほど性急に事を済ますのだろうか不思議に思ったが、

世話になっている以上、誰も深くは切り出せなかった。

「魔王は人間達を殺せと部下である魔物に命じておる」

「なぜですか？」

「古来から受け継がれた確執とでもいうものか、人間とは彼等にとつて異端であり、邪魔者でしかないんだ」

眉間に皺を寄せて、神妙な顔でジンクスは語った。

「ある村では小さな女の子が、町の外で奴等に無残にも食い殺され

てしまった」

「ひでえ」

「彼等には女子供など関係ない。人間をその視界に入れれば、襲って殺すよう本能に刷り込まれている。魔王が命令をする必要もないくらい、彼等にとって人間は食物連鎖の下級層に位置するものとして、捕獲すれば食らうのみなんだ」

なんか血なま臭い話が延々と続けられていた。

木製のテーブルに一つ蝋燭を置き、それを囲んで惨劇を話す様はまるで、百物語のようだ。

理子さんの白く端正な細い顔は、一見表情が薄く済まして見える。しかし、話の途中で、細い眉根がピクッと持ち上がったたり、鼻筋に皺が一本刻まれたりする様を見る限り、何かを感じてはいるのだろう。

表情が読み取りづらい理子さんと違って、惨劇を聞くたびに憤りを顔に表す直情的な雄介君。

身振り手振りを交えて、その惨劇の被害者になり切った様に悲しみを共にし、或いは、魔物に対して烈火のごとく怒りをあらわにしていた。

ジnkスの話を聞きながらも、対照的なその二人の顔を交互に見てるとなんだか微笑ましくって暗い話なのに、僕の心はそれほど沈むことはなかった。

前へ。

僕たちが朝、ジnkスの武器屋へたどり着くと、バンクス城の兵士が既にそこにいた。

彼等は僕たちを数人で取り囲み、無理やり拉致すると馬車に放り込んだ。

「さあさあ、早く行った行った」

「そんな急に」

そして、着いた先は城下町と外界とを隔てる入口。

街を囲むように続く高い壁の一角にしつらえられたアーチ状の門である。

「地図は渡しておいた。魔王を見事倒してくるんだ、さあいけ」

「くそ〜！」

兵士が槍の切っ先を向けて、僕たちを追い払おうとする。

武器はそれぞれ持つてはいるが、多勢に無勢だし、僕たちは戦いにおいて素人。

ここは退くしかなかった。

「おいおい、まだ俺達ジnkスから初歩しか教えてもらってないのに、いきなり魔物がうるつくりしい外界に追い出されちまったぞ」

「……………」

僕は呆けていた。

元々頭の回転はそれほど速くない。

突然の事態に思考がついてこない。

「おまえら、呪われるー！」

雄介君が城下町の方を見て罵詈雑言を飛ばしている。

しばらくして、我に返る。



どれくらい立ち尽くしていたのだろうか。

両足が棒のように強張って痺れている。

首だけ振って、辺りを見回す。

木陰で座り込んで瓶に入った水を飲む雄介君と目があう。

「理子さんは!?」

「足元」

素っ気無く言われて、足元を見る。

雑草の茂る足場で行き倒れた少女　　じゃない。

これは理子さんだ。

彼女は力なく地にうつ伏せに倒れていた。

首だけ右に捻っているので横顔は拝見できる。

黒い瞳は大きく見開かれ、死んだよう魚のような虚ろな光を放っていた。

今にも事切れそうさ。

「理子さん、元気だして！」

僕は彼女の傍に蹲って、励ますように言った。

「げ、元気……出して……どう……するの……」

掠れ気味だけど、声調はしっかりしている。

「え、そりゃ立ち上がったって前へ前へと」

「その……森の中へ……?」

「そゆことになるね」

目の前に鬱蒼と広がりを見せる緑の闇。

何が潜んでいるか分からない。

だけど、後門は閉ざされてしまった。

前へ進むしかないんだ。

## 深淵

「任せとけよ理子！ お前には指一本ふれさせねえからよ！」

「僕だつて頑張るよ！」

雄介君と二人で理子さんを威勢のいい言葉で元氣付ける。

見上げる理子さんは弱弱しく右手を地面について半身を起こした。表情に動きはないが、黙ったまますつと立ち上がり、僕たちを見て微笑む。

「私お荷物だけど、街で包帯とか買っておいたから、怪我したら治療はできます。これでも看護婦目指してて、そういうの得意なんです、だから、あの、私」

理子さんは語尾の声色を下げて口ごもった。

ぐつと唇を噛んで、顔を伏せて、黒いローブの膝付近に震える握りこぶしを並べている。

「OK！ それで十分や！ 俺達のしんがりに控えててくれたらええ」

「うん、理子さん任せて」

「分かった」

ほつとしたように、緊張した顔を弛緩させる理子さん。

彼女は彼女なりに、集団のなかで何が自分にできるか真剣に考えていたんだろう。

理子さんが僕たちに混じって化け物と戦うのは難しいだろう。

武器だつて持っていないし、女の子だし無理はさせたくない。

僕たちは彼女のナイトとして、彼女は僕たちの看護婦として、役割を分担するのはいい考えだと思う。

鬱蒼と茂る木々をかきわけ、人為的に草を分けた痕をなぞって歩を進める。

雄介君は先頭を歩いて、剣で邪魔な障害物を時々切り落としてい

た。

「何も出てこないね」

「そうだなーこれじゃただの森の探索だよな」

「魔物つてどんな奴なんだろうね」

首を傾げて雄介君はさあなつと一言呟く。

生むが易しと言うが、思ってたほど危険がないので、僕たちは退屈していた。

そんな時、ずっと黙っていた理子さんが口を開いた。

「みんな、ここへどんな風にやってきたの？」

言われて、召還された時の事が頭をよぎる。

「俺はなーはずかしーんやけど、トイレで大したあと、拭いてたんや、そしたら」

「いい……次」

理子さんがあっさり雄介君の話の遮って、白い顔を僕に向けた。

「僕はね……」

僕は……確か、母親と喧嘩してる最中だった気がする。

「母さんと話してたよ」

「どんな話？」

理子さんは口元だけ綻ばせて尋ねてくる。

困ったなあ……あまりに家庭の事情だし。

「今日の晩御飯はとか、そんな話だよ」

父さんの浮気が発覚して、ピリピリした母の相手をしてたら、争いになったなんて言えやしない。

「いいな〜」

朗々とした良く通る声が、静謐を湛える森の中に響く。

「何が？」

「うっん、ただ、お母さんがいるって羨ましいと思って」  
胸に鈍い痛みが走る。

そうか、理子さんには母親が。

僕はこういう流れに慣れていない。

繊細な話だけにどう切り出そうか、しばらく迷っていた。

「ぼ、僕」

「私ね、校舎の上から飛び降りたんだ。そしたら、地上にたどり着く前に……」

沈黙に耐えかねて話そうとした矢先、それを圧殺するような強烈な彼女の告白。

激白と言っても良い。

それは……あまりに重々しい内容だった。

一瞬目の前が暗転して世界が変質したような感覚を覚えたほどだ。激しい衝撃は僕を貫いて、前を歩く雄介君の足も止めてしまった。

## 遭遇。

この森の深さは想像を絶していた。

行けども行けども、濃緑の茂みや倒木、大岩や太い幹が行方を遮るように居並ぶばかりだ。

そして、森の中は総じて視界が悪く暗い。

「化け物いないやん」

「いない方がいいのでは」

僕はもちろん化け物なんかと遭遇したくない。

こんな方向も定まらず、足元がぬかるむ陰気な場所で、魔物とか言われる得体のしれない生物と出会うなんて、それこそ、熊と出くわしたとかの騒ぎではなくなる。

ただでさえ、僕は陰鬱な空気に胸が塞ぎそうな心地で歩いているんだ。

「魔女でもいそう……」

理子さんは消え入るような声で囁いた。

「魔女ならいるやん」

振り向かずそれに素っ気無く答える雄介君。

「どこと」

わざとらしく目を丸くして首を振る理子さん。

「ははは……」

そのやり取りに苦笑を浮かべるしかない僕。

服屋で買ったあの漆黒のローブに、環状の広い鍔の真ん中に円錐がのっかる帽子。

そんな容姿の理子さんを目にしては笑うしかない。

前を歩く雄介君の横顔が目に入る。

不満とも憤りともとれる色を顔に滲ませている。

雄介君は理子さんのあの告白以来、少々機嫌が悪そうだ。

『自殺するような奴はさいてーや』

あの告白の後、雄介君はあらぬ方向を見てこうはき捨てた。

僕は慌てたが、二人の重い沈黙の直中で身動きが取れず、理子さんの顔をじつと見つめるほかできなかつた。泣きじゃくって雄介君に罵倒を浴びせるのだろうか、暗い顔で俯いて、永久凍土のように未来永劫口を閉ざしてしまうのかと心配が先走った。

が、彼女は端正な白い顔立ちをびくりとも動かすことなく、本当に最低、と呟いただけだった。

その矛先が雄介君に向けられたのだと最初は思ったが、私は、と言下に添えたので、自身を咎める言葉のだとすぐに分かった。

それ以来、黙々と暗い森の中、不機嫌そうに肩をいからせ雄介君は道なき道を歩いている。

告白の後、僕は間に入って二人を宥めに入るべきだった。

しかし、はなっからそんな成熟した大人の真似など、経験不足な僕には到底成しえないと考え尻込みしていた。

本当なら自殺に至った理由を、それとなく聞いて、理子さんを慰めるなどしたり、傲慢にさえ聞こえる雄介君の発言を諷めるような言葉を挟んで、両者の雰囲気や和らげる事をすべきなのに……

トライアングルの一点を担う僕は、ひたすら無力で無能で空気だった。

「わ、なんだこいつは!？」

運がいいのか悪いのかは今となっては分からない。

しかし、当等、僕たちは魔物と出くわしてしまった。

「わわ」

僕はその異形を見るなり、思わず二歩三歩と後退る。

そして、理子さんの気配を真後ろに感じて、そのまま理子さんと背後の木にまで避難した。

前方で一人、勇ましく大剣を構える雄介君。

本当なら彼の横に並んで、矢をつがえて矢尻の照準を化け物に合わせるのが僕の使命だ。

なのに、本能が完全に立ち向かう事を捨ててしまっていた。

透き通るような体とは、この化け物達に相応しい表現だと思う。

昔、プレデターって映画あったけど、あれに出てくるエイリアンに似ているかもしれない。

形状は各々違っているが、透明の体躯の向こうにある濃緑の木々が透けて滲んで見える。

理子さんを背後に隠して、安全圏と思える場所から僕は怯えながらも彼等から目を離せない。

「気色悪いいいい、こっちくんない！」

程なく、剣を胸元で振り立てながら、雄介君も僕たちがいる場所まで気圧され辿りつく。

化け物いや、魔物たちはゆっくりとした動きで、森の木々の間を縫って移動していた。

時々、透明の体が青や赤、紫と薄い光を放っている。

「こいつら、襲ってこないな」

「うん、まるで僕たちに気づいていないような、気にもとめてないような」

彼等は既に僕たちの周りにうじゃうじゃひしめきあっていた。

しかし、不思議なことに、彼等が僕たちに危害を加えるような気配は窺えなかった。

「うわ、足が！」

「踏み潰される」

宙を弧を描いて、大きな細長い足が僕たちに迫ってくる。

木の幹に背中を押し付けるようにして僕は避けようとした。

「あれ？」

しかし、間近まで迫った薄っすら輪郭が白く光る大きな足は、頭上で向きを変える。

まるで僕たちを避けるように一拍間を開けて、違う場所を踏みしめていった。

「綺麗……」

闇に浮かぶ彼等の体に明滅する光は、神秘的でさえあり僕たちはすっかり恍惚と目を奪われてしまっていた。



## 変化。

暗く長いトンネルにも必ず出口があるように、深い森にもそれはあつた。

視界が次第に光度を増していくにつれ、僕たちの疲れ果てた顔にも明るみが戻ってくる。

「おお、森を出たぞ」

「眩しい……」

暗い森の中から日の光のわだかまる場所へ。

僕たちは手を翳し目を細めて辺りを見回した。

薄緑の草原が広がっている。

これまで行方知らずだった太陽も、頭上で燦然と輝き自己主張をしていた。

「地図を確かめよう」

雄介君は街を出るとき兵士に渡されたこの世界の地図を野原に広げた。

「ここから北東に歩けば村があるね」

「ほんとだ……」

理子さんは心なしか嬉しそうに見える。

あの暗く湿った森の中で歩き詰めだった。

宿を出るときには、さらさらと光沢のあつた背中に流れる黒髪も、今は、べっとりとしり気を含み、鬢や額にも髪が張り付いている。

「飯食つて体洗いたいな」

皆同じ気持ちだった。

ただ、村があると言つても、ここは見知らぬ土地。

不安がないと言えば嘘になる。

僕たちを快く迎えてくれるかどうかも分からない。

どんな人間が住んでいるかも全く想像がつかない。

「行こうぜ！」

だけど、雄介君は迷いのない笑顔で定めた方向へもう足を踏み出している。

その雄介君を追い越し先に駆けていく理子さん。

「鈍亀〜！」

振り返って後ろを歩く僕たちに、悪戯っぽく声を投げかける。

「のやる〜！　すぐに追いついてやらあ！」

「待ってよ〜！」

暗く長い森での苦渋の道のりを共にした時間は決して無駄ではなかった。

僕たちの間で何かが変わりつつあった。

村。

青々とした草原を少し歩くと、川のせせらぎが僕たちの耳に届いた。

木組みの短い橋の下には、澄んだ水を湛える小川が流れている。透明の冷たそうな水面は、降り注ぐ陽射しを受けて、幾重の白光の筋を抱いていた。

「あれ、なんだろう？」

橋を渡つてすぐ、木の柵のようなものが遠くに見えて僕は指差した。

「たぶん、村だ、そうや、それ以外ない！」

雄介君はそう言うなり、いきなりダツシュした。

「ええ！ ちょっと！」

僕は気後れしたが、雄介君の言葉を耳にして内なる高揚感は隠せない。

しかし、走るほどのスタミナは残されていない。

「まあいいか」

村であるかどうかの見分は雄介君に委ねて、結局、ゆっくり歩を進めることにした。

万が一、全力疾走したあげく、村ではなく廃墟かなにかであったら、僕は立ち直れそうにないので。

「元気だね……」

理子さんも森を出たときは、いつになくテンション高めだったけど、派手に跳ね回った分、今その反動が来ていて、亀の歩みでそう眩くのがやっとだった。

木の柵沿いに進んでいくと、建物らしき影がその奥にいくつか認められた。

柵が途切れた場所を見つけて、そこから中に入っていく。

「いやっほおお！」

離れた場所から雄介君の歓喜の雄たけびが風に乗って聞こえてくる。

よっぽど嬉しかったんだろう。

彼の影は僕の視界の中で、黒いボールほどの大きさになっていた。それを見て焦りを覚え、足を弾ませたところで、最後尾の理子さんを思い出す。

背後を振り返ると、まだ亀の歩みは継続中だった。

緩やかな傾斜の下方にその姿がある。

「理子さん！ 早く！」

それでも雄介君を一人だけにしているのも心配だ。

立ち止まって、僕は軽微な思考に耽り、程なくある決意を心に打ち立てた。

ゆるやかな丘を下って理子さんに駆け寄る。

「あ、あのさ」

「どうしたの？」

理子さんがきょとんとした顔で僕を見た。

顔がかーつと火照ってくる。

熱い血潮が体中を乱暴に巡って、体温を上げているのが分かる。

だけど、もう躊躇している場合ではない。

さっと彼女に背中を向けてしゃがむと、

「僕の背でよければ、どうぞ！」

言っちゃった。

普通やらないよなあ、こんなこと。

今時、おんぶとか。

例えカップルであっても、恥ずかしいに違いない。

そう思いながらも、それほど大きくない僕の背中では、理子さんの柔らかな体の重みを期待して止まない。だけど、沈黙が長引き始めて、

「う、ごめ」

僕は忸怩たる思いに駆られて腰を浮かそうとした。

「よいしょっと！」

だが、つと掛け声とともに覆いかぶさってきた重みで、浮き上がろうとした腰が再びかくんと沈み込んで僕は慌てた。

「有難う……遠慮なく。さあ、行きましょ、一人だと彼何しでかすか分からないし」

理子さんは淡々と、いつもと変わらない調子で言った。

特に照れた様子もその声色からは感じられない。

「え、あ、うん……」

彼女が平然としている分、僕は余計に照れくさくかんじて口ごもる。

「よいしょっと」

理子さんに気の利いた一言も返せないまま、爺臭い掛け声と共に立ち上がった。

首筋辺りに理子さんの柔らかい息遣いを感じて、鼓動まで高鳴ってくる。

胸の前で回される彼女のしなやかな腕。

背に感じる柔らかい彼女の……

だけど、そんな甘美な感覚もいつしか遠のいていく。

元々体力がないので、歩き始めた時にはそんな色香を感じる余裕はなかった。

歯を食いしばり覚束ない足取りで、ただ、理子さんを落とすまいと必死に歩を進めていた。

村が間近に見える範囲までやってくると、僕はもうよれよれになっていた。

「下りるね」

「あ、うん」

身軽になった僕は、今にも倒れこみたかったが、男としての見栄

がそれを潔しとしなかった。

震える足でなんとか体を支えて、背筋を伸ばし理子さんに辛うじて微笑む。

「いないねー」

「どこ行っちゃったんだろうね」

村の建物が軒を連ねている。

木板の壁と三角屋根、その造りはきわめて純和風。

僕たちを奇異の眼差しで見つめる幾人かの村人達の服装も、綿シヤツにズボンみたいな、日本にいても見かけそうな、ありふれた服装だった。

「あなたたち」

一人の禿頭の白い髭を生やした老人が笑顔で声を掛けてくる。

「腕輪しとるか？」

そう尋ねられて、理子さんと顔を見合わせる。

腕輪と聞いて思い出すものはアレしかなかった。

老人の目の前で袖を捲って見せた。

理子さんは怪訝な顔で眉間に皺を寄せていたが、やはり同じように袖をめくって腕輪を突き出す。

「やはりそうか、君たち三人はつい最近、こちらへ召還されたんじゃないな」

「ええ」

僕が頷くと、周りを取り巻く空気が一変した。

先ほどまでの警戒するような目つきは村人達から消え、一様に愛想の良い笑顔を浮かべている。

「無事全員、ここにたどり着いたか、これは朗報じゃ、わしはこの村の長老、秋の夜長じゃ、歓迎するぞ、さあ、君たちのお仲間が既に歓待の席についている、こっちへいらっしやい」

僕達は呆然としながらも、相手に敵意ではなく歓迎の意を認めて、ほっと胸を撫で下ろした。

老人に誘われて村の中心へと歩いていった。



ぼつた。(前書き)

空いた時、ひょいっと書くには、世界観があまりに縛りが多くて、最初の設定がごり押し過ぎて、辛いと判断しました。

また別の書きます。

最初だけ、ややこしくならないようしなくては。

さらさらと執筆できないと意味がない。

この作品はそういう場所なんです。

ご了承ください。



ぼつった。

村人達は優しかった。

僕達を豪華な食事でもてなしてくれた。

日にちが経つにつれて、

親密な関係になっていった。

ある日、この村の住民になるように進められた。

家を村の大工が作ってくれた。

そして、僕達はここで永住する事に決めた。

腕輪の呪いは嘘だったようだ。

あれはこの村へ誘うための嘘。

ここへ連れてきて村人として住まわせるのが目的だった。

この世界の人間比率を高めたい。

それが彼等の狙いだった。

化物たちをいつかこの大陸から追い払うために、

人間を増やして領土を広げようともくろんでいたのだ。

僕達は元の世界に最初は帰ろうとも考えていた。

しかし、良く考えてみると、今こうして3人でいられるのも、

あの召還のおかげだ。

召還されることがなければ、理子さんは死んでいた。

そう考えると、この理不尽に見える拉致も、それほど悪いものではない。

まあ、僕達は幸せです。

さてこの話は終わり。  
携帯で世界を削除する。  
つまらなかった。  
次はもう少しましなのを。

俺が！

新しい趣向を試みたが失敗に終わった。

やっぱり、ここは俺の妄想世界だけあって、

俺が主人公でないと、どうも時空の流れが歪になってしまう。

他人任せではうまくいかない世界なんだ。

そういうことで、今日からまた俺が好きに旅をする。

## 悪行

「中世ヨーロッパみたいな世界観で魔法と剣の世界をこの世界に反映」

「俺は変身能力を持つ」

以上。

妙な捻くれた世界観は縛りを生むことになる。

単純でいいんだ。

一見くだらない二つの条件だけど、これだけ整えば、それなりに俺が楽しめる世界となるわけだ。

俺が楽しめないとこの世界は意味がない。

そついう事で俺は今、犬になって緑豊かな平原を歩いている。

白く毛が生えそろった手を見るに、真つ白な犬だ。

たぶん、子犬だ。

そつイメージして変身したから間違いない。

道端で婦女子に見つかれば、傍に寄ってきて優しく撫でられる弱い存在だ。

「ワンワン！」

青空を仰いで吠えてみた。

平原の先が小高く盛り上がってる。

俺はそこへ向かってひた走った。

その先は傾斜があつて、下方の掘っ立て小屋に続いている。

誰か住んでるんだろうか？

俺はゆっくり歩を進めて、小屋の手前までやってきた。

入口と思しき木の扉は少し開いている。

が、扉は結構重そうな扉だ、押して空けれそうにない。

頭で俺は像を思い浮かべる。

蠅だ。

頭に蠅になる事を意識してすぐに、蠅に姿を変えた。

隙間から中に入る。

室内を見回した。

木の匂いが部屋を満たしている。

大きな窓が一つ、木でできた丸テーブルが一つ。

使い込んだ竈が一つ、かまどから伸びた外へ通じる煙突一つ。

端っこのベッドにじいさん一人。

白髪の老人だ。

鼻を搔いて横になっている。

年寄りの割りには、恰幅が良く、手足の筋肉は引き締まっている。

太い鼻梁、太い眉毛、いかつい頬骨。

年嵩だけど、何か強そうだ。

ぼーっと宙に浮かんで、甲高い羽音を上げているのにも倦んできた。

ここは一つ火付けを試みよう。

多少心は痛むけど、道徳的な流れの物語にも飽きてきた。

なあと、死にそうになったら助け出すさ。

## 観察。

壁は木材を使っている。

ライターで炙れば火付けできるだろうか。

元の人間の姿に戻った俺は、蹲って外の壁にライターの火を近づけた。

が、火が燃え移らない。

「やめた……」

俺はため息をついて、ライターを懐にしまう。

内心ほつとしていた。

火付けしようと考えたものの、やはり、俺はそこまで悪党ではなかったのだ。

いや、犯罪者になり切れない男だった。

「さてと……」

俺は立ち上がって、視線を左側に逸らしたところで、戦慄を覚える。

「なにしとんじゃ？」

お爺さんが半分開いた扉から、頭だけ出し鋭い眼光をこちらに向けていたのだ。

犯行は未遂ではあったが、その現場を家主に目撃されてしまった。

ヤルか？

逃げるか？

選択肢は少なかった。

変身はできるが、目の前でそれをするのは避けたい。

スーパーマンだって（古）、ルパンだって、姿を変える瞬間は他人には見せない。

俺も顔が割れているので、能力は知られなくなかった。

その場は逃げることにした。

老人の視界を切ることは容易だった。

建物の外郭の角で折れて、老人の視界を遮って蜂に変身。

これでもう俺の追跡は不可能だった。

まあ、変身後、老人は追ってこなかったわけだけど。

どうやら、そのまま扉を閉めたらしかった。

「アイツは一体……」

それでも、ライターの火を見てしまったては、扉を閉めて鍵をかけたも安心はできない。

数分経って恐る恐る、出てきた老人は家の周りをうろろして俺の姿を探っていた。

当然の成り行きだ。俺はそれを読んでいたので、開いた扉からなんとなく中に忍び込めた。

「何者なんじゃ……」

窓の外を眺めてさつきからぶつぶつ言っている。

辺りは暗くなっていた。

窓の外は黒一色、真の闇が外にある。

大きな体の両肩をいからせ、皺だらけの右手にはベッドに立てかけた斧の柄が握られている。

まだ警戒しているようだ。

何か悪いことしてしまったな。

俺は何にでも変身できる。

変身した相手の特性は付与されるが、本来の人間の五感は失われることはない。

現在、蛾に変身して壁に張り付いてはいるが、老人の姿は視界の下方にカラーで映りこんでいた。

「いつまでそうしてるつもりじゃ？」

不意に爺さんが独りごちた。

俺はそれを聞いても泰然としていた。

大きな羽を少し揺らして燐粉を宙に振りまくに留める。

独り言が多いのは老人の特性だ。

記憶の海で、見知った者と話をしているんだろう。そう高を括っていた。

「この家に居るのは分かっている、さっきの少年じゃろ？」

だが、この発言は聞き流せなかった。

一瞬の焦りが、バランスを失わせる。

足が壁から離れたのに気づいて、羽を二三回動かすが遅かった。ベッドと壁の間にぼとりと落ちてしまう。

体が軽いのと、羽の浮力で大して痛みはなかったが、音を立ててしまった。

俺は細い足を操りすぐに方向転換をして、床の下から様子を窺った。

ベッドの上から伸びる黒い長靴は床に固定されたままだ。

どうやら気づかれていないようだ。

この爺さん、どうやったかは知らないが、俺の気配に勘付いている。

俺がこの家に潜んでいる事を知っている！

「どこだ！？」

その証拠に今も見えない相手に声を張り上げ続けている。

なぜ分かったんだ？

超能力か？ 魔法か？

たぶん、後者だな……剣と魔法の世界と最初に設定したから。

「臆病者！」

だが、正確な位置までは把握していない。

それは今俺が床にいるのに、見当はずれの場所へ声を散らしているの分かる。

お爺さんの声の調子は不安げで上ずっている。

見えない相手に怯えているようだ。

胸は痛むが、姿を現してやるわけにもいかない。



相手は斧を持っているんだ。  
しばらく床の下から、老人の出方を待つ事にした。

爺さん。

「いや、たまたまこの近く通ってたなら、この家みつけてました」

「それで、火付けをワシに見られた。その上、ずーずーしくも透明化の魔法で屋内に忍び込んだわけじゃな」

「ええ、火付けは出来心というかやる気はなかったんです。魔がさしたと言いますか。で、この辺り不案内なもので、夜も暗いので一晩の宿を借りようかなあって」

「本当虫のいい話だ。正直言つて、こうして普通に話してもらえてる自体不思議にさえ思える。」

「姿を現すきになったのは、爺さんが何もしないと云った事と、斧を長持ちにしまったのを見て多少身の危険が薄らいだおかげだった。」

「なんで俺がこの家にいる事を？」

「サーチストーンを知らんわけではあるまい」

「知らん」

「あ？ お前この辺りに来たの初めてか？」

「そうなんですよ」

「俺はとぼけた調子で受け答えしていた。」

「こげ茶色の毛がふさふさと生える上衣の袷に突然、手を突っ込んだ爺さん。」

「その瞬間、体を硬直させて俺は半歩後退る。」

「気さくに話してはいるが、爺さんの所作に最大限の注意を払っていた。」

「懐から出てきたのは、青っぱい色の綺麗な石だった。」

「大きな皺だらけの手の上で青い石を転がしている。」

「光沢のある表面は明かりを反射して鈍い光を放っていた。」

「これはな、自らの魔力をこめると、半径10Mの円状の中に潜む生物を持ち主にイメージとして脳に伝えるのじゃ。正確な位置までは分からないがな。不審者の位置を探ろうとわしはこの家でサー

チストーンに魔力をこめた。そしてお前がこの家の中にいることが分かったのじゃ、このサーチストーンはインビジブルの魔法を使って隠れているものさえも映像として感知できるんでな」

「ほお、どのように見えるんで？」

「まあ、人間なら青い炎のような人間の輪郭が映る、虫なら塵のよう……」

「うーむ、中々便利な代物のようだ。」

しかし、魔力といわれてもピンとこない。

「インビジブルってなんなの？」

「お前が使ってた透明化する魔法じゃ！」

つまり、爺さんは俺がその魔法を使って忍び込んだと思っているわけか。

何かおかしい。それなら

俺は一抹の違和感を覚えて思案し始めたが、

「まあ、こうしてワシの最期にお前と出会えたのも何かの縁じゃ」  
その思考はすぐに分断される。

爺さんが最期とか物騒な事を言い出したからだ。

だが、それについて掘り下げつもりもなかった。

俺はこの爺さんと会ったばかりだし、面倒な事に関わりたくはない。

「ところで、あんたこんな寂しい森でなんで一人で住んでるんだ？」

「……………」

爺さんは俯いて口を閉ざした。

眉間の皺の本数を増やして瞑目している。

何か悪い事聞いてしまったかな……

窓は風に叩かれ、静寂の中に一定のリズムで音を刻んでいた。

爺さんはそのうち顔を上げると、ため息をついて俺を見た。

「最期は……一人前のめりで死にたかつたんじゃ……」

死ぬとか、何か強引に陰気な方向へ……

俺は当惑して黙るしかなかった。

「お前名をなんとという？」

「え？ 拓ってさっき言っただろ」

「本名じゃないじゃろ」

「いや、そのまんまだ」

この大陸では拓という名前は珍しいようだ。

「まあ、いい、拓か。拓よ、最期に握手だけしてもらえんかな」

「最期最期ってさつきから……あんた元気そうじゃん」

爺さんは体つきいいし、肌の色も一見、健康そうな色をしている。

「握手を頼めないか……」

白く太い眉毛の下の奥まった瞳は、哀願の色を湛えて微かに震えていた。

差し出された皺が刻まれた大きな手の平。

元気そうに見えるんだがな……

何か企んでいるのかな。

疑心が定期的に湧いてくるものの、まあ、握手くらいならと、

「分かった」

俺は恐る恐る自らの手をその上に被せた。

ぐっと強い力で締め付けられるが、痛いというほどでもない。

寧ろ、思ったより手は柔らかく温かい。

が、その感覚は長くは続かなかった

「な!？」

見る間に、伝わる全ての感覚が頼りなくなっていく。

手の温もりはひんやりと冷たく。

俺の手を握る力は潮が引くように失われていく。

爺さんの顔色は気がつく、酷く青褪めたものに変わっていた。

その変貌に驚き、俺は思わず爺さんの手を離してしまった。

## 悪魔。

「私はザラと言います」

「……………」

俺は言葉を喉から押し出す事がまだできない。

生え際を直角に切りそろえた伊勢えびみたいな髭が印象的な紳士然としたザラ。

彼が俺を助けてくれなかったら今頃俺は……

本当怖かった。

今思い出しても寒気が体中を駆け巡る。

「ジャミルをずっと張ってたんだよ」

あのお爺さんはジャミルという名らしい。

ジャミルはあの小屋ですっと誰かが尋ねてくるのを舌なめずりして待っていたらしい。

やってきた人間を丸め込んで、ルシフという邪悪な存在に変えるために。

「しかし、君が出てくるとは嬉しい……………いや、誤算だった」

「……………」

最初に俺が覚えた違和感は正しかった。

あのジャミル爺さんが使ったサーチストーンは確かに人間の存在を察知していた。

しかし、察知していたのはインビブルで隠れていたザラだったのだ。

俺の変身能力は俺個人のものであって、この世界の魔法とは一線を画するもの。

サーチストーンだろうが、何だろうが俺の正体を見抜けるものな  
どこの世界には存在しない。

「もう少し早く助ければ良かったんだが、相手は一筋縄ではいかない、君には悪いと思っただが、奴が術を行使した際の無防備状態になるまで待たせてもらった」

ジャミルと握手をした時、俺の頭の中に何かが入り込んできた。

奴は陰惨で、凄絶な思念を滔滔と映像として送り、俺の頭を猛烈な勢いで攪拌した。入り込んできた湛えがたいイマージュと苦痛。頭の芯が猛烈に痛くなって、俺は正気が保てないほど錯乱状態にあった。焦点の合わない視界にジャミルの青白い顔が見えて、何かを唱えているらしかったが、俺は全く身じろぎ一つできないでいた。

「君の足元に魔方陣が現れた時、その時こそが奴が術に捉われ無防備になる瞬間だった。しかしタイミングをしくじれば、君は奴の僕ルシフに代わってしまっていた。すまない、危ない目にあわせて本当、申し訳ないと思っている」

シルクハットの帽子を脱いで、右手に持ち頭を下げて詫びを入れるザラ。

頭の頂は少し髪が薄い。紫色の金の刺繍のある上着に、黒く長い革靴、鮮やかな赤い宝石がしなやかな指を上品に飾り立てている。

「き、気にし……ないで」

やっとの事で俺は言葉を口にした。

ようやく、シヨック状態から開放され、舌が本来の動きを思い出しつつあった。

「名前聞いていいかな……？」

俺の呂律が回らない事を察して躊躇い気味にザラは言った。

「た、拓です」

名乗ると、くしゃっと相好を崩して白い歯を口元に覗かせた。

## 異端魔術。

「俺はエミル魔術協会のものだ」

ザラはエミル魔術協会の一支部に所属する魔術師らしい。

エミル魔術とはこの世界でもっともポピュラーな魔術であり、人々の信仰を集める宗教のようなものだ。そんな世界にここ最近、ゾルジ魔術結社と呼ばれる怪しい魔術が勢力を増しつつあった。

「君も知っていようが、ゾルジは危険な魔術だ、ジャミルは君をルシフ（生なき犯罪者）に魔術で変えて、僕として操り、悪行の道具として使おうとした。全くもってけしからん」

ゾルジ魔術には他者を犠牲にする残虐な魔術が目立った。

それを看過できないとエミル魔術協会はさっそく異端審議会を開いた。

ゾルジ魔術がいかに禍々しいものであるかを強調し、術の中で他者を貶める術の多さを指摘し、危険であるとしてお歴々に訴え、敢え無く、ゾルジ魔術は異端魔術として認定されたのだ。

今ではゾルジのメンバーはエミル魔術協会から異端排斥を大義名分として派遣された魔術師によって追われる身である。捕まれば直ちに処刑される身の上らしい。

「異端魔術ゾルジはエミル魔術協会の魔術師にとって、もっとも、憎むべき敵だ。奴等をこの地上から消し去るべく私は派遣され、彼等の情報を集めていた、そして運よくこの辺りに潜伏しているとの情報を得て、あの小屋を探り当てた。しかし、ゾルジ、特にあのジヤミルは危険な相手だ。ゾルジ魔術師の中でも上級魔術師の部類に入る。私は駆け出しというわけでもないのだが、上級魔術師を相手できるほどの力量はまだ備わっていない。ここについて、離れた場所から奴の様子を探るしかなかった」

「サーチストーンがありますしね」

「そつだ……あれで探られてはまずいのだ、決して怖いから遠くか

ら見ていたわけではない」

俺の発言に小刻みに頷きを繰り返して、そうだと自分に確認を取るように一人呟いている。

この人案外素直な人かもしれない。腹芸ができないタイプだな。

「だが、俺も痺れをきらしていてな。あの日は夜からアイツの家に忍び込んでいた。インビジブルの魔法で身を隠して、奴をやる機会を窺っていた。だが、サーチストーンを使われてはばれる、インビジブルの魔法もずつとは続かない。俺は切羽詰っていた。背後をみせようものなら……」

「いきなり刺すつもりだったんですね……」

この人慎重なんだか、無鉄砲なんだか。

「そうだ、だが、君のおかげでうまくいった。ジャミルを始末できたのは幸運だった。フッフ」

ザラは堀の深い顔立ちを喜悦に歪めていた。

焚き火を囲んでの深夜の森での宴の場。

俺は命の恩人を前に、倒木に腰を下ろして炎の揺らめきに見入っていた。

「よし、良く焼けたぞ、おいに食べたまえ」

イモリみたいな小動物を枝で串刺しにしたもの、笑顔で差し出してくる。

「あ、有難う」

無碍にいらねっと断るわけにもいかず、震える手で受け取った。



だるい。

「よし、行くうか、ジャミル」

俺を救った白い光は、エミル魔術の封じ込め呪文だった。

虚を衝かれ青い石に一瞬で閉じ込められたジャミル。

ザラの手の中に収まる青い石にその陰気で不平を湛える顔が薄っすら浮かんでいる。

「さようなら、ザラさん」

「拓君も一緒に来ないのか？」

俺はこのおっさんについて行きたくなかった。

この辺りは村や町はないそうなので、ザラは幾分心配そうに俺を見つめている。

「いえ、一人でなんとかあります」

「辺鄙な場所だ、何がいるか分からないぞ？」

「大丈夫です、俺これでも強いですから」

断固拒否。少し意固地になっている。

ここまで頑なにに断る理由は単純。

面倒な輩と係わり合いになりたくない、ただそれだけだ。

「分かった、じゃまた会おう！」

お断りだ。

ザラは前方にできた波紋のような形の空間の歪みに飛び込んでいった。

森を抜けると、少し開けた場所にでた。

真っ直ぐそのまま歩いていく。

どこまでも続く草原……かと思いきや、

小高く盛り上がった先には、踏みしめる大地がなかった。

目が眩むような深い谷底。

切れ間に立って、下を覗き込んでいると、吸い込まれそうになる。背筋に薄ら寒いものが走って後退った。

谷底に鳥になって下りていくことにした。

時折、吹き抜ける強風に俺の白い体は左右に揺らぐ。

だが、その辺は鳥。

うまく風の流れに乗って、時々旋回しながらもバランスを保ち、底へと着実に降下していく。

底にたどり着くと、人間の姿が変わった。

湿った空気が辺りを満たしている。

見渡すと、背丈を越える岩が、あちこちに点在している。

岩壁に挟まれた狭い谷底の道には薄っすら白い靄がかかっていた。不気味な場所だ。

ザラがいうには、この辺りはあまり人の出入りがない未開の土地らしい。

そんな場所の谷底へ俺は自ら身を投じた。

無謀とも言えるが、俺は平坦な道にはもう飽き飽きしていた。

少し変わった場所を探索してみたかったんだ。

大きな岩の間を走る隘路を縫うように歩いていく。

靄とも霧ともつかない白い膜がほんの少し先の視界をも臙にしていた。

今は俺は狼に変身している。

何がいるか分からない場所で、人間の動きでは突発的な奇襲に対処できない。

俊敏性の高い狼、この悪路を進むにはうってつけの動物だ。

「ん？」

靄の中で何かの気配を目で捉えた。

ちらつとだが、何か岩陰の向こうで動いたのだ。

「うわ」

岩陰の向こうに耳を向けて音を探っている間に、背中に何か小さな物が覆いかぶさってくる。

狼の警戒網を潜って、避ける暇を与えず接触してくるなんて。

俺は動転して、体を揺さぶって背に纏いつくものを振り落とそうとした。

その時だった。

「……………」

耳元で低い声で紡がれる謎の言葉。

どこかで聞いた事のある…………

「あ!？」

瞬時に思い当たって、この状況が最悪である事を悟る。

首筋をちりちりと焦がす焦燥に突き動かされ、闇雲に走ろうとした。

が、既に体の自由がきかなかった。

神経系統が所々寸断され、脳からの命令が手足に伝わらない。  
もう一瞬の躊躇も許されなかった。

あのイメージが流れ込む前に

俺は咄嗟に目を固く閉じ、頭の中で熊をイメージした。

「な!？」

背中にへばりつく相手に動揺の気配。

と、同時に、体を束縛していた見えない力から解き放たれる。

チャンスだ。

俺は前足と後ろ足を交互に繰り出し、猛烈な勢いでその場から離脱した。

後ろからさっきのアイツが追ってきているのが分かる。

この隘路と視界でも途切れる事のない小さな足音。

相手はこの場所を良く熟知している者に違いない。

見る間にその距離は縮まっていく。

もう、すぐ後ろまで足音は迫っていた。

さっき熊に変身したのは失敗だった。

図体がでかいということは、相手は的を失いにくいのだ。

それに気づいて、岩を飛び越えた瞬間、蚊に変身して事なきを得た。

「どこいつちゃんたんだろ」

独り言を囁きながら、霧の中で素早く辺りを行き来している小さな影。

その凶悪な追っ手の正体は、年端もゆかぬ少女だった。

たぶたぶの深緋色のつなぎ服を纏い、腰の辺りを赤い帯で閉めている。

肩までの光沢のある黒髪に、大きなぱっちりとした瞳、抜けるような白い肌。

その小柄な体はまるで忍者の如く、霧に消えたかと思えば、大岩

の上突つ立っていたりと、身軽に辺りを飛び回っていた。

さて、どうしたものか。

相手は子供とは言え、その動きは常軌を逸している。

見かけにそぐわぬ身体能力は驚嘆に値する。

そして、彼女が俺に仕掛けようとした術は、明らかにゾルジ魔術だった。

遠のきかけた意識の中で耳にした、忌まわしい呪文は脳裏に焼きついていた。

このままの姿でここを立ち去ることはできよう。

だが、何故かそうすることを勿体無く感じてその場に留まり続けていた。

こんな辺鄙な場所でゾルジ魔術を使う少女と遭遇した。

危険ではあるがこの稀有な状況はそうあることではない。

俺は二度も背筋の凍るような思いをした。

普通ならゾルジ魔術の使い手と出くわしたくないと思うのが道理だ。

だが、俺の感性は狂っていた。

ゾルジ魔術になぜか興味を惹かれていたのだ。

あの少女になんとか取り入って、色々話を聞けないものだろうか。恐怖に慄きながらも一方で、接触する機会を望んでいた。

だが、並の動物に変身しても、相手に捕まればまたさっきのような目に合う。

かといって、人間の姿で彼女の前に現れても果たして話を聞いて貰えるだろうか。

相手の立場を考えると、見ず知らずの人間への対応は自ずと推測できる。

俺は彼女がいた場所から少し離れた。

そこで人間の姿に戻る。

そして、おもむろに手の平を宙に掲げて、  
「変身図鑑！」  
と、口にした。

直後、手の平には赤い本が握られていた。

この本は俺が変身する対象を頭にイメージしやすいように、あらかじめ変身能力のオプションとしてつけたものだ。様々な動物や、植物、神話の化け物や、妖怪、悪魔、天使、など、多岐に渡る種族を各々、図と説明文を添えて載せてある図鑑だ。片手に収まる薄手の軽量の本ではあるが、魔法が付与されているため、そこに収録されているものは、裕に1万を超えている。実に都合のいいアイテムだ。

俺はページを捲りながら、あーでもないこーでもないと頭を悩ます。

何に変身すれば、彼女とうまく接触できるか考えていた。

小岩に座り込んで、図鑑に首っ引きになっていた。

ミミズ、蝙蝠、ぬらりひょん、象、鬼、様々な種族を眺めては、ため息を漏らし、また次の頁に移る。

これをしばらく繰り返し返していたが、ふと、ある生き物に目が釘付けになり頁を捲る手が止まった。

胸元で両拳をガツンとかち合わせる。

図鑑のある生物を視界に入れて、萎縮していた心が大きく膨れあがっていく。

「なめくさってからに、ガキめ！　こうなりや、力でねじ伏せてやる！」

心の内で哄笑しながら、すっと立ち上がって俺はさっきの場所へ戻ることにした。



ぼつた。

戻ると彼女はいなかった。

俺はそのままその谷を通り過ぎて、鳥になってその場を飛び去った。

で、この世界つまんないので、一旦消去することにした。

-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----

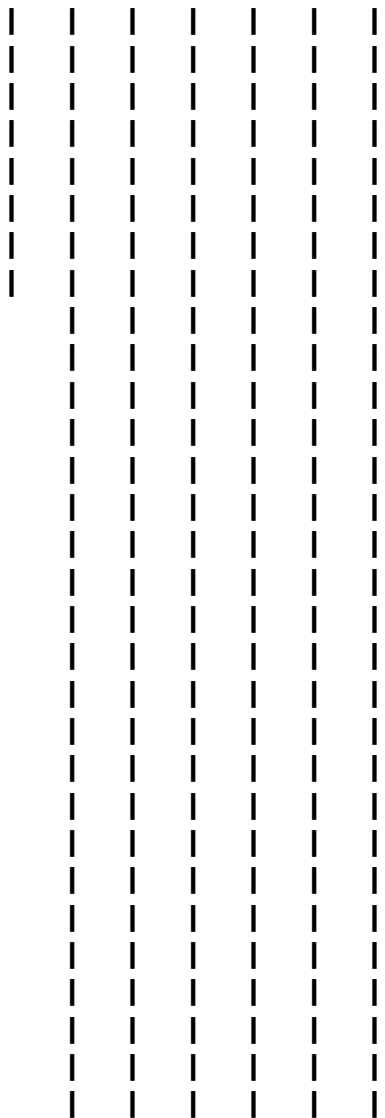


## 日本帰。

俺はこの世界にまた現実世界の日本を貼り付けた。  
結局、わけの分からぬ世界は俺の肌合わない。

以前はそうでもなかったが、この頃は飽きたというか。  
途中で倦怠感が大きくなって、世界ごとぶち壊したい衝動に駆られる。

やっぱり、日本はいいよ。



使いまわし。

「暑いなあ」

電車を降りると開口一番、弟の輝はこう漏らした。

同意見だ。

夏は暑いに決まっているが、この頃の熱気は筆舌に尽くしがたい。

「おい、ちゃんと歩けや」

「す、すみません」

駅の改札口を出て、日向の灼熱地獄へ踏み込むのに躊躇している矢先、ドスの聞いた声が後ろから飛んできた。すぐに謝るが、体格のいい白いシャツの男は舌打ちをして足早に去っていった。

「こ、こええ」

輝は背を仰け反らせ、気後れ気味に言った。

「気が短いよな」

みんなこの暑さで機嫌が悪いに違いない。

以前、面倒になって、この世界を凍結させた。

完全に消さなかったのは、輝や雪乃の消滅を防ぐためだった。

当然、凍結を解除したので、あの日の世界がここに蘇ったのだ。

前田探偵事務所の所長は釈放された。

相手と和解したからだ。

詐欺の容疑 詳しくは話してもらっていない。

まあ、雇い主が復活したのなら、俺のバイトは続行だ。

「久しぶりにやってきたな」

「頑張ろう」



**仕事再開。  
(前書き)**

25話から50話の続きになります。

## 仕事再開。

「今日は君たちには、あるアパートに行ってもらいたい」  
「へ？」

前田は微笑みながら、オールバックの黒髪を後ろに撫で付ける。  
「この写真のアパートなんだが、依頼主がこの大家さんなんだ。で、単刀直入に言うと、このアパートに幽霊が住み着いて困っているらしい。お祓いやら、拝みやに頼んだらしいが、効果なし。そこでうちにお鉢が回ってきたわけだ」

「なんでここへ？」

「探偵という仕事は幅広い。浮気調査、飼い猫、失踪人の探索、まあ、色々あるわけだが。うちは前も行ったように心霊関係の仕事も扱っていききたいと思っている。君たちが来るまでは人材がいなくて滞っていたがね」

言いながら、差し向かいに座る前田は、白い紙を渡してきた。

浮気調査、飼い猫、失踪人の探索、e t c……と太字で印刷されている。

どうやら、事務所の宣伝チラシのようだ。

ずらーっと仕事別に細かい説明が書かれていて、その横に大体の諸費用が載せてある。

俺達が肩を寄せ合って、目を通していると、

「その下の方をみてごらん」

「はい」

「あ!？」 確かに

NEW 霊によるトラブルもお気楽にご相談ください。

一番下の欄だが、赤い文字で一際大きく書かれていた。

「はは、今まではスタッフが足りなくて、載せなかったんだけどね、君たちがいるから安心さ」

俺は戸惑いながら、上目遣いで所長を見る。

迷いのない笑顔を俺達に振りまいていた。

な、なんかすごい期待されている。

ヤバイ、まさか、俺達任せなのか？

俺は不安になって、喉をぐくりと鳴らして所長に切り出した。

「も、もしですよ、俺達がすぐやめたり、これなくなったりしたらどうするつもりなんですか？」

期待を裏切るような発言だが、仕事は仕事。

最初にあらゆる質問をぶつけて不安要素は払拭せねば。

「うーん、その時は、真琴がいるからなんとかなるだろう、心配いらないよ」

特に動揺した様子もない。

その話しぶりから、絶対の自信が窺える。

考えなしと言いつ訳でもなさそうだ。

しかし、この真琴への強い信頼はなんだろう。

彼女には、幽体離脱以外に何か特技でもあるんだろうか？

## アパート到着。(前書き)

あ、前の見直したらテリーって名前連発していますが、間違いです。テリー＝輝です。いつからか代わりました。発音が似てるからです。訂正は面倒なのでしません。主人公の弟輝だけで事足りると思います……

アパート到着。

シルバーのハイエースで見知らぬ住宅街に乗り入れ、問題のアパート前に到着。

運転手はもちろん所長だ。

あれから少しして真琴もやってきて、事務所を出発。時間にして1時間の道程だった。

「真琴、後は頼むよ」

「はい」

所長は窓から顔を出して、俺達3人を笑顔で送り出した。

そして、エンジンを再びかけて、狭い通路をバックで出ていく。

方向転換を終えたハイエースが右折するのを俺達は手を振って見送った。

また昼頃迎えにきてくれる予定だ。

真琴はいつもと同じ、白いブラウスに黒っぽいタイトスカートという身なりだ。

ブラウスは夏用の薄手のもので、真琴の細身だが大きめの胸から、きゅっとしまった腰、細い足までの理想的な曲線美は今日も健在だ。

「真琴さあ、君も高校生だろ、何でその格好？」

俺達は綿パンに半袖、キャップと、ラフな格好だ。

兄弟して、お洒落というものに縁がない。

「私は一応あの事務所であなたたちを教育する立場だし、事務所の顔として、依頼主と会うのだからこの服装は当然よ。所長は接客の身だしなみには結構うるさいの」

所長のあの身なりのセンスを鑑みて、ふーん、なるほどとは俺は納得しにくいが、

「なるほどー！」



予想に反して、輝は妙に感心した風に頷いた。

「さてと、行きましようか」

磨耗したコンクリートの上に建つ2階建てアパート。

一階に3つの扉、2階にも同じ数。合計6部屋。

2階の廊下の全面は波板で覆われている。

一階部分の縁にあるこじんまりしたスペースに土が埋められてあり、

そこにある寂しげな植栽が殺風景な建物の脇にささやかな緑を添えていた。

「どうも、はじめまして、前田探偵事務所からやってきました三沢真琴と言います」

真琴は深々と大家に頭を下げて名刺を渡した。

「おお、こらまたべっぴんさんやな。こんな若い子が来るとはおもてなんだ」

丸い禿頭の頭の下に太い白髪の前、その下に蹲る奥まった黒い瞳。年の頃、70がらみの大家は、頬の辺りに穏やかな微笑を湛えている。

「そちらの少年達は？」

真琴の後ろでぼーっとしていた俺達に大家は気づいた。

「今回の除霊にあたるスタッフです」

「こ、こんな若い子達が……」

大家は微妙に表情を動かし、陰影を口元に拵える。

真琴の肩口から値踏みするかのような視線をこちらに投げってくる。

たぶん、俺達の顔貌を一目見て不安に思ったんだろう。

びりびり伝わってくる……こいつら大丈夫かよって。

その大家の変化に気づいた真琴が、慌てて口を開いた。

「あ、あああ！ 大家さん、し、心配しなくて大丈夫です！ こうみえても彼等はその道のプロフェッショナルです。陰陽師って聞いた事ありませんか？」

「平安時代の被い師じゃったかの？」

「そうです！ 彼等こそ平安の世から連綿と受け継がれた陰陽道を極めたスタッフなんです。幽霊相手なら、彼等からすれば赤子を捻るようなものです！ ご心配なさらなくてくださいね」

ちよつと、いきなりそんなプレッシャーきついよ！ まこっちちゃん！

中断。(前書き)

息抜きにプロットなしで不定期に何かを……

## 中断。

陰陽師の編は一旦話を中断することにした。

記録だけは残しておく。

家庭用ゲームと同じく、また気が向いたらそのセーブ地点から始めることにする。

それで、近いうちに別の世界を構築する。

とはいえ、何も考えていないが。

自由奔放をモットーにまたどこかの世界を彷徨うつもりだ。

荒野にて。(前書き)

脱力ふぁんたじー。

注意) 見るのは勝手だけど、何も期待してはいけない。

荒野にて。

俺の想像世界は、俺が携帯で何か世界を創造しない限り、そこは茫漠たる荒野である。

まずは、俺はオンラインゲームへログインするが如く、その中へ己の分身を投影することにした。

これまで何回もこの仮想空間を旅してきた。目的は現実世界では味わえない何か奇矯な体験をする事にあつた。だが、正直まだ取り立てて、記憶に残すほどの価値ある体験はできていない。

だが、もういいんだ。

いや、よくないけど、今日はそれには触れたくない。

今日ログインした目的は一つ。

現実世界で疲弊しきつてるので、ちょっと静養したくなつたんだ。

てことで、恒例の、荒野で一人砂山作りを始めよう。

俺は屈んで辺りの砂をかき集め、砂山を作ってみる。

目指すは富士山のような頂の高い、見栄えのする山　　なんて物は作らない。

ただ、無心で山らしきものを作っては踏み潰し、また作ってはを反復するだけだ。

三回で飽きてやめた。

手が砂まみれだし、鼻にも砂が入った。

ろくでもないな。

俺は仰向けに土の地面に寝転がり、ぬけるような青空をただぼー  
っと眺めていた。

### 63部を復元。

携帯は削除してしまえば、その世界は消えて二度と戻らないと思うかもしれないが、

実はこの携帯には復元ボタンがついている。

何故今になってこれを使って、あの世界を復元しようかと思ったのか。

それは、俺が疲れてしまっているからだ。

もったくたくなんだ。

俺は今、とても主人公として物語を紡ぐ気力はないんだ。

だから、彼等の世界を復元して、彼等のその後を覗いてみる。



## 歴史。

バンクス城下街を追いやられ、仕方なく森の中を超えこの村へやってきた。

そこで何故か歓待されて、その場で村長秋の夜長に驚くべき真実を告げられた。

件のバンクス城は元は、この世界にいた、バーグルという民族がすむ城だったということ。

バーグル族は、目的は分からないがこの地に日本を照準として、一年に一回召還の儀を執り行っていた。その時召還されるのは3人。この儀式は長い年月を通じて行われ続けた。

召還された日本人は、城の中で酷い扱いは受けなかったらしい。ここの世界の古い文献を調べる限りバーグル族は温厚な民族だったとか。

そんなバーグル族に打ち解けていく人間もいたが、そうでない人間もいた。

人間から見れば、相手の異形は驚嘆に値するものだ。

まさしく、宇宙人か、妖怪のような存在だった。

その民族と馴染めない、もしくは彼等を差別的な目でみるものは、城から離れて、同じ意見を共にする者を従えて、この大陸のあちこちに集落を構えていった。

そうしてできた集落では、独自の生業を確立し、村社会の中で規律や様々な組織が作られていった。

彼等の頂点に立つのは村長を筆頭に、外からの脅威に対抗する自警団、調達組と言われる、山野にいる

野生の動物を狩ったり、木々に自生するキノコや山菜などを調達する集団。

他にも色々あるそうだが、この村に住むものは食物や家を提供される見返りに、必ずどこかの組織に入ることが村の掟とされていた。

こうして集落が広がっていくと、人間達に領土意識ができていった。

自らと全く姿形の異なるバーグルを近しい場所に、しかも城に住まわせておくわけにはいかない。

人間達は徒党を組み、ある日、バンクス城に押し入り、温厚なバーグルは武装した彼等に抗う術を知らず、僻地へと追いやられていったらしい。

削除。(前書き)

この世界観は破綻してるので違うのになります。

削除。

ちょっと考えたんだけど、

この世界観は破綻しているというか、

ややこしいのでやっぱり使いまわしには不適當だ。

携帯で削除する。

そして、また別の世界を構築する。

人任せなのは変わらないけど、新たな世界と人間は俺が創造する。

ちょっと荒野で転がりながら、どんな世界創るか考えるわ。

## 類型。

異世界迷い込み、類型的ファンタジーを創造する。  
迷い混むのは男女。

よし、この世界観でゴーだ。

携帯で繁栄する。

始まりは迷い込んでからだ。

面倒なのでこの設定にした。

-----  
-----  
-----  
-----  
-----

## 一連托生。

「起きる……」

「んんん、朝？」

彼女は顔を手の甲でごしごし擦りながら言った。

この緊急事態に暢気な奴だ。

「ん……ここは……？」

どこか街の中にいるらしいが、判然としない。

表現しづらい町並みを敢て例えるなら異世界。

もしくはSFに出てくる別の星の居住空間とでもいうべきか。

「地球じゃないのは確かのようにだ」

「ええ、あなた誰？ 何言ってる……」

彼女はゆっくり半身を起こすと、眠そうな顔で辺りを見回した。

おき抜けの半分瞼で塞がった彼女の瞳は次第に驚きの光を強めて見開かれていく。

「え、なに、ちょっとここどこ……」

「俺が聞きたいところだ」

ここへ来る前の経緯を俺はすっかり覚えている。

俺は夜9時頃、外回りの営業を終えて会社へ戻ってきた。

報告書を書き終えて、タイムカードを押した後は、残っている面々にお愛想程度の言葉を交わした後、会社をでて駅に向かった。

外は道路沿いにある外灯やネオン、行き交う車の光に満ちていたが、

それでもこの時間帯はどこかうら寂しい雰囲気が始める。

シャッターを閉める音が聞こえてくるし、道沿いにあるビルのオ

フィスの光も、

まばらになってくる。

足早に同じようにして駅に向かう会社帰りの人々。

これからお酒を同僚とのみに行くといった風な開放感をかみ締めながら、大声で談笑する一団とも擦れ違うが、一人、疲労をため込んだ表情で、無心に自宅という安寧の地へ向かって飄然と歩を進める男女も認めることができる。その情景はなぜか、頭の中ではつきり残っていた。何故この日だけその見慣れた風景が鮮やかに記憶に映りこんできたのかは分からない。だが、今考えると、それは何か異変が起こる前の虫の知らせのようなものだったのかも。

俺は駅に着くと、ホームへ急いだ。

人々が列を成して電車を待っている。

どこか倦怠感のような気だるい雰囲気か辺りを占めている。

皆、仕事を終えたばかりで疲れているんだろう。

俺は灰色にくすんだ階段を降りてすぐの列の最後尾にたった。

ワイシャツの白い大柄な背中が眼の前を遮るので、圧迫感に耐え切れず、少し体を右側にずらして視界を確保する。俺は口に手を当てて欠伸をしながら、視線を何気なく流した。その時偶然、人々の列の間に一人ぽつんと立ち尽くす女性を発見した。

線路とホームの境界線ギリギリに立っている。

なんとなくその頼りなげな背中を見てみると、胸の底で微かなざわめきを感じた。

だが、案の定というか、しばらくしてその体が視界から消えたのだ。

辺りにどよめきが、数瞬後狭いホームを駆け抜けた。

そして、時を移さず、電車の光が右側の闇の隧道から近づいてくる。

線路に落ちたに違いない、だが、人々はざわめくばかりであたふたしている。

俺は無意識に列から抜け出してそこへ走っていた。

そして、躊躇なく線路へ飛び込んだ。

けたたましく電車の警笛が構内に鳴り響く。

焦慮に突き動かされるように、彼女の傍に駆け寄り、仰向けに倒れる彼女の下に肩を入れて立ち上がった。

滲むように広がって迫りくる光の輪。

俺は半ば彼女を引きずるように担ぎ、急いでホームの地面に手をかけた。

この時、ホームにいた50からみの男と若い男が、俺達を引き上げようと手を伸ばしてきていた。

その後

どうなったか覚えていないんだ。

目が覚めたら、この場所で彼女と重なって倒れていた。



ルルルル。

「あなたは誰？」

「誰か知りたいかい？」

「はい」

彼女の顔を正面に捉えて、思ったより幼さが残るその顔に驚いた。

「君の父親だよ」

「え？」

彼女の白く目鼻立ちのくつきりした顔を露骨に歪めて上目遣いで俺をじつとみていた。

時間が恰も凍ってしまったように。

「嘘だよ、ごめん」

「ですよね……」

記憶でも失っていないかと思って、初対面で大きな賭けに出たのだが、嫌そうな顔をされたので素直に謝った。

簡単な自己紹介を終えた。

彼女は秋山恵さんというらしい。

あの駅から二駅ほど西に行った地域にある公立高校に通っている。

「佐竹さんは、それで、私を救おうとして列車に巻き込まれて……」

「そっだよ」

「すみません」

俯いて長い髪を貞子のように垂れる彼女。

俺は次に発する言葉を考えあぐねて、静かに周囲の景色に目をやった。

その異様な光景を眺めながら、煙草の煙でも吐き出すかのように細く長い息をついた。

「で、ここは何だと思う？」

「何って？」

「天国か地獄かってこと」

「さあ……」

塵気楼のように周りの空気が揺らいでいる。

目に映る全てのものが、水を透してみるような不明瞭さに包まれていた。

最初見たときは、俺の目がやられているのかと思った。

だが、違うようだ。

1メートルも離れていない彼女の様子は鮮明に見て取れるのだから。

瑞々しい肌理の細かい肌、肩よりもう少し長めの髪はウェーブがかかっている、

白いシャツに濃紺のスカート、黒光する靴、白いパンツまできつ

ちり……

「ど、どこ見てんですか!？」

「いや、パンツじゃなくって君」

乾いた音とともに、強烈なビンタが飛んできた。

だらだら。

「さあ、これからどうしようか？」

俺は蒼穹を振り仰ぐように大きな伸びをした。

「あれなんだったんですかね」

「何だろうな、異星人のトイレだったりして？」

言われて後ろを振り返ると、白いドーム上の不思議な物体が視界に入る。

さっきまで彼女と一緒に一時を過ごした物体。

「それは……」

物体としか言えないのはそれが何か分からないからだ。

建物のようであり、地にのたうつクラゲのようにも見える。

正体は不明だが、唯一つ言えることは、さっきまであの中に俺達はいたのだ。

「それはないと思います」

「冗談だよ」

そこは真顔でなく、笑ってほしかった。

微妙に噛み合わない俺達。

世代の違いというやつか。

俺が今年24歳を迎えた勤め人で、彼女はまだ16の高校生。

この年齢と立場の相違は、微妙に噛み合うには無理が生じるものなのかも。

俺達は取り合えず、辺りを散策することにした。

クラゲのなかから見たときは、景色が白濁して見えて判別できなかったが、

こうして散策してみると、今いる場所は比較的ノーマルな風景だ。赤い金属のタイルが敷き詰められた地面は、一片約20メートル

くらいの正方形の形をしている。

その真ん中付近に、クラゲが鎮座している図だ。

「周りなんにもないですね」

それ以外には特に何も見あたらなかった。

360度ぐるりと遠望してみても、遠くの方に木々がまばらにあるくらいで、

それ以外は寂寥感たっぷりの荒野とその上に広がるぬけるような青空が広がってるのみだ。

「ここは天国か地獄か、また別の異空間かもしれないけど、取り合えず、俺達二人しか周りにはいない」

「ですねー」

「つまり、俺としては猛烈に心細いわけで……」

「そうですね？」

屈託のない表情で恵ちゃんは呟き、流れをそれとなく寸断される。俺は言葉に詰まってしまふ。

そんな俺を彼女は穴が開くほど無表情に見つめていた。

胸の奥まで見通すかのような混じりけのない黒い瞳。

「ここ知らない土地だしね」

「ですねー」

「土地勘のない場所に俺と君以外は誰もいなくて、そんな場所に二人きりだとやっぱりほらさ、一人よりは二人で……」

旅した方がいいよな、と自然な流れに持っていこうとしてるのに、

「一人旅嫌いじゃないです」

初めてみせる無垢な彼女の微笑み。

その微笑の前で思わず手を翳してしまった。

美人だけどころことなく、不思議少女の匂いをかもし彼女は今、神々しいまでの輝きを放っていた。

「広いなあ、なんも見えないな」

「いい天気ですね」

結局、俺はプライドをかなぐり捨てて彼女と一緒に来てくれと頼み込むしかなかった。

こんな寂しい土地で一人歩く孤独に耐えられそうになかったからだ。

彼女は快諾する前に、一つ確認を入れてきた。

下心ないですよ？

当然の質問だと思ったが、彼女の身持ちの固さを窺える一面でもあった。

「君は良い娘だな」

「そうでもないですよ」

気恥ずかしそうに、形のいい鼻梁を指先で摘む彼女。

素直ないい娘は本心から出た言葉だ。

荒野で二人でとりとめのない会話を交わっていてそう感じていた。それだけに 気になる事があった。

「ところで……恵ちゃん、何でホームであの時自殺を？」

俺は一段声を低くして彼女にあの時の事を単刀直入に切り出した。

「自殺？」

「線路に落ちたよね」

俺は彼女の顔の微妙な動きを漏らすまいと観察していた。

すると

「ああ、自殺じゃありませんよ、あれ」

「え？」

彼女はあっけらかんと自殺を否定した。

自殺じゃないのか？ あれは、どうみても

俺は戸惑いを隠せないが、すぐに動揺を押し包み冷静さを取り戻す。

「脳貧血とかで、ふらっと落ちたんだ？」

違うのは分かっている。だが、彼女に敢て逃げ道を作ってやる。

今はそつとしておいてやろう。

「いえ、それがですねー、どうも他殺っぽいんですよ」

「え……」

俺は意外な返答に言葉を失った。

「線路に引きずりこまれたんです」

もそり。

荒野を渡ってくる風は思ったより冷たく、スーツの合わせ目のボタンを閉めないとかくしゃみが出そうだ。彼女も白いカーディガンを胸に引き寄せて、体を縮めて歩いていった。

「困ったなあ」

「どうしたんですか？」

俺は腕時計を眺めながら、焦りを覚えていた。

あのクラゲの地を出たのが、確か3時頃だった。

そして、今みると6時近い。

まるまる三時間歩き続けたことになる。

「ここに至るまで何かあったかい？」

「いえ、土の地面と、枯れた低木くらいしか見てませんね」

そうなんだ、ここには何も無いんだ。

本当に、何も……

俺はふらつと頭に眩暈を覚えて額に右手の平を押し付けた。

どうしよう。

今夜の宿はどこで過ごすそう。

いや　そもそも、幽霊に宿など必要なのかは疑問だが。

とにかく、なんだか寒いし、辺りも薄暗くなってきた。

本来幽霊なら、寒さも暗さも平気のはずだ。

むしろ、闇が深まる刻限こそが、本領発揮の時間帯だろうし。

だが、俺達は幽霊の癖に足もあるし、寒さを感じる感覚器官もあるようだ。

歩き詰めで足は痛いし、体に充満する疲労感もやけにリアルだ。

つまり、もしかすると……俺達は。

彼女は消えゆく夕日の光を真つ向から受けて立ち尽くしていた。  
濃紫色をした不吉な太陽に何か感じるものがあるのか、身じろぎ  
一つせず眺めている。

「めぐちゃん！」

「はい？」

だが、感傷タイムはこれまでだ。

過酷な現実を乗り越えなければならぬ。

「よく聞いてくれ」

「はい」

「今気づいたんだけどさ、俺達生きてるみたいなんだ」

非常に馬鹿ばかりく聞こえると思うが真実だから仕方がない。

「そうなんですか？」

「うん、俺はそう断定した」

「そうすると……」

「もう日が暮れる。やがて夜がやってくる、ここはどこだか分からないが、旅したかぎりじゃ普通じゃない。日本でこのような光景はありえない、いえば、外国かもしれないし、どこぞの異空間かもしれない」

そして俺達は幽霊ではなく、血の通った生身の人間だ。

幽霊であるなら、この世界がどこであろうと、死ぬ事はないが……  
「世界には日が暮れば、夜には気温が極端に下がる地域がいくつもある」

彼女は俺の回りくどい説明を必死に理解しようとして黙ったまま聞いてくれている。たぶん。

「だから、どこか風だけでも凌げる場所を探さないと、日が暮れる前に探さないとまずいんだ」

暗くなってから駆けずり回って幸運にも岩場らしき場所を見つけ



る事ができた。しかも、都合よく岩窟のような窪んだ空間がぼつかりと空いている。奇跡としかいいようがない。

「良かったなあ、ここなら今日一晩くらいは過ごせるかもしれない、気温の低下も思ったほど激しくないようだし」

「そうですね……ハアハア」

めぐちゃんは走り回った後で、苦しそうに喘いでいた。

そのうちくず折れるように、岩窟の地面にお尻をペタンと落とすて横座りになる。

息を切らしながらも、俺に何か言いたげな視線を飛ばしてくる。

「どうした？」

「あ、う、あの、ハアハア、佐竹さん……」

まだ呼吸が苦しそうだが、多少は治まってきたらしく訥々と言葉を紡ぎ始める。

「さ、佐竹さん、まるで……この場所を、し、しっているみたいに「ん？」

彼女は最後にしわぶき一つ漏らすと、一際大きな濁声で、

「走ってびましたよね！」

「え、そう見えた？」

「はい、少なくとも、私にはそう見えませんでした」

大分落ち着いてきたようで、彼女の発言も滑らかになってきていた。

それにしても、可笑しなことというな。

俺がこんな場所知っているわけが……

もみくちゃ。  
(前書き)

ラノベ風味。

もみくちや。

「火が欲しい……」

吹きすさぶ風が洞穴の入口から容赦なく入ってきて体温を奪っていく。

「だな、俺も凍えそうだ」

俺達たぶんここで死ぬ。ほぼ死ぬ。

寒いなんてもんじゃない。

奥行きのない岩窟なんて、保温材が使われていない板壁と変わらん。

「まあ、例え火がついても、燃やす物がないけどな」

「そうですね、ワイキキのビーチは人だかりが来ています」

恵ちゃん壊れた。いや、この恍惚とした表情は既に頭の中の常夏のビーチにテッキキエア置いて、

甲羅干しにかかっている最中に違いない。

「恵ちゃん！」

俺は覆いかぶさるように彼女の眼前に膝立ちして、

「寝たら死ぬ！ 起きろ！」

古のギャグを飛ばそうと彼女の柔らかい頬にそつと触れようとした。

ガシ！ ギリギリギリ！

しかし、それは未然に防がれる。

「いてて！」

彼女が俺の浅黒い腕を握って逆手に決めていた。

この細腕のどこからこれほどの力が……

「約束守ってくださいね……」

「は、はい」

彼女は既に現に帰ってきていた。

濡れるような黒い瞳に青い炎がちらつく。  
侮れない女だ。

「さぶすぎるー」

「じぬー」

そろそろ三途の川の向こう岸が視界に入り始めた。  
去年死んだ婆ちゃんの幻影が見え隠れする。

「ね、眠い」

「寝てもいいですけど、死んだら服剥ぎ取りますね」

「目が冴えてきたなあ」

本気だ、この眼は賽の河原に棲む脱衣婆の眼だ。

などと、考える余裕もなくなってきた。

外に眼をやると、真っ白な丸い塵が……

「雪降ってきやがった、ヤバイ」

「佐竹さん何とかしてください！」

「そんなこといわれても……」

脱力気味の俺に、尚も執拗に彼女は絡んでくる。

「早くなんとかして！」

「無理だつて」

「そんな無責任な！　そもそもここへ連れてきたのはあなたなんでしょ！」

「え？」

「ど、どういふこと？」

俺が鼻白んでいると、彼女が助走をつけて覆いかぶさってきた。

「げふ」

彼女の小柄だが豊満な胸に押し潰されて苦しいやら気持ちいいやら。  
「暖かい」

体を重ね合わせて来て、彼女はもうなりふり構わず暖を求めている。

「ああ、ギブギブ！」

マウントとられてるだけなら良かったが、彼女の脇で俺の首を固められて思わず叫ぶ。

と、とんでもない力だ。

絞め殺されるうう。

「なんとかしなさい！」

「じぬうう」

俺が死の覚悟を決めた瞬間だった。

覆いかぶさる重みがすーっと退いていつて。

「わー火だー、佐竹さんの指から人魂が出た！」

「え？」

狂ったような嬌声の上から降ってきた。

見ると、人魂のような炎が宙に漂っている。

その炎の周りを彼女は喜びのあまり回り続けている。

「この炎は一体？」

「暖かい」

「本当だ……」

一メートルくらいの高さで釘でも打ちつけたように固定された謎の炎は、

岩窟内をその発散する圧倒的な熱量で暖め続けていた。

もやもや。

「ぶわーっと佐竹さんの手から出たんですよ」

「しらん」

「ほんとですよー」

「しらんったらしらん」

生憎、奇術師の特訓は受けた覚えはない。

「本当なんですから！ まあ、でもいいや」

「まあ、いいんじゃないか」

俺達は目の前の炎の揺らぎを安堵とともに見つめる。

謎の炎の正体は、結局、良く分からなかった。

だが、焼けどしない程度の熱で、岩窟内を暖めてくれるあり難い火の玉だ。

その出所はさておき、この火が一晚消えない事を祈るばかりだ。

自室でエアコンの暖房をつけているような心地よい岩窟内に身を置いていたうちに、だんだん、心にも体にも余裕が出てきた。とはいえ、未だ窮地には変わりはないんだが、彼女はそれをすっかり忘れたかのように、澆刺とした口ぶりで俺と世間話やらを交わしていた。

「今日もねー、放課後、友達とカラオケによったんですよ」

「ああ、もしかして、xビルの横にあるあの店かな？」

「そうそう」

彼女は無邪気に目を輝かせて、自分の得意な歌や、最近の人気歌手の話をとつとつと聞かせてくれた。

だけど、俺はその手の話は疎いから、適当に頷きをして聞き役に回っていた。

「友達歌うますぎなんですよー」  
「そうかー」

ずっと彼女の止め処ない話を耳にいれていたが、そのうち眠気が出てきて、途中から適当に相槌を返してただけど

「今日も帰り遅くなっちゃって、あの駅にくるのが普段より遅くなりました」

「なるほど、いつもあの路線で帰るんだな」

「……………」

「ん、どうした？」

だが、急に彼女が何の前触れもなく俯いてしまった。

なんか俺気に障ることいったかな……

唐突な変化にどう対処していいか分からず、二の句を告げられないでいると、

「知ってたくせに……………」

「え？」

「私がいつもあの電車に乗るの知ってたでしょ！」

彼女は弾かれたように顔をあげると、突如、激した口調でそう言い放った。

な、何のことだ〜！？

「私はあの駅で電車待ちしていました。ホームにある椅子に腰掛けていたはずなんです」

「それで？」

「でも、なんだか眠くなってきてうつらうつらしてました」

「だから？」

「そして、目が覚めたら、次の瞬間には線路の上について」

「それが？」

「くー、分かんない人ですね……………つまりですねー真相はこうです」

彼女は癪癪を起こしたみたいに首を振った。

そして、人差し指を俺に向けて立てたかと思うと、形の良い細い眉を潜めて捲くし立てる。

「いいですか！ 私はあの路線を学校に通うため良く使います。あそこで必ず列車を乗り換えます。朝は8時3分の列車に、夜の帰宅は大体7時です」

な、なんか物言いがどこかの探偵みたいになってきた。

尚も彼女は息継ぎをして、俺を親の敵でも見るかのように睨み続ける。

「つまり……あなたは私の姿を見る機会があった。何度も何度も私の若く麗しい姿を柱の影辺りから見ることがあった。そのうち私を頻繁に眺めるうちに、あなたは私に好意をもってしまった。

そして、あなたは疲れていた、人生に絶望していた。毎日毎日会社に出かけ、煩わしい人間関係で、下げたくもない頭を下げ……」

彼女は身振り手振りを加えて、表情豊かに俺の苦しい境涯を表現する。

聞いていると、本当にそんな気分になってくるから恐ろしい。

「あなたは私に興味を持つ前から自殺を考えていた。だけど、一人では寂しい。だからあなたは――」

まだ続くのか！？

「犯行に及んだ。あなたは私の帰宅時間を何度か出会ったびに推測できたはずです。あの駅で降りてカラオケによった後だから、普段よりは遅かった。だけど、時間はずれても必ずあそこは私が来る場所です。あなたは今日も会社を6時半過ぎにでた。だけど、私はいつもの時間には中々来ない。あなたはいらいらしながらも、執念深く待ち続けた。しばらくして私はこのホームにやってきた。あなたは待ったかいがあった。すぐに私の後をつけ、近くで動向を窺っていた。そのうち都合のいいことに私は寝こけ始めた。これは僥倖だ、あれを試す時だ！ あなたはそれを見て、するくと蛇のように私の隣に座り、耳元で囁き続けた。あなたは線路から落ちたくなる、落ちたくなる、呪文のように繰り返した。これはあなたが日



頃、独学で学んだ催眠術です」

「おいおい」

営業でワンマン社長の長い話を聞くなんてざらにある。

だが、彼女の話は妄想が多分に含まれてて聞いちゃいられない。

「ちよつと待てよ」

「黙ってください！」

反論の機会を窺い申し立てしたが、にべもなく途中で遮られてしまふ。

「私はあなたの催眠術にかかり無意識に席を立つ、そして、一歩一歩線路際に歩いていく」

「だんだん、言いたい事が見えてきた。」

「そして、私はまんまと線路に落ちた、それを見てあなたはすぐ以後を追った！ 電車が来るのは見えていた。ナイスタイミング。一目ぼれした私を道連れにして死のう、そうすれば一人でも寂しくない。あなたは半ば強引に私を巻き込んだんです」

「よくそこまで、無茶な推理展開できるな！」

半分呆れ口調で彼女に突っ込んだ。いた。

だが、尚も彼女の妄想世界は治まることなく続くようだった。

## ふわり

夜明け未明に、あの炎は跡形もなく消えていた。

ほぼ、その消滅と同時に肌寒さで目が覚めたに違いない。

恵ちゃんも既に起きていて、足を抱きこむようにして座っていた。俺の隣で寄り添うようにして……

「お、おい、朝から……」

「誤解しないでください、寒いんです、男臭いのは我慢するのでこうさせておいてください」

その物言いは酷く不遜で、男なら殴ってやりたいところだったが、彼女は女だった。しかも、美人ときてやがる。

「まあ、別に、い、いいけど……」

少しもってしてしまう俺がなんだか情けないが、これが健全な男性だということは心得ている。

「大丈夫か？」

俺の肩に蹲るようにして彼女は自分の頭を凭せ掛けている。

あの長い黒髪は幾分艶を失って、ほつれ髪が幾つか小さな輪を描いていた。

「はい、なんとか」

子犬のように体を竦ませて彼女は寒さで震えていた。

彼女の体と触れ合う箇所から伝わるその微かな振るえは、俺の中に深く浸透していき、やがて、萎えかけていた俺の心をも揺り動かす始める。

「よし、ここを出よう……」

「ええ？」

「でことで、無鉄砲に岩窟を飛び出したのが3時間前の話だ。」

また荒野を当て所なく彷徨うことになった。

後悔はしていない。

歩いている内に日が高くなるにつれて寒さは幾分和らいだし。

「それにしても、腹減ったな」

「ですねー……」

岩窟の上の方に窪みがあつてそこに溜まっていた水を飲み、喉を潤す事は出来た。

だが、血となり肉となる食べ物も二人とも口にできていない。

飲まず食わずの食わずが解決できていないのだ。

「靴食えねえかな……」

「そ、それ革靴ですよ、ひよ、ひよつとしたら」

恵ちゃんは口の端から何か光るものを滴らせて、俺の足元を正気を失った目で見ている。

ヤバイ……

彼女は生きる事にどこまでも貪欲になれる娘だ。

いつでも人間としての矮小な矜持を、くずかごにあっさり捨てる事ができる。

「ま、待つて！」

「え、は！ 危ない危ない」

靴先3cmまでの位置に四つん這いになった彼女の鼻先がある。

俺が声を掛けなければ、そのままがぶりと噛み付いていたに違いない。

「おい、あれはなんだ！」

「えーっとなんだらう」

何とも形容しがたい物体が、宙に浮いていた。

殺風景な荒野に圧倒的な存在感を醸すあれは……

「山みたいですね」

「確かにこんもりした山に見えるが」

濃緑色の扇形に近い山のようなものが、遠目に確認できる。

「だけど、何か変ですね」

「うん、少し、地上から浮いてるように見えないか？」

「平たい山の底に何か見えます」

確かに、何か……透明のような白いような長いものが。

「水みたいですね」

近づくに連れ、その異様な光景が余す事なく視界に飛び込んでくる。

青々と茂る木々をたくわえた大きな山が、地面から立ち上る水流に支えられて浮いているのだ。

俺達は尚も近づいて、不可思議な山の間近までやってくると、その大きさに圧倒されて呆然と立ち尽くした。

「たぶん、あの山の底は固いんだろうね」

「はい、それをあの水の流れが絶妙の平衡感覚で支えていると思われます」

「にしちゃあ、底にぶつかった水が辺りに飛び散りそうなものだけ」

「そういえば、そうですね、その飛び散った水が、その下の荒野を湖に変えていても可笑しくくないですよ」

何だか良く分からないものを目の前にして、俺達は丁度、長いすのような大きさの岩場に腰掛けてこの物体が何なのかを議論していた。あまりに非現実的な構造に疑問がとうとうと湧き上がってくる。

「山という事は食べ物あるのかな？」

「そら、何か、例えば、木の実とか、りんごの木とか、土を掘れば長いもとか、もしかしたら、溪流があつて、そこに沢蟹とか岩魚とか」

やがて頭の中では、奇異な山の構造や存在理由が立ち消えて、食べ物事ばかりぐるぐると回り始めていた。

「イノシシ鍋いいですよー、熊鍋もー」

「ちげーよ！ やっぱ鍋はかに鍋だろー」

妄想世界の住人としてすっかり定住しかけた頃、

「あれ、何か山の麓から降ってきましたよ」

「え？」

ふいに恵ちゃんが呟いた声によって現に引き戻される。

涎を手の甲で拭いて、俺は彼女の視線を追ってぼんやり頭をもたげた。

「ほんとだ、確かに、何か黒いゴミみたいなのが落ちてくるな」

「何でしょう？」

「さあな」

最初は黒い点くらいだったそれは、視界の中で徐々に広がっていった。

「あれ、人じゃね？」

「んー、人間にしては……」

「ああ、ここにおちて」

フワリ。

正体をはかりかねている間に、それは俺達のすぐ眼前に唐突に舞い降りてきた。

## さわり

「ガーガーガー」

「うんうん」

スマイルスマイル。

「ガーガーガーガー」

「なるほど」

俺達はあの奇怪な山の上でもてなしを受けていた。

周りを取り巻くのは半鳥半人の皆様方だ。

雑壇に座る俺達の差し向かいには、数匹の仲間の群れに挟まれて、一際凶体のかい鳥人間が鎮座しておられる。鳥の癖に顎らしき部分の毛が白く変色している。

「恵君、あのでっぷりとした長老然とした彼にこれをお注ぎしたまえ」

視線も交えて彼女を対象を教えて、足元の細いフラスコのような陶器を渡した。

「はいーどうぞ」

彼女が酌を進めると、長老は黒々とした羽が生える右手で後頭部を摩り、

「ガーガーガー」

前に迫り出した嘴を開いて何かを述べた。

「ありがとうだって」

「ふふふ」

もう一度言うが相手の言葉は分からない。

だが、彼は恵ちゃんに御酌してもらって喜んでいるのは間違いない。

人間みたいに表情豊かに微笑んで、背中のかなな羽をバタバタ動かしてるのだから。

「ガーガーガー」

「はい、朝7時ごろ朝食ですね、分かりました」

「ガーガーガー」

「グツナイツ！」

バタン

焦げ茶色の木の扉が閉じられる。

「はーあ」

俺は後頭部を右手で摩りながら大きなため息を放つ。

「楽しかったですね」

「……………」

耳鳴りがきくと頭の奥にまで鳴り響く。

突然と扉の前でしばし立ち尽くしていた。

が、突然、夥しいまでの嫌悪のようなものが、寒気を伴って体中を駆け巡った。

御する事のできない感情が怒涛となって押し寄せ、

「めぐちゃあああん！」

無意識のうちにハンモッグに腰掛ける彼女の両足に、猛然と頭から飛び掛かっていた。

「ちよ、ちよっとー」

「すげ〜〜〜怖かったよ！ マジで泣きそうだったんだよ！」

「な、なんですか！？」

彼女はその勢いに気圧されながらも、俺の頭を両手で押さえ込んでいる。

それを意に介さず、カッターシャツの袖を捲って右腕を露にし、彼女に見せ付けた。

「ほらみて、この鳥肌！ もう怖くてこんなになってるよ、ほらほらほら〜！」

「あ、ほんとだ……………」

尚も半狂乱の状態で、無意識のうちに彼女の両足を抱き締めてい

た。

その膝の間でいやいやをするように頭を左右に振る。

「ほんと、死ぬほど怖かったんやー！ あんな化け物反則だー家に  
帰りにてー！」

震えが止まらない。

なんなんだ！ あれはなんだったんだ！

あんなの存在するなんて卑怯だ！

「よしよし、落ち着いたかな？」

「うん」

「もう泣かないでね、いい年こいてるんだから、そして、離れてく  
ださい」

「あ、すまん」

しばらくして、激しいショック状態から解き放たれて、俺は我に  
返った。

「俺、何か恥ずかしい事口走ってなかった？」

半狂乱の時の記憶があまりない。

だが、かなりみつともない事を言っていた気がする。

正気が戻って、決まり悪く俯いていると、

「いつもと変わりましたよ」

恵ちゃんは天使のような微笑みでさらっと言った。

思わず鼻の奥にツーンとくる痛みがこみ上げる。

「2時間か……」

「何がですか？」

「歓待を受けてから、俺が正気に戻るまでかけた時間だよ」

俺は物事の節目節目で時間を確かめる癖が身についている。  
外回りの営業をしていると、自然とこうなっていくのだ。

「こんな時まで、時間気にしてどうするんですか？」

俺に哀れむような目を彼女は向けてくる。



「ふ、これが日本の企業戦士さ」

「奴隷の間違いじゃ……」

「言つな」

そんなとりとめのない会話を続けているうちに、いつしか夜は更けていく。

「じゃあ、明日はこの山の探検だ」

「はー、逃げ出さなくていいんですか？ あんなに怖がってる烏人間達がここにはたくさんいるのに」

「どうやって逃げるんだ？ ここまで彼等の足に捕まって運んでもらったんだし」

「じゃあ、何もなければ普通に下ろしてくれますね」

「たぶんな」

今日彼等と接した限りでは俺達を歓迎してくれているのは確かだ。烏人間の風貌に対する生理的嫌悪さえ抑えていれば何ら問題はな

いはずだ。

慣れていこう。

郷に入れば郷に従えの精神だ。

「うん。」

「ガーガーガー」

「ごちそうさま」

朝の食事はイモ類や植物の葉のお浸しみたいなものが出た気がする。

俺は彼等と同じ席にいる間は、思考を切ってオート化していた。いわば、人形だ、ロボットだ。

相手の反応に対して適切な答えを返すのみだ。

自分が何を見て何を食べているのか認知する必要はない。

「じゃちよつと散歩してきます」

木造の三角屋根の家の引き戸を丁寧に閉めながら閉める。

この山の散策に今から出かけるのだ。

「日本のド田舎の集落みたいだね」

「さあな」

山腹から振り返って鳥集落の全貌を見渡していた。

もうオート思考から通常のものへと切り変わっている。

「まあ、建物や生活は確かに日本のものと似てはいた」

確かに日本家屋に近い造りの建物が、この山には点在していた。

しかし、細かい部分は微妙に違う。

屋根に鳥の羽を貼り付けてたり、床に楕円形の使用用途不明の穴が開いてたり、良く見れば何かが違うていた。

「でも佐竹さん、あの人たちと会話できるみたいだね」

「できるみたいなんだ」

最初は当てずっぽうで言ったのが、たまたまうまく嵌っているのかと思っていた。

しかし、俺は何故か彼等の言葉を感覚的に理解できるみたいなの

だ。

何言つてたか思い出せないが、長老と会話できていた気がする。

「それって頼もしいー外国に行つて英語しゃべれる男性いたら素敵ですよー」

「ははは、少しは見直したか？」

「ええ、頼りにしてます佐竹さん」

ちよつとおどけて言つてみたけど、その能力の出所は不明だ。

「取りあえず、上つていこう」

「はいー」

まあ、細かい謎は後回しだ。

今は鳥のお宿から少しでも離れて英気を養うことが先決だ。

勾配が緩やかな山道を上がっていく。背の高い木々の太い幹が、山道の両脇に連なるように立っていた。山深くに足を踏み入れてからは、青空はその木々の大きな葉の屋根に隠されていて、辺りは緑の間に覆われて薄暗かった。

「道は整備されているのに、ここはどこかのジャングルみたいだな」  
「ですねーでも空気はおいしいです」

彼女はここに来てから途轍もなく機嫌が良い。

お宿で飯食つて湯浴みもできたし、部屋も悪くはなかった。

ちよつとした旅行気分なんだろう。

弾むような足取りで、俺の3歩先くらいを歩いている。

「恵ちゃんは鳥達全然恐れないよな」

「ええ、円らかな瞳がかわいいじゃないですか」

「ほお、あれが……」

「私昔鳥かごに鳥飼つてたくらいですから、慣れてるんですよね」  
悪趣味な。

普通の鳥じゃないんだし、ちよつとは怖がれよ。

「長老に聞いた話ではこの山の頂には大きな建物があるらしい。この神様を祀ってるそうだ」

「頂ですかーまだ遠そうですね」

今山のどの辺りにいるのか見当がつかない。

これ以上、上って行っても、帰る頃には日が暮れて真っ暗な山道を降りるはめになる。

「戻るか……」

「そうですね」

嫌々ながらも、鳥のお宿へ引き返そうと踵を返した時だった。バサバサバサ。

不意に鳥の羽音のような音がしたかと思うと、下方の石段に鳥の村の住人が現れたのだ。

「こ、こんにちわー（ガーガーガー）」

「ガーガー（お前等か、昨日来た奴等は」

以下、ガーガー省きます。

「ええ、そうなんですよ、長老さんに優しく……」

「早くこの村を出る」

「え？」

耳にはガーガーと聞こえるのだが、感覚で捉えた声はやけに渋く少し険のある声だ。

表情のない顔には凄みがあり、円らな瞳には有無を言わぬ迫力があつた。

「いいから出るんだ！」

「ひ……」

怒鳴り声に俺は怯んで一步後退る。

威圧するかのような鋭い眼差しを受け、足が竦んでしまつて動けない。

蛇ににらまれた蛙だ。

「な、何はなしてるの？ 通訳して」

「ち、ちょストップ」

彼女も何か俺達の会話から不吉な影を察したのだろう。

だが、今は彼との話を中断するわけにはいかない。

「出るんだ、すぐに出る」

「そんなこと言われても出る方法が」

「この山をもう少し上がったところに2又に分かれる道がある、そこを右に辿れば地上へ出るゲートがある、そこから地上へ降りる事ができる」

「ええ」

「いいな、すぐに出るんだぞ、じゃあな」

そう言い残すと、漆黒の翼を大きく広げた彼は、バサバサと羽音を立てて木々の向こうに広がる緑の闇へ消えて行った。ぽつんと取り残された俺はしばらく思考停止に陥っていた。

「何を話してたの？」

「……………」

「何か言つてよ」

彼女が不安そうに尋ねてくる。

一方的に出ると言われたが、どういう意味なのか。

なぜ、俺達に…………

最初は困惑してその場を動けなかったが

「めぐちゃん、よしここを出ようか」

「ええ」

途中で悩むことはこれっぽちもないことに気づいた。

ここを脱出する事ができるんだ。

「よし、この石段上がっていくぞ」

善は急げだ。

## ぶすり

石段を上がっていくと確かに道が二又に分かれていた。

「右だったな」

「はい」

「よし行こう」

「ちょっと待って」

右側の石段へ歩を移して程なく、後ろから恵ちゃんに呼び止められる。

「どうした？」

振り返ると、彼女は細く形のいい鼻梁を指先で摘んで佇んでいた。伏目がちに、何やら考え込んでる様子。

「トイレでも行きたくなったか？」

「違います」

「じゃあ、何なの」

俺は投げやりに尋ねた。

動き出したら中断されるのが嫌いな性分だ。

「先いくよ」

返事がないので、焦れてきて歩き出す俺。

「佐竹さん！ それ以上行ったら死ぬ」

「ええ」

物騒な言葉が飛び出して、驚いて足を止めて彼女に向き直った。

「どうしたんだよ」

「これは罠です」

「はあ？」

「馬鹿馬鹿しい」

「あの烏人間は嘘をついています」

「そんなことないよ、あの真剣な眼差し、なんか鬼気迫るものあつ

たじゃん、たぶん、思うに、ここにいたら長老達がそのうち態度豹変させて、俺達をロープでしばりあげてさ、昔からの風習だとかで、山神様に人身御供として俺達捧げて命おとすはめになるんだよ、それを哀れに思う村人Aである彼が助け舟だしてくれたんだ、千載一遇の逃げ時だろうが」

「佐竹さんも人のこと言えないくらい妄想豊かですね、だけど、私の話を聞いてください」

俺の頭の中にはもう、ここを出て地上を歩いている未来の姿が描かれている。

今さらこの未来図を変える気はなかった。

しかし、言い出したら、彼女は人の意見など聞きやしない。

薄ら寒い空気が漂う石段の上に屈むと、鼻水を指で堰きとめながら、しばし彼女の話の話を聞いてみることにした。

「いいですか……」中略　　畏の確率が高い、一応見に行きますが、慎重に行きましょう。待ち伏せされてるかもしれませんよ」  
話は相変わらず妄想たっぷりで、まともに聞いちゃいられなかった。

けど、冷静になってみると、そんなこともあってもおかしくはないとも思う。

俺は両者の意見の間をとることにした。

「良く分かった、じゃあ、取り合えず、油断せずに行こう」  
間をとっても、俺の意向に変わりはない。

「分かりました」

拒否されるかと思ったがあっさり彼女は了承した。

「行こう」

「ちょっと待って」

「まだ何かあるの？」

苛立ち気味に俺は言った。

「これを……」

言いながら、彼女は持っているバック中を弄って何かを取り出し

た。

暗所で鈍い光を放つそれは 鉤爪を模したような刃物!?

「調理場からくすねて来ました、えへ」

「えへって、なんで調理場にそんなものが!？」

「これを手に嵌めて、お芋切ってましたよ」

「そうか、烏だもんなあ って違う! それより泥棒じゃないか、勝つてに持ってきて……」

「大丈夫! いざとなったらこれでぶすりと」

俺は顔を右手で包むと、大きなため息をつく。

「はい、どうぞ」

恵ちゃんはにっこり微笑んで俺にも鉤爪を手渡してくれた。



ぼとり。

石段を登りきった場所は周りの木々を人為的に切り開いたような  
広場があった。

といっても、小さな神社の境内ぐらいの敷地だが。

「これなんだろう？」

「どれどれ」

辺りを見回すと、奥まった薄暗い場所の地面に白く光る楕円形の  
ようなものがあった。屈んでその表面をみると、白い光の粒子が楕  
円形全体を隙間なく覆っている。

「これもしかしてゲートっていうものじゃない？」

「そうかもしれないな」

他に目立ったものは何もない。

これしか考えられなかった。

ゲートってことはつまり、どこかへ通じる門であるはずだ。

そして、烏人間の言ったとおりなら、これは地上へ通じているは  
ずだ。

「ここに落ちればいいのかな」

「ま、待て！」

恵ちゃんが、無造作に一步踏み出そうとしたので右手で制する。

「な、なんか匂うな」

俺は屈んだまま、左手に嵌めた鉤爪で土の地面を抉り3本線を浅  
く引いた。

俺が屈んだまま逡巡していると、

「もう、先行くからねー」

「え、ああ」

彼女は焦れたのか無造作にぴょんと跳ねてその穴に飛び込んだ。

「もう、ままよ！」

すっぽり彼女の体が光の中へ吸い込まれたのを見て、慌てて俺も後から続いた。

「うわああああ」

穴の中は曲がりくねっていた。

まるで滑り台のような構造をしていて、その中を猛烈な勢いで滑り落ちていく。

「きゃあああ」

少し先に行く彼女のくぐもった悲鳴が、穴の奥から聞こえていたがしばらくして

「あ？」

と、間の抜けたその一言を漏らして、彼女の声が聞こえなくなっ

た。

「おい、どうしたんだ、恵ぐ！」

彼女が心配になり大声で叫ぶが返事は返ってこない。

不安と焦燥に駆られてじっと先に目を凝らしていると、暗い曲がりくねった隧道の先から白い光が射してきた。ようやく出口がみえて……

「あ？」

おわり。

「うわぁ……ぁ……ぁ」

青空に放り出された俺は声にならない声で手足をバタバタさせていた。

やっぱりこんなオチか……！

嫌な予感はしてたんだ。

「く……」

せめて下方にいるであろう、彼女だけでも最後に視界に。

風圧で目が塞がれそうになる。

だが、死ぬ前に彼女を視界に

腕を交差させて直接目に受ける風を交わして視界を確保した。

その時だった。

「見えた！ え？」

下方に見える彼女の背中に白い翼がパラシュートのように突然、広げられたのだ。

「な！？」

俺はその変化を目にして動転した。

だが、時を移さず、己の体に起きている異変にも気づいた。

背中に熱を感じて何かが這い回る感覚があった。

「え？」

程なく、得体のしれない筋肉の躍動を背に感じると同時にふわりと浮き上がる。

俺は何が起こったのか分からず動転していると、目の前に白い影が。

「誰だ君は？（ガーガー）」

白い羽の鳥人間が眼前で羽ばたいていた。

俺はその答えを半分予期しながら敢て尋ねる。

「恵よ（ガーガー）」



俺はなんとなしに顔を上げると、思わず声をあげて目を見張った。その女の子の顔はさつき夢の中でみた恵ちゃんそのものなのだ。夢の中身はほぼ覚えていなかったが、彼女の名前と顔は脳裏になぜか鮮明に焼きついていた。

「こんな偶然……」

俺は年甲斐もなく、胸が高まるのを感じていた。

キツネに摘まれたような思いで彼女の動向を見守る。

長い列をなす人だかりを目にして露骨に彼女は顔を歪めていた。

しかし 前触れもなく、彼女の視線が俺の方へ向けられて鼓動が高鳴った。

彼女はこちらに足先を向けて歩んでくる。

「お隣いいですか？」

「はい」

「ふー、疲れた」

人目を憚らず彼女は甲高い声をあげて俺の隣の席に座る。

俺はどぎまぎしていた。

夢の中で出合った彼女と現実に出くわす。

こんな偶然はそうあることではない。

俺はこの奇跡とも思える偶然を何らかの形で彼女に伝えたかった。とはいえ、見知らぬ年上の疲れきったリーマンが、いきなり声をかけたらどんな反応を示すだろう。

気持ち悪がられるに決まっている。

が、心の底から湧きあがる衝動は抑え切れるものじゃなかった。

バタン

彼女の足元にわざと膝元のバックを落とした。

「あ、すみません」

俺はわざと時間をかけてバックに手を伸ばした。

「はい、どうぞ」

彼女は凄く丁寧にかバンを拾ってこちらに渡してくる。

その時、俺の体は疲れていたのか、かくんと前倒れた。

「あ、御爺ちゃん、大丈夫？」

「ああ、平気だ、恵ちゃん」

「え、どうして私の名前を」

彼女は目を見開いて、幾分訝しげに、しかし、澁刺としたとても澄んだ瞳で俺を見つめ返してきた。

俺は一拍間を空けて、彼女に微笑むと、

「そんな気がしただけです、えっこらせ」

と、掛け声とともに今年60になる老体を持ち上げ、彼女に頭を下げ列にまた戻った。

漲ってきた(前書き)

ので、書くことにします。

漲ってきた

まあ、ランダム世界、ランダムキャラ設定で、俺的の仮想空間で話が自動的に作られるようにオート化した。以前も言ったように、俺は疲弊しきってるので主人公はパスだ。外から眺めている。

かつて、サルビア大陸にジャミ族と呼ばれる暗黒の民がいた。

彼らは人間とは全く異なる相貌と独自の文化をもち、人間族とこの大陸を二分する勢力であった。

だが、サルビア城の王ビアンカ8世はそれまで共存していたジャミ族を忌み嫌い、ある日兵を集めて彼等に戦争をしかけた。ジャミ族は奇襲に遭って、悉くその命を散らしていった。そして、終始劣勢のまま、傷を負いながらも生き残ったジャミ族は、サルビアの北の果てにある『悪魔の口』と呼ばれる大地に開く大きな亀裂の中に逃げ込んだ。

それから悠久の時を経た今、彼等の存在も人々の記憶から抜け落ちていった。長い年月のうちに彼等は絶滅したように伝説では語られるようになり、現在ではジャミ族の話は吟遊詩人の歌を通して哀切の籠った旋律とともに悲話として登場するのみとなった。

「爺さん、ジャミ族ってどんな種族だったの？」

「さあな、サルビア王家の城の壁画に描かれているのは、とてつもない大きな蛇だったり、見たこともない化け物だったり、まあ色々いたようだな。絵を見る限りじゃ凶暴そうな種族じゃわい」

「ふーん」

俺は祖父マイルの話聞いて、そのジャミ族に興味湧いていた。一匹だけでも捕まえられないだろうか。



そんな異形のものなら、見世物小屋で客集めて芸の一つでもさせりや大金が転がり込んでくる。

ボロイ商売だ。

「くくく……」

何だか胸が高鳴るじゃないか。

ああ、そいつ等捕まえたい。

だけど、もう絶滅しちまつてるらしいから無理か。

「ピロ様！」

俺が少し消沈していると、隣町で奴隷商に売ってもらった女が入ってきた。

「セルフイカ」

長い黄金色の髪を後ろで編むように束ねて腰の辺りに垂らした少女。

美人ってほどでもないが、まあ、可愛い部類に入るし尻もでけりやプロポーションも良い。

俺の召使としては合格水準に達してたので、大金はたいてこの家に連れてきた。

「あのー言いにくいんですが」

「どうした？」

「キッチンが燃えています」

「はあ？」

俺は背中に薄ら寒いものを感じながら、キッチンに走った。

「うわあ、燃えてるじゃん、ひでえ」

「う、ごめんなさい」

「お前！ 謝ってすむことか！」

「じゃ脱ぎます」

「ぶ！」

彼女が肩を露出しただけで、俺は鼻血が滝のように吹き出た。

「止める、馬鹿」

ぶ、格好つけているが、俺はまるで女に耐性がないのだ。

「えーっと、どこだっけ」

俺は着ている動物皮の衣服のポケットを弄って、魔玉『水の玉』を取り出して、

腰に巻いてある魔道ベルトに嵌めた。

そして、右手の平を火勢の激しいキッチンに向けて翳した。

「ウォーターウォール」

俺が叫ぶと、虚空に突然、大量の水が発生して部屋を覆う炎をは怒涛のごとく飲み込んだ。

「どうやって、ああなったんだ？ 教えてみて？ (ニコ)」

「怒らないですか？」

「バーカ、俺は心が大きいんだ(ニコ)」

「じゃあ言います」

セルフィはぼそぼそと呟くが、俺の耳には届いていない。

イラ。

「で………」

イラ×2

「だから」

もう限界だ。

「もういい！ 後は俺が始末しとくから」

投げやりにセルフィに言った。

煤がついた壁を見渡しながらため息をつくとき、俺は黙々と焦げた原形を留めない物体を生ゴミ処理用の金属製の樽に捨てた。

どうせ、火の魔術を誤って暴走させたんだろう。

なんとなく、（前書き）

無理して書いてみました。

なんとなく、

光塵3年、今から300年前、サルビア大陸の南方に位置する国ザルジは隣国セルジと3年に渡る戦争の末、勝利を収めた。戦勝国のザルジは当然のごとく敗戦国セルジの領土を植民地化した。セルジにはバントー海に隣接する交易都市ジルがあつた。戦火の後の生々しいジルは荒廃し廢墟が立ち並んでいたが、その地の利はセルジの商人にとつては生唾もんだつた。さつそくセルジの商人はこぞつてジルに移民していった。その中には我がセルスタイン家のスタイナーもいた。俺のひーひーひーひーひー爺さんに当たるわけだが、彼はさつそく自国から二束三文で植民地の一部を買い上げ今の屋敷を手に入れた。そして、そこを交易所としても活用して、世界に点在する国々の都市と交易し、ぼろ儲けしたそうなの。

「我がセルスタイン家はそんな家系だから、成り上がりと言われればそれまでだが、それなりにこの辺りでは豪商として名を馳せてはいる、つまり、分かるな」

2年前　俺はここへ連れて来たばかりのセルフィーに我が家の発祥を説明した後、高圧的に彼女に詰め寄つた。

「はーしらねーよ、要は業突く張り一族がちよつと儲けて威張つてるだけだろ」

ジルの港の奴隷商人から買った女セルフィー。この頃はまるで口の聞き方がなっていないかつた。薄汚れた薄墨色の長衣を着せられ、髪は本来の艶を失い、顔には赤黒い垢がこびりついた小汚い少女だつた。

どこか人を食つたような瞳で、投げやりな口調は俺を苛立たせたが、

「まあ、そういうことだ、俺は金持ちな上とてつもなく偉い。そして、俺はお前を買った。今日からお前は俺の小間使いとして、俺の身の回りの世話をする運命なのだ。泣いても叫んでもこの町からは逃げることはできない。まあ、行くあてなんてないだろうけどな」

「ペ！ 言ってるバーカ！」

その生意気で育ちの悪そうなセルフイーに、何かしら宝石の原石のような隠された光を認めていたのだ。俺はもう買った当初からこの女にある種の野望を抱いていた。

思いの丈。(前書き)

なんとなくきもくなった。  
後悔はしていない。

## 思いの丈。

俺は母親は非の打ち所のない美人だった。その姿は目を閉じればいつでも網膜の闇に映すことができる。柔らかな長いさらさらとした金髪、淡青色の透き通ったガラス細工のような瞳、しなやかな雪白の木目細かい肌、どの箇所もぬかりなく手入れされていた。端正な顔立ちに凜とした強い輝きを宿し、一方、見つめる瞳はいつも聖母のような柔らかい光を放って俺を暖かく押し包んでくれていたのを覚えている。

そんな母が10年前、突然、セルスタイン家を捨てて出て行った。父ばかりでなく、俺にも別れも行き先も告げずどこかへ姿を消した。

理由は後で父に聞かされた。父は交易で知り合った他国の女と浮気してたそうだ。

特に珍しくもないありふれた理由だ。

だが、別れた理由は納得がいくものの、なぜあれほど慈しみ可愛がった息子に何も告げずあっさり捨てていけるのか。当時10歳の俺はショックで毎日毎日泣いて屋敷に引きこもりながら、その答えを最初のうちは必死に考えていた。だが、いくら考えてもその答えはわからなかった。それは成人となった今も同じだ。

母が出て行った7年後、父もこの世を去った。残された俺は祖父に殆どの家業を任せてはいるが、ゆくゆくはセルスタイン家の家業を継ぐ長男である。金も権力もほしいままにできる。母譲りの美貌もある。あの時のどうしようもなく頼りなく無力な俺ではない。今は押しも押されぬ豪商の跡取り様だ。

母がなんだ、たかが、女じゃないか。俺が少し色目を流せば、女は五万と後から列をなして憑いてくる。などと粹がってた時期も

あった。しかし、やはり母の存在は大きく、俺は何かしらトラウマのようなものを引きずって生きてきた。それはともすれば、俺の表面に浮かび上がってきた。

俺がジル国立魔術学園に通っていた時の事だ。俺はそこで女と知り合う機会があった。そして、実際に何人かと付き合ったのだ。しかし、何回逢瀬を繰り返しても俺は女にある一定の距離を保っていたし本気になることはなかった。大抵1ヶ月もしないうちにあっさり別れを俺から切り出す始末だ。

母から受けたトラウマは想像以上に深く、女に対して一種の偏見と恐怖を拭い去ることがいつまでもできなかった。

学園卒業後は俺は屋敷で放逸な生活を送っていた。

といつても女色におぼれることなくただ、友人とどこかへ旅に出たり、町で酒をあおったりする程度だ。実に地味な憂さ晴らしというか。

だが、ある日の事、友人であるトルストンが、港に奴隷商の舟がやってきてるのを教えてくれた。

この時代、奴隷渡世は特に珍しいものではなかった。

俺はその日トルストンに連れられてその舟が横付けする港にやってきた。

そこでセルフィと出会ったのだ。

最初は俺自身、何でこのオークションに参加したのかわからなかった。俺のこれまでの女への接し方を知っている友人もその行動には驚いていた。

しかし、家に連れ帰ってその理由は自ずと分かった。

彼女は舟の長旅で表面的には薄汚れていたが、その奥まった瞳の深くに謎めいた魅力を感じていた。

俺はその光を見た瞬間、妙な郷愁と既視感を覚えていた。



そう、彼女は俺を捨てて家を出て行った母とどこか似ているのだ。

一時俺はマザコンかもと悩んだこともあった。だが、自問自答しているうちにそれは間違いであるとすぐに気づいた。俺は母親にそんな俗なものではなく、ある種崇敬にも似た感情を持っていた。あの母の完成された女の輝きに俺は憧憬と嫉妬が入り混じった名状し難い思いを抱いていたのだ。そう、この世界に伝わる女神シールを信仰するような思いを、母にも、そして同じ輝きを宿すこの喧しく生意気な小娘の瞳にも感じていたのだ。そして、いつの日か、女神シールや母のような、ある種、神々しさを纏う美を備えた女性に彼女を育て上げ、俺がこの男ならと納得できる相手に彼女を嫁がせる。そんな無垢でひたむきな思いから生まれ出た、ある意味男のロマンともいえるべき欲望を抱くようになっていた。それからは彼女を表向き召使と使いつつ、いつか母や女神シールのような美を備える立派な淑女に育て上げようと日夜腐心し続けたのだ。

苦しい。

だが、俺の考えは浅はかだった

「あーすみませんピロ様」

「そそつかしいなーセルフイーは」

俺は彼女をここへ連れてきたことを今になって後悔していた。

己の愚かさに絶望していると言ってもいい。

そそつかしいのは実はセルフイーではない、俺が一番阿呆なんだ。自分で割ったグラスを片付けるセルフイーを見下ろしながら、これまでの愚を思い起こして、俺は頭を抱えて首を振った。

2年一通りの作法やレディーとしての教育を俺自ら施して、彼女は明らかに生まれ変わった。

しかし、生来彼女が持つ不器用さだけは直せなかったし、粗野な口ぶりも俺の指導で変わりはしたが、総じて俺が抱く理想像とは程遠い。幼子から育てたわけじゃないし、急ピツチな俺の更生カリキユラムではこれが限界なのか。とにかく、蓋を開けてみれば、彼女は母にも女神様にも遠く及ばないごく普通の女になってしまった。

理想は高くても現実はうまくいくもんじゃない。だが、それは、俺の犯したミスと比べれば 些事な事だった。

「セルフイー、好きな男はいるか？」

俺は一旦、我に返ると顔を起こし彼女に尋ねた。

「いえ、いません」

「そうか」

俺が掲げるもう一つの理想、彼女を俺が見込んだ男と結婚させるというものだが、これに於いて、俺は致命的なミスを侵していた。彼女を小間使いとしてこの家に迎え入れたことだ。俺は彼女の嫁ぐ相手先は、当然俺の身分相応か、出来ればそれ以上の地位の人間の

もとへと考えていた。だが、もしそうするなら、彼女は小間使いなどではなく養女とするべきだったのだ。

「はあ、俺は馬鹿だ」

この失敗は避けられるものだった。あの時一緒に奴隷商の元へと出かけたトルストンに彼女の素性の口止めをして、早いうちから彼女を養女として迎えていれば。だが、そんな事も当時の俺は気づいていなかった。もうこの街では、いや、俺を知る人間がいるこの近辺では、彼女を俺が理想とする相手に嫁がせる事はできそうにない。召使の身分ではいくら彼女が美しくても相手にされないだろう。今更、養女にもできないし。俺の理想はもう跡形もなく崩れ去ってしまったも同然だった。

「ふー」

「どうしたんですか？」

「いや、ちよつと気分が悪い、セルフイ水持ってきてくれ」

「はい」

キッチンへ向かう彼女背を見送りながら、俺はまた顔を両手で塞いだ。

「は」

俺は理想に目が眩んで、先を見通す事を欠いていた。

ああ、本当駄目な男だ。

所詮は俺は成り上がり商人のぼんぼんだ。

いや、商人としても失格だ。

何もかもいい加減で浅慮な考えでしか行動ができないなんて。

絶望に打ちひしがれていると彼女が盥に水が入ったグラスを載せて戻ってきた。

俺は水を受け取ると、ある決心をして彼女を見つめた。

「セルフイ、俺は家を出るぞ」

「はい、お出かけになられるんですね」

「いや、この家を捨てて当て所のない旅にすることにした」

「はあ……」

俺は呆然とした顔で首をかしく彼女をじつと眺めていた。

## 弟、マルコ。

「そうか、兄貴旅するんだ」

「そうだ、俺の理想は潰えたが、セルフイの幸せのために敢てこの家を捨て」

「またあの話か、兄貴も頭固いつていうか」

ロイド眼鏡をかけた、丸顔の少年マルコは手にもった算用盤（この国の数値の計算に使用）を爪弾きながら、半分呆れたような目で、口元に苦笑を浮かべて言った。

「何を言ってる！ 俺にとつては生涯賭けてもいいくらいの大事なことなんだぞ、セルフイを俺が見込んだ男のもとへ嫁にやりたかつたんだ、だが、この街じゃもうだめだ、誰も相手なんか」

「だから、それがおかしいつて。ライア家のコンソネリーだつて言つてたじゃないか、セルフイなら召使だろうと、世間体関係なく嫁にもらうぞつて」

「あいつは俺が気に食わん、あのだらつと脂下がった目つきも、下心丸見えのところも、突き出たお腹も俺は許せないんだ。あんな男にはセルフイはやれん！」

「なら、マルホイはどうなの、彼セルフイに本気だよ。まあ、商家の雇われ人だけど、すつごい真面目だし、身分的にも一致してるじゃないの。いい夫婦になると思うんだけどな」

「だめだだめだーあんな平凡な奴ではセルフイは幸せになれん」

俺は外に止めた馬車に荷物を纏めてる最中、弟マルコと平行線を辿る問答を繰り返していた。

真剣に話す俺とは対照的に、マルコは算用盤弾きながら交易の見積もりをしている。

本来なら長男の俺がやるべき仕事だが、俺は交易に興味は今のところなかった。だから、祖父に任せてはいたが、祖父は祖父で家を守るため、放逸な性格の俺より伶俐で商才のありそうな若き弟にた

まに仕事の一部を任せて、今から期待をかけているようだ。俺はそれはそれで、良いとは思っている。

「まあ、でも兄貴、行ってきなよ」

「うむ、俺の失敗からセルフィーがこんなことになったが、俺はまだ諦めてないぞ、どんな手」

俺が鼻息荒くこれからの旅の抱負を述べようすると、弟が遮るように口を挟んだ。

「いいっていいって、うちのことは俺に任せてセルフィー連れてあちこちの街回ってくるといいよ、商人としても勉強になるし、運よければ、セルフィーの相手も見つかるかもよ」

「ああ、そうさせてもらう」

マルコを尻目に俺は荷物をどんどん馬車に詰め込んでいく。

太陽の光が真上から降り注いできて、幌の中も幾分熱を帯びてきていた。

ほぼ荷物を詰め終えて、俺は忘れ物がないか荷物をチェックしていた。

金を十分持ったし、当分の食糧、水、寝袋、後は

そんな時、弟が石垣の上から、さっきと違って少し改まった声色で尋ねてくる。

「でもさ、兄貴、一つ聞いてくれるかい？」

「ん？」

マルコは算用盤を弾く手を止めて、石垣からひょいっと降りると、俺を真正面から見据えてくる。

少し躊躇いがちだが、俺の胸の底を真っ直ぐ覗きこむような青い瞳で。

「話を聞こう」

「なら、お言葉に甘えて」

マルコは地面に転がっていた丸いすを器用に足で操って、俺の前

に立たせるとその上に腰掛けた。そして、鼻を挟むようにして顔付近に両手を持ってくると、しわぶき一つ漏らして静かな口調で話し始める。

「あのさ、セルフイを奴隷商から買ったのは兄貴だし、そのセルフイを兄貴がどうしようたつてそれは兄貴の自由だと思う」

「まあな」

「でも、正直、あの時最初は戸惑ったさ。奴隷つてのは大抵男に買われると、妾や娼婦扱いされるつてのが世の中の常だし」

「増세가キめ、どこでそんな知識身につけた？」

俺はからかいながら弟の額を指で弾くと

「いてえ、もう12だけ、それくらいは」

額を手でさすりながらおどけた様に手の平を俺に向けて左右に振った。そして、また口に手を当て、一つ咳き込むと話を元に戻して続けた。

「だけどさ、兄貴に限ってそんなことはないとは思ってたし、それならなぜ、彼女を連れてきたのか不安だった。兄貴は家に女性を連れてきたことなかったし、その目的がさっぱり分からなかったからね。けど、兄貴の変てこな理想を真剣に話すのを聞いていて安心したさ。そして、その気持ちもなんだか分かるような気もするんだ。

俺はさ、母が出て行った時、まだ2歳だったから、顔とか全然覚えていないだけだね。家に立てかけてる肖像画とか見ると、美人だったのは分かる程度さ」

「マルコ……」

マルコは右頬を指でつまみ何度か引つ張り始めた。

「気恥ずかしくなって言葉が詰まると、自然に表に出てくる弟の癖だ。

「だ、だけどさ、言わなくても分かっているだろうけど、セルフイは母の変わりにはなれないし、それに、彼女は大人の女性だし、そのーほら、理想もいいけど」

マルコは年の割りに大人びていて、歯切れ良く話す方だが、重要

な締めくくりの部分で口を濁す癖があった。だが、弟の言わんとする事は十分分かっていて。俺は金色の弟のおかつぱ頭に右手を置き、くしゃくしゃと撫でると、

「大丈夫、俺の理想は飽くまで理想に過ぎない。それをセルフイーに押し付けるつもりはない。本当に心に決めた男がいるなら、あいつの心を尊重するさ。ただ、今、あいつにはそういう男はいないみたいなんだ。だから、俺はセルフイーのために何人かこれはって男を見つけて、彼女にその、機会をだな……」

そこまで言くと弟は納得したように相好を崩した。

「分かった、後の事は任せて！俺は兄貴を信じてるよ、うまく行くといいね」

「ふ、生意気小僧め！ まあ後は頼むわ」

「了解！」

何か吹っ切れたように、弟はまたいつものからかうような調子で俺の肩を触って、屋敷の中へ戻って行った。



## 行き先。

家に来て多少意志の疎通が出来始めた頃、彼女の奴隷商に売られるまでの過程を尋ねた事がある。

サルビア大陸にある幾多の国々では、未だ戦争をしている国がいくつがある。

宗教的対立やら、領土争いやらなんやら。

理由は様々だが、俺が暢気に暮らしている間も、世界のどこかでは絶えずドンパチやっていた。

当時、セルフィーはそんな戦火の真っ只中にある田舎街に住んでいた。

鄙びた農村の、7人家族の農家の次女だったらしい。

金色の稲穂が揺れる静かな田園地帯。

時が止まったような閑静な風景を彼女は今も鮮明に覚えている。

だが、その静かな聖域に悪魔はやってきたのだ。

いかめしい鎧を身につけた男達を乗せた馬車が、数台、この静かな田園地帯に乗り入れてきた。

そいつらは戦場を渡り歩く傭兵部隊、ならずものの集団だ。

彼等は馬車から降りると、疾風の如く家々を回って食糧と女をかき集めた。

その際、抵抗する者達は猫や犬のごとく惨殺された。

彼女の父親も、セルフィーとその妹を浚っていこうとした傭兵部隊の一人に食い下がった。

傭兵隊の隊長はそんな父親を、蠅を払うが如く、槍でなぎ払って殺した。

夫の無残な死に泣け叫ぶ彼女の母親。

幼い彼女はその惨状の一部始終をただ立ち尽くして見ている他なかつたと言う。

当時いや、今のご時勢、そんな光景は特に珍しいことではない。だが、時が流れても、セルフィーはその光景が目には焼きついて離れないらしい。

話を聞いた当初は、セルフィーが哀れに思えて、彼女の実家に返してやるうとも思った。

けど、当時は、まだ彼女の母国リーズは隣国ライズと戦争中だった。

その時は返してやりたくても、世情がそれを許さなかつた。

だが、近頃、リーズとライズは休戦協定を結んで一時の平穩を取り戻したらしい。

「セルフィー、リーズの家族に会いたいだろうか？」

「はい、まあ……」

俺は少し考えるそぶりをしながら、彼女の横顔を観察する。

彼女は翳りのある表情で俯いていた。

不安と恐怖、諦念、それらが交ぜになったような複雑な表情を浮かべている。

「もう、みんな死んでるかもしれないし、それに家は……」

彼女が浚われてから、軽く見積もっても10年以上は過ぎている。住んでいた家は愚か、その村も残ってるか怪しい。

別の人間が移り住んで……

彼女の思い描く絶望にも似た気持ちは、想像に難くなかつた。それでも

「まあ、なんだ、行って見なけりゃ分からないしさ、なあ……？」  
俺は言葉に詰まりながらも、努めて笑顔を崩さずに彼女に促した。

「はい、ピロ様がよろしければ」  
「よっし、決まりだ」

ぶち殺す。

「爺ちゃんも諦めてたな」

「まあ、ピロ様の事はマイル様が一番良く分かってらっしゃいますから」

「引き止めても無駄ってか？ まあな！」

リーズはジルから北東3000キルティの位置にある。馬車では軽く見積もっても1ヶ月はかかる道程だ。直線コースを辿れば、もつと時間を短縮できるのだが、それにはバルー山脈を越えねばならない。しかし、そこは急峻な山々が連なりとても馬車では超える事はできないので、山の麓付近からリーズへ繋がる迂回路を通って行く他なかった。といっても、その麓までも結構な距離がある。

「それにしても、最近、山賊や盗賊が出るらしいですよ」

「ああ、分かっている、その点は万全だ」

できるだけ街を経由していくコースを最初から地図で確かめてある。ならず者の襲撃に遭わないために、わざわざ整地された人通りのある道を走る事に決めていた。

「ザンルって賑わってますね」

太陽が西方の山並みに傾き空に赤みが差してきた頃、宿泊する予定の街へたどり着いた。

「ああ、ここは宿場町だからな、三つの街道が交差する場所だけあって、旅人や巡礼者、商人、その他諸々の往来が激しい街だ。今日はここで一泊するぞ」

「はい、分かりました、ふー暑い」

彼女が頭の被いに手をかけたとき、

「待った！ それは脱ぐな」

俺は慌てて彼女の手を握って被いを元に戻した。

「すみません、でもこの服装暑くって」

セルフィーには顔から足先まで覆うこげ茶色の襦袢を着せていた。ほっかむりの襦袢は顔の辺りだけ開いているが、その部分にも紫色の薄いヴェールを垂らしている。

「分かっている。だが、もう少し我慢してくれ」

「はい……」

これは言うまでもなく、セルフィーの虫除け対策だ。ジルでも外を歩けば人が振り返る美貌の持ち主だけに、こうして襦袢で覆っておく必要があった。とはいえ、このままじゃ可哀想だ。

「後で、この街でもっと薄い変わりの衣服みつけてやるから、それまでな……」

「よろしく、お、お願いします」

もうすっかり日は落ちていたが、このザンルの大通りは闇に侵されるどころか、益々色鮮やかな明かりに満ちて、行き交う人々のざわめきや足音で溢れていた。

「あの店……」

セルフィーがどこかを眺めながら躊躇いがちに囁いた。

「ああ、宿の手配は済ませたんで少し見に行くか」

「はい！」

街路の両側に立ち並ぶ旅籠屋や木賃宿に挟まれて、雑貨や土産屋などの店がちらほら目につく。

セルフィーは迷いのない足取りで往来の人々を巧みに縫って一軒の店の前までやってくると、彼女は好奇に満ちた目を輝かせた。

「これ、綺麗な宝石ですねー」

「ふむ、淡い緑に青みがかかっている、これはサーチムストーンの輝きだ」

「何ですかそれ？」

「魔力を帯びた鉱石だ。魔道具や魔よけに良く使われる石だ、以前はサファ……」

「なるほどー」

彼女は宝石の夢中になっていて、途中から俺の話など聞いていなかった。

女の買い物は長いのは、嫌というほど分かっていた。俺は軽くため息をつくると、店の狭い通路に体を割り込ませて中に入り、置いてあったスツールに腰を落とした。そして、なんとなしに店内を見回した後、役に立ちそうな魔道具がないか物色することにした。

「キャ〜〜これいい！」

だが、程なく女の甲高い嬌声が店の外から聞こえた。反射的にそちらへ視線を移すと、目がちかちかするような派手な色合いの服を着た女が一人、セルフィーの隣に立ち尽くして、悲鳴にも似た不快な声を上げながら宝石に見入っている。

「……………」

襟割りの開いた妙に胸の谷間を強調した服装といい、ぎらぎら放射する金属の飾りを縫いこんだ真紅のドレスと言い、遊女かなんかの類だろう。俺はその女の甲高い声が酷く耳障りで、早くどっかいけ、ブスと心の中で罵言を吐いていた。俺は昔っからこの手の類の女を見るとなぜか苛立ちが募ってくるのだ。

「どけよ、汚いの」

「わ……………」

だが、そのけばけばしい女の隣へ、突然、でかい凶体の男が割って入ってきた。

前かがみになって陳列台を見ていたセルフィーは男の体に押し出され、派手に外へ弾きだされる。

「糞が……………」

俺は慌てて外へ出ると、尻餅をついて倒れていたセルフィーを見つ、手を引いて助け起こした。

「おい、もういいだろ」

「まだよ〜もう少し見させて〜」

「じゃあねえな」

スキンヘッドのいかつい男は舌打ちすると、身を屈ませて店内に入っていく。

この野郎、セルフィ吹き飛ばしておいて

俺は内に煮えたぎった怒りを隠さず、すぐさま後を追うと、中で踏ん返り返って座っている、いかつい男の顔を正面から睨み付けて怒鳴った。

「おい、その豚！ ぶち殺してやる！」

おわり。

俺は生まれて初めて敗北を味わった。

あの後、大男を外に連れ出しタイムンに持ち込んだまでは良かった。

だが、相手が悪かった。野卑な風貌から侮っていたが、奴は只者ではなかった。

あの男がその巨軀を屈むだけで悠々と店の中に入った時、可笑しいとは思ってはいたが、

まさかあのような魔術を使おうとは

俺は、変幻自在に体を伸縮、膨張する奴の前では赤子も同然だった。

剣の切っ先は悉く空を切って奴に掠りもしなかった。

それならばと、剣術から魔術へシフトしようとした間隙を奴は見逃さなかった。

奴の長く伸びてきた右ストレートを受けたところまでは覚えてる。

だが、次に目が覚めたときは俺は地に伏せていて、奴の姿はどこにもなかった。

その後、敗北の辛酸をかみ締めながら、町外れの暗闇で呆然と夜風に当たっていたが、不意に胸騒ぎがして立ち上がった。俺は奴との戦いでダメージを負った体を引きずりながらも、セルフィーを探しに元いた店に戻る事にした。そして、あの店にたどり着いてみれば、あれほど明るかった大通りは暗く閉ざされていた。店は既に鎧戸ががちり閉じられてどこも開いていない。人影もまばらなうら寂しい大通りを、しばらくセルフィーの姿を求めて彷徨い歩いたが、彼女の姿を見つける事はできなかった。



時間が遅いから宿屋に戻っているのかも微かな希望を抱いたが、やはりそこにもセルフィーはいなかった。部屋のベッドに腰掛けて、せわしなくセルフィーの行き先に思いを巡らしていると、ふいに嫌な予感が胸の底から湧きあがってきた。

まさかあの男に浚われたんじゃ

俺はセルフィーにタイムン前にあの店でじっとしておけと命じていた。

だが、もしかしたら俺の言いつけを破って、あのタイムンの場の近くで俺達の戦いを見ていたのかもしれない。そして、俺が地に伏せたのを見て、木陰から飛び出してきたのかも。

もしそうであるなら、慌てて飛び出てきた拍子に被いが頭からずれて顔が露出した可能性もある。

大男はそれを見て、あの美貌だ。良い女じゃないか、俺のスケにしようってことになって、浚っていたのやもしれぬ。これは俺の想像に過ぎないが、とはいえ、事実、その夜彼女を見失って以来、何ヶ月も彼女の消息は杳として掴めなかった。

俺は方々彼女を捜し歩いたが、ついに金が尽きたと同時に心も折れてしまいセルスタイン家に戻ることにした。そして、煩悶と彼女の消息を日々案じながら3ヶ月の月日が経ったころ 手紙が届いたのだ。

真つ白な羊皮紙にはこう書かれていた。

「ピロ様、お元気ですか 中略」

送り主の名は書かれていなかったが、文面の最初を見てそれがセルフィーの筆致であることが分かった。

手紙の内容を掻い摘むところだ。

ある男と幸せに暮らしているのでこちらにはもう戻れない。その

男とは、やはり俺が予想したとおり、あの夜俺とタイマンした男だった。あの男はさるやんごとなき身分の人間で、野卑な見かけによらず性格は温和で、あの日も姉思いの彼は、夜道は何かと危険だといって、あの街へ買い物に泊りがけでかけた姉に付き添いでやってきていたらしい。

だが、あの時俺に喧嘩を売られて、少々戸惑ったらしいが、売られた喧嘩は理由はともあれ買う主義らしく、俺をタイマンでしとめたのだが、さすがに気まづくならしく、その夜のうちに姉を連れて馬車で自分の家へ引き返そうとしたのだが

「な、女なんて皆こんなもんだよ、兄貴」

「しかし、信じられん、あのセルフイが倒れている俺を見捨ててあの男に哀願してついていったなんて、そんな馬鹿な話だ！」

「いや、事実を見ようよ、セルフイはずっと兄貴から逃れたかったんだよ。あの夜はその絶好のチャンスだった。兄貴は2年の間彼女を理想の女になるよう教育しようとしたけど、彼女には重荷でしかなかったに違いない」

それだけ言うと、マルコはうるたえる俺の震える肩に手を置いて、

「諦めな……」

「そんな馬鹿な~~~~！！」

俺の絶叫の声は夕暮れの空に吸い込まれ、勇み足で駆けていくちぎり雲に運ばれていった。

その後、俺が以前にもまして、女を信じられなくなったのはいうまでもない。

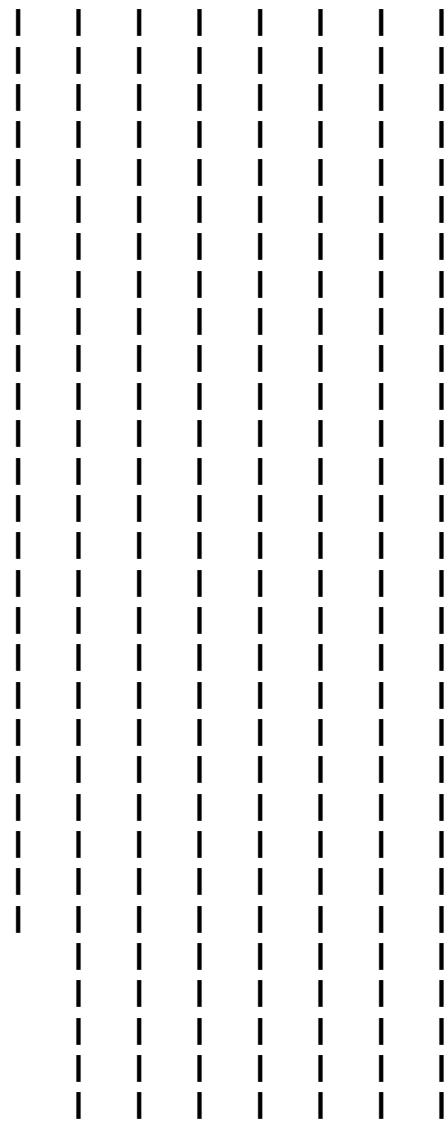
おわり。(後書き)

様々な謎を残していますが、一応オチがついたということですので……

冬眠。(前書き)

またしばらくこの作品は長き眠りに入ります。

冬眠。



拓再び。(前書き)

原点回帰。

元通りの話へ。

本当に気まぐれに書いていきます。

拓再び。

また主人公は俺がすることになった。

舞台はまた日本で。

今回は探偵事務所の話の続きではない。

ただ、日本で俺が散歩するだけ。

物語にすると面倒なので、俺がそぞろ歩きしたものが話？  
みたくなっていけばいいかな。

まあ、そんなかんじでよろしく。

-----  
-----  
-----  
-----  
-----

## 抱負

俺は現実世界の日本では高校二年生だ。  
はつきり行って、凡庸で目立たない人間だ。  
そんな俺が仮想世界にも日本を創造した。

理由なんて特にない。

ただ、現実ではできないような事をここでやる。

まあ、初期の目的に回帰したわけだ。

前も言ったが、ここでは俺は神だ。

俺の持つ携帯に何かを書けばどんな物でもこの世界に反映できる。  
これからまた、仮想日本の中を彷徨いながらその使い道を考える  
ことにする。



## 怨霊召還。

俺は夜も深い静まり返った住宅街を歩いていた。  
特に行くあてはない。

ただ、深夜に外出すると血が騒ぐのだ。  
その昂揚感たるや、狼男が満月の夜に変身するときの高ぶりと同じ。  
かもしれない。

手がかじかむような夜気が体に纏いつく。  
俺は肌寒さに体を竦めて、左右をきよろきよろしながら歩を進めていた。

青白い闇に沈む家々が通りの両側に林立している。  
この辺りは住宅街といっても、郊外の高台にあり市の中心地より離れていた。

深夜2時の通りは当たり前のように人影はなく静まり返っている。  
またしても俺は携帯の力を頼ることにした。

瞬間移動の力だ。  
頭に思い浮かべる事で、一度行った事のある場所へ移動できる超能力。

仮想世界の日本まで、律儀に歩く必要はない。  
ここでは俺は神様なのだ。

神様といえば、古来より人知を超える力を行使できる者と相場は決まっている。

だから、俺はこの街でその力を存分に奮うつもりだ。  
そうでなくては、仮想世界を作った意味がないのだ。

さあ、派手にやるぞ。

まずは一人は嫌だ。

話し相手が必要だ。

「凶悪な怨霊だが、俺とは主従関係にある、人には見えない」

これを携帯のディスプレイに文字うちしてOKを押す。

今打ったものがこの世界に反映された。

と、同時に己の軽薄さを悔いる。

夜の基地外じみたテンションの高さに任せて、えらいものを……

呼んでしまった。

『い、いるの？』

『はい、ご主人様、あなたの背後に憑いています』

彼とは心の声で話す事ができた。

既に背後霊と化しているらしい。

特に肩が重いつか、背筋が寒いといった感覚はない。

『よ、よし』

俺は不思議と怖いという思いはなかった。

相手の声が妙に澄んでいて、想像とは違っていたからだ。

まあ、設定反映の正確さを信じているせいもある。

もうこの携帯とも長い付き合いだ。

さあて何しようか。

取り合えず、彼と会話かな。

『お前さ、特技ある？』

『特技ですか、そうですね、憑依にかんしてはエキスパートだと自負しています』

誰かに取り憑いて、好き勝手に他人の体をもてあそぶって事だよな。

俺は短く刈った髪を左手で弄りながら、辺りを見回した。

親王。(前書き)

デキトー。

## 親王。

俺は一時的に破壊衝動を抑えて、怨霊君と今後の方針について話し合う事にした。

「あのさ、怨霊って言えば、平安時代とかの菅原道真の怨霊とか有名だよな、大宰府に左遷された恨みで、天皇家の皇太子崇って殺したとか、雷神となって建物に雷落としまくったとか」

「ああ、それは濡れ衣というもの、あの時代は天変地異が凄くて、疫病もはやってたし、いっちゃんんだけど、生活環境も良くなかった。だから、若死にしてもおかしくなかったし、そんな自然死のよくなのをなんでも菅原道真公に押し付けて酷い話っすよ」

「まあ、昔はしらないけどさ、俺が言いたかったというか、知りたかったのは君の実力がどの程度かかってことだよ」

召還した怨霊君、何が出来るかで遊びの幅も変わってくる。

凶暴と銘打ったのに、何だか穏やかな奴なんで、まさか、憑依しできない無芸な奴なのでは。

そんな思いに駆られて今コミュニケーションとって、彼を値踏みしている最中だ。

「じゃあ、ちよっと2、3人殺してみましようか？」

「え……」

彼の声色がさつきとは別人のように重々しさを増した。

と、次の瞬間

目が眩むような白い閃光が視界に満ちた。

思わず目を瞑ってしまうが、間髪いれずにかなり近くで凄まじい轟音がこえました。

堅い岩に鉄球でも落ちたような、ゴッソんっていうような音だ。

俺の立つ位置からそう遠くない場所にある家々に炎と煙が立ち上っている。

闇に赤々と照らす炎は否応がなく、俺の興奮を掻き立てた。

「おお、今の君がやったのか？」

『はい、やつちやいました、スカツとしましたよ』

だんだん、口調が変わってきている怨霊。

内の凶暴性が抑えきれないといった様子だ。

最初のご主人様に気を遣って猫を被ってたな。

「良く分かった、親王、仲良くやろう」

「親王ってなんですか？」

「これから君に敬意を表して名前をつけてやったんだ」

「あ、ありがたき幸せ」

こうして、また俺達は何を企てるか、子一時間話し合う事にした。

仲間を呼んだ。

「拓よお、もちつとしゃきつとできん？」

「言われてもな」

「ち」

難癖つけのエドワードは舌打ちをして、背中を向けた。

「拓く拓く、タンポポが咲いてたよ！ 綺麗だよ！」

「ああ、綺麗だね、斜里」

「拓様、気のせいか大所帯になってませんか？」

「親王細かい事は気にするな、俺は神なんだし色々できるんだよ」  
確かに増えた。

俺が親王とこの世界で何をやるかについて頭を悩ましてたらこう  
なった。

エドワードはちょび髭を鼻の下に生やし、シルクハット被り燕尾  
服を纏った30代のオヤジ。

タンポポに浮かれてたのは年のころ、13,4の少女斜里。

他にも

「拓様、こういうのはどうでしょう、親王の力を利用して宗教団体を  
創設して拓様が教祖になって信者を集めて」

「いや、俺は人の上に立てるような人間じゃない」

今合理的かつ現実的な案を出したのは秘書のマルフォイ。

紺色の紳士服で身を固めた一見リーマン風の男。頭脳明晰、生ける  
知恵袋。怨霊が右腕なら、彼は俺の左腕候補だ。

まあ、なんか俺があまりにやる気ないので周りに相談相手を増や  
せばと

安易に考えて携帯で次々と家来を増やしてしまった。

## 迷い蛾

「ドツペル君、俺の家は任せたよ」

「はい、拓様、お気をつけて」

家を出る事にした。

理由は単純、家族とのしがらみはここでは不必要だからだ。

ただ、突然、息子がいなくなつては大騒ぎになるだろうと、ドツペル君に俺の代わりになつてもらい、この家で暮らしてもらつことにした。

「いいの？ 拓」

「いいんだよ」

俺は悲しそうな顔をわざと抑えて低い声で斜里に返す。

「家出かよ、まだ高校生だろお前、神様だかなんだかしらないが、親不孝ものめ」

小憎らしい顔でエドワードはほざいた。

『まあ、いいじゃねーか、拓様にも考えがとおりになるんだ、口を慎しまんかエド』

親王は俺に対しては敬語だが、ほかの連中の前では上から物を言う。

つまり、上位関係は俺、親王、そのすぐ下に越えられない壁があり、それを隔ててほかの連中なのだ。

「かーあんに指図される覚えはないね」

「エド、口は災いのもとだ」

といつても、その相関図は親王の頭の中だけに存在する。

ちなみに、親王の姿は誰にも見ることはできないが、その声を予め決めた範囲にある人間に聞かせる事ができるようだ。だから会話が成り立っている。

俺は無能な仲間はいらない。

だから、ここにいる連中は皆、特殊な能力を一つ備えさせた。まあ、親王だけは怨霊ということだけあって、幾つか能力があるようだが。

「斜里、迷い蛾頼む」

「はい」

薄暗く人の姿のない公園で、野宿  などするつもりはない。

斜里は首から提げた小さな笛を口にくわえると、闇に不思議な音を響かせた。

すると、俺の顔際を何か白っぽいものが掠めた。

「なんだそれは？」

「迷い蛾だ」

「蛾？」

斜路の小さな手に舞い降りた白い立派な羽を持つ大きな蛾。胴体の部分は太く、卵色の柔毛がみっしり生え揃っている。

「ただの蛾ではない」

俺は薄笑みを浮かべてエドを眇目で眺める。

「な、なんだ、きもちわりいな、なんだよそれ」

「すぐ分るさ、じゃ、斜里頼むわ」

「おっけー」

斜里は端正な白い顔に悪戯っぽい笑みを浮かべてエドを見た。

「な、なんだよ、なにするつもりだよ」

ただならぬ気配を察したか、エドは青褪めた顔を引きつらせた。



消した。

前の設定けした。

また荒野で一人だ。

なんつーか、俺の想像力のなさには辟易している。

やめだ。

1から出直した。

取り合えず、俺は荒野をだらだら歩きたい。

歩く事にした。

もう現実の俺はよろよろなんだ。

脱力感の塊。

せめてここで何か楽しい事でもって思うが、

悉く携帯の無駄利用に終わっている。

だから、無理に弾けなくてもいいなって。

ただこの世界を歩くだけでもいいや。

設定はさ、もう適当選ぶぜ。

俺はもう勇者でいいよ。

で、魔王やっつけにいくよ。

そんな世界だ。

反映。

世界観はランダムだ。  
どんな風になるかしらん。

俺勇者。

俺は勇者だ。

多分、勇者だと思う。

襤褸衣を来てどこかの村？ キャンプ？ にいるようだ。

判別がつかないのは、荒野に濃緑のテントがいくつもあるからだ。テントってことは何かの移動集団か？

砂嵐が酷い。

吹き荒れる風が真っ向から俺の顔に砂をぶち当ててくる。

首筋辺りを砂の礫がちくちくと刺してくる。

それでも、目や鼻や口には何も入ってこない。

俺は顔に何か装着しているらしい。

触った感触はかなりごつごつしている。

何かのマスクだろうか。

俺はこの一員なのか？

それならテントにお邪魔して砂嵐を避けたい。

「勇者」

「はい、なんでせう」

思わず返事をしてしまった。

いくつがあるテントの一つから、白い手がにょきつと現れた。

俺に向かつて手を振っているように見える。

「こつちへおいで」

女性の声だ。それも若さを感じさせる甲高く澄んだ声だ。

俺は視界の悪さなどものともせず、ただ、その白い手を目指して歩を進めた。

「よくきたね、見知らぬ人」

「え、知らないの？」

「当たり前よ、ただ、砂嵐の中で突っ立ってるから可哀想だと思っ  
て呼んでみただけ」

テントの中にいたのは、14、5歳と思われる少女だった。

絵に描いたような美少女、色白、栗色の髪を方まで垂らして、

何故か右手にはぎざぎざのついた鉄の棍棒みたいなもの持っている。  
体には雷の毛皮みたいな物を巻きつけている。

よくあるパターンだなっと、俺はため息をつくど、

「やー、君名前なんていうの？」

「知らない」

「名前ないの？」

「私たちは名前を許されてないの」

彼女は俯いて、やや額の上辺りに陰影を漂わせた。

良く分からないが、たぶん、この世界では身分の低い人なのかも  
しれない。

「よし、じゃあ、名前をつけてあげよう」

「それより、お願いがあるの」

「なんでせう」

女の子は俺に顔を近づけてきてじっと見つめてくる。

黒目がちの大きな瞳は、まだ幼いかんじだが俺と違って妙に押し  
の強さを感じる。

俺は彼女の視線に押さえ込まれるように、顔を後ろにそらせた。

蛇ににらまれた蛙のように、俺は何も言えず、ただ彼女の長い沈  
黙を受け入れていた。

「うーん、あんまり強そうに見えないけど、いいわ、お願いってい  
うのはね、ここから私を連れて逃げて欲しいの」

「ええ」

「捉われの身なのよ、もうすぐ奴等が帰ってくるわ、お願い、私を  
連れて一緒に逃げて！」

彼女が無理やり右手を掴んでくるので、俺はその手を払って、

「いきなりそんなこと言われても……」

「お礼になんでもするわよ」

「へ？ な、なんでも？」

無意識に彼女の胸元付近の獣服の盛り上がり目に目が行った。

なんとこの役得な展開だ。

しかし、こつこつ考えた。

こつこつ美味しい展開にはそれに見合った危険がつきものだ。

だが、俺もまだ若かった。テントの外は砂嵐が吹いて視界が悪い。

そして、まだ誰の姿も見えなかった。

「よし、俺についてこい」

「うん！」

彼女の手をとると、俺はテントを勢い欲飛び出した。

どーでー

彼女の名前はヤドカリに決めた。

「君の名は今日からヤドカリだ」

「何それ？」

「知らなくていい。だけど、君はこれからヤドカリだ、よろしく」  
彼女は首を傾げながらすぐには答えなかったが、俺が微笑み手を差し出すと強く握り返してきた。

オーケー。ヤドカリ成立。

俺達はテントを飛び出した後、砂嵐の中を当て所もなく彷徨った。砂の海に足を取られ、追っ手の追跡をきしながら、やっとたどり着いたこの場所。

眼前に茫漠たる黒い水面が横たわり、小波の音が夜の闇にこだまする。

潮の香りが風につけて匂い、潮騒の音が耳の奥で碎ける。

目の前に広がる水溜りは海にしか見えなかった。

背後を振り返ると月明かりに照らされ、青白い闇にぼんやり小屋の群も見て取れた。

海、砂浜、家々から連想するに、ここはどこかの漁村のようだ。

だが、その風景を見てもにわかには信じられなかった。

砂嵐が吹くような、たぶん、砂漠と呼ばれる場所を闇雲に歩いて、海に辿りつけるものだろうか。そんな疑問は最初俺を困惑させたが、まー、俺の創った世界、どんな理不尽だって同居できるだろう。そう開き直って、途中から詳しく考えない事にした。

俺は取り合えず、周りを見渡して人気がない事を確認すると、

「さて、ヤドカリ」

「はい」

俺は放ちかけた言葉を飲み込んで喉を鳴らした。

その空嚙下の音は彼女に聞こえたに違いない。

彼女は俺の心の内を察しているらしく、真顔になっているだろう、俺の顔の接近を拒もうともしない。

鼻息だつて荒いし、息も荒いのに、手でそれを押しつけようという素振りを見せない。

本当になんでもしちゃうよ、いいのか？ 本当にいいのか！？

半分諦めたように目を硬く閉じて、その状況を受け入れようとする彼女に目で問い続ける。

「はは、冗談だよ」

「ええ……」

「何かすると思った？」

俺は彼女の両肩に触れていた手を静かに離して立ち上がった。

そして、今にも流星となってこちらへ降ってきそうな明るさの星々を抱く夜空を眺める。

「正直……」

「見くびられたもんだな」

齒の浮くようなセリフを言った後、俺は背筋に這い回る冷気の存在を感じていた。

ぞくぞくとした、例えようなない快感と嫌悪が渾然一体となって俺の体を内から突き上げる。

今すぐにも海に飛び込んでしまいたい、そんな高ぶりを抑えながら彼女の反応をじっと待つ。

タッタッタツ。

静まり返った砂浜を掛けていく彼女の軽い足音が聞こえて  
え？

「バイバイー！ ありがとねー！」

「ちよつとまてや！」

俺は彼女の後を全速力で追ったのは言うまでもない。



## 勇者とは。

彼女を再度捕虜した後、砂浜に座らせて尋問を続けていた。  
何故逃げたのかは敢て問わなかった。

その答えは俺の間抜けを露呈することになるからだ。

「ところでよう、何でお前は俺を勇者と呼んだんだ？」

「フェイスマンつけてるからよ」

「なにそれ？」

俺が尋ねると、彼女はかっと目を見開いて驚いたような顔をした。  
青白い月の光は彼女の顔のぬけるような肌の白さをより一層際立たせている。

「そんなのも知らないの、勇者がつけるお面でしょ」

彼女は呆れたように言うと、俺の顔面をわしづかみにした。小柄な体に似合わず、俺の顔を掴めるほどそのしなやかな指一本一本は長かった。ちょうどプロレスラーが片手で相手の顔面を大きな手で掴むように彼女の親指と薬指は俺のこめかみにめり込んでいた。

「い、痛いじゃねーか、何て握力だ」

「ほら、これよ」

「いつ……」

先ほどまで顔面を覆っていたものが、ブチッとゴムがきれるような音とともに彼女によって引き剥がされた。そして、その表面を彼女は俺の目の前に押し付けてくる。

白い能面、いや、鉄火面、とにかく形容しがたい模様が施された仮面だ。

これが俺がさっきまでつけていたものらしい。

目と鼻と口の辺りは凹んではいるが、隙間が見当たらない。

さっきまでどうやって息が吸えてたんだろう。

「これ勇者がつけるん？」

「そうだよ」

俺は腕組みをして首を傾いでしばし言葉を捜した。

なんかこのみっともない仮面をつける勇者ってのが、少し哀れと  
いうか。

どういう意味合いでつけてるのか、いや、その前に勇者ってのは  
何なのか。

この面妖な仮面みてるよ、勇者のこの世界での位置づけに興味が  
湧いてきた。

「勇者ってどんな人？ 何する人？」

「え……」

彼女は顎に人差し指を置いて、虚空をみつめたまま黙り込んだ。

短時間では返答しにくいほど、勇者の説明には時間がかかるのだ  
ろうか。

俺は手持ちぶたさに、白い砂を掴んでは、手の平を上に向けて、  
指と指の間からさらさら流れ落ちる砂の行く末を目で追っていた。

「あ、たぶん、強くて格好いいよ、何する人かは分かんない。ただ  
強くて格好よくて、そのお面をつけてるって死んだ婆ちゃんから聞  
いたわ……」

「そう……」

不遇。

「おじさん、イストまで行く？」

「ああ、これから帰るところだ」

「ヤドカリの人好きする顔を見た瞬間、親父は相好を崩した。

「乗せてくれる？ 彼と一緒にだけだ」

「いいけど、あんま後ろでデレデレしないでくれよ」

交渉成立、藁が積まれた荷台に二人して仰向けに寝転がる。

「ヤドカリ、君はなんか口達者だし気安いね」

「そうかしら？」

「ああ、なんていうか自然だ」

「有難う！」

「いや褒めてはいない」

俺はヤドカリの気安さに好意を持ったのは本当だ。

「ただ、同時にそのあまりにあけすけで短絡的な行動には危うさを感じていた。」

「なんで、むすつてしてるの？」

「むすつとはしていない、ただ、考えているんだ」

「でも、まあ、一人当て所もなく徒歩で歩くよりは彼女がいて良かった。」

「今から向かう場所は彼女の居住区があるイストという街だ。」

「俺がこの辺りは不案内だと言ったら、彼女の家を招待してもらったことになった。」

「捉われの身の彼女を助け出してくれたお礼らしい。」

「視界には雲ひとつない青空が映りこんでいる。」

「首を左右に捻れば、黄金色の稲穂が重く頭を垂れている。」

「長閑な田園風景。」

その風景はありふれているが、俺に心地よい安らぎをもたらしてくれる。

ああ、このまま寝てしまいたい。

ジャラジャラ

長閑な静寂を破り、まどろみに溶け込もうとする俺の意識をしばしば現に引き戻す不快な金属質の音。

さつきから断続的に俺の眠りを妨げ続けていた。

「うるせーなー」

「あ、ごめんね……」

彼女は膨れ上がったズタ袋を大事そうに抱え込んだ。

「でも、大切な売り物だから」

「ふー、しゃーねーな」

あの薄汚い袋の中には彼女が捉われていた採掘団の連中のテントから巻き上げた品一色が入っていた。

「そんなん売れるのかよ」

「売れるわよ、それなりに。さんざんこき使われたんだからこれくらい持つててもいいでしょ」

一見がめつく見える彼女だが、その言い分も最もだと思う。

彼女はイストで誘拐された後、奴隷商に売られ、採掘団に労働力として買われた。

採掘団は彼女の腕っ節の強さを見込んで彼女を連れて行くことにした。

彼女は明けてもくれても地質調査の手伝いで、スコップであらゆる地層を掘まくってたらしい。

「しかし、よく君みたいなお断のならない子を見張りもつけず一人残していったな、その採掘団も」

「間抜けなのよ、誰かさんみたいに」

「そうかもね……」

言いたい事言いやがる。

「でもまあ、それは私が彼らに信頼された証拠でもあるのよ、彼らが近くの町へ出かける時に、荷物番として置いてかれたんだから」

「はあ、君口だけはうまいからな」

「口だけじゃないわよ、腕つぶしの強さもあるからこそ、女である私一人が置いてかれたのよ」

確かに俺の顔を掴んだ握力は大したものだった。

華奢な見かけからは想像できないくらいのを彼女はその体に秘めている。

「こんなに腕細いのになあ……」

「何じろじろ見てるの？」

「いや、なんとなく」

「言いたい事は分かるよ、こんなに弱そうな私がなぜって顔ね」

「まあ……」

「あなたは一つ誤解してるわ」

俺は誰？

「 を助けてくれたそうで有難うございます」

「 ？ 」

海老のように腰を折り曲げたヤドカリの婆ちゃんは、俺の白い力  
ツプに、

飲み物を注いでくれた。

そして、大儀そうにテーブルの傍のぼろい揺り椅子に腰掛ける。

婆ちゃんはヤドカリに目配せして、なんだか困惑している様子だ。

「 えっと、拓様、あなたどこから来たんですか？ 」

ヤドカリはここへ来てから、俺に対して丁寧語を使い始めた。

まるで、VIPでももてなすように。

「 知らん 」

「 シランだそうよ、お婆ちゃん 」

「 え？ 」

「 いて…… 」

俺が口を挟もうとすると、彼女の木靴で思いつきり足を踏まれた。

「 まあまあ、そんな遠くからわざわざ、 の友達だそうで、ごゆっ

くりしていつてくださいなね 」

「 お、おお 」

俺が愛想笑いを返すと、老婆は安心しきった様子で奥の部屋へ姿  
を消した。

「 ちょっとあんた！ 」

「 はい、なんでせう 」

テーブルに置かれたカップを両手で包むようにもって、ほんわか  
と出された飲み物を啜る。

紅茶に近い味のそれは、喉越し柔らかで、旅で疲れた俺の体に染  
み渡っていく。

「なんでそんなに物しらないの？」

「さあ」

「仮にも人間ってことはこの世界の常識くらい知ってるはずでしょ」  
「知らんがな」

俺はなぜヤドカリに糾弾されているのだろう。長いすに足をかけてまで怒る彼女は、高校の中間テストで欠点取ったときの母親の形相とそっくりだった。美人なのに、もったいない。

「で、ってなんなんだ？」

「ふー、本当に知らないのね……」

「ええ、まあ」

彼女は俺の無知の理由を聞くのを諦めて、  
「何なのかを話してくれ。」

掻い摘んで言うところだ。

今いる場所はダルっていう国のイストという地区だそうだ。

ダルってのは、人間が納めている国だ。

で、イストは元々は魔族と人間のハーフが寄り集まってできた独立国イストにあったのだが、

ダルがイストを侵略して、イストという国は史上から消えうせ、ダルの領土と一体化した。

それが500年前のことらしい。

そして、ダルの当時の王様は、飲み込んだ元イストの人々に様々な法律を適用した。

支配側だから当然といえば当然のことだ。

その一つに、

・元イストの民、名を名乗る事を禁ずる  
があつたのだ。  
でも名前がないと管理は大変だ。

よって、一人一人や1とか、記号と数字で無限の組み合わせをつくり、

それを各々にあてがって、この国の異民管理局が一人も漏らさず帳簿に記載して異民（元エストの民）を統制しているわけだ。

「なるほど良く分かりました」

「良かった で、」

彼女はテーブルの向こうの席にどかっとな腰掛けて、胸元で人差し指を立てたまま目を閉じた。

何か考えているのを示唆するかのように、指を振り子のように左右に振っている。

だが、その早い振幅を突然止めたかと思うと、指先をこちらに向け、目を幾分吊り上げて言った。

「で、あなたはどこから来たのよ？」

「知らん」

それから、堂々巡りがしばらく続くことになった。



なめんな！

なるほどね。

彼女は魔族と人間のハーフだからあんなパワフルなんだ。

見た目人間に近いんだけどね。

彼女の一族は皆、表面上は人間の姿をしているが、内には魔族の血が流れていて、

人間に見えても、腕の力が発達していたり、視力が異常に良かったりするらしい。

ただ、ハーフといっても、街を見渡せば分かるがいろいろだ。

頭だけ牛のような顔で、その下は全部人間のパーツでできているとか、

蛇のように地べたをぬめぬめと這うが、その体の側面から両手が生えてたりとか、

魔族と呼ばれる異形の民族の特徴が顕著に現れている人たちもいる。

「しかし、ここの街ってなんか寂れてない？」

「そうかしら」

イストの街の景観はお世辞にも美しくもなければ、整然としてもいなかった。

木材を利用した家々が多い。

これはイストの伝統的家屋なのだろうか。

まあ、形は微妙に変わっているが、さすがに俺の携帯からできただけあって、創造力貧困からくる平凡な家々が立ち並んでいる。三角屋根とか、平屋根とか、レンガ造りとか、和洋折衷な造りが混在している。

「は「悩ましい」

「何が？」

「いや……」

説明しても彼女に俺の悩みなど伝わるわけがない。

俺は彼女の木造三角屋根の家のテラスにある椅子に座って、街を見渡しながら頭を悩ましていた。

一応勇者が魔王を倒す話でいいやみたいな設定で作った世界がこなわけだけど、俺は一体どうすればいいのだろうか。

仮面を被っていたから勇者であることは確かはずだ。

そして、魔族の国フレには魔王は実在するらしい。

しかし、俺は魔王とやらと面識もなければ、倒す理由も今のところ見つからない。

倒せる実力もたぶんない。

となると、何から始めれば……

一応世界を作って目的が設定されているのなら、何かしなければいけないはずだ。

「ヤドカリちゃん」

「なーに？」

「俺何すればいい？」

「ん？ また変な事聞いわね」

彼女は給食のおばさんみたいな、白い頭巾を頭に被って純白のエプロンを身につけている。

さっきまで晩飯作っていたのだ。

「家事の手伝いでもしたいの？」

「いや、したくない」

「したいと言われてもさせられないけどね」

彼女は珍獣を見るかのような視線を俺に注いでいる。

この子どもから来たんだるか、ガキくさいから、どこかのボンボ

ンかしら。

そんな声が聞こえてきそうなくらい雄弁な瞳で俺を穴が開くほど見つめている。

困ったなあ……俺もどうすればいいのか。

「そういや、その首に巻いてある紫色をした首輪、綺麗ね」

「そうかい？ そんな物してたのか」

首の辺りを弄ると、確かに金属質の首輪みたいなものをしていた。

「何だろうねこれは」

「あなたがつけたんでしょ、それも覚えてないの？」

「ああ、知らない」

どこからか、ひんやりとした風が俺達の間を吹き抜け、しらけた静寂を運んでくる。

彼女は呆れたように頬杖をつきながらも、何かを考えている様子。けれど、その表情は次第に強張ってきていた。

警戒するような、俺との距離をあげるような、尖った顔つきに変わりつつあった。

「私考えたんだけど、あなたの身なりだけ見ると、結構なお家柄の人間だと思うのよ」

彼女はふいに身を乗り出してきて、目に鋭さを増して続けた。

「だから、そろそろ吐きなさいよ、いい加減本当のことを」

「何が？」

「しらばっくれても無駄よ！」

「何言ってるんだおめーは」

彼女の態度が急激に硬化したので、吊られて地のきつめの口調が飛び出た。

だが、挑むような目つきで尚も彼女は怯まず言い放った。

「あんたダルのお偉方の密偵なんかでしょ、何か情報集めにきたんじゃないの？」

俺は……勘違いをされている。

いや、勘違いというか、この露骨に怪しんだ目には敵愾心のような

なものが窺える。

つまり、思いつきりスパイ認定されている。

「どうなの！」

「……………」

俺はその詰問に不可解な気分を抱いていた。

なんでこいつはこんなに偉そうなのかと。

俺がダルという国の密偵だったらどうなんだ？

もしそれが事実だとしたら、植民地に来て何しようが勝手なはずだ。

そうだ、彼女が俺をダルの人間と考えるなら、俺に対してこんなに強い態度でいるのは可笑しい。

そして、俺は何も縮こまる事はない。

「ハハハハハ、君は些か想像豊かな娘だな」

「え……………」

彼女は身を引いて、ガタッと音を立ててスツールに身を落とした。俺の豹変に計算狂ったみたいなの顔してやがる。

ここは推すところだ。

「貴様、俺を誰だと思っているんだ！」

「え？ え？」

水戸黄門なら、ここで印籠を見せるんだろうけど、

「勇者の中の勇者、五聖に名を連ねる拓將軍様だ、娘よ頭が高いわえ？」

「まさか、そんな！？」

「拓將軍様にかかれば、お前なぞ一瞬で鼻くそみたいに飛ばすこともできるんだぞ、分かってんのか小娘！」

俺は少し前から話していない。

この溜飲が下がるような、気持ちのいいセリフを放つのは俺以外の誰かだった。

クラン。(前書き)

頭から煙でていきます。

クラン。

イストの街の中央にある小高い丘で、俺と謎の少女カマクビとヤドカりは、

話し合いをしていた。

「拓様、例の件いかがしますか？」

「しらんがな」

「え……」

俺はカマクビに未だ不審を抱いていた。

いや、彼女は疑惑の塊だ。

どこから現れたのか、何者なのか、その肩をだした紫色のパーテイドレス姿は何なのか。

更に言うなら、俺の素性は正しいのか、あらゆる疑問の総合商社だった。

ゆえに、まともに会話をする気になれなかった。

「ヤドカリ……俺の正体は他の村のものには……」

「分かっております」

「ハーフの小娘ばらしたら、首チヨンだからね」

しかし、俺が偉い人間だということは本当らしいので一応。

ヤドカリのマジ顔を見ると、そう思えてならない。

となると、このカマクビとやらも偉い人間なのだろうか。

「なあ、ヤドカリ、お前なんでこの怪しい奴の言葉信じたの？」

「だ、だって、五聖は精霊が宿る首輪をしているって言うから」

「その精霊みたことあるの？」

「はい、このお姿そのまんまです」

「俺にはただの派手な服を着た少女にしかみえないが」

ヤドカリはもう借りてきた猫のように大人しかった。

俺にも敬語しか使わなくなった。

精霊とか何の話か分からないが、俺はとても偉い人間だということだけは分かった。

それだけ分かれば俺の中では無問題だ。

「ヤドカリ荷物運べや」

「で、カマクビ、俺はここへ何しに来たんだけ」

「ええ」

「さっさと答えろ！」

俺は即答を要求した。

「拓將軍様の部隊に、ガラパゴスを引き入れに交渉にきたのでは」

「そうか、よし、そいつの家に行こう」

俺は深く考えることをやめていた。

なぜ？ とか愚問だ。

沈滞した流れを断ち切るのだ。

エストでは三派閥の勢力に分かれていた。

ガラパゴスを首長とする、ギアスクラン。

カルバンを首長とする、ジアナクラン。

マルクを首長とする、サラダクラン。

この国ではクランに所属する人間にだけ名前が認められていた。

クランはいわば、エストの武力集団だ。

名前を名乗ることができるといことは、この国の男たちにとっては、大きなことだった。身分的にもハーフでは最上位の地位は得られるし、ダルのお偉方と接触することもできるようになる。あらゆる利権を手にすることができるのである。

ダルがクランを認めたのは対フレ用のハーフ戦士を育成するためには他ならない。

ハーフは人間と違って身体的能力は優れている。

植民地にはしたが、有能な人間は手なずけておいて損はないのだ。

で、カマクビの話じゃギアスクランの首長ガラパゴスは鋼のような肉体を武器にする、屈強のハーフラしい。拓將軍はそいつをパーティに引き入れるためにここへやってきたということだ。

まあ、設定はそういうことになっている。

俺の記憶に反映されていないせいで、面倒なことになっていたが、カマクビ、それで、ガラパゴスを引き入れてどうするんだっけ？

「

「そんな事も忘れたんですか？ 簡単ですよ、他の兄妹達がそれぞれ集めたパーティと競争するんですよ。今度フレに宣戦布告するので、その時五聖の誰が魔王を先に倒すか競うんですよ」

「ええ……」

俺は絶句した。そんな大事な事は早く言えよ。



逃亡。

正直今いる世界も、俺にあてがわれた立場も成り行きも気に入らなかつた。

全てが面倒だ。

俺は乗り気になれなかつた。

何が勇者だ。五聖だ、ガラパゴスだ。

そんなウンコストーリーにはめ込まれてたまるか。

取り合えず、俺は 逃げた。

首元から離れて人間に化けているカマクビからも、ヤドカリからも。

この世界と俺を結ぶ紐帯を断ち切り、俺はエストの山奥へ引き籠もつた。

何も俺はこの世界の趨勢に従う必要はないのだ。

ふざけんな。

俺はこの仮想空間では神だぞ。

携帯でいつでも世界の成り立ちを変えることができるんだ。

何がかなしゆうて、そんな危険な旅やらお国騒動に巻きこまれなければいけないんだ。

蛮人。

ただ、俺は確かに勇者のようではある。  
はつきりいって強いのだ。

文句なしに身体能力がずば抜けている。  
軽くランニングをしてみても、道端で歩いている四足獣や鳥など  
余裕で追い越せるのだ。

又その速度についてこれる動体視力も兼ね備えていて、車なら自  
足100キロは出ていそうなのに、全ての障害物を避けながら速度  
を維持できる。

はつきりいって、中二病設定だ。チート勇者だ。  
笑いがこみ上げてくる。

それでももう俺の属する社会とは触れ合つつもりはない。  
岩場の隙間からちろちろと流れる清水で喉を潤し、下山しては付  
与されている魔力を使って商人の店から食料を奪って腹を満たすの  
だ。

俺はこの名も知れぬ山で仙人のように暮らす事にした。

ああ、なんて奔放で、それでいて不自由なく何でも思うがままな  
生活だろうか。

だが、時が経つに連れて、俺はこの世界で無用な感情や長い言葉  
を使わなくなっていた。

孤独にジャングルのような山で暮らしていると、人間は適応して  
無駄なものをそぎ落としていく。

「腹減った」

魚、食う。

「うめえ」

喉渴いた。

「川」

腹痛い

「うんこ」

てなかんじにこの頃変わってきていた。

だが、まだ理性あるため、その変化を客観視はできている。しかし、この生活を続けていてはいずれ……

3カ月後

「みんな、気をつけろ、このザイン山は恐るべき物の怪が住んでおる」

「なーに、クランの兵士様方ならそんなの打ち倒すさ」

昼下がりの眠い日、山道をぞろぞろ、人間。

俺の山……ここは俺の縄張り……

「しかし、どんな奴がここに住んでるんですかね？」

「フレのハグレ魔族じゃないの？」

何の話？

「見たことねーからなー、まあ、ジルは気をつけろよ」

「任せて！ 出てきたら私の魔法で丸焼きよ」

金髪三つ編み、白い肌、美人、華奢、女、補足。

アイツを浚う。

他、数名、武力排除……&追いはぎ。

「いただきます！」

だらだら。

計画通り他の連中は追っ払い、この子だけを浚った。

「拓さんっていうのですか」

「そうだ」

俺はこの子と話している間に、言葉や思考も流暢に流れるようになっていた。

適応の異様な速さに自身でも驚いている始末だ。

想像にすぎないが、勇者はその環境に応じて自らを溶け込ませる能力にも長けているのかもしれない。

「時に、俺の山になにしにきた？」

「えーっと、私は……」

ジルは大きな瞳を瞬かせ、

「あー、えーあー、そう、人身御供ですよ、ここんところこの山で崇り神となったあなたが暴れているのでそれを沈めようと捧げられたく・も・つなんです、私は！」

「そうか、お前は俺への贈り物ってわけだな」

「そういうことになります」

「じゃあ、食うかな」

白い法衣、紫の三角帽子姿の彼女は気品があり、その目には知性の光が窺える。

要は口がうまいのだ。世渡り上手な人間だ。

この手の人間は信用できない……

「顕現 白王！」

彼女が後ろに飛び退った直後、頭上に大きな白い手が容赦なく俺に被さってきた。

いや、叩き潰されたといってもいい。

「これなに？」

その膨大な圧力を俺は片手で相殺した。

「ひえええ」

「慄く彼女は踵を返して山道を降りようとしたが俺から逃げる事は不可能だ。」

更正。

「もつと社会性をもつべきです！」

「そ、そうか？」

ジルを捕獲したのは良かったのか悪かったのか。

とりあえず、さっきからクドクドクドクドと叱られっぱなしだ。

「とにかく、ここを出ましよう」

「ええ……」

藪の中に逃げ込もうとすると、ジルに衣服の裾を踏まれて逃亡を阻止される。

「やだよ……」

「なぜ？」

「明るい場所にはもうでたくない、俺はここで静かに暮らすんだ。俺はうんこ座りの体勢で断固拒否を貫く。

踏ん張って抵抗し続けていた。

「ハアハア……もういいです、さようなら」

「いや、それは許さん」

今度は彼女の白い法衣を俺が引つ張る番だ。

これがさっきからずっと続いていた。

俺は外にも出たくないが、彼女を逃がしたくもなかった。

高飛車に見えて案外聞き上手だし、俺の寂しさを紛らわすにはちよつと良い女だ。

日はもうとつぷりと暮れ、山のなかはしんと静まり返った闇に浸されている。

「で……」

「君とここで暮らしたい」

月明かりがちよつと、俺と彼女がいる辺りを白く照らしている。

彼女の真つ白な肌は月明かりを帯びて青白く光っている。  
美人だ。俺はこんな美しい女性に会ったのは初めてだった。  
だから

「一緒にここに住もう、拒否すれば……」

拒否すれば殺すなんてつもりはさらさらない。

ただ、俺は強い。

「分かりました……」

やっと折れたか。

俺は安堵の息を吐こうとしたとき、

「でも、ここに残るからには、あなた覚悟してくださいね」

彼女は上目づかいできつと俺をにらんだ。

「私はきつとあなたを更正してみせます！」

素晴らしい終えると、彼女はすくつと立ち上がって崖上のこの場所から山裾をじつと眺めていた。

## 変化

「セルツピオさん、お久しぶりです」

「お、拓か、最近どうだ？」

セルツピオとは俺がこの山にやってきたとき知り合った。

彼は細面で形の鼻梁が顔の真ん中に通った優男風の男だ。

「やっぱ山はいいですよ、人もそこないし落ち着きます」

「そうかそうか」

数ヶ月前、俺は何もかもに嫌気がさしてこの山にやってきた。

そして、しばらくこの山で暮らしていたが、何せ村や町とは違って、

食料が転がっているわけでもない。

そんな時彼に出会ったのだ。

俺は現実世界ではただの高校生だ。

神がかった力を持っていても、それをいかしてどうやって食料を

調達するか

分かる由はなかった。

だが、彼とであってその調達方法を学ぶことができた。

山野には鹿や兎があちこちにいる。

その野生の動物の狩猟方法から、獲物の調理の仕方を教えてもらった。

しかし、彼から学んだのはそれだけじゃない。

「最近派手にやってるそうじゃないか」

「知ってましたか」

「だがあんまりやりすぎるな、強奪なんてのは目立ちすぎる、出る杭はいつか打たれるもんだ、賢い人間は目立つようなことはしない。やっぱ、こことこれよ」

彼は指先で頭をさしながら、もう片方の手を宙に上げてハーブを



かき鳴らすように虚空で指を動かした。

そう、彼は限りなくグレイな生き方をしている人種だ。  
なにせ彼の生業の半分はスリでまかなっているのだから。

俺はこの人から生きるためには、時には　と、彼の持論を聞か  
され、

その意見にある程度同調することにより彼の裏の部分も吸収し変  
わっていったのだ。

ただ、彼の名誉のため付け加えるなら、彼は飽くまでグレイであ  
って真つ黒ではない。

普段は山に生えるつる草を編んで手提げ籠を作り、下山して行商  
に行く商人でもある。

「その奴出てこいよ」

俺と彼が談笑していると、ふと彼は俺から意識をそらし、離れた  
場所にある大岩に向かって声をかけた。

忘れてた……

「ジルよ、おいで」

「は、はい……」

ジルは顔を幾分強張らせて岩陰から姿を現した。

「これ俺が拾った女です」

「あ、どうも、拓様に拾われたジルといます」

「拾った？　浚ったの間違いじゃねーのか、ハハハ」

彼は端正な顔立ちではあるが、笑うときは大口を空けて笑う。

この辺は育った環境が出ていると行って良い。

ジルは完全に萎縮してしまっている。

俺とこの山で住むことになってから十と四日経つが、  
彼女もまた俺と同じくここへ来て何かが変容していた。

## ジル

「するつてえと、サラダクランが治めるジーザスの街の住人つてことか」

「はい……」

「なんだそれ」

露骨にセルツピオが顔を歪めて頬に手を当てた。

そして、小さなうなり声を長く伸ばした後、俺を見て言った。

「この子解放したほうがいいぞ」

「え……なんでですか？」

「サラダつていやあ、お前、ガチガチのフェミニストの集りじゃねえか、女だてらに武器振り回して、なんかわけのわからん教えをまとめた経典とか持つててさ」

「ええ……」

俺は言われても良くわからなかった。

だが、もし彼女が準拠していた組織がそういう場所ならば

「よく分からないけど、そんな集団なら、なぜ彼女を連れ戻しにやつてこないんですかね？」

「それもそうだな……14日経つてるつて言つてたよな」

「あ、あの一」

俺たちが顔を見合わせて考えていると、ジルは俺の傍によってきて耳打ちし始めた。

「実は……」

「は？」

「どうした、拓」

俺の素っ頓狂な声を聞いて、セルツピオは物問いたげな眼を向けてくる。

「えつと……ジル説明してくれ」

「私がですか？」

「ああ、お前を引き止めた俺が言つのもなんだが、お前の行動は解せない、少し詳しく話してくれ」

ペルソナ。

ジルは詳しいことは話さなかった。

ただ、俺やセルツピオに話したのは、自らが所属するクランへもう帰らない旨を魔法で連絡しておいたという一点のみだ。なんでそうなった？ お前馬鹿じゃねーの？ などと俺なんかは困惑して罵詈雑言を浴びせたがそれほど長くは続かなかった。浚ったの俺だしな……

「ふーん、そうなのか」

セルツピオは平然と聞いていた。

俺が声を荒げてジルに詰問している最中でも黙っていた。

「はい、だからご迷惑おかけすることはないと思います」

ジルの話では、サラダクランは去るものを追わない主義なので、この山にジルを取り戻しにぞろぞろやってくることはないのと。

「じゃ、何にも問題ないな……」

「そうなんですかね」

「ああ、大丈夫だろ」

切り立った崖の中腹にある岩窟での話し合いは一旦幕を閉じる。

「じゃ帰ります」

「さて、拓、久しぶりなんだから今日はここで食事でもしていかないか？

ジルとも俺は初対面だし、3人で楽しく夕食会としゃれこもうじやないか」

「いいですけど、ジルはどうする？」

「ごちそうになります」

「よし、決まりだ、じゃ俺は食事の用意するから、お前等は適当にくつろいでいてくれ」

そういい残して、セルツピオは岩窟の奥へと姿を消した。

夕日が木々の葉から幾筋か差し込んできてはいるが、電灯のない

岩窟は既に薄暗い。

淡い闇が辺りに散在する岩や草木の輪郭をぼかしている。

「お二人はなんでこんなっていったら失礼ですが、あの、その……」  
飯を食い終わって、一息ついているとジルが口を切った。

頃合を見計らってたらしい。

「はつきり言っていていいよ。何でこんな山奥で仙人みたいに暮らしてるかって……聞きたいんだろ」

セルツピオは髪を上撫で付けながら彼女に向き直った。

彼の長い銀色の髪がどこから差し込む月の光に照らされ白く光って見える。

長い髪が前に垂れてはいるが、その髪の間から覗く彼の目は恐ろしく鋭い。

「は、はい……」

ジルはいつになく緊張した様子で首を縦に振った。

「よろしければお聞かせください」

岩窟の奥に陣取る彼女の姿は闇の中でも白く浮き立って見える。

松明も月明かりもないというのに、彼女の所作は岩窟の入り口付近にいる俺にも確認できる。

「簡単な話だ。俺はエストのある村で生まれた。その赤ん坊の俺はなぜかこの山に住む仙人風の男に預けられた。つまり俺は両親に棄てられてこの山で生まれ育った、そういうことだ」

セルツピオさんに最初に出会ってそのことは聞いていた。

なぜ棄てられたのか聞いても本人は知らないらしい。

ただ、その育ての親である彼の義父はもうこの世にはいないそう  
だ。

「なるほど……大変な人生を……」

「おっと、変な同情はいらんよ、俺はこの山が気に入っている。そしてここが俺の故郷だ。本当の両親がどんな奴か知らないが、俺は何にも恨んでいないし興味もない」

「そうですね……」

「それより、拓はどうなんだ」

いきなりセルツピオが話題を振ってきた。

「なんでこの山にやってきた？」

「俺は……」

何でだっけ？

自分自身でもあまり把握していなかった。

ジルに出会ったばかりのとき、何度か聞かれたが分からないの一点張りで押し通した。

実際分らないんだ。

俺は全てのしがらみが嫌になって、この山へ逃げ込んだ。

ただ、それだけなんだ。

他にいけないかもしれないが、なぜかこの山へ分け入ってしまった。単なる成り行きとしか言えない。

「分からない……俺はここへくるまえから、なすべきことも拠り所にするものも目的もなかった」

「そういえばお前言ってたな、なぜこの世界を作ったのかって」

「そ、そんなこと言ったっけ……」

俺は焦った。確かにこの世界は俺が創造した世界だ。

だが、それは飽くまで俺の心のうちにしまっておくべきシークレットだ。

心が荒み自暴自棄になってたときに、彼に出会い詰まらない事口走ってしまったのか。

とにかくごまかさないと。

「作るって……」

「つ、作るっていうのはだな、も、目的がなくてもぶらぶらしてたので、俺もなんか目的がほしいなってことさ」

「なるほど……」

ジルは気の抜けた声で同調したように見えるが、得心は言っていないだろう。

セルツピオは暗闇で鼻を鳴らした。

ふふんと何か人をからかうような気配を闇に漂わせている。

「お前に目的を把握してなかるうと、既にお前がやることは決まっているとおもっぞ」

セルツピオは俺が腰に締めている帯を指差した。

「その帯にはさまれている仮面は、確実にお前を目的の地へ誘うだろっよ」

## 胎動。

闇を朱色に染める狂気の炎は、木々や草花を灰燼とすべく駆け巡る。

炎の勢いは止まりそうにない。

「派手にやってくれたもんだ」

セルツピオは赤々と夜の闇に照らし出された元棲家を、忌々しそ  
うに目を細めて見上げる。

ここは山の裏側を降りてたどり着いた河川敷。

危急の事態に備えセルツピオが確保していた抜け道を辿って降り  
てきたのだ。

「あの化物はなんだったんだろう」

「しるか！」

「大きな鳥のように見えましたか」

そう、鳥に見えた。

大きな金色に光る鳥だった。

その鳥がとがった嘴から、猛烈な炎を山に吹きかけたように見え  
た。

「拓様、えっと……」

「いや……何も言わなくていい」

ジルは無理に励まそうとするが、そんな彼女も痛々しい表情で俯  
いている。

棲家が焼かれて俺も彼女も虚脱していた。

戦で両親を殺され、焼け出された兄妹のようなもんだ。

惨め過ぎる。こんな時は

「どうしよ、セルツピオ」

頼もしい大人に救いを求めたくなる。

「まあ……どうにでもなる」

彼はそういったとき、俺たちに視線を滑らせた。



「なんかなるぞ……」

うわ言か独り言のように呟く声音に元気がない。

俺たちを憐れむようでもあり、どこか面倒くさいような、そんな複雑なニュアンスが混じっている声だ。彼は元々盗賊、一定の棲家をもたない根無し草。

そんな彼にとって、今回のようなことは些事なことだろう。

俺たちという付属物がなければ……

「お、俺にま、任せとけ」

たどたどしい口調で最後に彼は柄にもない言葉で締めくくった。

「ジルもついてくるか？」

思い出したかのようにセルツピオはジルにも声をかけた。

「行っていいんですか」

「もちろんだ」

セルツピオの言葉は決然として迷いが無い。

その言葉を聞いて、ジルは安堵したのかぱつと目を輝かせる。

「当たり前じゃないか、俺たち家族だぜ」

なんだか暖かい雰囲気には俺は便乗したくなり臭い台詞を付け足した。

他人なら尻蹴りまくりたくなるような寒い台詞だ。

月影に照らされて浮かぶ川面を見ながら、傍らの彼女の反応にじつと意識を傾ける。

川のせせらぎの合間に漂う気まずい沈黙に俺は外したかと考え出した時だった。

「あ、あのー」

俺の手にそつと絡み付いてきたのは 彼女の柔らかい手！

「どこいきましよう！」

振り向くと、彼女はいつもと変わらない笑顔で俺に向けていた。



76の続き。(前書き)

今の話が少し行き詰ったので、前の話の続きでも。

## 76の続き。

2階の一番奥にある部屋は南向きで、青い戸口のすぐ隣には大きな格子窓が嵌っている。

管理人が眉根を寄せて神妙な顔を真琴に向けると、彼女は促すように頷いた。

「でわ、開けますが、私は入りませんので」

「大丈夫です、後はお任せください」

真琴の言葉と微笑みにほっとしたのか、管理人は突然、若返ったかのようにきびきびした動きで鍵穴に鍵を突っ込む。ガチャガチャと金属質の音を立てた後、呪われた部屋の扉は開け放たれた。

「はい、鍵どうぞ。出る時はちゃんと閉めてくださいね！」

「あ、はい、わ、分かりました」

真琴に危険物でも手渡すかのように鍵を押し付けるとすぐに、管理人は夏の日差しを上げ頭で照り返しながら早足でこの場から去っていった。

室内は六畳一間のスペースながら、何も家財用具が置かれていないため広く感じた。

南向きの大きめの窓から、熱気を帯びた陽光が遠慮なく室内を焼いていた。

「暑いよ〜死ねる……」

「さすがにこれは……ちよっと窓開けるね」

真琴が頬に伝う汗を白いハンカチでぬぐうと、窓に手をかけた。たてつけが悪いのか、幾分力みながら窓枠をガタガタと揺らしている。

「窓壊すなよ……」

窓を潰さん勢いで力む真琴を見かねて、輝に顎で合図を送る。

「真琴さん、代わって！」

「ああ？ あ、うん、お願い……」

「ほら、開いた」

鼻息あらい顔真つ赤な真琴に代わった輝は、事もなげに窓を開け放った。

室内に外の風が舞い込むと、幾分熱気は和らいだような気がする。

「で、容疑者はどこにいるんだ」

「うーん」

三人三様、狭い室内を歩き回り異端の住人を探す。

中はがらんとしていて、すぐに見つかりそうなものだが。

部屋の四方を覆う漆喰の壁はもとは真つ白だったに違いないが薄墨色に汚れていて、このアパートの年輪の深さを思わせる。

「だー！ この暑いのに、もうー、どこにいやがるんだ」

「こつちこつち！」

俺が畳の上で地団太を踏んでいると、台所の方から真琴の声が届いた。

板間のこれまた狭い台所にやってくると、

「どこにいんだよ！」

「兄貴足元！」

「ああ？」

暑さに幾分イラついた声で視線をおろすと、流しの傍に黒い影が蹲っていた。

「お前はゴキブリか……」

アングリ〜！

「お前は何でここにいるんだよ、アパートの人ら迷惑してんだよ」  
「ちよつとちよつとちよつと〜！」

湿っぽい台所に胡坐をかいた高慢な顔つきの幽霊に詰問していると、真琴が後ろから割って入ってきた。

「一方的すぎるじゃない！」  
「そうだよ、兄貴、そんな言い方じゃ」

俺は二人に肩を掴まれ、半ば強制的に畳の間に連れていかれた。

「あれじゃ相手は萎縮するか意固地になって話が進まないよ」  
「あいつがずつとガン無視するからさ、イラついちまってよ」

「兄貴は短気だからなあ……」

俺は人を説得できるような人間ではないのは重々承知している。

「よし、真琴、まずは君が優しい言葉をかけて彼の心を開くのだ」  
「ええ、私が？」

なぜそこで困惑したような顔をする。

そんなことは経験豊かなお前にとっては朝飯前だろ？

「搦め手がだめなら、色仕掛けでもいいぞ」

「兄貴、幽霊に色仕掛けって通用するのかな」

マジ顔でそんなこと聞かれても……

だが、確かに身体がないのだから、性的誘惑は通じないかもしれない。

俺は腕組をして真琴のスラックスの見事な曲線に視線を移し、白いシャツの二つの隆起物で目を留める。

「拓、何見てるの？」

「いや、別になにも」

「あんたの考えてることは丸わかりよ……」

真琴はひややかな視線を俺に向けてため息をついた。

「でも、この次は私が説得するしかないみたいね」

彼女は何かを吹っ切るように深呼吸をし、豊満な胸を上下させた。狭苦しい炊事場の板間は、日差しの恩恵もなく湿った陰鬱な空気が淀んでいる。

日向を忌避し闇を好む幽霊にはもってこいの場所だ。俺たち兄弟は真琴に幽霊の説得を一任し、背後からこっそりその様子を伺っていた。

「ここ素敵ね、人の干渉も入らないし」

真琴は茶色がかった髪を後ろに掻き分けながら、幽霊のすぐ傍で腰を下ろした。

幽霊は灰色のジャージ上下で身を包み、目の辺りに薄暗い隈のある青年風の男だ。

足を折りたたみ背中を流しにもたせ掛けるようにして蹲っている。「ここに括られているんだから、何かよっぽどこの場所に未練があるのね」

真琴は諭すようなやわらかい口調で彼に囁きかける。

普段見せたことのない慈愛に満ちた横顔。

俺が幽霊ならとつくに懐いているかもしれない……

「何か苦しいこと……」

尚も真琴が言葉を続けようとすると、

「うるせーよ、ババア！」

幽霊が初めて口をきいた　というよりは真琴を罵った。

挑むような目を石化した真琴に向けると、舌打ちをして膝の間に顔を埋めた。

予想を覆す反応に、真琴はおるか背後の俺たちもと身じろぎひとつできなかつた。

二の句を継がないでいる真琴に幽霊はにやりと笑って、

「俺はよお、お前みたいな偽善者ぶった婆が一番きれ〜なんだよ、失せる！　ブス！　近寄るな！　豚！」

奴の下品で粗野な罵りが室内にこだました。

その瞬間、俺は一瞬頭が真っ白になって、

「こら、お前！ 口の利き方に気をつけるよ！」

無意識のうちに、奴の前に躍り出ていた。

「俺がその気になれば、一瞬で……」

幽霊相手に凄む俺とは別に、もう一人の俺は沸き立つ怒りの正体が掴めないでいた。

なんで俺はこんなに……

「拓やめて！ あんたは向こうにいつてて！」

威嚇しようと思懐の中の護符に手をかけたとき、真琴の思いもかけぬ怒号が飛んできた。

「い、いきなりなんだよ！」

真琴は俺を射るように睨むと、無視してまた霊に向き直る。

「兄貴はこつち」

怒りと恐怖、屈辱に体を震わせて棒立ちになっていると、後ろから弟に羽交い絞にされる。

「彼女に任せよう……ね！」

「あ、ああ……」

我に返った俺は釈然としないものがあつたが、ここは抑えて引き下がることにした。



## 掴めない女

台所から出てきた真琴と幽霊には笑顔が浮かんでいた。

「拓、輝君、お待たせ」

「お、おう」

「ごめんな、みなさん、さっきは申し訳なかった」

幽霊は牧田茂と名乗った。

さつきとはまるで雰囲気が違う。別人のような爽やかな顔つきだった。

「ここにきた霊媒師の女が失礼な奴だったからさ」

それが真琴に対して異常な罵詈雑言に繋がったとこいつは言うのだが。

「真琴ちゃんは本当いい子や、本当ごめんな」

「あはは、まあ、仕方ないですよ」

口端にへらへらした笑みを湛えるこいつがどうも信用できない。

真琴もあれだけ言われてよく打ち解けて話せるな。

いや……眉間による皺や右手の握りこぶしをみるとまったく気は許していない。

「真琴ちよっと……」

「どうしたの兄貴？」

きよとんとした顔で輝は言った。

「まあ、ちよっと話し合い」

俺たちは幽霊と一定の距離を保ちひそひそ話をしようとしたところ、アパートの外で聞きなれたエンジン音が。

「所長迎えに来たわよ」

「よし、なら、話はそっちでしょう」

腹と背中がくつつきかねない瀕死の午後、所長はかるうじて昼間の時間帯に帰ってきた。

運転席に所長が座り、助手席に輝、後部座席に俺と真琴が陣取る。「ほら、ハンバーガー買ってきたよ、ジュースもポテトもあるから好きに食べて」

「ありがとうございます！」

時刻は1時半、この差し入れがなかったら不機嫌な顔を隠しきれなかったかもしれない。

「兄貴うまいね！」

口を目一杯食べ物溜め込んで話す弟を見ると、育ちの悪さが露呈しているようで恥ずかしい。

「所長、話はまとまりました。これから向かってほしい場所があります」

「そうか、進展があったのか」

「なんかあったの？」

俺は飲みかけのジュースを口から離すと、真琴に尋ねた。

真琴はそれには答えず、済ました顔でハンバーガーを上品に食べている。

「なにがあつたんだよ？」

わざと、不機嫌な声色で真琴を問い詰める。

さっきの態度といい……収まりかけた俺の怒りの火種が腹の底で再びくすぶり始めていた。

と、そのときだった。

真琴が肩を震わせて、フフッと小さな笑い声を漏らしたのは。

「ち、ちよつとやめてよ！ アハハ」

彼女は体を小刻みに震わせながら前かがみになる。

ど、どうしたんだ？ 気でも触れたのか……？

俺がその様子を訝しげに観察していると、

「アハハ、わかったわよ、ほら！」

真琴は急に体を反らせてシートまで戻すと、何を思ったか、食べ

かけのハンバーガーを座席の後方に投げた。

「きたねえ……誰が掃除するんだよ」

俺はすぐさま真琴の座席シートの後背を見た　　が、真っ黒なボードには何も付着していない。

座席の隙間にでも落ちたかと思い覗き込んだが、ハンバーガーの痕跡は見当たらなかった。

俺が不審に思って、真琴に今何が起こったのか尋ねようとするのを遮るように、

「よし、食べたし、話すわね」

「お、おう」

「輝君も良く聞いてね」

「はい」

輝は助手席から身を乗り出して顔を接近させる。皆が円陣を組むかのように話を始めるが、所長は我閉せずといった風に窓の向こうの景色を眺めながら、良く分からない鼻歌を奏でていた。

番外、息抜き。

現実生活で俺は悲嘆に暮れている。

だから、今創造中の世界はおいといて、またあてどのない旅を挟もうと思う。

完全な現実逃避だ。

前の世界はとりあえず凍結して、何も無い荒野から旅は始まる。すぐに終わるだろうけど

現実の俺は鬱が酷い。

何もかもが薄墨色に染まって見え、空虚の只中に俺はぽつんと置き去りにされている。

なぜ生きているのか？

存在理由は何なのか？

そんな根本的な答えも見出せていない。

こうなつては現実世界から一旦退いて仮想世界で癒しを求めるしかないだろう。

だよな？

てことで、俺は仮想世界にやってきた。

荒涼たる景色が広がっている。

時折あらぬ方向から吹き寄せる砂塵が目にしみた。

荒野の乾ききった白く固い大地にあおむけになって青空を眺める。真つ青な空を穴が開くほど見つめる。

そして、横向きになり、手枕に頭を置いてしばらく忘我の境を彷徨う。

俺は現実世界から逃げ出し、仮想世界に逃げてきた難民だ。

表の世界はあまりに苛酷で、容赦がなく、俺の精神は磨り減ってしまっていた。

ジーパンのポケットに携帯は差し込まれているが、触れる気にもなれない。

以前なら新しい世界を創造して、悦楽に浸るうなどと画策するはずなのに……

## 息抜き2

どのくらい俺は眠っていたのだろうか。  
すっかり辺りは真っ暗な闇に閉ざされている。

俺は半身だけ起こすと、身を包む夜気の冷たさに身震いした。  
何でこんなに寒いんだろう。

半そでにジーンズの姿では、風邪を引いてしまいそうだ。  
しかし、家を携帯で創造するのも面倒だな。  
衣服だけで事足りる。

「あつたけー」

俺は黒いダウンジャケットを携帯でひねり出した。  
思わずその着心地に歓喜の声が漏れる。

宵闇に浸っていると、少しずつ心が高揚してくるのを感じた。  
「だー！」

突然、俺は荒野を駆けてみた。  
全力疾走だ。

足がもつれようと、息が切れるまで走り続けてやる。

「ハアハア……」

だが、俺は目標とした高い木に辿り着く前に力尽きた。  
なんて体力がないんだろう。

俺は前傾姿勢で激しい息を整える。

そして、ゆっくり視界をあげていった。  
と、そのときだった。

前方に何か黒い影が動くのを目で捉えたのは。

まだ設定も創造もしていないのになぜ生き物がいるんだ。

俺は呼吸を整えながら、黒い影のほうにゆっくり歩を進める。  
少し離れた位置で立ち止まって、黒い影を透かし見た。

すると、相手も俺の姿に気づいたようでこちらに歩んでくる。

俺は身を硬くして、不測の事態に備える。

「拓様……お久しぶりです」

と、そのとき、闇夜の合間を縫って、朗々とした声が静寂を破った。

「え？ なに？ ま、まさか……」

お、俺はこの声の主を知っているぞ！

「ピ、ピエール？」

「ええ……」

「何でお前がここにいるんだ？」

「さあ、気がつけば私はここで佇んでいました」

事態が飲み込めなかった。

なぜ、この仮想世界にピエールがいるのか。

ここはピエールの存在する世界とは別の次元にあるはずだった。

「拓様……ここは危険です、急いで立ち去りましょう、ついてきてください」

「え……？ な、なに」

言いかけると、ピエールはいきなり俺の腕を掴んで走り出した。

「おい、待てよ」

「静かに……話は後です、振り向かないで全力で走ってください！」

息抜き3 (前書き)

ちよつと長く書くためにだらだら展開するかもしれません。



### 息抜き3

俺はピエールに誘われるまま走り続けた。

後方から確かに何かを追ってくる気配がある。

振り向いてその存在を確かめたかったが、その衝動に駆られる度にピエールは掴む俺の右手を強く引いた。

「なんなんだよ」

「……………」

ピエールらしき男は答えなかった。らしきというのは、未だ月影も射さない暗い闇にあって、彼の顔を確認できていないせいだ。声を聞いた瞬間だけはピエールだと思ったのだが、何せ人間の記憶というものには曖昧だ。過去に彼と共有した体験や時間も、時の経過とともに薄れてしまっている。記憶の中にあるピエール像は平らに引き伸ばされ、脳内で虚飾や脚色を加えられ変容していてもおかしくはなかった。

「どこまでいくのかな……………」

彼の走る速度が徐々にだが落ちてきていた。

それを見計らっていくつか質問を並べ立てる。

「なにに追われてたんだろうな」

相手を刺激しないように、蚊の鳴くような声でぼそぼそとささやく。

「ここまでくれば大丈夫でしょう」

急に立ち止まった彼は、俺の右手から手を離す。

高い木々がまばらにみえるこの一帯には月明かりが差し込んできていた。

その光を帯びて、ピエールは神々しいまでの素顔を俺に向けて微笑んだ。

「ピ、ピエール……………やはりお前か」

「お久しぶりです、拓様」

金髪の貴族然とした風貌の男はまさしく過去、幾多の危険をともした従者ピエールだった。

ジユストコールの上衣、ジレ、膝丈のキュロット、どれも見覚えのある服装だ。

「相変わらず眠そうな顔してるな」

「はは……目が細いだけですよ」

「ピエール！」

俺は再会の喜びに我知らず彼と抱擁を交わしていた。

涙がとめどなく溢れてくる。

「どうされたんですか？」

俺は答えなかった。

今は何も考えずピエールの存在だけをかみ締めていたい。

#### 息抜き4（前書き）

あ、ピエールとかアンリとか誰って思われても仕方ないのですが、えーっと、拓が昔創造した貴族風の従者と元気な女の子だと思ったださい。

詳細を知ろうなんて奇特な人はいないと思いますが、一応、俺的フアンタジーに俺を送り込むのほうの小説で登場した人たちです。気まぐれに登場させてしまった後で後悔してしまいました。

まあ、息抜き実験小説なので、お許しください。

#### 息抜き4

ピエールとの再会の感動も長くは続かなかった。

「この世界は混沌に満ちています、そこらじゅうにぐるぐるしている得体のしれないたちの悪い輩、形をなさない流動体、秩序のない時間の経過、今までいた世界とは成り立つものの質が違っています」  
眉間に細い縦皺をつくって話すピエールの表情は以前より神経質に見えた。

随分会つていなかったが、過去のピエールは少々の事では取り乱さない男だった。

その彼がこれほど深刻な顔で……

「よく分からないんだが、おそろく……」

確かにピエールがこの世界に存在する自体普通ではない。

世界がおかしくなった原因をあげるなら一つしか思い浮かばない。「世界を成り立たせている者の精神がゆがみ、多重構造の世界の境界が曖昧になってきているんだよ」

この世界は俺が創った仮想世界であり、その出所は俺の精神世界だ。つまり、俺が現実世界で鬱になっているために仮想世界にもその影響が及んでいるに違いない。それしか考えられない。

「この世界の主とは？」

「知らない、ただ、神といえる存在だろう」

ピエールには俺が神だとは教えていない。これからも教えるつもりはない。ピエールのことは信頼しているが、俺が神だと知ること彼の心にどんな変化が現れるか未知数だからだ。

「とにかく、拓様、ここから少しいったところに街を発見しました。そこへ急いでまいりましょう」

「おう、あ、そういえば、アンリ元気？」

確かピエールの世界にはアンリっていう天然少女がいたはずだ。

「残念ながら……」

ピエールは唇をかんで、細い目を固く閉じた。

「え……………」

俺の頭の中に、不吉な感情とともにアンリの無邪気な顔が浮かび上がる。

アンリに何か……………」

「ピエールな、なにがあつたんだ！」

気がつくと俺はピエールの両肩を激しく揺すっていた。

**きままな世界、原点回帰。(前書き)**

好きなように書きます。

いつもできていないので、今日こそは。

きままな世界、原点回帰。

俺はこの中で自由に暮らすのが目的だったはずだ。

それがいつの間にか俺の世界を覗く人たちを意識してしまっ  
て、  
ぎこちない生活を余儀なくされている。

これでは俺がこの世界を立ち上げた意味がないのだ。  
よって俺は好きなことをする。

原点回帰だ。

世界の外側から降り注ぐ見えない視線を意識しない。

何でも良かった。

こだわりなど最初からこの世界にはいらぬのだ。

物語のなかで踊る主人公を演じる必要もない。

俺は好きなこととする。

まず携帯を使うことにしよう。

何をしようか。

とりあえず、学校を作ろうか。

俺が現実で世話になっていた中学校をこの世界に召還しよう。

携帯を開いて、画面に”俺の中学一年生の頃の世界を召還”と  
文字を打ち込む。

しばらくして、砂埃立ち込める殺伐とした荒野は、記憶の底に沈  
んでいた懐かしい世界へ変貌を遂げる。

ああ、俺はこんな中学校に通っていたんだっけ。

黒い門に閉ざされた向こうに懐かしい校舎が見える。

## 緊張。

俺はこの学校では本当ろくなことがなかった。

一年のときは苛められて、二年の時も苛められて、

三年の時も……

苛め地獄を耐え抜いた暗黒の中学校生活。

あの暗い過去をどうにか変えることはできないか。

たればなのも、後ろ向きな愚行であることも分かっている。

しかし、一度あの凄惨な過去を変えることができるのか試してみる。

中学校入学の初日である。

俺は教室に入り、入り口に一番近い縦列の一番前から4番目の席に座っている。

周囲には面識の薄い生徒達が、緊張した面持ちで先生の話を聞いている。

教壇に立つ先生は、太つてはいるが体はがっちりしていて、潰れたような鼻の横にはでかい黒子を貼りつけている。きびきびした口調からは、生徒達になめられてたまるかみたいな意気が滲み出していた。

俺は先生の話が学校が終わるまで続いていればいいのにと感じていた。

先生が造り上げた緊迫したこの静寂がなくなれば、周りの生徒達はこの新しい生活の場で、己の快適な地位を確保するために様々な主張を周りに投げかけ始めること請け合いだ。

いっちゃんんだが、俺は小学校の時は無口な人間で通っていた。

人と歓談することはおろか、能動的に話しかけることすら自信は



ない。

だが、そんなことは他人の知ったことではなかった。

「俺田島、よろしくな！」

「え……あ、よろ……」

突然の挨拶を受けて俺は何を言っているかわからず、何か口走りながら握手を交わした。

田島にぎこちない微笑みを返そうとしたときには、彼は他の人間に顔を向けていた。

俺は休み時間を迎えると、焦った素振りで教室から抜け出した。

戦線離脱ではない。

一度、気を落ち着かせて作戦を練らねばならないと思ったからだ。過去の俺は、この後の初対面の攻防をしくじったために暗黒の中学生を送るはめになった。

絶対同じ轍を踏むわけにはいかない。

俺は今、誰も来ないであろう人気のない階の大便専用トイレで束の間の安寧を手に入れていた。

休み時間は10分だ。

ここまで来るのに2分を費やしているから実質8分しか時間は残されていない。

俺は考えた末に、携帯であるアイテムを作成した。

一見、それはただの腕時計に見える。

だが、これには時間を操る機能が付与されていた。なぜこんなものを作ったのか。

答えは簡単だ。

俺は不器用な人間だから一回や二回で理想な言動をとることは不可能に思えた。

だから、しくじった場合、これを使って時を遡りやり直すのだ。

これさえあれば、暗黒の中学生生活を変えられるはずだ。

いや、変えてみせる！

キンコンカンコーン。

懐かしい響きを耳にすると、途端にわき腹に鈍い痛みが走った。緊張した時すぐに腹が痛くなるんだ。

大便がしたい。

だが、始業ベルは既に鳴っている。

どうしようと焦り始めた時、腕時計にふと目を落とした。そうだ、これがあつたんだ。

特に意味なし。(前書き)

よく分からないもの書いていますが  
気にしないでください。

特に意味なし。

俺は悪戦苦闘していた。

人の本来備わっている気質というものはそう変えられないのである。

田島との最初の挨拶がうまくいかない。

まず人をひきつけるような笑顔が作れないのだ。

田島だけじゃない。

どの相手とも、瞬間的な言葉のやり取りができて、尻すぼみで結局会話が途切れてしまう。これは会話が下手だということも言えるが、それ以上に相手に警戒心を持ちすぎて、自分の内部を探られることを極端に嫌っているのだ。

時間を遡る腕時計の最大効果範囲は20分に設定している。

あまり長い時間の巻き戻しは、意味がない気がするし、この馬鹿げた世界がエンドレスになるのも本位ではない。

「俺、小学校の時、サッカー得意でさ」

「相づちをうつただけで精一杯。」

「拓は何かしてた？」

「何も」

「運動部とかはいらね？」

「工作部でも入ろうかな」

「工作部ってなにやるの？」

「さあ」

相川君は誰にでも気軽に声をかけてくる明るいかんじの少年だ。

顔もこぎれいに纏まっているし、友達にすると後々多大な恩恵を受けるだろう。

だが、こんな調子で話しては、彼と親友になんかなれやしな  
い。

共通点というものが無いのだ。

「おう、拓（名字で呼ばれているが拓とする）、シャープン貸して  
くれよ」

「いいけど、はい」

「有難う」

高木は見るからに危険なオーラを発する強面の男子だ。

熊を連想させる体型に、感情をどこかに忘れてきたような顔が特  
徴的だ。

何かと人から無償の助力を得ようとする。

怒らせると怖いから従ってしまうが、普通に接していれば人畜無  
害な男だ。

だけど、友達になろうとは思わない。

誰と友好的にすれば、この学校で人並みの学園生活が送れるかを  
考えていた。

人の道というものは、付き合う相手によって様々なベクトルに傾  
く。

できるだけ、違った人生を与えてくれる人間と仲良くなりたい。

とはいえ、えり好みして結局、クラスから浮いてしまえば、行き  
着く場所は暗闇の底しかないわけで。

俺はそろそろ焦りを感じ始めていた。

友達。(前書き)

テキストに。

## 友達。

「何してるの？」

沢木は本から目を離すと、からかうような微笑を浮かべて、

「本読んでるに決まってるじゃん、見りゃ分かるだろ」

「そ、そうだね」

人を見下したような口調は相変わらずだが、特に悪意はこもっていない。

彼は俺の顔をじろじろみて、一言。

「大方数学の宿題忘れたんだろ」

「あたり、よく分かったな」

彼はふんと鼻を鳴らし、机の横に掛けている黒いカバンからノートを取り出した。

パラパラと捲って、すぐ返せよ、汚すなよと釘を刺して俺に手渡し、俺が踵を返す前に、また青い装丁の太めの本に視線を移した。

俺は結局、彼と交流をもつようになっていた。

入学後、1ヶ月してからの話だ。

友達探しは最初のうちは難航していた。

俺は世知に長けた明るい人間とは相性が悪い。俺自身が物静かで口数少ない人間なので、そういう相手と無理に合わせようとしても疲れるだけだからだ。

俺は体育のドッチボールの時間に微妙にクラスから距離を置く沢木を見て何か相通じるものを感じた。

そして、話しかけてみた。

『一緒にボール投げあわない？』

『ん？ いいけど』

俺は相手が同属だと思つと、案外気軽に話しかけることができた。

『下手くそだな、センスないよ』

『う、ごめん』

『はは、謝らなくていいよ、俺も体育は苦手なんだ』

彼は外見の物静かなイメージと違って何でも思ったことは主張できる男だ。だが、この率直な物言いの裏側になにも特別な感情を持ち合わせていない。

だからか、変な警戒心を抱かずに、気楽に彼とは話すことができた。

でもまあ、沢木とは元々中学校時代友達だったので、この世界でも友達になるのは容易なことだし、彼と付き合うことで学園生活に何の変化も起きない。が、取り合えず、友達一人いれば浮く事はないだろう。彼は当時もそうだが、俺の心の保険みたいな役割を担っていたのだ。



だから？

しかし、俺のやっていることは果てしなく空しい。

過ぎ去った中学校生活の改善なんて、建設的ではない。

こんなものは後ろ向きな懐古主義者の愚行だ。

なんて女々しい奴なんだ。

頭の髪の毛全てをかきむしりたい衝動に駆られる。

だが、俺は考え直した。

過去の失敗の改善だけが目的だから自己嫌悪に陥るのだ。

せつかく神アイテムの携帯を持っているというのにそれだけでは  
芸がなさすぎるではないか。

それに過去を変える方法なんていくらでもある。

俺の能動的な関係作りだけが手段ではない。

何かイベントをこの学校で起こせばいいじゃないか。

環境によっていくらでも人間関係など変わるものだ。

そんな前向きな遊び心が芽ばえ始めて俺は首を左右に振った。

いや、それだと途中で面倒になってこの世界を放擲することに繋  
がるのではないか。

幾度もこの世界で同じような試行を繰り返して途中で投げ捨てて  
きたじゃないか。

俺の好奇心などひと夏の蝉の生命よろしく儂く長続きなんてしや  
しない。

だが、まーいいか。

今までだって面倒になっていくつの世界を葬ってきたんだし、今  
更それについて嫌悪など抱くこともない。

やりたいようにやるぞ。



## 試み1。

試行1。

校舎内には便所以外あらゆる場所に監視カメラ（映像音声録画つき）がついている。

こんな環境下では生徒達はどのような行動にでるのだろうか。一度試してみようと携帯を使って世界に反映してみた。

「なんか落ちつかねーな」

「何が？」

「うーん」

沢木は長い黒髪を苛立たしげに右手で掻き毟った。

「いいよなあ、お前は」

お呆れたような視線を俺に投げかけたため息をついた。

「なにいらいらしてんの？」

彼の不機嫌の理由が分からず困惑気味に沢木に尋ねた。

「カメラだよ、気にならないか？」

「別に？」

「ならいい」

沢木はそれ以上話すのが面倒だという風に、俺から顔を背けると本を読み始めた。

彼はこの監視体制がどうも気に食わないらしい。

実験的に校舎内に反映してみた監視システム。

生徒達の多くに不評ではあるようだが俺はあまり気にならなかった。

むしろ、監視下にあることで、生徒達は逸脱した行為を取り難いので、この学校の治安は保証されたようなものだ。と内心ほくそ笑んでいる自分がいた。

「秋山君、何してるの？」

「え、今次の時間の宿題してるんだよ、沢木はやったのかこれ」

「うん」

「そっかそっか」

人懐っこく誰とでも分け隔てなく普通に話す秋山君。声はかけやすいのだが、いかんせん、クラスのなかでも人気者であり一人でいるということが少ない。俺は一對一ならぎりぎり話かけることができるのだが、2、3人の小集団に割ってはいるのが苦手だった。

だが、今は一人のようなので、調子付いてもう少し話を続けてみる。

「あのさ、秋山君はこの監視体制どう思う？」

秋山君は俺が腰をかがめて話しはじめてから、シャーペンを置いて聞き役に徹している。彼はどんな人間相手でも話す場合には、自分の作業を取りやめて真剣に耳を傾ける。おちやらけた微笑は浮かべているものの根は真面目なのだ。しばらく彼は、うっつと唸りながら視線を宙に彷徨わせた後口を開いた。

「先生達も大変だからなあ、あの事があっていらいさ、だから、俺達も我慢しないとな」

「うん」

「まーだけど、音まで録音されるんじゃ屁もこけねーけどな」

「そ、そうだね」

「じゃ、宿題やるから」

「頑張つてね」

あの事って何だろうと不審に思ったが、これ以上彼の邪魔をするわけにもいかずその場を立ち去った。

## 試み2

試み1の世界は全部削除した。  
学校ごとね。  
飽きてしまった。

そして、試み2だ。

例えば、道路があつてその両脇に3軒の家があるとすると、その区間だけを切り抜いたする。

いわば、箱庭みたいな世界。

彼らはその世界しか知らなくつて、その狭い空間が当たり前だと思っている。

この世界の現実世界の常識や理は存在しない。

ライフラインは各家庭に設置されているが、食糧などは道路の真ん中付近に設置された長方形のコンテナに毎日補充される。コンテナは観音開きで女の子でも普通に開けれる。

こんな狭い世界を召還してみる。

ちなみに道路の左側に軒を連ねる三軒のうち一番奥の二階建ての家が俺の家だ。

家族構成は俺、妹、父、母、猫だ。

他の5軒はランダム。

これを反映してみる。

狭界。

光暦 0 2年（この世界が生れて2ヶ月）

朝目覚めると、俺はベッドから這い出てパジャマのまま階段を伝って一階へ。

父親が気だるい顔でテーブルの傍の椅子に腰掛けている。

母の姿はない。

「父さん、母さんは？」

「さあね、どうせそのへんにいるだろ」

父は目玉焼きを口にいれ、しゃくしゃくと音をたてながら虚ろな表情で俺を見た。

「拓、梶山さんがな、呼んでたぞ」

「はー何の用だろ」

「さあな、行って本人に聞いてくれ」

妹のさやかは一階の居間で仰向けに寝転がっていた。

俺と同じくパジャマ姿のままだ。

「なんか梶山さんが呼んでるので行って来るよ」

「行ってらっさい」

梶山さんちは、道路をはさんだ向かい側にあった。

10階だての細長いビルが四角い蒼穹に伸びている。

少し前までは俺達家族がここに住んでいた。

『代わり映えしないこの世界でなんとか趣向を凝らし人生を楽しもう』

梶山さんが寄り合いで提唱したので、それに5世帯が賛同し始めた家交換の儀。

最初は盛り上がったのだが、ここ数日はそれすらもなくなつて

いた。

## 仕組み。

黒い門を後ろ手で閉めると、道路に足を踏み入れた。

横並びの三軒を分断する道を俺は道路と名づけているが、なぜそう呼ぶのか？

答えは単純だった。なぜか道の真ん中に真っ直ぐ白い線が引かれているからだ。車はこの世界には存在しないのに、なぜ道路があるのか。その理由は定かではない。ただ、道路というものを知る住人には不可思議なものであるし、知らない住人には確かに珍しいものだが、特に気にかかるものでもなかった。

今から訪ねる梶原さんは後者の部類に属する。

梶原さんの家に行く前に食糧コンテナの中を確かめてみることにした。

道路のほぼ真ん中に設置された縦長の黒い金属のコンテナは、形状は学校や職場にあるロッカーを彷彿とさせる。この中には3日に一度食物が湧いて出てくるようになっていて、俺は正面に回って両側の取っ手を握って外側に開いた。形状から耳障りな金属音が聞こえそうだが、実は全く音を立てることもなくすんなり観音開きの扉は開いてしまう。

3段目の棚を見ると食糧は湧いていなかった。

このなかには棚が5つ取り付けられていて、6層に空間が分けられている。各層の空間はあらかじめ各世帯に宛がわれているようで、自分たちの棚の中身にしか手をつけることが出来ない。つまり、俺の家族の棚は3段目であり、そこからしか食物を調達できないようになっていて、他の棚に触ろうとしても、何か電磁波のようなものが邪魔をして弾き返されるのだ。



まあ、道路やコンテナの存在だけみてもここがパラレルワールドであることは間違いない。無論俺が作ったわけだけど、各種設定自体はランダムになっているので、俺自身もこの世界の仕組みを把握しているわけではなかった。

さてと梶原さんちに向かうか。

梶原ビル。(前書き)

よく分からない物書いています。

## 梶原ビル。

梶原さんのビルの入り口には管理人室があり、そこを通り抜ければエレベーターがあつた。一階は管理人室以外は椅子が置いてある憩いの場があるくらいだ。ちなみに管理人室に人がいることはめつたにない。ごくたまに階上へあがるのさえ億劫になつた梶原さんが畳の間で寝転がっている時があるくらいだ。

「さーつと」

俺は気合を入れなおしてエレベーターの階上方向のボタンを押した。二階へ上がる時はいつも戦場へ出かけるような緊張感が付き纏う。深呼吸をして、1階のパネルが点灯するのを待ち受ける。

しばらくして、甲高いチーンという音が鳴って、赤褐色の自動扉が開かれた。

「うわ……」

2階に到着直後、異臭が鼻をついた。とてつもなく嫌な予感が胸底を満たしていく。

帰りたい。このままエレベーターの扉が開かなければいいのにと心底願つた。だが、無常にも重い扉はあっけなく開き、凄惨な現場を俺に見せ付けるのであつた。

鼻をハンカチで塞ぎながら、2階の泥地を踏みしだく。安っぽい運動靴できたのは正解だつた。

しかし、この目の前に広がる薄暗く饅えた匂いのする空間は一体……

俺は周囲の足場を慎重に見定めながら、状況の把握のため散策を試みることにした。

沼地の畔でも歩いていような粘着質の泥地は、中央部の山のように盛り上がった堆積物を取り囲むようにして続いていた。

「梶原さん〜！」

半ばやけくそ気味に大声を張り上げた。声は方々の壁や堆積物にぶち当たって反響した。

「いないのかー？」

返事がないので、これが最後だと決めて腹から声を絞り出した。

「帰っちゃうよ！」

「ま、待って、いることはいる……」

しゃがれた声が上の方から降ってくる。

陰に籠ったその声を聞いて、やっぱりなっと思いが嘆息となって口から漏れた。

## 異界ビル。

「つまりね、こ、この世界は……未知な部分がお、多いので、いろいろ……し、調べる必要が、あ、あると思うんだ」

「それは分かります、けど、少し休んだ方が、まだ昼間だし」

差し向かいのソファーに座る梶原さんは、俺に促されてソファーに深く体を沈ませた。薄膜のような褐色の肌が内部の骨や筋肉に張り付いた彼の姿は、ゾンビといっても遜色ないほどグロテスクだ。

「す、すまんな、今度は夜に話そう」

「ですよ、昼間は……」

彼は昼間はいつもこんな風だった。体質がそもそも俺が知っている人間とは遠くかけ離れている。ひよつとしたら人間ではないのかもしれない。

「しかし、この部屋は厄介ですね」

「ん、ああ、そうだね」

「さつきはゴミ処理場みたいな有様でしたよ」

まだ抑え気味に表現したほうだ。正直にいうとあの風景は何か得体のしれない化け物の餌場のようなだった。

「昼間はね、気力がね」

「分かっています」

この梶原ビルの内部は特殊な力が働く異界のような場所だ。しかもその力は梶原さんの脳や心理状態と密接に連動している。

「今はどうかね」

「別世界のようですよ」

現在はこの2階は青緑色の床と壁に覆われ、ソファーが二つ置かれるシツクな様相を呈しているが、これは梶原さんが意識して整えた心象イメージなのだ。

「昼間はどうしても、気が塞いでね、昼寝しかけていた、申し訳な

い

つまり、彼はさっきまで昼間の不調からくる鬱々とした気分支配されていた。当然その荒廃した心情は、このビルの力に連動し、しかもさっきまで彼は夢現だったらしく、野放図に負の心象イメージが暴れまくった状態がさっきの生ゴミ古墳だったわけだ。

「慣れていますよ」

「まあ、もう少し経ってから、寄り合いで話すことにしてこれで切り上げようか」

「じゃまた夜いつものところで」

崩壊、息抜き。(前書き)

タイトルのまんまです。

崩壊、息抜き。

だるい。

ひたすらだるい。

夏ばてもいいところだ。

あ、前の世界は展開がどうしようもなく詰まらないので潰した。いつものことだと思って諦めてくれ。

また荒野で一人芋虫ごっこをしている。

照りつける日差しはそれほど強くはない。

気温は23度設定にしてある。

現実世界の暑さと比べれば随分ましだ。

この仮想世界にはさっきログインしたばかりだ。

特に何もする気が起きないので芋虫よろしく身体の蠕動運動でゆるやかな移動をしている。

あーここはいい。

何者にも束縛を受けず、頭をからっぽにして幼児退行ができる。

俺を萎縮させる他人の視線などというものはないのだ。

なにをしようが干渉してくる人間はいない。

少し飽きてきた。

芋虫移動は続けると思ったより身体の疲労が激しいことに気づいた。

体の全面が砂と土にまみれているし。

もうやめだ。

「ここはどこですか？」



「荒野だよ」

俺は携帯で同じ年くらい女の子を作り出した。

栗色の髪が肩まで伸びている。目はぱっちりしているが、鼻と口はやけに小粒。

薄桃色の唇は微妙に微笑みを含んではいるが、どこか気弱で神経質な雰囲気醸している。

彼女は外敵の存在に常に脅えている小動物のように、辺りに不安げな視線を散らしていた。

「愛ちゃん、大丈夫だよ」

「で、ですよ〜、拓さんもいますしね」

「うん、俺は君の保護者みたいなものだ、悪い風にはしないよ」

何か曰くありげな契約で、女性を風俗業に引っ張ってきた山師みたいな台詞だ。

「これからどうします？」

白いワンピースの裾が風に巻かれて踊っている。

俺は砂埃が目に入ったので、不機嫌な小言を並べながら、

「まずは建物の中に避難しようか」

「はい」

彼女は俺の言葉に半信半疑といった面持ちだったが、とりあえず首を縦に振った。

気だるい話。(前書き)

そのまんまです。

## 気だるい話。

「拓さん、食事できました」

「ありがとうございます」

ブラウンに塗装された丸テーブルを囲んでの朝の食事。

結局、また安全な住居を携帯で創り出してしまった。

玄関入ってすぐの場所にキッチントイレ完備、奥はL字型の壁になつておりそれぞれの辺にドアがついていて、俺と愛ちゃんの寝室になつている。外観は白塗りの壁に陸屋根といった、こじんまりとした簡素な建物だ。

ガス、水道、電気などは、得体のしれない無限貯蔵庫から引いていることになつている。そのへんの仕組みは考えるのも面倒なので、そういうものがある！ と携帯にうって現実のものとした。

まあ、相変わらずの無計画さで女の子を生み出し、俺とその娘のために家を建てた。これからなにをしようかなど微塵も頭のスケジュール表には書かれていない。全くの白紙のまま同棲生活が始まつていた。

「愛ちゃんは何処から来たのか思い出せた？」

「さ、さあ」

彼女にそんな記憶がないことは百も承知。

だが、敢えて毎日同じ質問を投げかけていた。

「俺ってさ、愛ちゃんとはどういう関係なんだろうね？」

「わ、分かりません」

「覚えていない？」

「は、はい」

それも彼女に分かるわけがなかった。

『彼女は記憶喪失で過去の記憶すら失われた若い女性であり、

なぜか、傍には世話焼きの俺がいる。

俺の事はよく知らないが、彼女の潜在意識はなぜか俺の事を安全だと認めている』

彼女を創造するときには携帯に打った文面はこれだけなのだ。

「それにしても、拓さんは魔法使いみたいですわね、こんな建物を一瞬で造るなんて」

「まー、そんなもんかもね」

愛ちゃんはそれを聞くと、心底安心したように微笑んでスープを啜った。

「どうしたの？　なんか急に機嫌よくなったみたい」

「いいえ、別にそんな……」

彼女は取り繕うように慌ててスプーンを置いて、首を横に何度も振った。

「ただ……私」

「ん？」

「この世界で生きていく自信ないし、拓さんみたいな人いて頼もしいなって」

言われて俺もなんだか照れくさくなって、

「ちよつと外の空気吸ってくるわ」

ばたばた扉を開けて外へ出て行くしかなかった。

## 女2

自宅を建築してから数週間が経った。

「愛ちゃん、ご飯ここにおいておくからね」

「……………」

俺はいつものように白い扉の前の床に、食事を載せたお盆をそっと置いた。

愛ちゃんは現在室内でヒキコモリ中だ。

なにが原因かは分からないが、いつしか彼女は心を閉ざし室内から出てこなくなった。

未知の土地で暮らす不安が募って、精神が蝕まれたのだろうか。

それとも俺に不審を抱き、同棲生活に嫌気が差したのか、真偽の程は定かではないが、彼女はしばらくそっとしておいた方が良さそうだ。

「あなたは誰？ ここはどこ？」

また女の子を懲りずに創造してみた。

特に条件は定めず、ただ、どこから召還されてここへやってきた少女とだけ携帯に文字を打った。

「俺は拓だよ、ここは俺の家」

彼女はおかしな格好をしていた。

なんと表現したらいいのやら、頭の上に乗っているストローハットみたいなものと、サングラスみたいなものが特徴的だ。みたいなものというのは、そうとは断言できないので。

肌は衣類によってことごとく隠されてはいるが、かろうじて臍のあたりに露出した部分が褐色だと分かる。

「えーっと、名前は？」

「アンナ」

言いながらも、室内をちよろちよろしている。まるで遺跡を調査

しにきた考古学者のようだ。

「何してるの？」

「ん？」

彼女は振り向き様に一足飛びでソファアに飛び乗ってきた。

「聞きたいの？」

「うお、あ、ああ」

俺の顔にくつつぎそうなくらいに顔を近づけてきて覗き込んでくる。

サングラスかと思っていたが、その色眼鏡は透けていた。奥に潜む瞳は大きく見開かれている。

「ここ変わっててすっごい楽しいから、目移りしてたのよ」

「な、なるほど」

ソファアからすつと立ち上がったアンナは、大きくその場で伸びをすると、

「ちょっと外見て来る！」

とだけ言い残して、外へ飛び出していった。

## 流転。

「この世界はなんにもなさすぎだわ」

「そりゃあね、荒野だからね」

アンナは日が暮れる前には帰ってきた。

長めのソファーに体を横たえて寝そべりながらつまらなさそうにしている。時折向かいのソファーに座っている俺に面倒くさそうに一瞥をくれた後、一言ぼやくを繰り返していた。

「家が欲しいわ、私共同生活苦手なのよね」

「そーかい、じゃあ、家を作つてあげよう」

「そんなこといって、家を作るなんて簡単じゃないわ」

彼女は目を細めて、俺に疑いの眼差しをくれた。

あなたみたいないびよりい男に家なんて建てられるわけないわつと馬鹿にするような目だ。

だが、今更俺もそんなことで息まくほどフレッシュな男でもない。欠伸をしながら、携帯に文字を打ち、

「アンナ、外に家作つたから見ておいで」

何の感情もこめずに淡々とアンナに言った。

「えーなんでこんな家できてるの？ どうやったの？」

「まー俺魔法使いだし」

「そんなわけ……」

アンナは半分口をあけたまま俺と家を交互にみていたが、程なく家の周囲をぐるぐる回り始めた。

面倒くさいから塔みたいな家と携帯に打つたのだが、こんな地味な造りでもアンナの好奇心の対象となるらしい。

「どんな風になってるんだろ……」

やがて彼女は扉の前に立ち止まってひとりごちた。

「中みてこいよ」

「そつするわ！」

自宅に戻った俺は人心地ついて、ソファーにだらっと背を預けて目を閉じた。

なにやら気が重くなってきた。

女二人をこの世界に創造したのは良いが、その後の事を考えていなかった事に今更ながら気づいたからだ。

彼女達を創造した俺には、それなりに義務というものがついてまわる。

生きた人間を荒野に呼び込んだからには、彼女らに快適な生活や人生を送ってもらうために何かを果たさなくてはならない。

俺一人飄々と気ままに日々暮らすなどできないのだ。

アパートの大家と同じく設備の維持や掃除、水回りなど住人の生活に一定の義務を負う。

そういうのを考えると、なんだか面倒くさくなってきていた。

頭の片隅に染み出てきた暗い衝動が、早くも俺を急かし始めている。

『彼女達もろとも、世界ごとぶっ潰しちまえ！』

俺の指先はするすると蛇のようにソファーを伝いテーブルの上の携帯に伸びていく。

だが、その時どこからか別の声が聞こえて俺を諫める。

『毎回毎回お前はなぜそんなに飽き性なんだ、数多の世界と罪のない人々を事も無げに葬って良心は咎めないのか？ お前は鬼か？』

確かに俺はあまりにも無責任に世界を創造し、面倒になったらパソコンのキーボードのデリートキーを扱うように世界そのものを削



除してきた。闇に葬られていった数々の魂は、何処へ消えていったのだろうか。いくらこの仮想世界で神のような存在であるとはいえ、そんな横暴が許されて良いのだろうか。

そしてなにより、この無意味な死と再生の繰り返し自体に飽きてこないか？

しばらく顔を右手で覆って自問自答してみる。

が、はっきりとした答えは浮かばなかった。

いや、考えたくもないが正解か。

閑話休題。

思考を一旦停止して宙をぼんやり眺める。

増幅した負荷によりブレーカーが落ちるように、俺は考える事をやめた。

そうすることによって、過去の記憶から無意識のうちに都合のよい方法が浮かんでくるを俺は知っていたのだ。

「まーだから、高志さん、そういうわけで頼むよ」

「いきなりなんだ君は、大体こことだよ」

そして、新たな男性がこの世に生れた。

頼りになりそうな人間だ。

結局 俺の頭脳がはじき出した答えは、相も変わらず 『他力本願』 だった。



## 高志さん。

「過去の記憶がないし……ここがどこだかわからない」

「荒野ですよ」

「それはさつき聞いた、ただ俺が聞きたいのはなぜこうなったかだ」  
黒っぽいスーツに身を固め、銀縁メガネが生真面目そうな顔にフ  
ィットした高志さん。

論理的な思考や口調から考えても以前は日本のどこかの企業で管  
理職の地位にでも就いていたのかも。携帯で彼を呼び出すために打  
った文字は、「記憶を失ってはいるが、頭がきれて頼りになる中年  
の男性」だった。

「簡単に言くと、僕はこの世界の魔法使いみたいなもので、異界に  
いるあなたをチョイスして、この世界に呼び込んだ。それだけのこ  
とですよ」

これまでの相手と同じように軽薄な口調で話すと、高志さんの太  
く凛々しい右眉が、ぴくつと微かに上に跳ねた。顔を覆っていた右  
腕を下げると、恐ろしく冷たく尖った瞳が現れ、俺は瞬時に石化し  
てしまう。

今まで俺が生きてきて出あったどの人間も擁していない冷酷な気  
配を孕んだ瞳だった。

「拓君、大人にむかって話す口ぶりじゃないな」

「は、はい、す、すみません」

「謝らなくて良いよ、ただ、次から気をつけくれ」

「す、すみません」

「それで？」

高志さんは前かがみになって、俺の心奥を覗き込むような深みの  
ある表情で問いかけた。

本当に言いたいのはそれじゃないだろうって暗に示唆するように、

俺の右手に彼の掌を重ねた。

「えっと、実は……あなたを選んだのには深い深い理由がありました……」

こめかみに左手を当てながら、上目遣いで高志さんの反応をみる。  
「なんだい、深いわけって」

## 説得成功。

高志さんに正直な思いと願いを誠意を持って伝えた。

ここを取り仕切るには俺では荷が重いということや、この世界で未成年が生きていくには苛酷だという訴え。方向性のない現状を打破するには、頼りになる大人のリーダーシップが必要だという切迫した現状。

淵源に他力本願の考えがあるのと、一部真実を曲解して伝えてはいるが。基本的に間違った事を言っていないつもりだ。

途中から目を閉じて神妙な顔つきで高志さんは聞いていたが、ふいに目を開けるとその顔つきは穏やかなものに代わっていた。

「大体の事はわかった、役に立てるかどうか分からないがベストを尽くすよ」

「有難うございます！」

俺は顔を伏せて目に手をやった。

「本当に助かります」

「君も大変だったんだな、だけど、俺も今日から君たちの一員だ、ともにこの状況を乗り越えていこう」

迫真の演技が奏功したのか、高志さんはあっさり俺の意図するポストを引き受けてくれた。

普通ならこうはうまくいかないだろう。高志さんが記憶喪失だという設定が彼が本来なら捉われるであろう現実社会とのしがらみを断ち切り、すぐに元の世界へ帰ろうという気を起こさせない事が成功の前提としてまずある。その上で、未知の世界に引っ張り混まれたという共通した不遇が、高志さんに共感をもたらし協調意識を呼び起こしたに違いない。

## 事情。

愛ちゃんが引きこもった理由はいくつか考えられるが、一因に俺の彼女への配慮のなさが含まれているのも確かだ。

例えばある日の朝食時の会話

「この先どうなるんでしょうかね……？」

愛ちゃんはこの日酷く青ざめた顔で俺に尋ねた。

「こんな荒野でどうやって生きていけば」

「細かいことにしないでいいじゃん」

俺はその日腹が痛くて不機嫌だったので、彼女の気弱な発言が酷く耳障りに感じていた。

「そうはいつでも……」

「おっと、俺トイレ行ってくる」

俺はそれ以上聞いていられなくなって、トイレを口実に彼女の話をしてその場を離れた。

こういうことが何度かあった気がする。

3日目くらいで分かったのだが、どうも彼女は神経質なところがありマイナス思考だった。最初のうちは、俺が連れてきた手前、愛ちゃんの不安を解消しようと前向きな発言を繰り返していたが、次第に俺もメッキが剥がれて来て、彼女の不安に真剣に向き合うことをしなくなっていた。

それを彼女は敏感に察知したのか、一週間が過ぎた頃には食卓での会話は途切れがちだった。

そしてさらに数日を経たある朝、ちょっとした事件が起きたのだ。

「お、おはよう！」

その日の俺は内省的で、これまでの不遜な態度を改めて彼女との関係の修復を図ろうと考えていた。

「今日もいい天気だね」

「そうですね……」

愛ちゃんはテーブルにつくと、俯いて朝食を淡々と口に運んでいく。

以前にもまして彼女は陰鬱な様子で会話を続けにくい。

大体こじれた人間関係の修復をするには、どう声をかけたらいいのか分からなかった。

「愛ちゃんの卵焼きはうまいなあ」

「そうですね……毎日毎日作ってますからね」

愛ちゃんは抑揚のない口調で言った。

なんか刺々しい。

「助かってる……」

「拓さんもたまには朝ごはん作ってみたらどうです？」

「え、俺が？ 無理だよ」

「作ろうって気もないんですね」

少しカチンときたが、咽喉までせり上がった怒りの言葉を飲み込んで、

「仕方がないさ、できないものはできない、人にはそれぞれ役目ってものがあってね」

「拓さんは最近何かしてましたっけ？」

「え……そりゃ、いろいろ」

「確かに魔法でいろいろ提供してもらっています、それは感謝しています、だけど……」

愛ちゃんは感情を押さえ込むように一拍間をあけて、

「なんかこう、他人に対して、もう少し気配りとかあっていいんじゃないですか？」

「え……どういう意味？」

「それは、例えば、誰かが落ち込んでいたら、慰めの言葉ひとつかけるとか」

「かけたじゃないか！」

「え……」

俺はここで切れてしまって、後はもう……で最後に彼女は泣きじやくつて。

「う、うう、ほ、ほんと、ごめんなさい……言い過ぎました……う、うう」

嗚咽をあげながらしゃくりあげている。

端正な顔を両手で包んではいるが、端にはみ出た頬は真っ赤に染まっていた。

俺はあたふたして慰めの言葉を探していると、彼女はいきなり立ち上がり、何も言わずに室内に駆け込んだ。

ヒキコモリ生活の始まりだった。

「なるほどな」

「俺が悪いんです」

「うーん、拓君は悪くはないと思うよ、彼女も未知の世界の生活に不安を感じているんだろう」

「そうですね」

これまでの話を聞いた高志さんは、落ち着いた様子で慰めの言葉をくれる。

「よし、とりあえず、俺の初仕事は彼女を部屋から外の世界に連れ出すことだな」

眼鏡の奥の瞳は自信に輝き、彼の身体からは後光が差している  
よつな気さえするほどに頼もしさを感じた。



朝。

朝、俺は目が覚めるとのろのろと私服に着替える。

今日はいつもより気温が低いのか肌寒く感じた。

室内には異臭が漂っている。

いつ脱いだか分からない衣服が、あちこちに散乱しているのだ。

そろそろ洗濯をしなければ……そう思いつつ壁際に歩み、青いカ

ーテンを引いてガラス窓を開け放った。

「まぶしい……」

朝の日差しを受けて思わず目を細めると、瞼の裏は黄金色に染ま  
った。

じんわりと肌を包む朝の冷氣。

ああ、俺は生きているのだと再確認する瞬間だ。

目が慣れてくると荒涼たる景色が視界を占める。

おや？ 俺はいつもの景色を目に入れてなんだか違和感を感じた。

あれ？ 確か昨日まではこの窓の前に大きな岩場が立ち塞がって

いたはずだった。

まどろみが残る頭を右手で摩りながら思考する。

そして、なんとなしに窓外の右側へ視線を移動した。

岩の向こうにわだかまる日向に何かが見える。

何だろう？ っと目を凝らした瞬間、俺は全てを思い出した。

「やーおはよう拓君」

「お、おはようございます」

高志さんはぼさぼさの頭を櫛で梳いている最中だ。

一点の曇りもない清しい顔で、朝のこの時間を堪能してるとい  
った雰囲気。

だが 俺はそんな気分にはなれなかった。

「あの、いいんですか！」

「何がさ？」

俺が先ほど窓を開けて見つけた風景はあまりにも刺激が強すぎた。白く乾いた土の地面に横たわるパジャマ姿の少女。

まだ寝ていたのかぴくりとも動かなかったが。

「愛ちゃんのことですよ」

「ああ、愛ちゃんか、大丈夫！ 腹が減ったらこの家に帰ってくるって」

そう彼女を夜のうちの野ざらしにした犯人は俺だった。

ただし、案を出したのは高志さんだ。

家をこっさり別のところへ移して、愛ちゃんだけ一人吹きさらしの荒野の絨毯に置き去りにするなどという非道なやり方を俺一人で考え付くわけがない！

「ヒキコモリは家がなくなれば動くしかないさ、野垂れ死にはしたくないだろう、アハハハ」

高らかに笑う高志さんの横顔は見ようによっては悪魔の哄笑に映らなくもない。

俺の肩にちゃっかり回された高志さんの大きな手は、お前も共犯だよと語っているようだった。

## 狼狽。

ベルが鳴ると、高志さんは機敏な動きで立ち上がり玄関へ駆けていった。

俺は皿洗いをしながら、まさか………という思いに駆られた。

「やーおかえり」

「あ、おはようございます」

玄関口から届く声音はまさしく愛ちゃんのものだ。

間違いない。

俺は酷く狼狽して、手に持っていた皿を取り落としそうになった。これほど早く彼女が訪ねてくるとは思っていなかったのだ。

「昨日は風邪ひかなかったかい？」

「ええ、おかげさまで」

水音が邪魔をして聞き取りづらいが、彼女の声は沈痛な響きを孕んでいるに違いない。たぶん、愛ちゃんの事だから今にも地に倒れそうな青ざめた顔をしているはずだ。俺は蛇口を捻って水量を増やし、故意に皿をかちあわせて煩雑に洗った。意想外に早く彼女が訪れたために、まだ心の準備ができていないのだ。皿を洗っていて彼女の訪問に気づかない振りをして時間を稼ぐしかない。

その後の玄関口の会話は殆ど聞き取ることはできなかった。時折高志さんの豪快な笑いは地響きのように奥にまで伝わってきてはいたが。俺は彼らが会話している間、自責の念を抑えながらも、なんとか彼女の前で平静を保ち能面のような顔を保持する訓練に励んでいた。しばらくすると、悔悟や自責の念も幾分和らいできて心に余裕が出てきていた。

俺が悪いんだ。彼女の不平不満をすべて受け止めようじゃないか。蛇口を止めると、最後の皿を食器洗い機に収め蓋を閉じた。と、同

時にこれまで堰き止められていた彼らの会話が容赦なく俺の耳朶の奥に流れ込んでくる。

「寒かったかい？」

「いえ、平気でした」

直後に届いた彼女の声は明るかった。

「それより、深夜まで話きいてもらっちゃって」

「ああ、気にしなくていいよ、俺あの時間まで起きてるのはざらなんだ」

ど、どういうことだ？ 　いつ深夜に二人は話したんだ。

「あれ拓さんは？」

「ん？ 皿洗いしてたから、聞こえなかったんだろ、拓く！」

俺は二人の会話に不審を抱きながらも、いそいそと玄関口に歩んだ。

「あ、おかえり」

「お、おはようございます」

愛ちゃんは俺を目の前にしたとたん、急に笑顔を引っ込める。

気まずい雰囲気が狭い玄関口に漂い始めていた。

「えーあの後、高志さん愛ちゃんと話してたんですか」

「当たり前じゃないか、彼女を野ざらしにして寝れないよ」

心臓をフォークで一突きされたような衝撃が走って、顔全体が熱を帯びる。

「知らなかったなあ……俺も深夜3時までには愛ちゃんのこと気になつて起きてたんだけど」

睡魔に勝てなくて寝てしまっていた。言い訳にもならない。

「いいんだよ、二人で話す必要があったから」

高志さんはテーブルに置かれた紅茶をすすってまた受け皿に戻した。

「まだ話したことなかったしね」

愛ちゃんにウィンを飛ばして彼は微笑んだ。

彼女は顔を上気させて、気恥ずかしそうに苦笑いを浮かべる。

「なんなんだろ、この二人の……」

「さてと、俺は席をはずすよ」

「え……？」

唐突に高志さんはこの場を去ろうとした。俺は思わず、追いつめるように手を伸ばしかけたが、それより早く彼は自分の部屋へ歩み、扉を開けて室内に消えていった。

「って、いきなり修羅場ですか!？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1031/>

---

俺的妄想ファンタジーでもっと自由に戯れる

2011年9月29日03時10分発行